伊場遺跡発掘調査報告書 第6冊

伊場遺跡遺物編4

1987

浜松市教育委員会

伊場遺跡発掘調査報告書 第６冊

伊場遺跡遺物編４

凡　　例

1. 本書は，伊場遺跡の正式な調査報告書第６冊として刊行するものであり，第７次調査までに出土した古墳時代の土器に関する報告書である。但し大溝内の古墳時代の土層より出土した土器を除き，東部地区及び古墳時代遺構より出土した土器を対象とした。大溝より出土した土器については，後日報告する。
2. 挿図のうち土器の実測図はほぼ１/３に統一した。ただし№425の土器は１/６とする。写真図版の土器についても１/３になるように努めたが，縮尺は一様でないので大きさの比較は実測図か土器の観察表を参考にされたい。
3. 遺構写真（土器の出土状態写真）や遺構図中に付けた番号は土器実測図・土器観察表の土器番号と同一であり土器の出土状態をしめす。
4. 挿図のうち遺構図については，既刊の報告書に掲載した図を使用するように努め，必要に応じて加筆・修正した。
5. 写真図版のうち土器の写真は漆畑敏が撮影し，遺構の写真は調査時に撮影したものを使用した。
6. 土器の復元・実測など整理作業は，漆畑が三宅マチ・水野智恵子・金児きみ子・田辺磯子・河野亜都子の協力を得て行った。また，版下の作図・作製は金田光代・神谷功依・武藤緑による所が多い。
7. 本文・土器観察表は漆畑が浜松市博物館館長向坂鋼二及び同館学芸員諸兄の助言を得て執筆した。文責は漆畑にある。
8. 本報告書の遺構記号については，既刊の伊場遺跡の正式報告書に従った。

   ＫＤ…住居跡　　ＫＰ…小穴　　ＫＩ…祭祀跡　　ＫＴ…溝遺構

   ＫＧ…井戸　　ＫＣ…方形周溝墓
9. 本書に使用した図版・写真は全て浜松市博物館に保管している。

伊場遺跡発掘調査報告書第6冊

伊場遺跡遺物編4

目　　次

第1章　遺跡の概要（古墳時代を中心にして）…… 1
第2章　古墳時代遺構と出土土器…… 4
　第1節　住居跡…… 4
　第2節　東部地区小穴…… 30
　第3節　祭祀跡…… 32
　第4節　溝（KT 201）…… 36
　第5節　西部地区溝状遺構…… 38
　第6節　井戸…… 40
　第7節　方形周溝墓…… 44
第3章　古墳時代包含層出土土器…… 50
　第1節　年代および編年的位置…… 50
　第2節　出土位置および状態…… 56
第4章　遺構群の年代観および推移…… 60
　第1節　遺構群の年代…… 60
　第2節　遺構群の分別…… 65
　第3節　遺構の推移と海面変動…… 66
　第4節　住居跡伴出土器について…… 68
おわりに…… 69
注・参考文献
　古墳時代土器観察表…… 75

挿　図　目　次

第1図　伊場・城山・国鉄工場内遺跡位置図 …… 2
第2図　伊場遺跡周辺の遺跡および海面変動推定曲線 …… 3
第3図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図1（KD—1・2・3） …… 5
第4図　古墳時代竪穴住居跡実測図1（KD—1・2・3・4・7） …… 6
第5図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図2（KD—4） …… 7
第6図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図3（KD—6・7・8） …… 9
第7図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図4（KD—10） …… 9
第8図　古墳時代竪穴住居跡実測図2（KD—10・11） …… 10
第9図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図5（KD—11・12） …… 11
第10図　古墳時代竪穴住居跡実測図3（KD—12・17） …… 12
第11図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図6（KD—12） …… 13
第12図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図7（KD—14） …… 15
第13図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図8（KD—14・15・16・18） …… 17
第14図　古墳時代竪穴住居跡実測図4（KD—21・22） …… 18
第15図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図9（KD—17） …… 19
第16図　古墳時代竪穴住居跡実測図5（KD—23・25） …… 20
第17図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図10（KD—19・20・21・23・25） …… 21
第18図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図11（KD—26・27） …… 23
第19図　古墳時代竪穴住居跡実測図6（KD—26・27・29） …… 24
第20図　古墳時代竪穴住居跡実測図7（KD—30・32・33・34・35） …… 25
第21図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図12（KD—31・32・34） …… 27
第22図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図13（KD—35・36・38） …… 28
第23図　古墳時代竪穴住居跡実測図8（KD—31・36・37・38） …… 29
第24図　古墳時代小穴出土土器実測図 …… 31
第25図　古墳時代祭祀跡出土土器実測図（KI 1） …… 33
第26図　古墳時代祭祀跡出土土器実測図（KI 1） …… 34
第27図　古墳時代祭祀跡出土土器実測図（KI 2） …… 35
第28図　古墳時代祭祀跡実測図（KI 1） …… 36
第29図　古墳時代溝状遺構（KT 201）出土土器実測図 …… 37
第30図　古墳時代溝状遺構（KT 201）断面図 …… 38
第31図　古墳時代溝状遺構出土土器実測図 …… 39
第32図　古墳時代溝状遺構模式図 …… 40
第33図　古墳時代井戸跡実測図 …… 43
第34図　古墳時代井戸跡・方形周溝墓出土土器実測図 …… 43
第35図　古墳時代方形周溝墓実測図 …… 44
第36図　伊場遺跡グリット表（古墳時代遺構位置図） …… 45
第37図　東部地区古墳時代遺構出土状態 …… 47
第38図　古墳時代出土土器実測図1 …… 51
第39図　古墳時代出土土器実測図2 …… 52

第40図　古墳時代出土土器実測図3 …… 53
第41図　古墳時代出土土器実測図4 …… 55
第42図　古墳時代出土土器実測図5 …… 57
第43図　古墳時代出土土器実測図6 …… 59
第44図　古墳時代出土土器実測図7 …… 61
第45図　古墳時代出土土器実測図8 …… 62
第46図　古墳時代遺構変遷図 …… 73

写 真 図 版 目 次

第1
A—古墳時代住居跡 KD 1（北西から）
B—古墳時代住居跡 KD 1（鉢の出土状態）
第2
A—古墳時代住居跡 KD 4（北西から）
B—古墳時代住居跡 KD 4（かまど付近の土器出土状態）
第3
A—古墳時代住居跡 KD 6（かまど鉢の出土状態）
B—古墳時代住居跡 KD 10（南から）
第4
A—古墳時代住居跡 KD 10（貯蔵穴内の土器出土状態）
B—古墳時代住居跡 KD 12（北から）
第5
A—古墳時代住居跡 KD 12（かまど付近の土器出土状態）
B—古墳時代住居跡 KD 14（土器出土状態）
第6
A—古墳時代住居跡 KD 15（かまどと甕の出土状態）
B—古墳時代住居跡 KD 17（南隅の土器出土状態）
第7
A—古墳時代住居跡 KD 25（北西壁付近の須恵器高坏の出土状態）
B—古墳時代住居跡 KD 25（南西から）
第8
A—古墳時代住居跡 KD 27（かまどと甑の出土状態）
B—古墳時代住居跡 KD 36（東南から）
第9
A—古墳時代住居跡 KD 36（土師器出土状態）
B—東部地区小穴群出土状態（西から）
第10
A—東部地区小穴群出土状態（東から）
B—古墳時代祭祀跡（KI 1）及び方形周溝墓（KC 1）（南から）
第11
A—古墳時代祭祀跡 KI 1（土器出土状態）
B—古墳時代溝 KT 201（北東から）
第12
A—古墳時代溝 KT 201（南西から）
B—西部地区溝状遺構（南から）
第13
A—西部地区溝状遺構（北西から）
B—古墳時代井戸 KG 1（左）・KG 2（右）

第14
A—古墳時代井戸 KG 1（北から）
B—古墳時代井戸 KG 2（北から）
第15
A—古墳時代方形周溝墓 KC 1・KC 2
第16
住居跡出土土器（KD 1・2・3・4）
第17
住居跡出土土器（KD 4・6・7・8）
第18
住居跡出土土器（KD 10・11・12）
第19
住居跡出土土器（KD 12・14）
第20
住居跡出土土器（KD 14・15・16）
第21
住居跡出土土器（KD 16・18・17）
第21
住居跡出土土器（KD 17・19・20・23）
第23
住居跡出土土器（KD 25・26・27・31）
第24
住居跡出土土器（KD 31・32）
第25
住居跡（KD 34・36・38）・小穴出土土器
第26
小穴・祭祀遺構（KI 1）出土土器
第27
祭祀遺構（KI 1）出土土器
第28
祭祀遺構（KI 1）出土土器
第29
祭祀遺構（KI 1・2）出土土器
第30
祭祀遺構（KI 2）・溝（KT 201）・溝状遺構出土土器
第31
井戸・溝状遺構出土土器
第32
古墳時代出土土器
第33
古墳時代出土土器

第 34
古墳時代出土土器
第 35
古墳時代出土土器
第 36
古墳時代出土土器
第 37
古墳時代出土土器
第 38
古墳時代出土土器
第 39
古墳時代出土土器

伊場遺跡発掘調査報告書第6冊

伊場遺跡遺物編4

第1章　遺跡の概要（古墳時代を中心にして）

伊場遺跡については，すでに報告されたものも多くあり，その全体については，既刊の刊行物を参考にされたい（注1）。ここでは古墳時代の伊場遺跡周辺遺跡群の概略を述べる。

三方原台地南端の海食崖から，約5㎞南の現在の海岸線まで続く海岸平野には，第2図に見るように下山田・八反田・村裏・新橋村東・堤町村東遺跡などが，伊場遺跡と同様に旧砂堤列上に立地する。さらに第1図で見るように伊場遺跡の北側には国鉄浜松工場内遺跡と城山遺跡が接している。

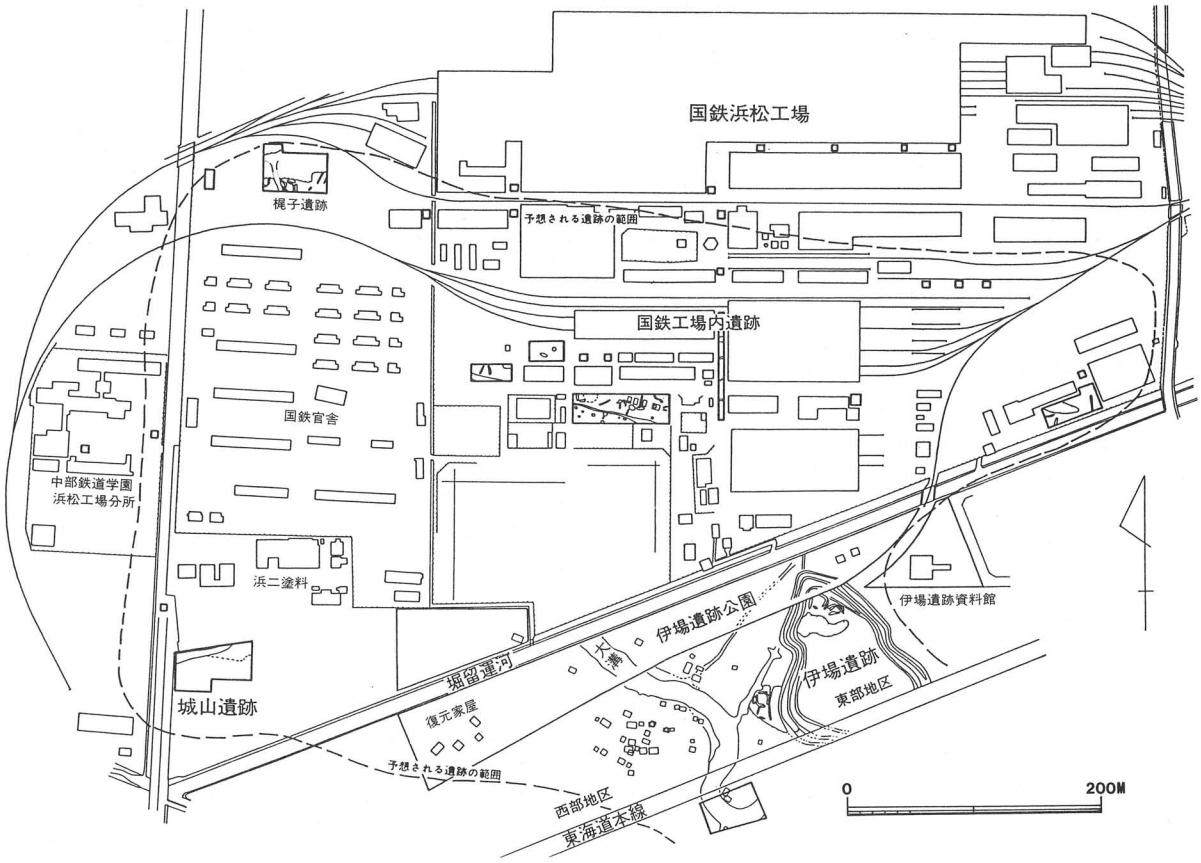
伊場遺跡では晩期縄文土器・石器が，工場内遺跡では後期縄文土器が1片出土している（1971浜松市教委・1983浜松市教委）。弥生時代にあっては工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次調査（1983浜松市教委）で弥生時代中期の土器や木製農具が発見されたのを始め，伊場・工場内遺跡ともに弥生時代後期の集落であったことはすでに知られているところである。さらに律令期には伊場・工場内・城山遺跡の広がりの中で，古代地方官衙が推定されている。これらのことから伊場・工場内・城山の各遺跡は，いずれも近接しており，立地の面からも各時期を通じて一体の遺跡と考えて良い。

こうした遺跡群の中にある伊場遺跡は，先述したように三方原台地の南端に広がる海岸平野に営まれた縄文時代から鎌倉時代までの遺跡として知られている。第2図下段を見れば明らかなように，伊場遺跡は弥生時代と律令時代に隆盛期がある。あいだの古墳時代について見ると，弥生時代から続く古墳時代前期には衰退し，中期にはやや持直すが，後期には再び衰退化の傾向になっている。この時期に隣接する城山遺跡が始まり伊場遺跡ともども律令時代の隆盛期を迎える。伊場遺跡に於ける古墳時代の後期から律令時代への推移は，城山遺跡との関係から城山遺跡への移動と考えて良い。

縄文時代の土器片や石器が発見されている事から，伊場周辺の砂州は早い時期から陸化していたと考えて良い。やがて弥生時代中期に本格的な開発（稲作の定着）が成され，後期の中葉に至るまで盛隆期を迎えた。この頃，伊場周辺は稲作に適した湿地帯が広がっていたと考えて良い。弥生時代後期末から古墳時代初頭になると，伊場遺跡には，該当する時期の遺構がほとんど無くなる。工場内遺跡の第Ⅵ次調査の所見によれば，“後期中葉の前半”と考えた方形周溝墓（1号）や“後期中葉の後半”の溝（YT1）が，基層である砂層と共に浸食され段丘状の平坦面を作っている。この平坦面に堆積した土層を掘込んだ凹地から，定形化したS字口縁の甕の破片が検出されている。このことは「浸食」が後期中葉から古墳時代初頭の間の出来事であることを示し，更に古墳時代中期の後半までには，再び堆積が進んでいたことになる。

伊場遺跡集落では，弥生時代の環濠や東部地区の周辺部に，広く堆積した青灰色粘土（C層）に覆われて廃絶し，その大半は工場内遺跡へと移ったと推定されている（1982浜松市教委）。このC層に覆われた時期が，工場内遺跡の浸食された時期とほぼ一致する。この時期は第2図で見るように海水面が高位になった時期と重なる。一方，古墳時代の中期に，海水面は最下位になる。この最下位になった時期に，伊場遺跡では安定的な住居跡群が作られ始めている。弥生時代末から古墳時代中期後半までの間に営まれた遺構は，伊場遺跡にはごく少ない数しかない。

伊場遺跡周辺の遺跡群の中で，古墳時代の遺跡をあげると，第一砂堤列上には下山田遺跡（前期）・八反田遺跡（後期），第三砂堤列上には東若林村中遺跡（中期），第四砂堤列上には新橋村東遺跡（前期）・堤町村東遺跡（前期）・田尻古墳（後期）等がある。さらに三方原台地南端には入野古墳（中期）が立地している。伊場遺跡で古墳時代遺構が衰退する時期の遺跡を，周辺の遺跡群の中で見てみると，第2図に示した下山田遺跡・新橋村



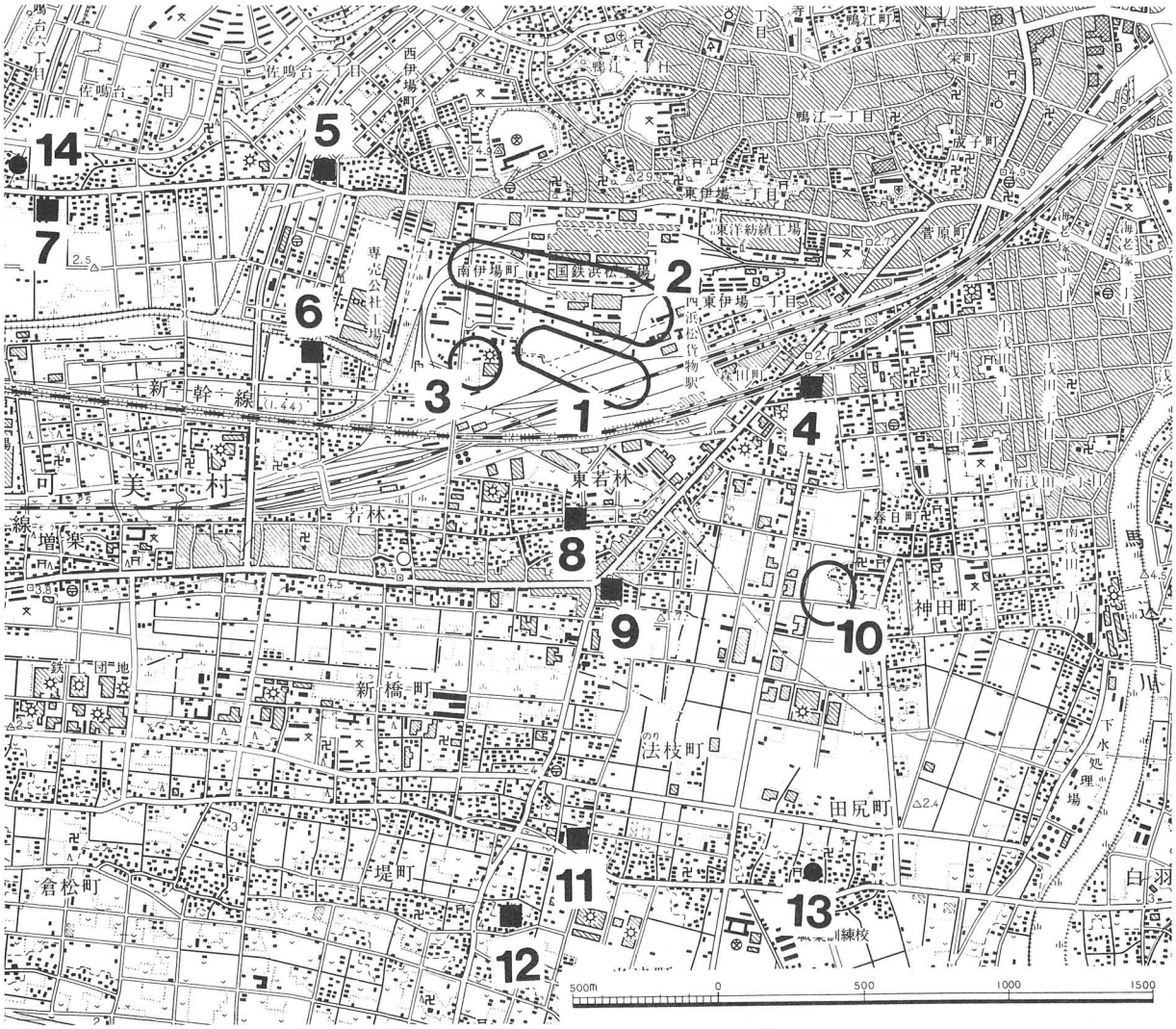
第1図　伊場・城山・国鉄工場内遺跡位置図

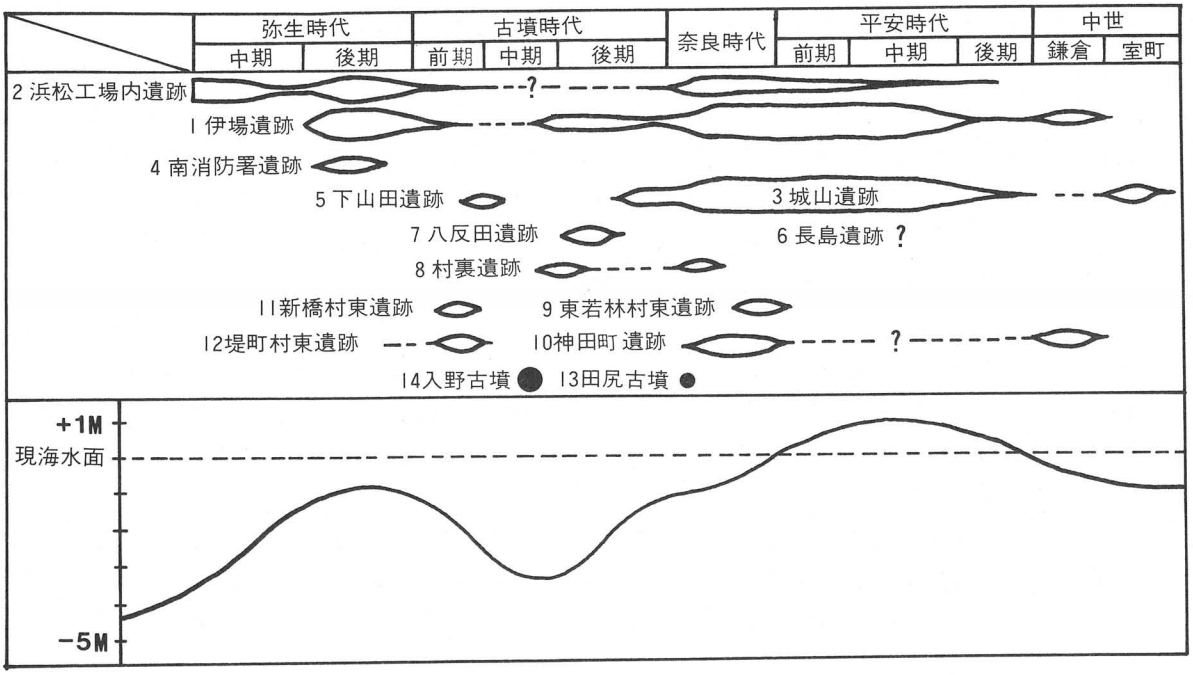
東遺跡・堤町村東遺跡などである。これらの遺跡（遺物散布地）は現在でも畑として残っている部分であり水田面より一段高くなっている所である。昭和44年測量の浜松市都市計画図（1/2500）によると，下山田遺跡標高1.8 m，新橋村東遺跡標高2.3 m，堤町村東遺跡標高2.3 mの砂堤列上（畑）に立地している。それぞれの遺跡の周辺には，畑となっている部分が（旧砂堤列が露頭する部分）広く，地形的には安定している。ちなみに伊場遺跡では標高は2.3 mと同じだが，旧砂堤列が露頭する部分（畑）が少ない。

これらの遺跡は，遺物が検出されただけで遺跡の規模や性格が分明でないが，いずれも安定した旧砂堤列上で発見されている。海水面が相対的に高位であった時期に，砂丘露頭面が比較的狭かった伊場遺跡では，生活基盤が不安定であったのかも知れない。伊場遺跡でも，この時期の遺物も散見される。したがって全く「生活」が無かったのではないので，地理的な自然条件の劣勢が，『伊場』に住んだ人々に与えた結果であると考えている。

海水面が最下位から上昇した，古墳時代後期から奈良時代にかけての周辺遺跡群（五反田遺跡・田尻古墳など）についても同様な事が言える。律令時代の中心となった城山遺跡でも，砂丘の高さは同じ様であるが，安定した広がりでは，伊場遺跡より城山遺跡が勝っている。

古墳時代の周辺遺跡群を年代順に整理してみると堤町村東遺跡・新橋村東遺跡―下山田遺跡―入野古墳―伊場遺跡―八反田遺跡―田尻古墳・伊場遺跡・城山遺跡となる。『遺物編3』でも述べているように，短絡的にこうした順序で人々が移動したとは考えられない。しかし，古墳時代を通じて，粗密の差こそあれ，伊場周辺の海岸平野に人々の生活が継続的に展開した結果である。当然，地理的な条件も考慮せねばならないが，伊場周辺の海岸平野に於ける古墳時代を通じての社会的（政治的）成熟度の結果として，次の律令時代の官衙が伊場・城山の地に立地したと考えたい。





第2図　伊場遺跡周辺の遺跡および海面変動推定曲線

第２章　古墳時代遺構と出土土器

第１節　住居跡

KD―１　（第３・４図）

有機質の多い砂質粘土が覆土となった住居跡で北半分が残されている。一辺が4.6ｍ程の隅丸方形になると推定している。北壁中央に北に，ふくらむ部分がありその内側の床に灰や炭化物が集中していた。炭化物が集中する部分の中央に３本の土製支脚が検出されている。土器は弥生式を含みポリエチレンの袋に５袋程検出されている。図示したのは，覆土から検出された１の須恵器坏身と，土製支脚を持つ炉の西側の床面に密着して出土した２の土師器の鉢である。他に土師器の坏身の口縁部の破片と，甕か鉢の底部が２個体出土している。（1977浜松市教委）

１について見ると立上がりが体部からくの字に曲がること，端部が内傾して段を作ること，受部を横にひねり出すこと，底部外面の篦削りの範囲が１／２程度である点など遠考研編年Ⅰ期後半（1966遠江考古学研究会・1979静岡県考古学研究会）・田辺編年TK 23（1981田辺）に比定されて良いものであろう。２は使用形態から言えば甕と言うべき土器で３本の土製支脚に乗せられて使われた物であろう。支脚の周囲に粘土が検出されないことなど，炉からかまどへ転化する移行期の「炉」と考えている（1971浜松市教育委員会）。以上の点からこの住居跡を５世紀後葉と考えている。

KD―２　（第３・37図）

Ｕ字形に開き土製支脚を１本持つかまどが，南向きに発見されただけであり，住居跡の規模・形態の詳細は不明。隣接するKD―９との切り合いからKD―２が新しい。かまど内の覆土から，図示した３の須恵器坏蓋の他，須恵器と土師器の破片が15点程検出されている。３は口径が15.2㎝と大きく，肩部の稜も沈線に近くなってしまう点から，形態的にはやや古そうだが遠考研編年Ⅲ期前葉（注１）（田辺TK 10）にあたると考えられる。６世紀中頃とすればかまどを持つ点とも矛盾しない。

KD―３　（第３・４図）

住居跡の２／３が東海道本線の敷地内に入ってしまい、北側の１／３が調査されている。覆土は炭化物が混じった砂層で一辺5.9ｍ程の隅丸方形と推定される。かまどは南向きに開き土製支脚を持つ。かまどの東側の床一帯に須恵器の坏身・蓋・提瓶・甕片や土師器の甕・甑片などが散乱していた。これ等のうち実測可能な３・４を図示した。４の須恵器は口唇部と底部を欠く坏身の破片だが，口径は小さめで篦削りの範囲も広い事を考えれば遠考研編年Ⅰ期（田辺TK 208）とすべき土器である。５の土師器は長胴ぎみの甕で５世紀末～６世紀と考えて良い。図示しなかった提瓶は全体をやや雑なカキ目で仕上げた，径が20㎝に満たない程度の偏平な体部に，環状の把手が付くものと推定される。坏蓋は遠考研編年Ⅱ期とⅢ期にそれぞれ推定される３㎝程の細片が２点ある。したがってこの住居跡は６世紀初頭から中頃に位置付けたい。

KD―４　（第４・５図）

かまどを中心にして東側に１／３程が検出されたに過ぎない。かまどは北壁に付いて，南側に開くＵ字形に作られ，中に土製支脚を１本置く。かまどの周辺の床面には土器が散在し土器の使われ方を窺わせる。この土器の広がりから，一辺4.8ｍ程の隅丸方形の住居跡と推定している。土器は全部で13個体程確認したが，そのうち図化可能な９個体を図示した。

６は残っている部分が１／５と少ない点とやや歪みの有るのが難点だが，口唇部をしっかり作り，篦削りの範囲を広く取っている点などTK 208に近い。いずれにしろ遠考研編年Ⅰ期の範疇に入れるべきと推定される。７は坏部の稜が甘くなる点や脚が短く脚裾も横ナデして横に開く度合いが強くなるなど，和泉式の新しい所か。８

は口縁部が僅かに開き体部を箆整形し平底に作り出している。底部の作りから篭目土器の可能性がある点などやはり5世紀末とすべきか。9・11・13などの口縁部は横に大きく広がる事はなく，体部も長胴化しているとは言え丸みを持っている。12は篭目が残り，15は丸底に作っている。図示しなかったが把手のある球胴の甑（甕）が1点出土している。これ等の土器からこの住居跡を5世紀末から6世紀前葉のものとした。

KD—5　（第37図）

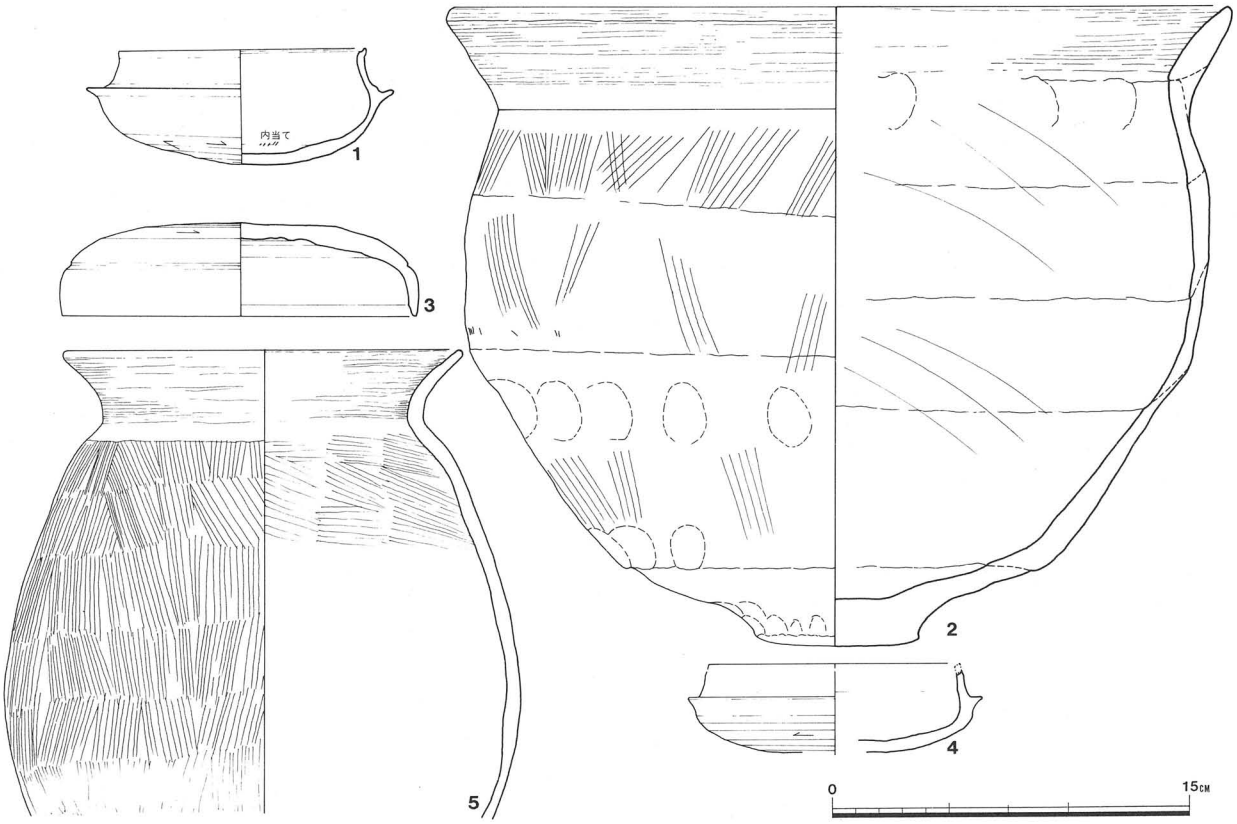
粘土の集積が検出され，調査の結果かまどと決定したものである。他にこの住居跡に伴う遺物は検出されていない。調査時の所見によれば北に隣接するKD—4を切って作られ，東側に隣接するKD—7によって切られていると推定している。KD—4が5世紀末〜6世紀前葉であり，KD—7が後述する様に6世紀末であるなら，KD—5は必然的に6世紀中葉に位置付けざるを得ない。いずれにしろ他に根拠が無いので断定出来ない。

KD—6　（6・37図）

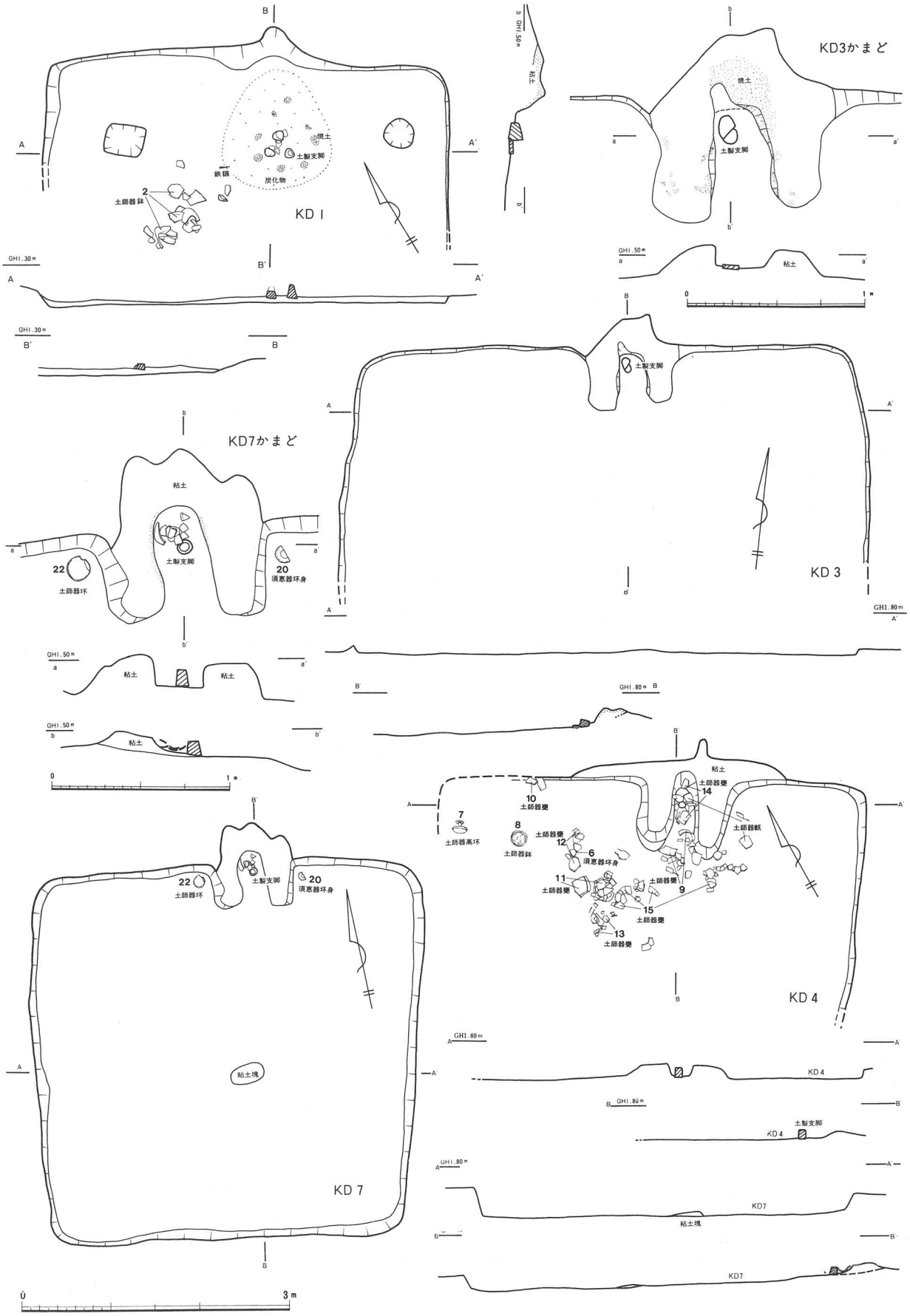
粘土の広がりが検出され精査の結果，かまどと周壁の一部と認定した。かまど内からは土製支脚や甕片が検出され，周辺の床面からは16の高坏や17の甕，さらに須恵器の破片等が検出されている。かまどの南西に小穴が検出され，これがKD—6に伴う遺構と考えられるので18として図示した。18は底部を欠き口縁部も1/3しか残っていないが，KD—1の2の鉢と同様に考えて良い。KD—1が「炉」であったことを考えればKD—6は既にかまどとなっており，それだけ新しい要素を持った住居跡である。従ってこの住居跡を6世紀の前葉に位置付けたいと思っている。16の高坏や17の甕についても同様な時期の幅の中で考えて良いものであろう。

KD—7　（第4・6図）

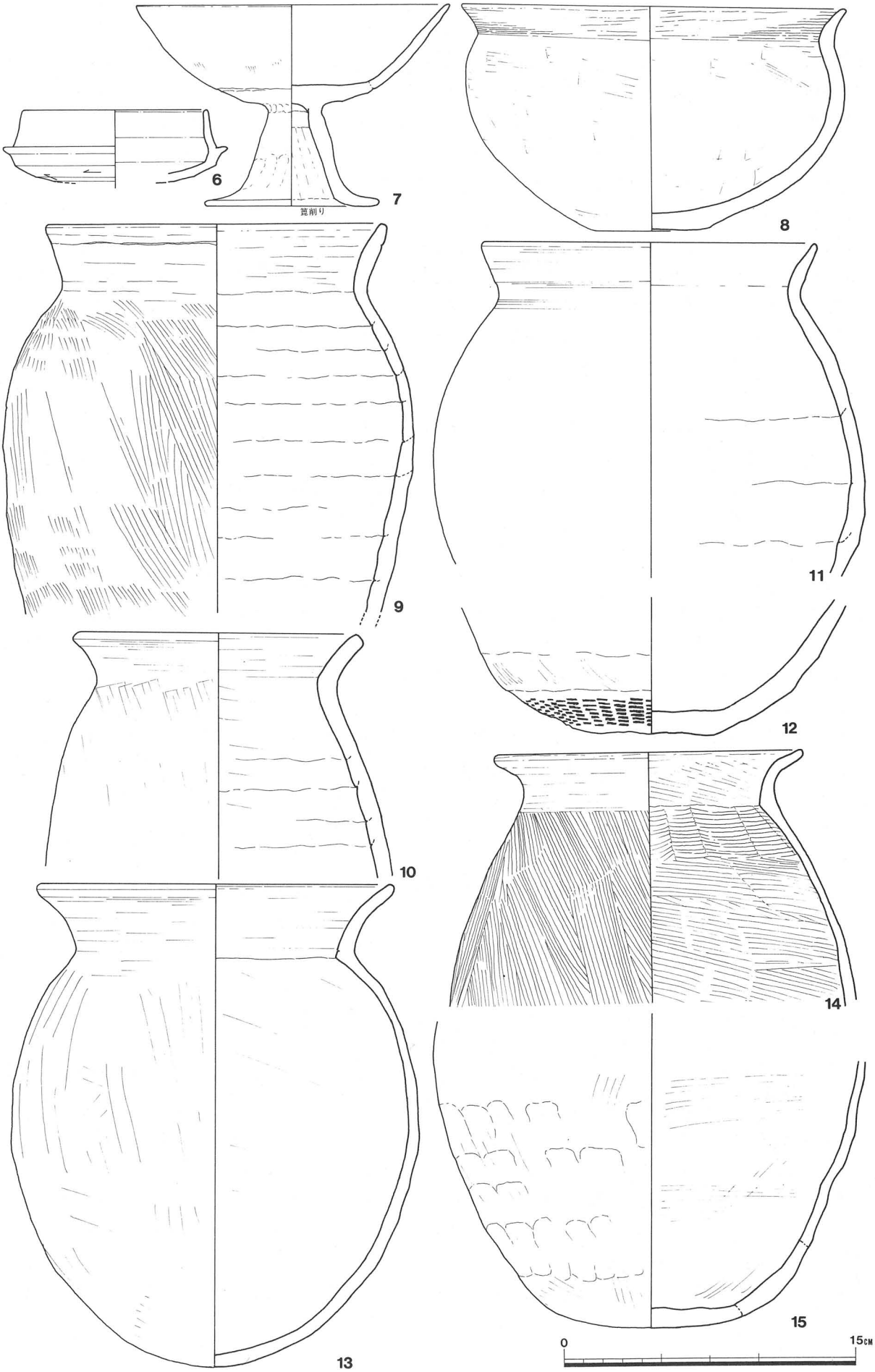
住居跡の全面が検出された唯一のもの。一辺4.3m程のやや小さめの隅丸方形の住居跡になる。U字形に開くかまどが北壁の中央に作られ，その両側に須恵器（20）と土師器（22）が置かれていた。かまどには土製支脚があり床面からも多くの土器片が検出された。土器片は弥生式土器を含むほか甑の把手や甕片等が多く，須恵器片



第3図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図1（KD—1・2・3）



第4図　古墳時代竪穴住居跡実測図1（KD—1・2・3・4・7）



第5図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図2（KD—4）

も混じる。細片が多く19～22の4個体を図示した。19と20は同様な須恵器坏身で，口径や体部の作りから遠考研編年Ⅲ期中葉に位置付けて良い。22は模倣坏の蓋で口径が14.2㎝と大きく肩部の稜も明確ではないなど，Ⅲ期中葉に併行するべき模倣坏か。21は口縁部が内彎し体部も腰が張って深くなるなど19・20・21等より古くすべき土師器である。20と22が，かまどの両側に置かれた様な出土状態であったことや，編年的な時期もほぼ一致するので，一応KD—7の時期を6世紀の後半と考えている。

KD—8　（第6・37図）

砂層が浅く掘り込まれた部分を住居跡と推定した。北側には砂質粘土が広く分布して焼土のブロックが検出される部分もあった。しかしいずれも炉やかまどと認定出来なかった。覆土からは弥生式土器・土師器・須恵器等の破片が検出されたが細片であり検討に耐えない。22－2はA11dのポイントの近くで検出されたもので，KD—8に伴う土器と推定される。遠考研編年Ⅲ期中葉に伴う鉢と考えている。この鉢に年代を求めればKD—8は6世紀後半に位置付けられる。いずれにしろ他に根拠はない。

KD—9　（第37図）

KD—2のかまどに隣接して同じような向きに並んだかまどが発見され，これをKD—9と認定した。調査時の所見によれば，KD—2以前の住居跡に付属するかまどの残骸と考えている。住居跡の掘り込みは検出されていない。位置関係からKD—2の建直しも考えられる。いずれにしろKD—2以前（6世紀中葉）に住居跡が在ったことになる。

KD—10　（第7・8図）

遺構が後世の攪乱や耕作によって壊されている度合いが少なく保存状態が良い。かまどや土器も比較的良く残されていた。かまどは北壁のほぼ中央に作られ壁の外に突出しない。かまどの前面の床には焼土や炭化物が広がり，かまどの中には土製支脚が無く，「炉」の要素を多く残している。南壁の中央部に接して70×50㎝深さ14㎝の掘り込みがあり，砥石と土器（25・31）が入っていた。23～31まで9点を図示したが，この他に土師器の甑片・高坏・坏・甕片，須恵器片等が出土している。

23の坏蓋は天井部の篦削りの範囲が広い点など，やや古い手法が残るが全体の器形から遠考研編年Ⅰ期後半（TK23あるいはTK47）と考えて良い。24も口径が大きくなって坏部が横に広がり浅い感じになる点など同様と考えて良い。25～28の坏や高坏も5世紀末としてよいものであろう。かまどの形態も両側に袖を持つかまどではなく，炉に近い形を残している。炉からかまどへの移行期と考えれば5世紀末としてよい。

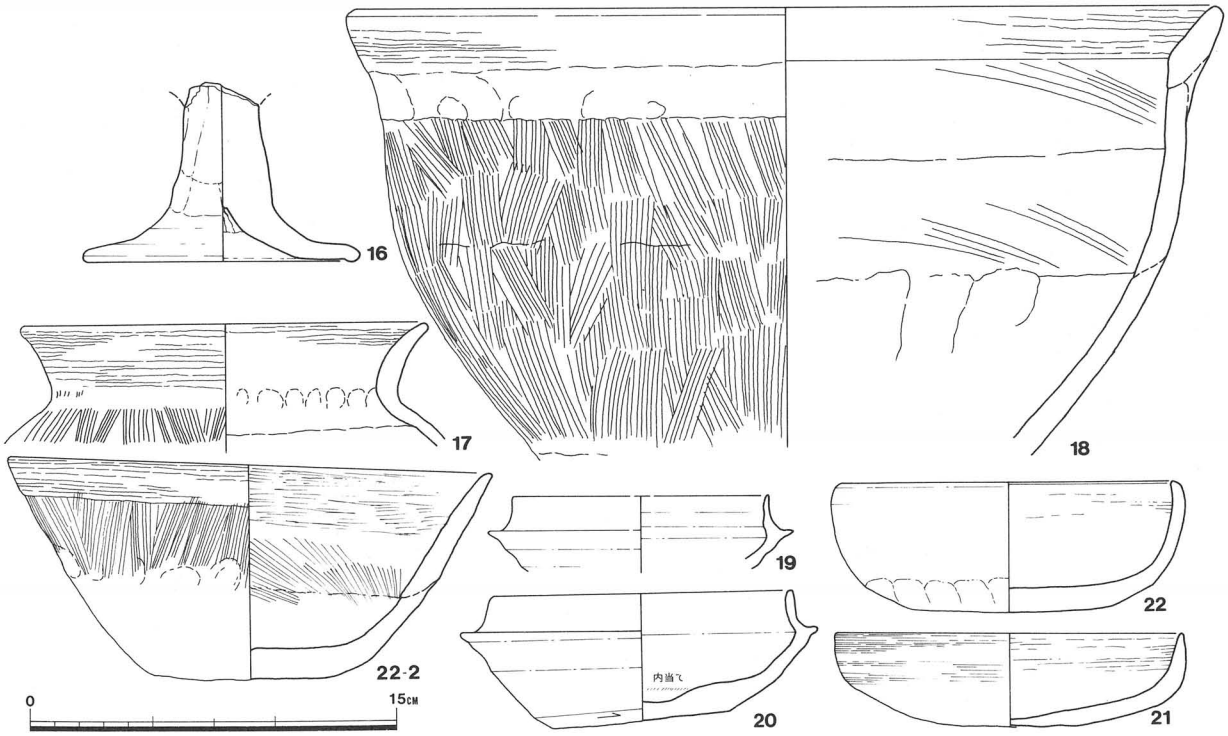
KD—11　（第8・9図）

一辺が5m程のほぼ正方形に近い隅丸方形となる住居跡で，西側は奈良時代の掘立柱遺構と重なっている。北壁の東寄りに壁から突出したかまどが作られ，南壁中央に接して貯蔵穴状の小穴（径80×70㎝深さ20㎝）が設けられている。幅10㎝長さ10㎝の壁溝も一巡している。かまどには土製支脚は無く袖状の作り出しも見られない。KD—1やKD—10の様に炉からかまどへの移行期の住居跡と考えている。貯蔵穴状の小穴の縁には炭化したザルが残され，須恵器高坏（32）土師器甕（33）・甑（34・35）が中から検出された。調査時の所見によれば土器をザルに入れて小穴の中に置いたものと想定している。

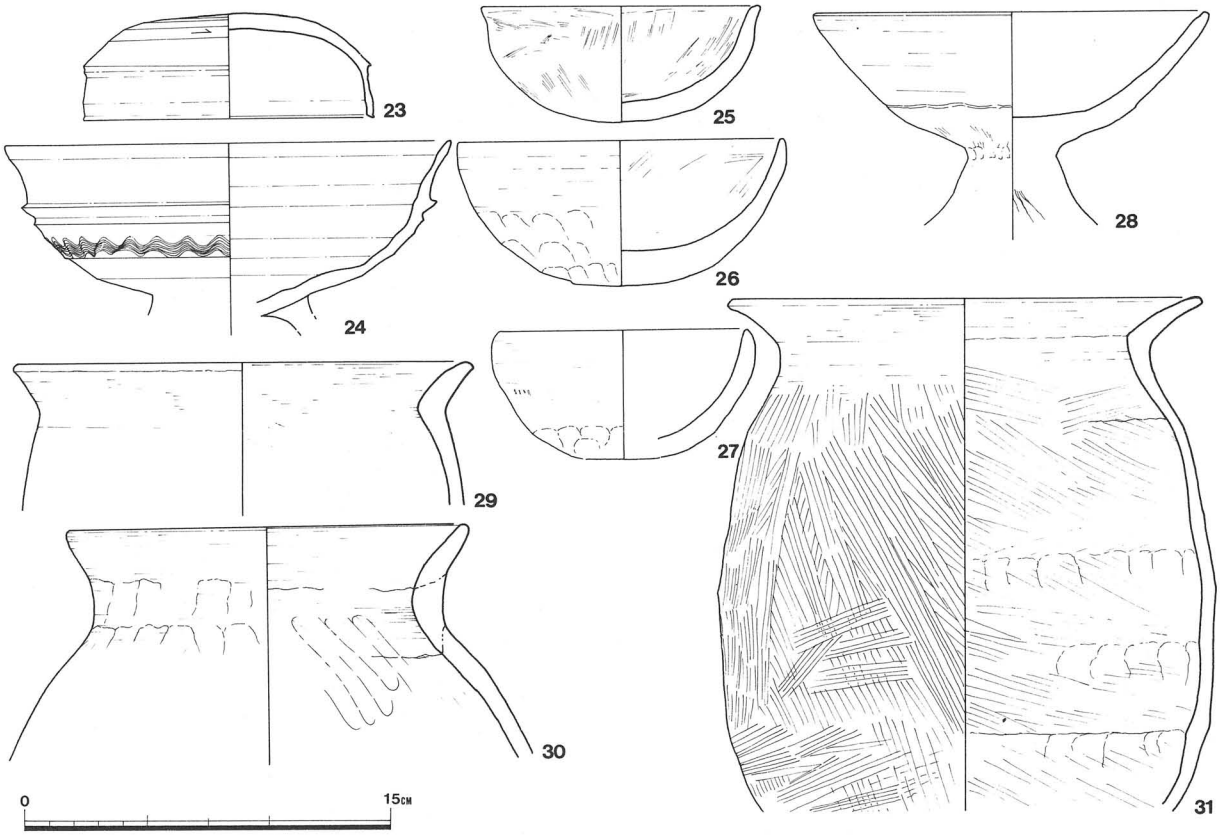
32は長脚の無蓋高坏で稜も甘くなり櫛描波状文も雑になる。遠考研編年Ⅱ期（MT15）に比定されると考えている。33はS字状口縁の甕の最終段階の形態で安達編年でVA（1974安達・木下）としたものであり，5世紀末の年代が考えられている。34と35は折り返し口縁になり胴部はややふくらみを持ち底部にかけて丸くすぼまる。同様な甑が坂尻遺跡でも見られ「K第三期（2）＝6世紀初頭」の遺構から出土している（1985袋井市教委）。したがってKD—11の年代は住居跡の構造からも遺物の面からしても6世紀のごく早い時期を考えている。

KD—12　（第9・10・13図）

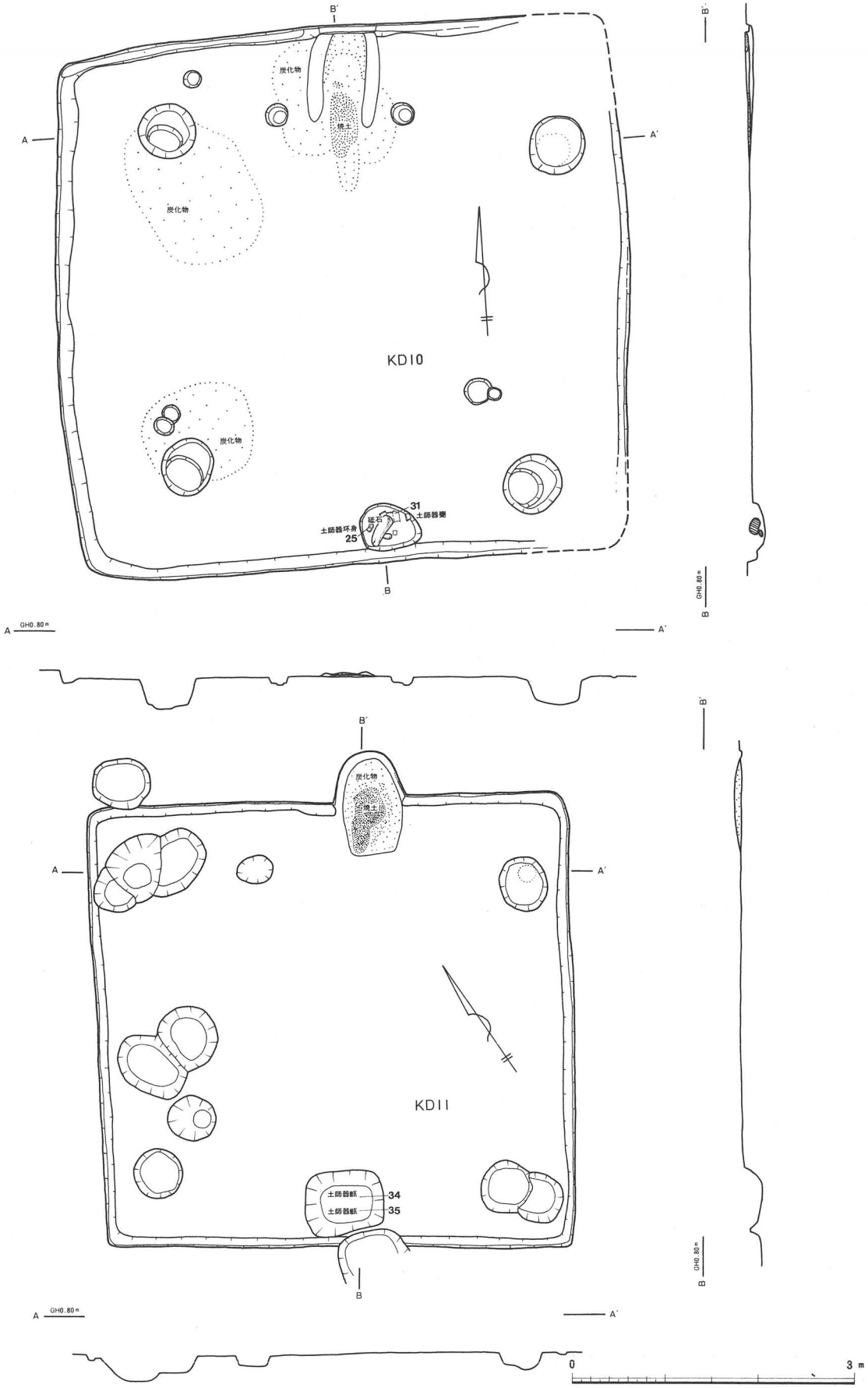
粘土質の砂層の落込みとして検出され4.9×4.9m程の隅丸方形になる。北壁にはU字形に袖を作り出した，



第6図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図3（KD—6・7・8）

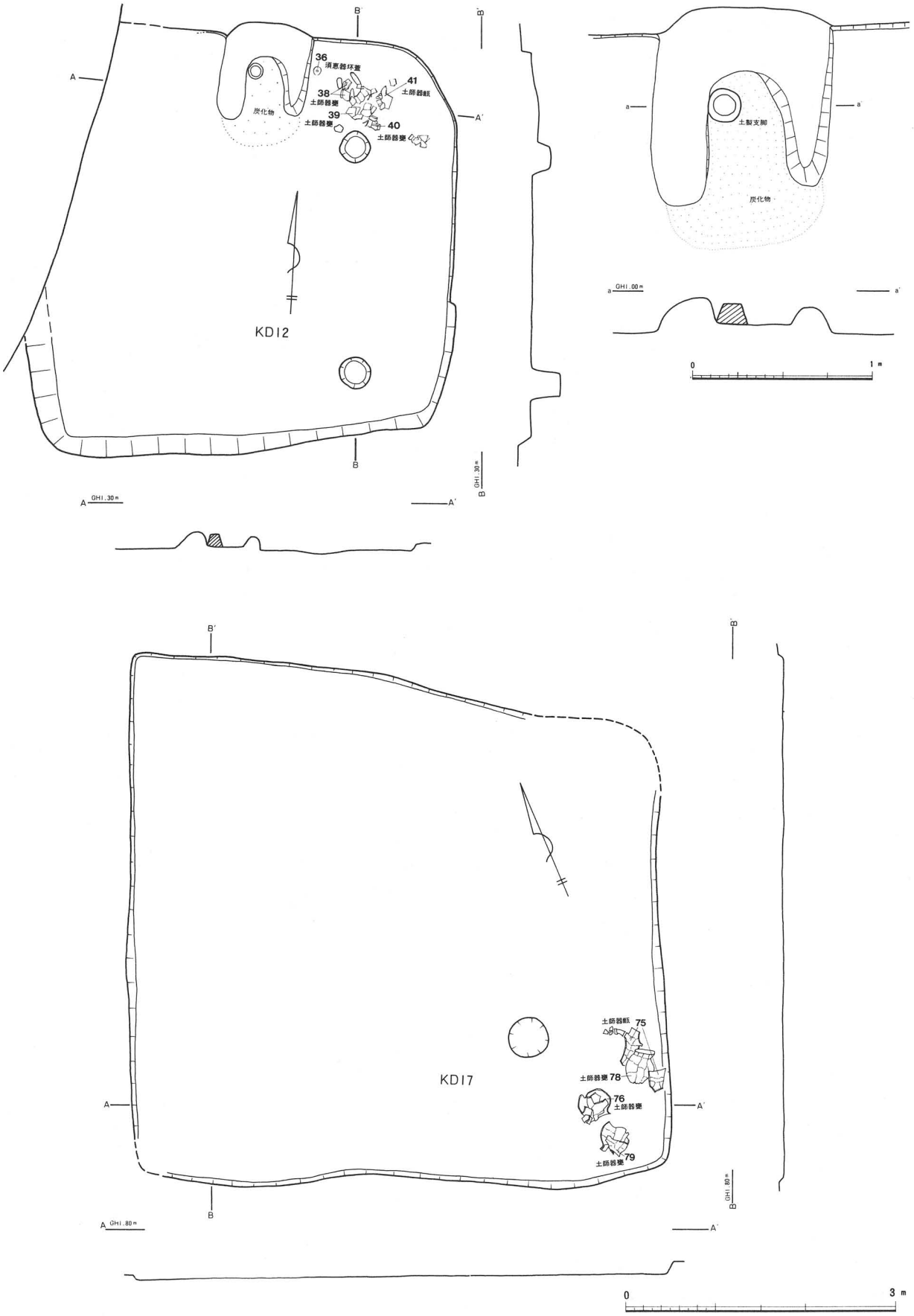


第7図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図4（KD—10）



第8図　古墳時代竪穴住居跡実測図2（KD—10・11）

第9図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図5（KD—11・12）



第10図　古墳時代竪穴住居跡実測図3（KD—12・17）

しっかりしたかまどが作られ土製支脚も検出されている。西側の壁や柱穴は確認出来なかったが，その他の壁や住居跡の平面形は比較的良く残っていた。甑・甕等の土器はかまどの東側に散乱して出土している。

36 は口径が 14.6 ㎝と大きく肩部の稜も無くなってしまう点は新しいが，箆削りの範囲が広く口唇部の作りが丁寧である。遠考研編年Ⅲ期前葉（TK 10）に併行すると考えたい。37 は口縁部を欠くので何とも言えないが口径が大きいのでⅢ期の須恵器と考えて良い。図示出来なかったが床面から出た須恵器の中に，口唇部が段を作って内傾し，底部外面の箆削りの範囲も広い坏身（MT 15?）の細片が混じっている。

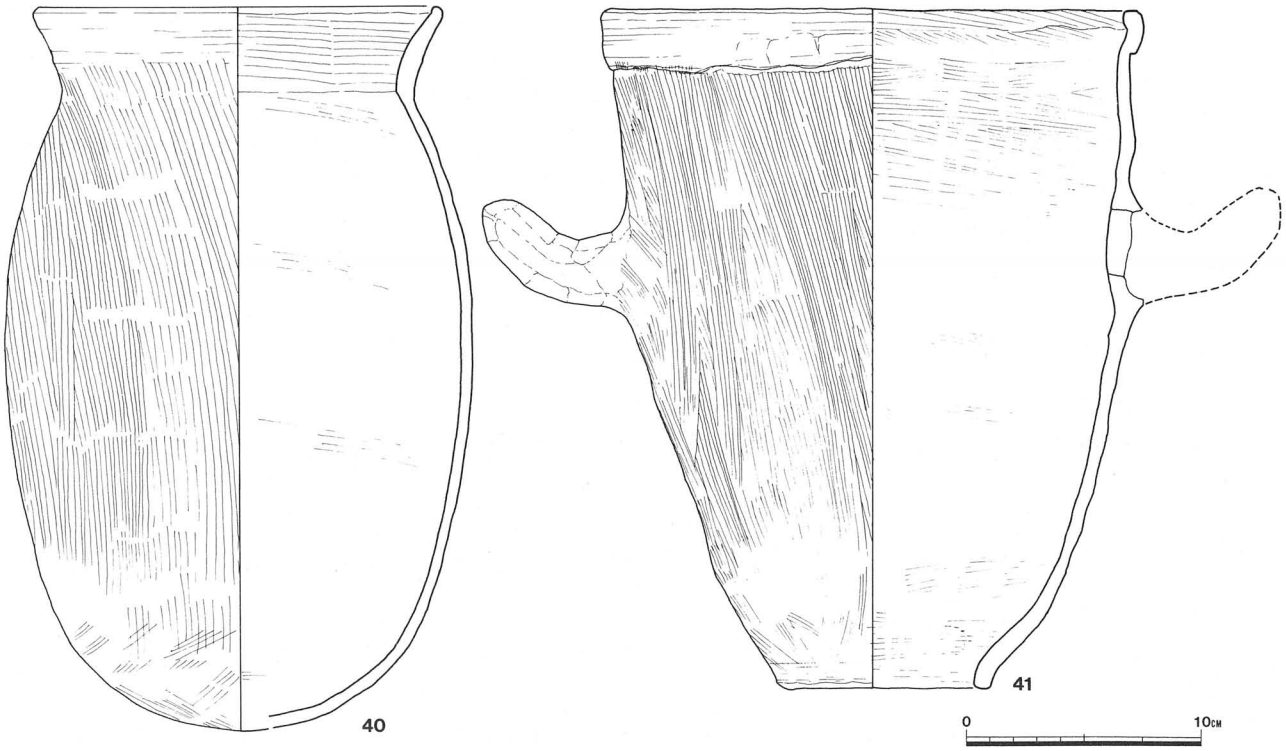
土師器について見ると，甕は口縁部が立上がりぎみになり，先端は内側を窪ませ丸く作り，体部は長胴化する（38・40）。41 の甑もやはり KD—11 の 34・35 に比して口縁部から直線的にすぼまり，長胴化する。これが時間的な変化とすればこの住居跡は KD—11 より新しく 6 世紀の中頃に比定出来よう。

KD—13（第 37 図）

発掘区の断面の観察により砂質粘土の落込みと水平堆積を住居跡と推定し，平面的な広がりを確認したものではない。したがってかまどあるいは炉等の遺構や焼土・炭化物・灰等の集積も検出されていない。調査当時の所見によれば他の住居跡と同様にかまどを北東に作った住居跡であり，断面の観察により 6 世紀代のものと推定している。根拠の脆弱な住居跡である。KD—13 として取上げた土器片は須恵器・土師器等 15 点程であり坏身の細片から，6 世紀代の中頃以降としか考えられない。

KD—14（第 37・12 図）

A 12 f 区東壁断面で確認された砂質粘土の落込みと平面的な粘土の広がりから住居跡と認定したもの。平面調査では北壁にあたる部分に，焼土や粘土塊も検出されたが，かまど等の遺構として断定出来なかった。かまどと推定される焼土・粘土塊の集積部分の周辺から多くの土器が検出されている。42 ～ 51・54・56・58・342 がそれ等の土器である。（写真図版第 5 -B）



第 11 図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図 6（KD—12）

蓋坏について見ると42の蓋は肩部で折れ曲り口縁部も直立して，田辺編年のMT 15に近い器形を残すが，焼き歪みがありはっきりしない。45は肩部に稜も残りMT 15併行の土器としてもよい。46の立上がりが直立する点や口唇部を内傾させるなどMT 15に近いが，体部の腰が張らない点などTK 10とすべきか。43や44の蓋，47や48の身などはTK 10に比定して良いものであろう。342は立上がりが低く，体部も腰が張らずに直線的に立上がるなど，やや新しく遠考研編年Ⅲ期中とすべきであろうか。45と47は蓋が身に着せられた状態で出土している。土師器の甕について見ると54や58のように胴部にやや脹らみを持ち篭目を残す点など古い要素か。

須恵器の蓋坏で見るかぎり形態的には2又は3形態の幅がある。しかしこれらの土器はその出土状態からして一括品として考えて良い。342がやや新しい要素を持つので問題だが，田辺編年のMT 10に比定すべき土器の多いことから，この住居跡の時期を6世紀中葉としたい。

KD—15（第37・13図）（写真図版第6-A）

A 12 f区の西壁断面で砂質粘土の落込みが検出され，平面的にも粘土の多い部分の広がりがあり住居跡と推定した。住居跡の北壁にあたると思える部分に粘土の集積がありかまどと想定された。後世の攪乱が激しく床面やかまどの構造などはっきりしない点が多い。かまど（粘土の集積部分）には60の甕の底部が置かれた状態で出土している。

土器は60の他に弥生式・土師器が20片程とカキメの残った小形壺（瑔?）の須恵器の頸部破片が1片検出されている。これらの土器の他に時期を示す積極的な資料がないので断定できないが，かまどを持っていることも含めて6世紀中頃と推定している。

KD—16・18（第37・13図）

A 12 e区でセクション帯の東壁断面で検出した砂質粘土の落込みを住居跡とした。同じ断面でKD—16の真下でKD—18も確認している。調査時の所見によれば，KD—16の床面と考えた砂質粘土の広がりが1.8 m程確認され，KD—18では壁の一部と住居跡の床面? が，4 mに亘って確認された。さらに，KD—18は僅かに残された壁から，他の住居跡と同様にかまどを北東の壁に作った住居跡と想定された。また，KD—16としたこの落込みはKD—18の覆土の可能性もあると考えている。いずれも幅1 mに満たないセクション帯の中で検出したもので，平面的な広がりが確認されていない。根拠の脆弱な住居跡である。

KD—16として取上げられた土器は61～66で，他には破片が少し残るだけである。63・64の蓋坏は蓋肩部の稜も残り田辺編年MT 15に比定されて良い。62は肩部の稜が沈線によって作られるがやはりMT 15と考えて良いであろう。61は口径が小さく立上がりも高い。1回あたりの箆削りの幅が広いことや体部の形態から5世紀代に遡るものではない。遠考研編年Ⅱ期の土器とすべき物か。土師器については65の鉢が古そうである。

KD—18として取上げた土器は，67の壺（甕?）と，他に弥生式と土師器の破片が数点である。67は球胴になるようであり，古くしたいが下半を欠くため何とも言えない。

周辺から出土しKD—16かKD—18に伴う土器として，取上げられたものが68～71の土器である。68の坏蓋は口径が小振りだが肩部の稜も残り，69同様にMT 15に比定出来る。70・71の甕も66と同様な土器である。

したがってKD—16・18として取上げた土器相互に大きな時期差はなく，ほぼ同一時期と考えて良い。住居跡が同時に存在することはあり得ないので，何らかの事情による建て替か，先述したようにKD—18の覆土をKD—16と誤認したものかも知れない。

いずれにしろ，ここに在った住居跡の時期は6世紀の前葉から中葉にかけての期間と推定される。

KD—17（第10・15図）

東西6.1 m，南北5.8 mの隅丸方形の住居跡で，奈良時代の溝や各種の小穴と重なって検出された。壁溝が巡っており住居跡と確認できた。後世の遺構や攪乱で失われた部分が多いと推定されるが，かまどを思わせる粘土や炭化物の集積は見られなかった。床面に焼土が検出された部分があり，炉の存在が想定されたが断定出来なか

第12図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図7（KD—14）

った。住居跡の南東の隅に土師器の甑と甕が（75・76・78・79）置かれていた。床面からは他にも多くの土器片が検出され主なものを第15図に示した。

須恵器について見ると72は肩部に鋭い稜が付くが，口縁部の立上がりがやや低く，口径も大きい事から遠考研編年Ⅱ期（MT 15）として良い。73は口縁部破片の細片であるが72と同様と考えて良い。74は壺の蓋と考えていいが類例が少なく時期は不詳。土師器について見ると75の甑はやや長胴化するが，口縁部から丸みを持って徐々にすぼまり直線化しない。76・78の甕も球胴の傾向が残っているし77・79も同じと考えて良い。5世紀末から6世紀前葉の時期であろう。

この住居跡の年代を72・73の須恵器坏蓋に求めて6世紀前葉にかけての時期としたい。

KD—19（第37・17図）

A 12 b区の北壁断面でKD—13と並ぶ住居跡と確認したもの。残された幅50㎝程のセクション帯の中で平面的な範囲を確認した。検出した土器は多くはなく30片程で，土師器の甑の把手や篭目のある甕底部破片，須恵器の細片等であり時期を明確にする物はない。図示した高坏の脚も5世紀までは遡らない。調査時の所見では切合いからKD—13以前に作られていたと考えているので6世紀中頃と推測される。住居跡の存在も含めて他に根拠は無い。

KD—20（第37・17図）

A 12 aのポイントで交差するセクション帯の断面で住居跡と確認した。平面的にも砂質粘土の広がりから住居跡の範囲の大略を知ることが出来た。床と確認した砂質粘土の範囲ではかまどを示す粘土の集積は確認されなかった。

住居跡内から出土した土器は，それほど多くはなく破片が50片程であり，土師器の埦（81）をはじめ高坏脚・甕の破片，須恵器の坏身片等である。81の埦はやや古く発掘当初の所見では5世紀代と考えていた。しかし，床面に近い覆土からは須恵器坏身片も検出され，細片とは言え遠考研編年Ⅲ期中葉から後葉に比定されてよいものである。したがって6世紀後半代の住居跡と考えたい。

KD—21（第14・17図）

他の住居跡のように砂質粘土の覆土ではなく，黒色の有機砂層の落込みとして検出された。古墳時代の遺構や砂層の崩れ等で攪乱された部分もあり平面形を明確に確定し得なかった。しかし，住居跡の壁が2/3程が確認され，ほぼ方形で東西6.3 m，南北6.1 mの規模と推定出来た。住居跡の西側と南側には，やや広がった壁溝状の溝があり北東の隅には焼土が集積して検出されている。

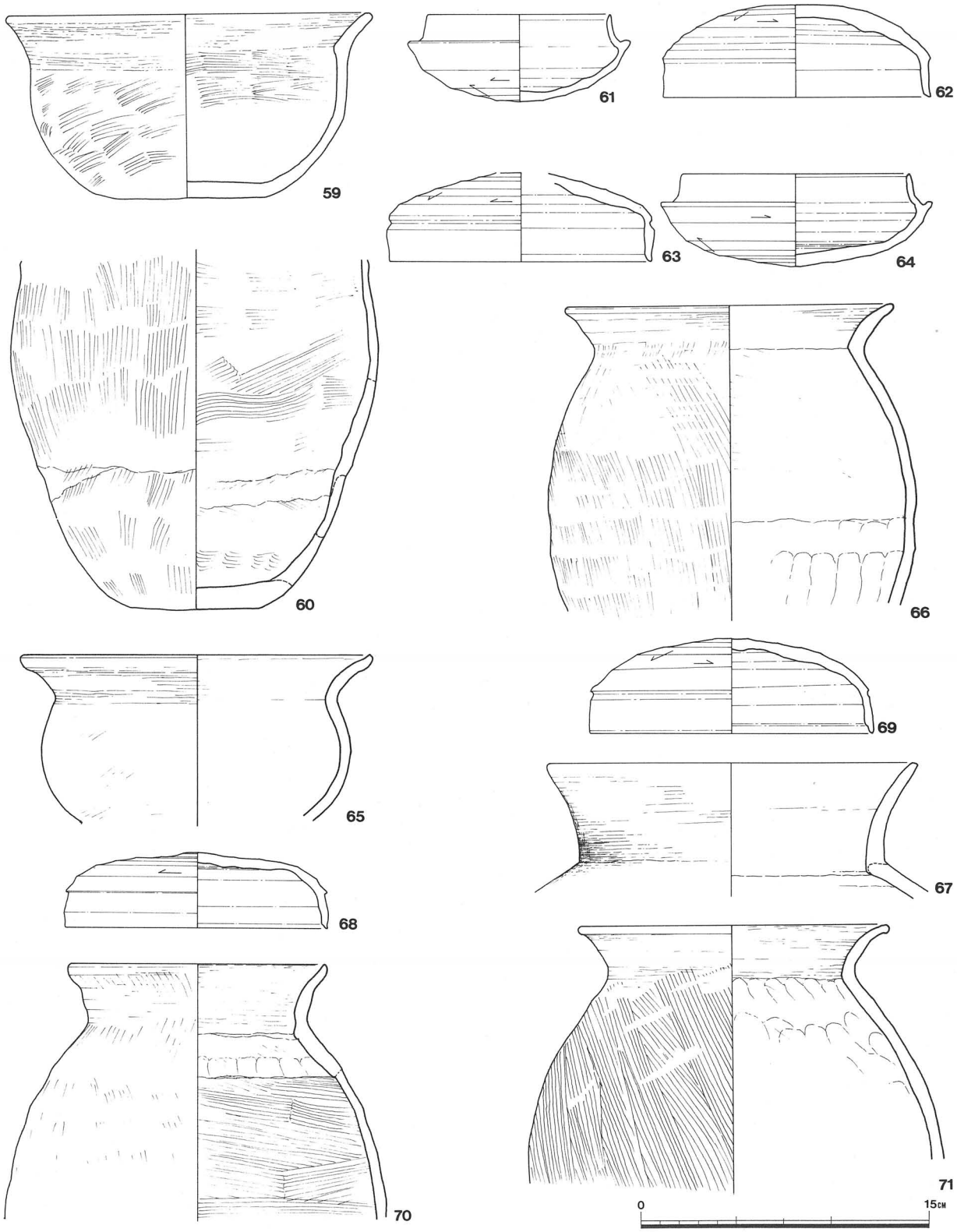
住居跡内の溝から82・83・84の土師器が検出された。住居跡の覆土から多くの土器片が出土したが，須恵器は含まず弥生式の破片やS字形口縁の甕片（安達編年Ⅲ類に比定）（1974安達・木下）が混じる。84は外面に薄く刷毛目が残り内面から箆削りして薄く仕上げた布留式土器である（注4）。82も底部を不定方向に箆削りして仕上げる等古い手法を残す。

したがって，この住居跡は他と異なり一段と古い4世紀後半代と位置付けて良いと考える。伊場遺跡では最古の住居跡である。

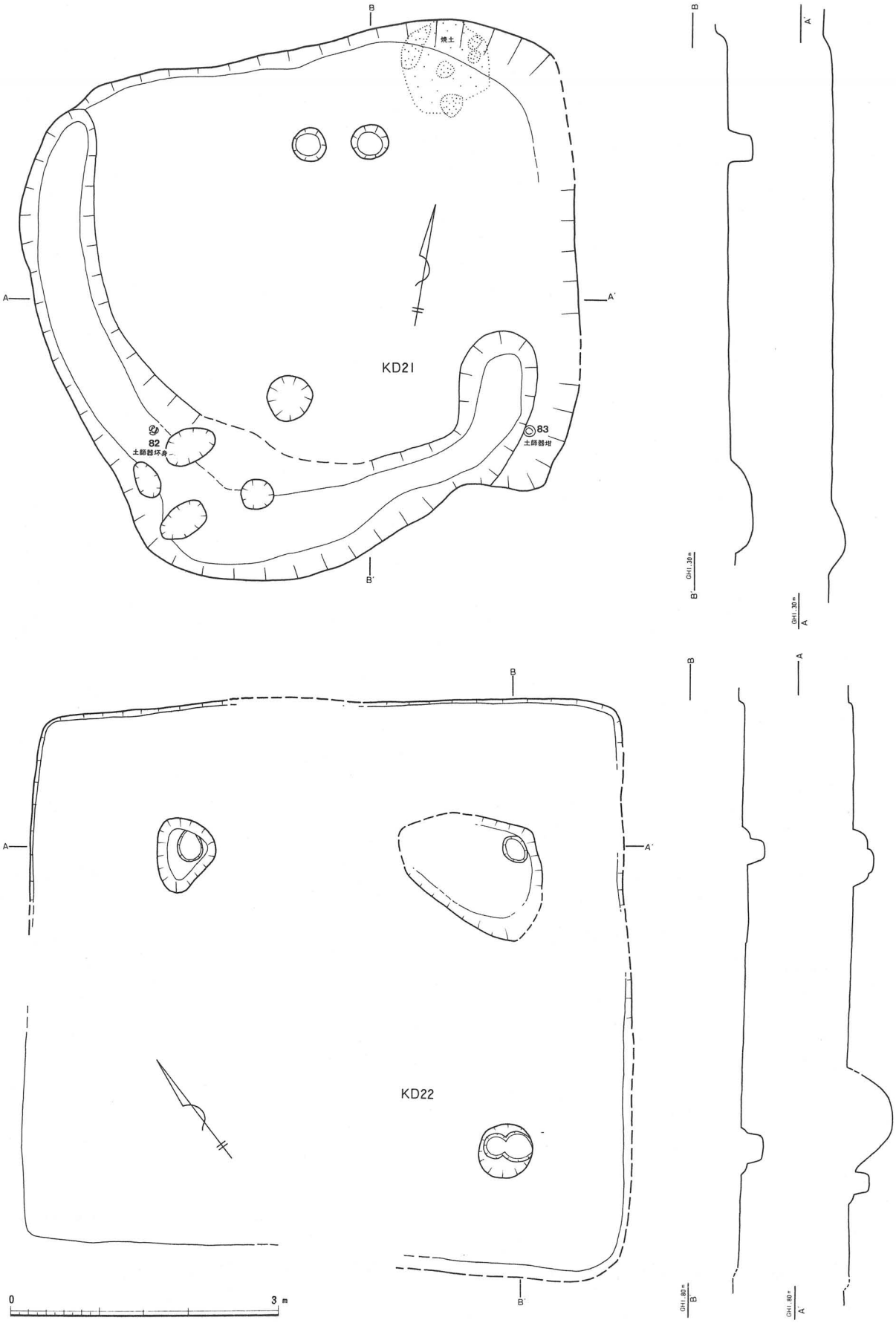
KD—22（第14・37図）

最下層の砂層中に砂質粘土の落込みとして検出された。後世の攪乱や遺構の重なりから消失している部分が多い。浅く残った壁溝から住居跡の三隅が確認されたので，東西6.7 m，南北5 mの隅丸方形の住居と推定された。床面は多くの遺構が重なるため（第37図）平面的な広がりの確認が困難であり，かまどを示す粘土の集積や，炉と思える焼土も確認されず，この住居跡の柱穴も確定出来なかった。

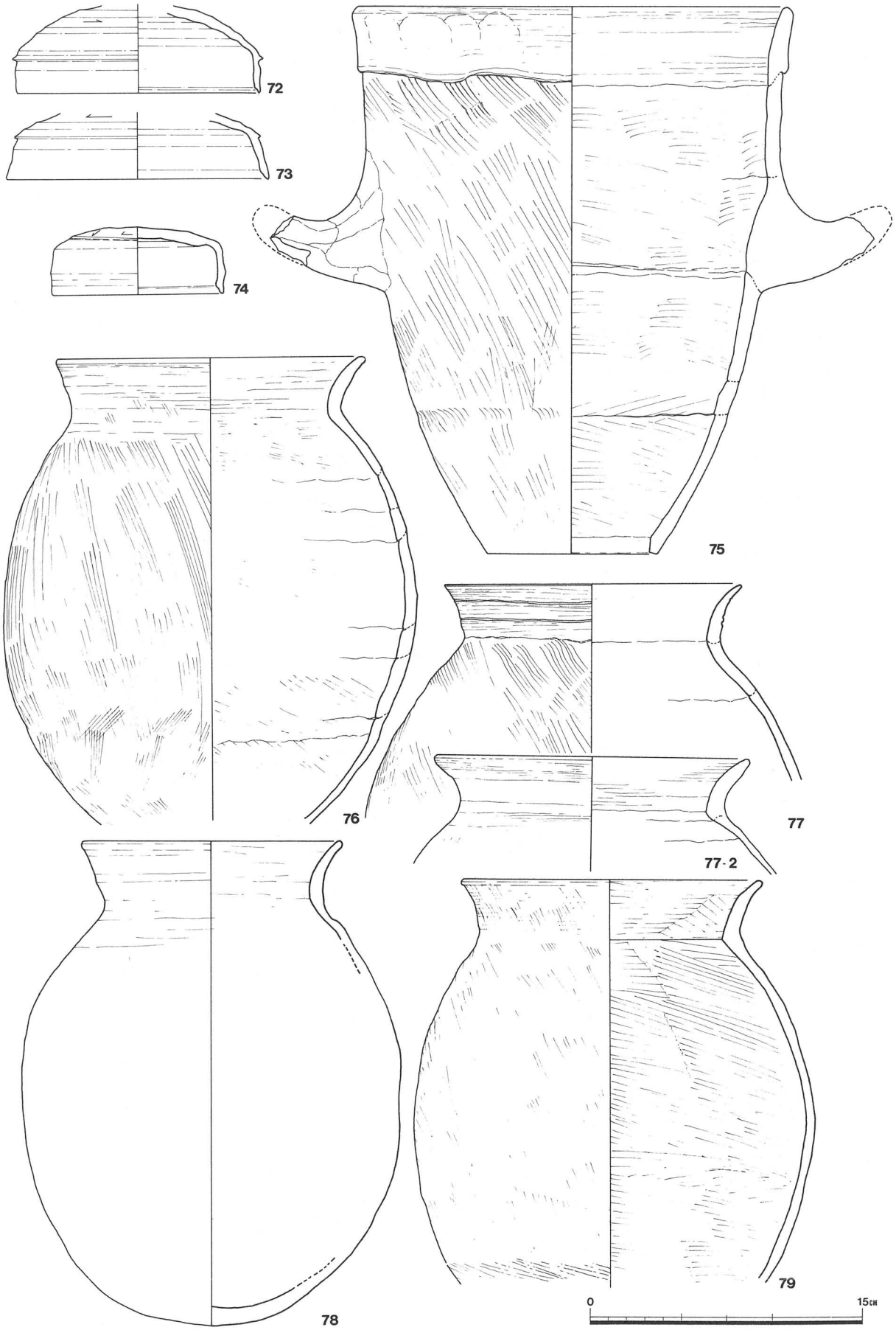
住居跡内から検出された土器は，いずれも破片ばかりであるが，古式土師器片や須恵器片もまじる。調査時の所見では住居跡の検出された層位や，炉を持つ住居跡と想定して5世紀代のものと推定している。しかし，須恵器片を見るかぎり，6世紀代の土器とするのが妥当と思えるが，細片であるため他に根拠は無い。



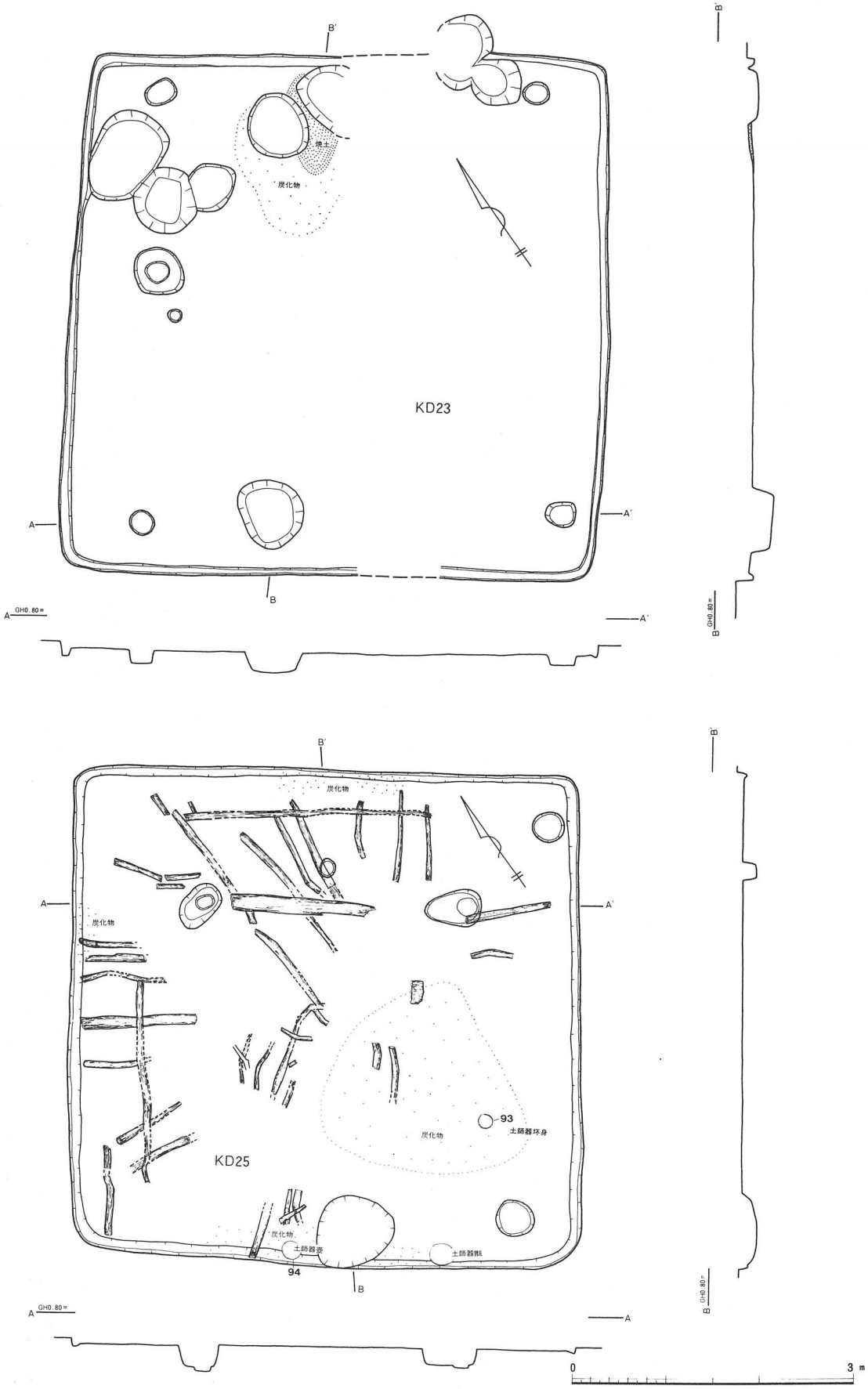
第13図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図8（KD—14・15・16・18）



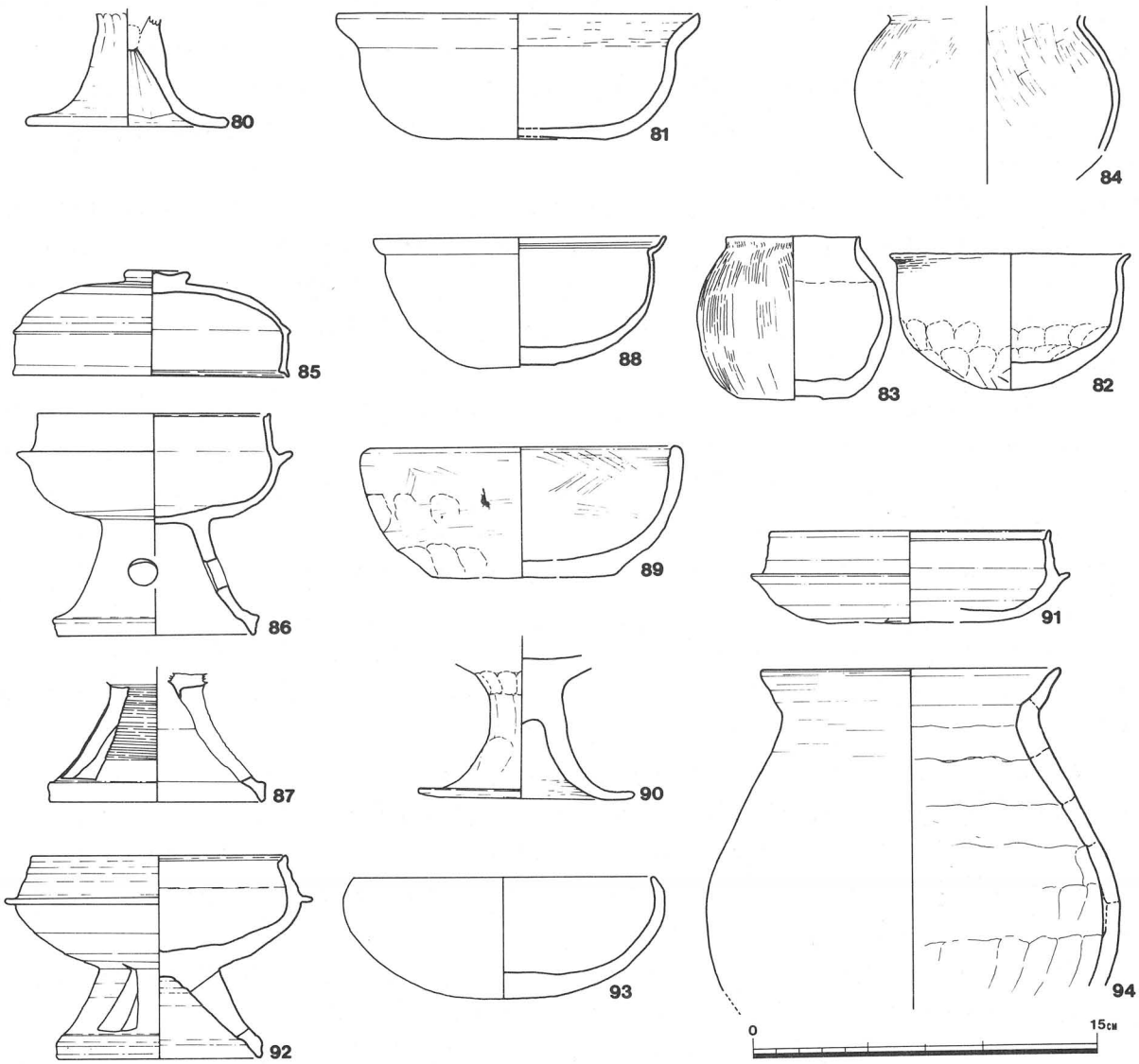
第14図　古墳時代竪穴住居跡実測図4（KD—21・22）



第15図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図9（KD—17）



第16図　古墳時代竪穴住居跡実測図5（KD—23・25）



第17図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図10（KD—19・20・21・23・25）

KD—23　（第16・17図）

西部地区大溝の南縁で検出された住居跡である。奈良時代の掘立柱遺構と重なりその堀方によって壊されている部分も多い。壁溝がほぼ一周して検出されたので隅丸方形の住居跡と確認できた。西側床面が炭化物で覆われていることから，火災に遭ったと推定されている。北壁寄りに焼土の広がりが検出されたが粘土の集積はなく，袖を持ったかまどではなく炉と考えた。南壁寄りには径80㎝×70㎝，深さ20㎝ほどの貯蔵穴が作られている。

KD—23から出土した土器は，85～90までの6点と須恵器と土師器の破片が少しである。85の高坏の蓋は撮が低く偏平になり，天井部外面の篦削りの範囲も狭く遠考研編年Ⅰ期後半（KT 47?）に比定される。86・87の高坏は脚部が八の字に開き薄くカキメを残す。端部は断面三角形に作られるだけで終わるなど，同様に遠考研編年Ⅰ期後半と考えたい。88の埦は古くなるが（和泉式?），89・90は85～87の須恵器に併行する土師器として良いものと思われる。

したがって，KD—23の時期を5世紀末から6世紀の初頭にかけての時期としたい。

KD—24　（第37図）

大溝の南縁で検出した東西4.2 m，南北3.9 mの小形の隅丸方形になる住居跡。壁溝と床面，4つの柱穴が確認されただけで，焼土や炭化物粘土の集積など住居跡に伴う他の遺構を想定させるような物は検出されなかった。年代を示す土器などの遺物は検出出来なかった。発掘時の所見では大溝の西側で発見された住居跡は全て5世紀代であり，KD—25・29・30・38等と同じ方向性を持つので，KD—24も同様に5世紀末に比定した。

KD—25（第16・17図）

大溝の南縁で発見された。住居跡の床全面に炭化物が散乱した状態で検出された。炭化物は屋根材や壁材と確認できる木材や茅?（藁?）等もあり，火災によって崩壊した事が窺えた。壁溝がほぼ一巡し一辺が5.3 mほどの隅丸方形になる。住居跡中央の南東部分に焼土が集積していたが，発掘時の排水溝と重なったりして，はっきりした炉は検出出来なかった。南壁に接して径90 cm×70 cm深さ20 cm程の貯蔵穴が作られ，周辺から土師器の甑や甕が出土した。

91の須恵器坏身は床面に接して検出した土器である。最大径が13.9 cmありTK 47? に比定される。92の高坏は住居跡の覆土から検出したもので（写真図版第7-A）器高もやや低く脚先端の作りも甘い。遠考研編年Ⅰ期後半（TK 47?）に比定出楽る。93や94の土師器の坏・甕・甑等は，いずれも床面に密着していた土器であり，火災による焼失を考えれば一括品と推定して良い。

したがって，KD—25が廃棄された時期は土器の出土状態から5世紀末～6世紀の早い時期としたい。

KD—26（第19・21図）

後世の遺構と重なり合って攪乱が進み破壊された部分が多い（第37図）。北壁に土製支脚を持ったU字形に開く粘土のかまどが築かれている。確認出来ない部分もあるが東西5.2 m，南北5.4 mの隅丸方形の住居跡と推定される。

住居跡内からは，弥生式土器を始め土師器や須恵器が出土した。95は覆土から，96はかまど内から検出した破片と接合した口縁部片，97は床面に密着して出土した。98～101の土器は，住居跡の北東にある大きめの小穴内から検出されたもので，小穴の位置からKD—26に伴う物と考えた。95は天井部と口縁部を欠く細片のため断定できないが，口径が14 cm程になり，稜も残るなど遠考研編年Ⅱ期（MT 15）に比定される（坏身?）と考えられる。95や96の土師器の甕もほぼ同時期としてよい。

小穴内から検出した土器は，99の様にやや古く101のような壺も含む。あるいは別の遺構とも考えられる。96のように住居跡内から検出した土器に近い物もあるので，調査時の所見に従う。

したがってKD—26の住居跡は，6世紀の前葉から中頃にかけて営まれていたと推定している。

KD—27（第18・19図）

住居跡の大半が後世の耕作等の攪乱によって失われ，かまどと北西隅の壁溝が検出されたに過ぎない。かまども基底部の焼土で確認され上半は攪乱され欠落していた。

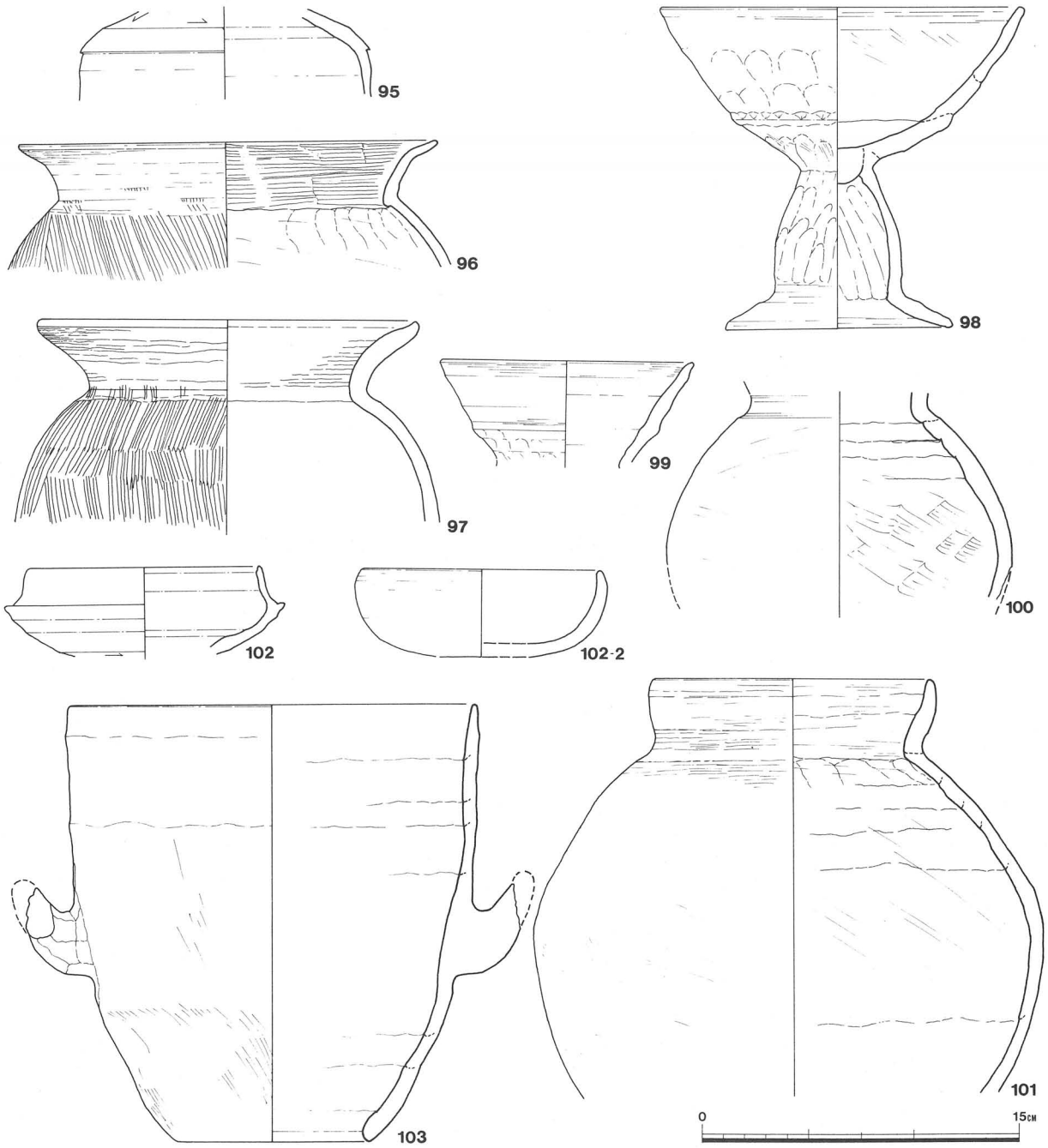
土器は床面を確認した範囲が狭い割には比較的多く出土している。床面からは102-2の土師器坏や103の甑のほかに，坏1個体・甑2個体分が確認出来た。覆土からは102に示した須恵器坏身のほかに古式土師器や弥生式土器等の破片が出土している。

102は口径が小さく立上がりも高く口唇部も段を作って内傾するなど古い要素が多いが，箆削りの範囲が狭いことや体部の器形から遠考研編年Ⅲ期前葉（MT 10?）以降の物と考えたい。103の甑は折り返し口縁には作らないが，丸みを持ってすぼまり器形が直線的ではない。102-2の坏も口縁部が内彎し古い要素を残す。

KD—27の時期は，102の須恵器坏身が細片であり比定されるべき時期が明確に断定出来ないが，6世紀の中葉としたい。

KD—28（第37図）

KD—17の西側でB 12 aからB 12 dにかけて，砂質粘土層の広がりとして確認された住居跡である。壁溝の一部が検出されたが，弥生時代の小穴が集中していたり，後世の攪乱などにより平面形は殆ど確認出来なかっ



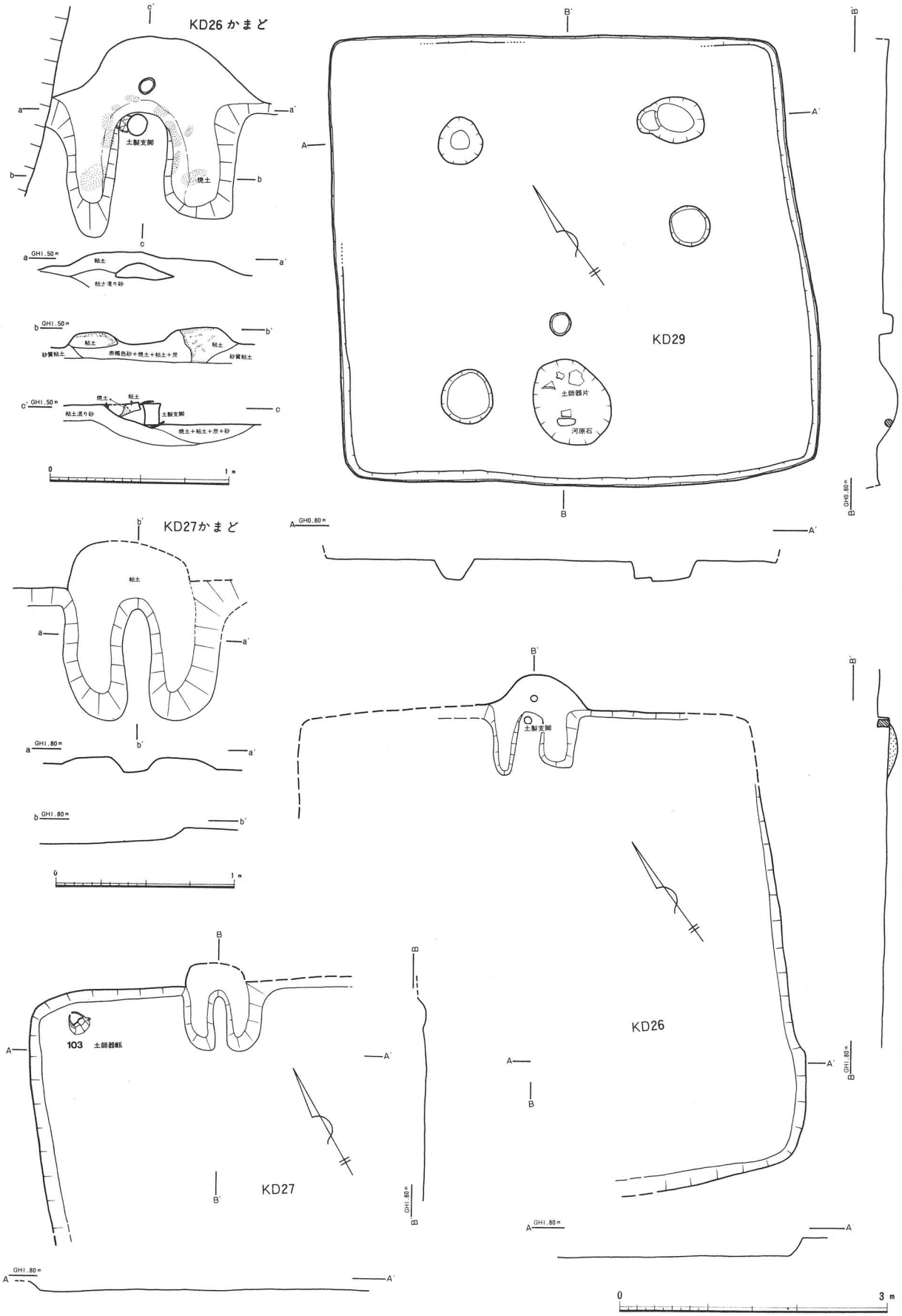
第18図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図11（KD—26・27）

た。また，炉やかまどなどの住居跡に伴う施設も検出できなかった。発掘当初の所見によれば，かまどが発見され無いことから炉を伴う住居跡と考え，層位的な観察に因って5世紀中葉と想定していた。しかしKD—28として取上げた土器の中に，櫛描の波状文のある須恵器の大形甕の口縁破片が1点混じっており，時期を新しくせねばならないかもしれない。KD—17との切り合いからKD—28の方が古いと考えている。

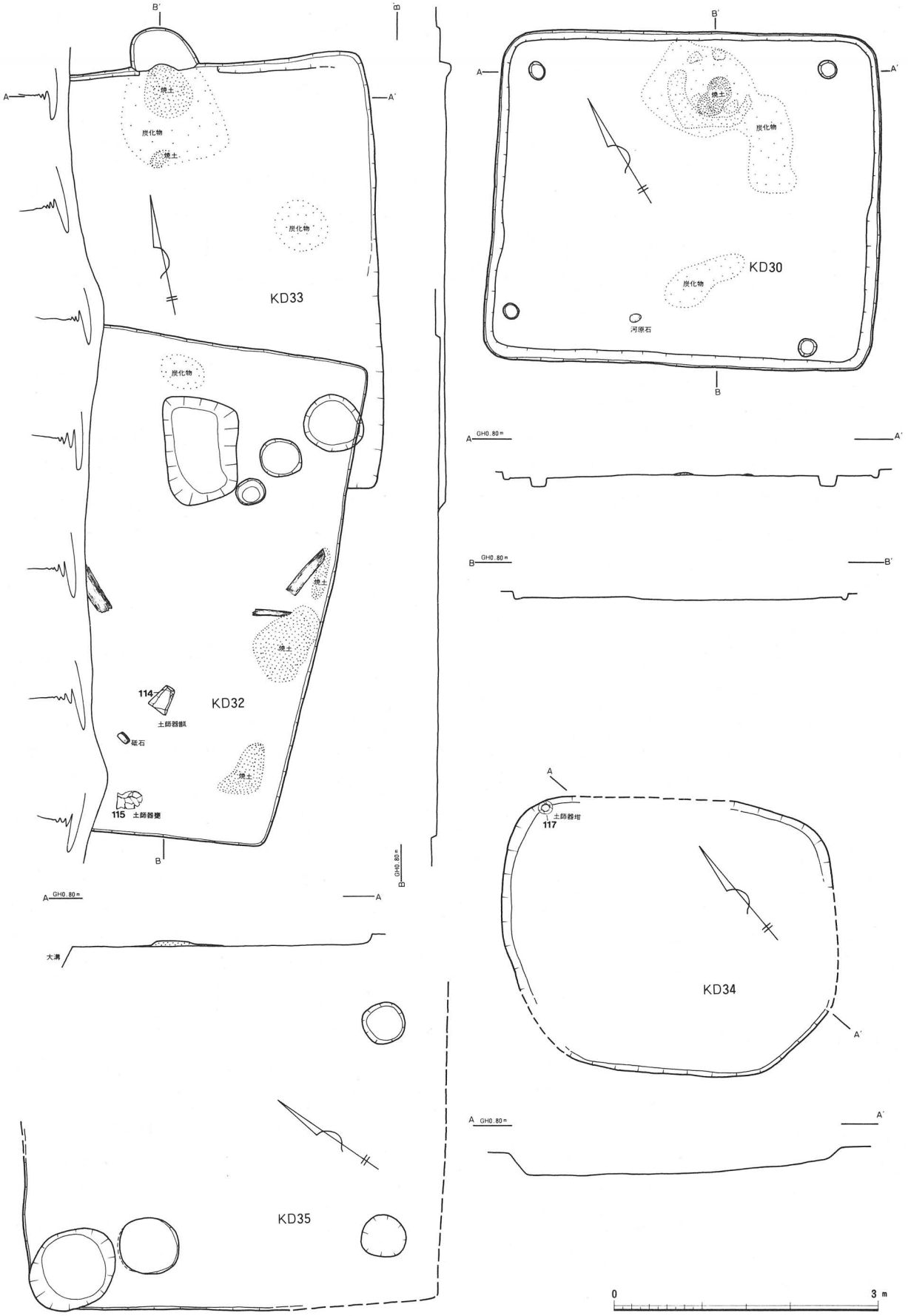
なお，KD—28の南側の下層で焼土・鉄滓・鞴の口等が検出され，小鍛冶の遺構と推定されている。

KD—29（第19図）

わずかに残った壁溝と柱穴から東西5.2 m，南北5.1 mの隅丸方形の住居跡と確認された。かまどを想定させ



第19図　古墳時代竪穴住居跡実測図6（KD—26・27・29）



第20図　古墳時代竪穴住居跡実測図7（KD—30・32・33・34・35）

る粘土の集積が無かったので，炉を伴う住居跡と考えた。住居跡の中央南寄りに径100㎝×80㎝，深さ30㎝程の貯蔵穴が作られている。

発掘時の所見によれば炉と貯蔵穴が伴うことや，貯蔵穴から検出した土師器から5世紀の後半の時期と考えている。

KD—30（第20図）

KD—25・29・38等と一群を作って西部地区に検出されている住居跡である。壁のほとんどが後世の耕作等によって削平されている。東西4.3 m，南北3.8 m程の隅丸方形に壁溝が検出され，四本柱の住居跡と確認した。北壁の中央寄りに接して焼土や炭化物が広がって検出された。この集積が粘土の袖を持たない事から，これを炉と考えた。床面には炭化物が広がっている部分が多く火災に遭った事を窺がわせた。直接年代を示す遺物は出土しなかったが，炉を使用している事から5世紀後半の住居跡と推定している。

KD—31（第21・23図）

北壁と東壁の一部を確認した。北壁には南に向いてU字形に開くかまどが作られている。後世の耕作などによる攪乱を激しく受けており，住居跡全体の1/3程が確認されただけである。

土器は，かまどの周辺の床面から出土している。104の須恵器坏蓋は，稜もしっかりと作られ口縁部は肩部で折れて直立するなど古い要素が残り，遠考研編年Ⅱ期（MT 15）に比定出来そうである。105・106の坏身は，口唇部に軽く平坦面を作るが，体部の器形からして遠考研編年Ⅲ期前葉（MT 10）と考えて良い。107～111の土師器は，直接的に時期を示し得ないが，出土状態から一括品と考えられる。107などはやや新しく考えねば，いけないかも知れないが，104～106の時期幅の中に含めて考えている。

したがってKD—31の年代は6世紀の前葉から中頃にかけての時期と推測される。

KD—32（第20・21図）

KD—33と重なって大溝の東縁で検出された，一辺が5.3 m程の隅丸方形の住居跡である。いずれも奈良時代の時期の大溝によって浸食され床面の半分を残すだけである。住居跡どうしの切合いからKD—32が新しい事がわかっている。床面には炭化物が散乱し，中には建築材と思われる炭化した木片もあり火災に遭った事が窺えた。北壁は半分以上残っていることから，かまどを持った住居跡ではない事が分る。残された床面には炉は検出できなかった。炉に当たる部分は浸食によって欠落していると考えられる。

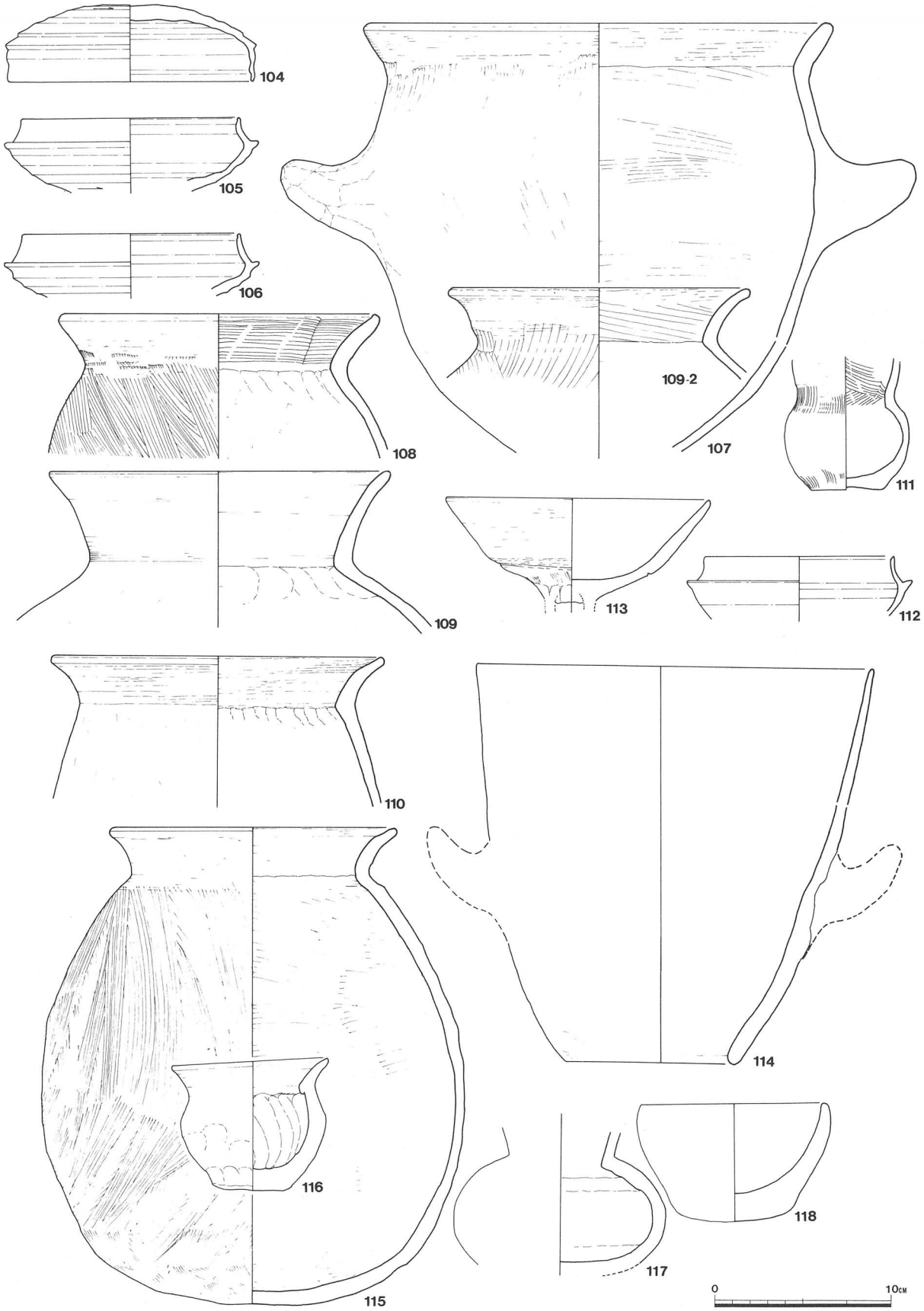
土器はいずれも床面から検出したもので112～116などで多くは出土しなかった。115の土師器の甕はやや歪みもあるが球胴に近く古い要素である。セットとなるべき114の甑は折り返し口縁でもなく，体部もやや直線化する。112の須恵器坏身は，立上がりはやや低いが口唇部は内傾する端面をしっかりと作っていたのでMT 15併行としたいが，口径や体部の作りから，もっと古く遠考研編年Ⅰ期後半とすべきか。KD—32はかまどを持たない住居跡と考えられるので，その時期を5世紀末から6世紀初頭と推定したいが須恵器の年代観との間にややずれがある。112は115や114の様に床に密着して検出した土器ではないので，こうした結果となったと考えたい。

KD—33（第20図）

大溝の縁にKD—32とともに検出され，奈良時代の大溝の浸食で西側半分を，KD—32で南側1/3が削り取られている。北壁中央には，焼土や炭化物の集積があり，壁から北側に突出した作り出しもあった。しかし，かまどに見られる南向きに開くU字形の粘土の集積がないため，炉からかまどへと変化する過渡期の住居跡と考えた。南側のKD—32と重なる部分で検出された，120㎝×70㎝の長方形の小穴が，KD—33に伴う貯蔵穴なら住居跡の形態からも一致する。

住居跡内からは，直接的に時期を示し得る，土器などの遺物は検出されなかった。KD—32（6世紀初頭～中頃?）との切り合いや，炉からかまどへ変わる，過渡期の住居跡と考えて漠然と5世紀末頃と考えている。

KD—34（第20・24図）



第21図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図12（KD—31・32・34）

西別区（弥生時代方形周溝墓群）の西側で発見された3.8 m × 3.1 m程の不定形の窪地状の遺構。柱穴・炉あるいはかまど等の施設は検出できなかった。したがって，住居跡ではなく他の遺構の可能性が大きい。他に遺構の性格を考え付かないので一応住居跡状の遺構とした。

床面に接して117と118の土師器が出土した。これ等の土師器によって5世紀後半の遺構と考えた。

KD—35（第20・26図）

KD—34と同様に西別区の西側で，壁の一部と柱穴が3箇所検出された。床面は1/4程度が確認出来ただけであり，壁は後世の耕作などで殆ど削平され確認出来なかった。柱穴の並びから一辺4.8 mの規模の隅丸方形の平面形を想定した。119は床に当たる部分から出土した。口径が13.6 cmとやや小振りになることから，遠考研編年Ⅲ期中葉に比定すべきものである。したがって，6世紀末の住居跡を想定している。

KD—36（第23・24図）

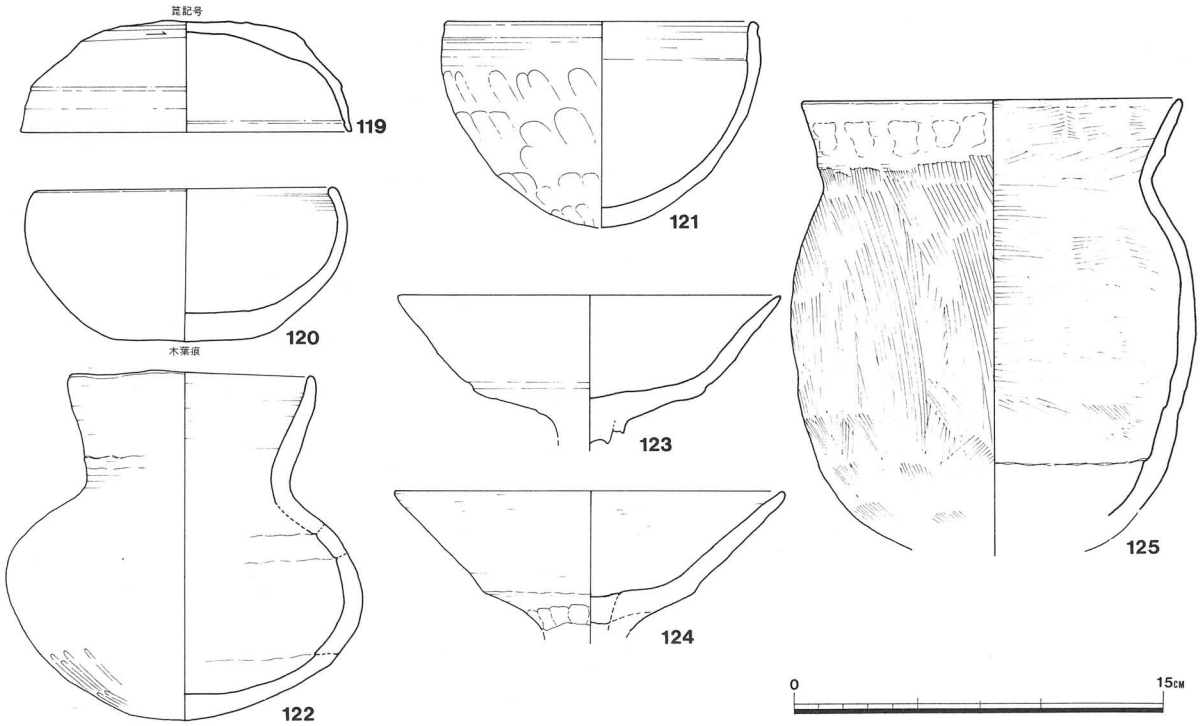
東西3.5 m南北4.1 mと小形の隅丸方形の住居跡を考えた。壁は10 cm程の高さが残って検出され，壁溝は南壁中央で40 cm程とぎれるが一周している。しかし，柱穴は検出出来なかった。また，炉跡は一部に，それらしいものが在ったが確定できなかった。

土器は床面から120・121の土師器が検出された。120は口縁部が内彎し器形も深くなる。覆土からは122の壺など土師器片が出土したが，須恵器は出土しなかった。したがって，これらの土師器から，住居跡の年代は5世紀の後半と言うことが出来る。

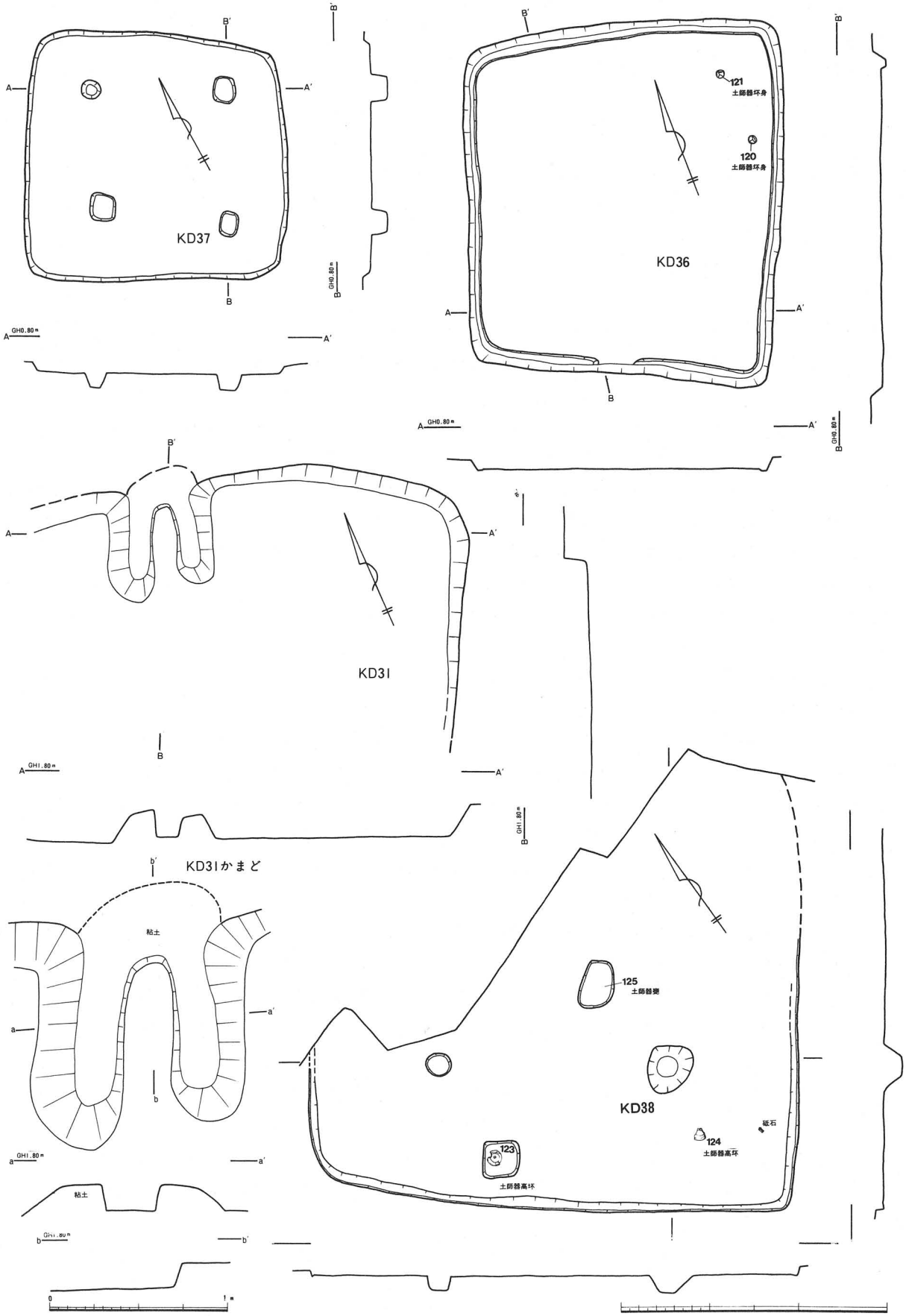
KD—37（第22・23図）

大溝の東縁に近い部分で発見された，東西3 m，南北2 mの小形の隅丸方形の遺構となる。床面には炉跡やかまど等の施設は検出されなかったが，柱穴は4箇所に確認された。こうした事から単なる住居跡ではなく性格の異なった遺構と考えられる。

この遺構から，土師器の小破片が検出されただけで，時期を示し得る資料は出土しなかった。



第22図　古墳時代竪穴住居跡出土土器実測図13（KD—35・36・38）



第23図　古墳時代竪穴住居跡実測図8（KD—31・36・37・38）

KD—38 （第23・26図）

西部地区の大溝西縁に接するようにして検出された。北側は未発掘部分となり，床面の半分ほどを発掘した。南東隅の部分で灰や炭化物が広がっており，住居跡が火災に遭った可能性を窺わせる。北壁側が発掘されていないので，かまどの有無が判然としない。しかし，南壁寄りにやや小形ではあるが，土師器の高坏（123）の入った小穴がある。これを貯蔵穴と考えて良ければ，他の例のように炉を持つ住居跡となる。

土器は123～125の土師器が出土し須恵器は検出されなかった。125の甕は小形だが古い様相を残している。炉を持つ住居跡を想定すれば5世紀末の時期の遺構と考えたい。

第2節　東部地区小穴

伊場遺跡は旧砂堤列上に営まれた遺跡であり，基盤層は黄色砂層である。東部地区での古墳時代の基層は茶褐色の粘性を帯びた有機質砂層であり，その下位に弥生時代の包含層である黒褐色有機砂層が続き，次に基盤層へと続く。

古墳時代の遺構の中で深いものは基盤層まで掘り込まれるが，浅いものは茶褐色の有機砂層の中で終わってしまう。したがって，こうした砂層内での調査では，粘土や焼土の集積する炉やかまどの存在から，住居跡と確認されても，土質に変化の乏しい柱穴などは検出できない例が多かった。小穴についても同様であり，東部地区で検出した小穴には時期など性格の不詳な物が多い。さらに，東部地区では弥生時代の遺構と重なる部分が多く伴出遺物の少ない小穴などの遺構の峻別は難しい。

第37図に示した遺構図の内，▲印を付した物が古墳時代の遺構である。これらの遺構は，その覆土が古墳時代の包含層と同じものや，伴出遺物から古墳時代と明確に確認されたものである。したがって▲印以外にも古墳時代の遺構が存在する可能性がある。

小穴から検出される土器は細片が多く，弥生式土器か，古墳時代の土器（土師器・須恵器）か分かる程度で，元の形状を復元できる物が少ない。第24図に示した126～134は小穴から出土した主な土器である。

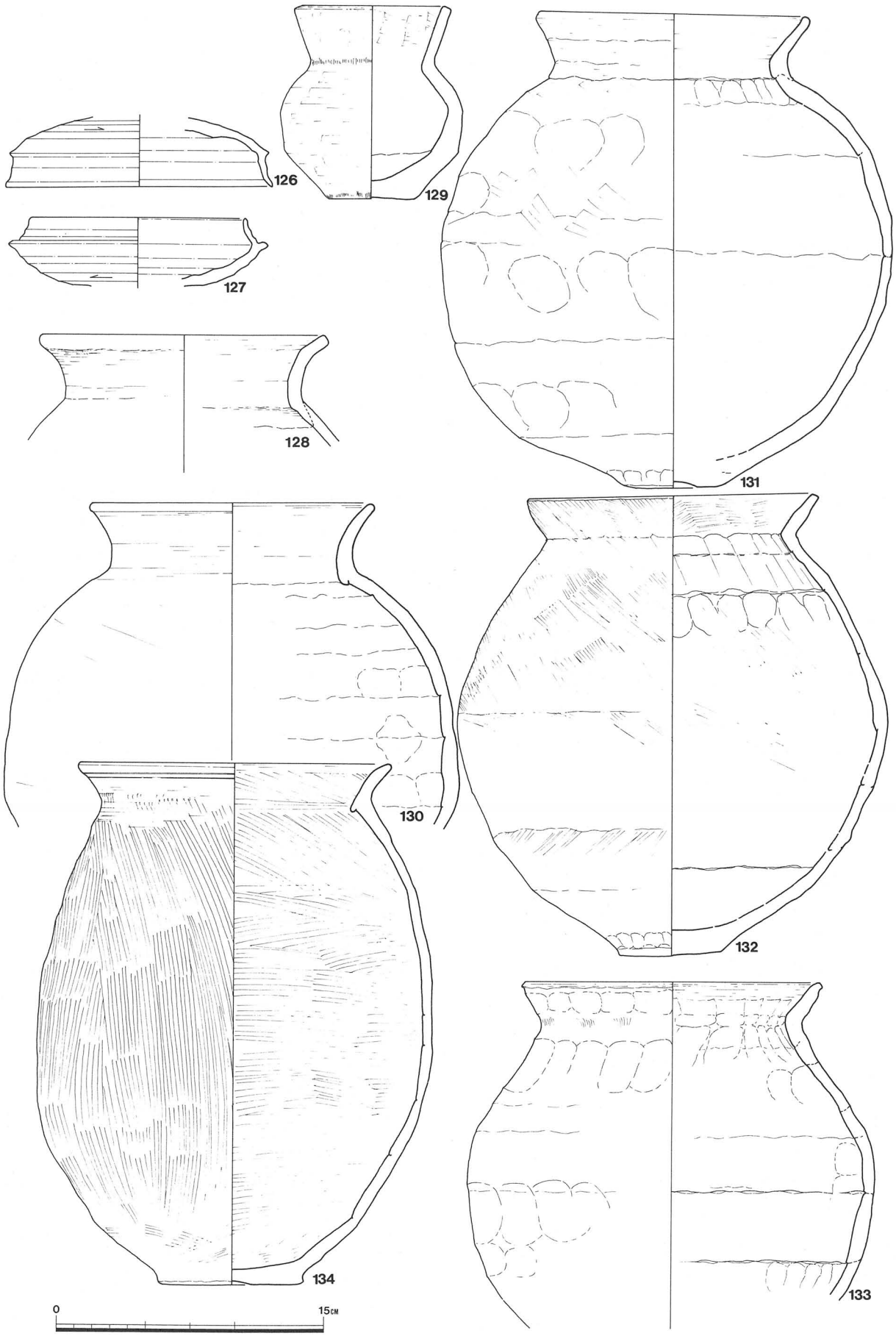
126はB11h—Ⅲ下pitとしてセクション帯から検出した須恵器の坏蓋である。第37図を見ると該当する場所に古墳時代の小穴は無くYH4（弥生時代の土坑）があり，この付近から出土した事が分かる。YH4の南にはKD—31があり出土地点は住居跡の広がりの中に含まれる。この土器の年代は肩部の作りから遠考研編年Ⅱ期（MT15）に比定されKD—31の年代観と一致する。KD—31に伴った遺物と推定される。

127はA12eのポイント上の小穴（KP3）から出土した。KP3の東側には，直接的に時期を示し得る資料は無かったものの，6世紀中頃と推定したKD—19が存在している。127の須恵器の坏身はTK10に比定され，やはり年代観が近似する。129の小形壺が検出されたA12e—KP1も，KD—19の住居跡が推定される，広がりの範囲に含まれると考えられる。

128はA12c—KP7で検出された土師器である。A12c—KP6の東側で須恵器の蓋坏や土師器の甕の集積があり，そこはKD—14の住居跡と推定した場所である。KP7は北にややずれるが，KD—14の住居跡の広がりの範囲内と，推定することも可能である。

住居跡に伴う小穴（柱穴・貯蔵穴等）以外の小穴が，どのような性格の遺構かは東部地区で見るかぎり，残された部分が少なく分明でない。先述したように，やや強引に住居跡と小穴を符合させたが，126～129のように，比較的大形の破片が出土した小穴が，住居跡の想定される範囲の中に存在することは，住居跡と小穴との間に有機的な関係を窺わせる。それらの小穴がそれぞれ，住居跡内のどのような施設に当たるのか提示出来ないが，そうした可能性を例示するにとどめたい。

130～134はA12bからA12eにかけて検出された小穴（KP1）から一括して出土した土器群である。131・132は胴部を球形に作り，頸部はくびれ口辺部は外反し，底部は平底になる。器面整形には箆（刷毛状箆?）



第24図　古墳時代小穴出土土器実測図

が使われている。130・133は底部を欠くが同様な土器である。時期的には和泉Ⅰ式併行（5世紀前半）と考えて良い。134は長胴化し刷毛整形されるなど新しくなる物かも知れないが，平底に作り，他の土器と一括出土したので同様と考えたい。

これらの土器が出土したA12b—KP1は，やや大形の小穴で遺構編（1977浜松市教委）では中形小穴と呼んだものである。遺構編ではKD—10・11に見られた屋内貯蔵穴の可能性を示しつつも，A12b・e区に多く集中することから墓域を推定して，積極的に土坑と想定している。しかし，130～134の土器は外面に煤が多量に付着する甕などの煮沸形態の土器であり，生活に密着した住居跡との関連を強く示唆させる。KP1の周辺に住居跡の存在が想定されず，断定出来ないが「貯蔵穴」として考える事の方が妥当性があるように思える。古墳時代と推定した柱穴状の小穴が周囲に多くあり，住居跡の存在の可能性が，全く皆無でもないので，土坑とするより整合性があるように思える。

第3節　祭祀跡

KI—1　（第25・26・28図）

ト5区とト8区にかけて東西5.6 m，南北5.2 mの方形の掘立柱遺構が検出された。方形の掘立柱遺構の中央には，更に2本の柱穴があり，その周りから土師器・手捏土器・須恵器が48個体，集積して一括出土した（写真図版11-A）。柱穴の並びや柱間がやや不揃いなことや，屋根を置くには柱が細すぎると考え，柵囲いの遺構を想定した。土器は土師器高坏16個，坏10個，壺1個，鼎1個，坩2個，甕1個，手捏土器15個，須恵器坏身1個が出土した。土師器の坏・高坏・手捏土器がとりわけ多い事から，日常的な生活の場ではなく祭祀に関する場と考え，外側の柵囲いを祭祀の場を画する柵列と想定した。

第25・26図には手捏土器を除き，図化可能な土器を合計27個体を図示した。（須恵器坏身1個，土師器坏8個，高坏13個，鼎1個，坩2個，壺1個，甕1個）

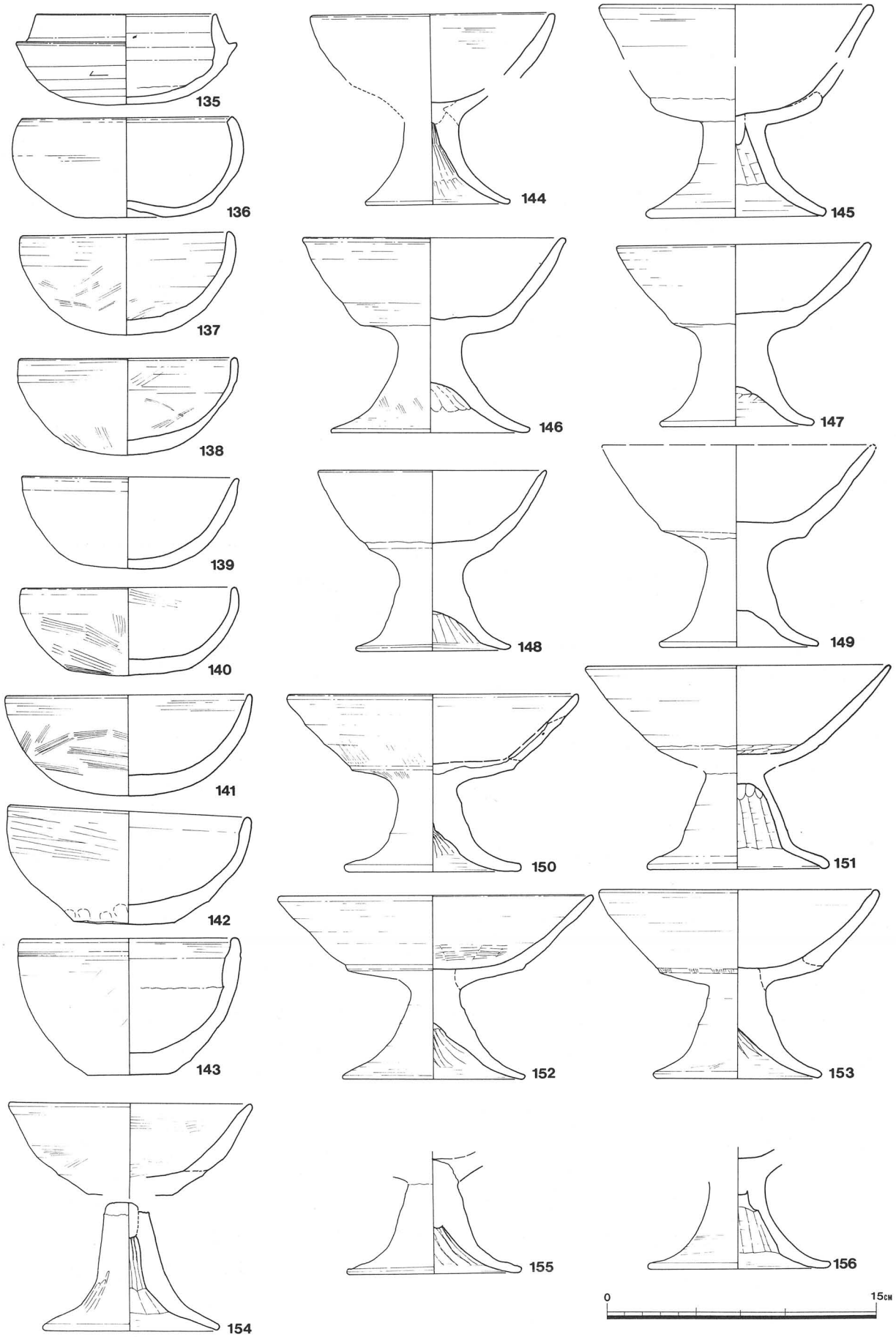
135の須恵器坏身は，器壁が厚く端部も丸く作られ全体にシャープさが無く，焼成もあまり良くない。こうした傾向が初期の須恵器の定形化する以前古い要素と考えれば，遠考研編年Ⅰ期前半（TK 208?）の時期に比定して良い。

136～143の土師器坏は，いずれも口縁が内彎して立上がり深めの器形に作られる。口縁先端部の内彎は弱く口唇部が向き合うほど内傾せず，底部は丸底に作るが，平坦面があり土器の安定は良いもの（137～141）。口縁先端部が強く内彎し，口唇部に内傾する平坦面を作り，底部を押えて上げ底に作るもの（136）。口縁部は内彎ぎみに立上がって先端部は横ナデされ，底部は平底に作るもの（142と143）等がある。

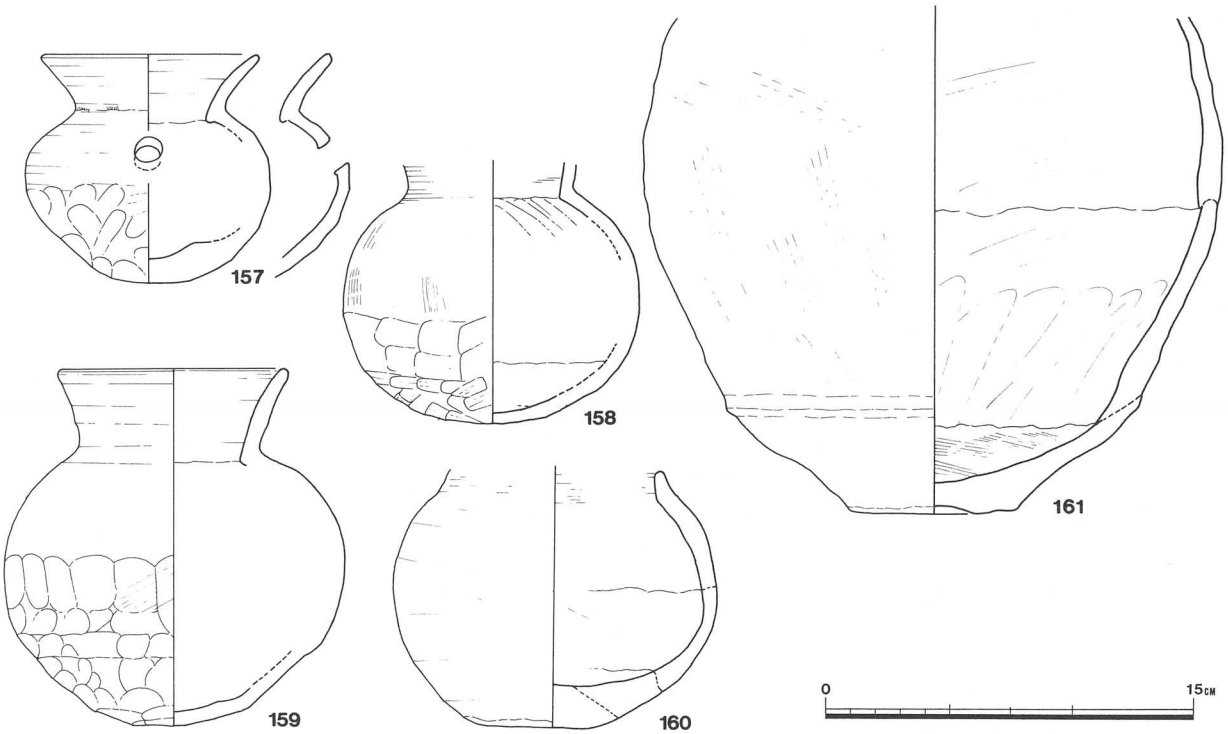
144～156の高坏は，坏部は途中に不明瞭ながら稜を置き，ほぼ直行して立上がる口縁部を作る。脚は比較的低く，八の字形に徐々に開き，裾は横ナデして，さらに，その開きを強める。坏部の稜は，底部と口辺部（体部）が接合する部分に当り，粘土の繋ぎ目になっているのが一般的である。

脚部の破断面や坏部の底面の割目などの観察から，坏部と脚部の接合に2種類がある。坏部の底面に突起を作って脚に挿入するもの（142・143・154・156），脚部の先端を坏底部に挿入するもの（150・152・153・155），の2種である。完形品など接合部が破損していない土器は観察不能だが，146～149などのように脚の上半が中実になる高坏は全て後者と考えている。

脚内面は整形時の絞り目をそのまま残すもの（150・152・153・155）。箆整形されるが一部に絞り目を残すもの（144・154）。箆で整形し絞り目を残さないもの（143・147・150・156）。指頭で掻き出すようにナデたもの（146）などがある。また，156のように脚内面に出た坏底部の突起を，指で押えたもの。151のように指で突起をナデツケて整形した？ものもある。坏部と脚部の接合法が時期差になるものなら2時期に別れるが，形態的にはさしたる変化は無いように思える。



第25図　古墳時代祭祀跡出土土器実測図（KI 1）



第26図　古墳時代祭祀跡出土土器実測図（KI 1）

157の鍋と158・159の坩は整形技法に類似性が多い。外上方に開く口縁部と肩部外面は丁寧に横ナデされる。体部内面の上半は掻場げるような指頭痕が残り，下半は箆で削って整形し，薄く仕上げている。外面下半は箆で削った後にナデて仕上げ，底面は箆削りで丸底に仕上げている。

161の壺は頭部の上半を欠くので全体の器形を知り得ないが，やや長胴化した甕と言うべきかも知れない。刷毛目が残る部分もあるが箆ナデ整形している。

第25・26図に示した土器は出土状態からは，一時期の一括品と考えたい。144～156の高坏は，脚が短く，脚裾まで，八の字形に緩やかに開く点など新しい要素である。和泉Ⅰ式併行とされる磐田市見性寺遺跡（1974磐田市教委）の高坏は脚が長く，脚裾が折れて横に開く。したがって，ここに挙げた高坏は見性寺遺跡のつぎの時期和泉Ⅱ式に比定されて良い。157の鍋や158・159の坩は，技法上からは古い要素を残す。161の壺（甕）も上げ底になる平底に作り箆ナデして仕上げることが，和泉的であるなら同様に和泉式の範疇に比定できる。135は遠考研編年Ⅰ期前半に位置付けられ，5世紀の中頃と考えれば，須恵器の編年的位置と矛盾しない。136～143の坏は形態的にはばらつきがあるが，同じような時期幅の中で考えて良い。

しかし，135の須恵器を技術的な後進性から来る未熟な作りと考え新しい時期（5世紀後半＝TK 23併行）と考えれば，157の甑や158・159の坩と類似した土器が，宮之腰Ⅰ式＝5世紀後半（和泉Ⅱ式）（1970焼津市教委）の中にもあり時期をやや下げて考えねばならない。したがって，KⅠ—1の年代はやや幅を持たせて，5世紀の後半代と考えておきたい。

KI—2　（第27・36図）

リ5区に土師器・須恵器・手捏土器の集積が発見され，滑石製の石製模造品（勾玉1点・臼玉35点）も伴出した。KI—1に類似した遺構であるので祭祀遺構（KI—2）とした。しかし，KI—1のような柵列は検出されなかった。土器は土師器高坏7個，坏7個，手捏土器23個，須恵器2坏身個が検出された。

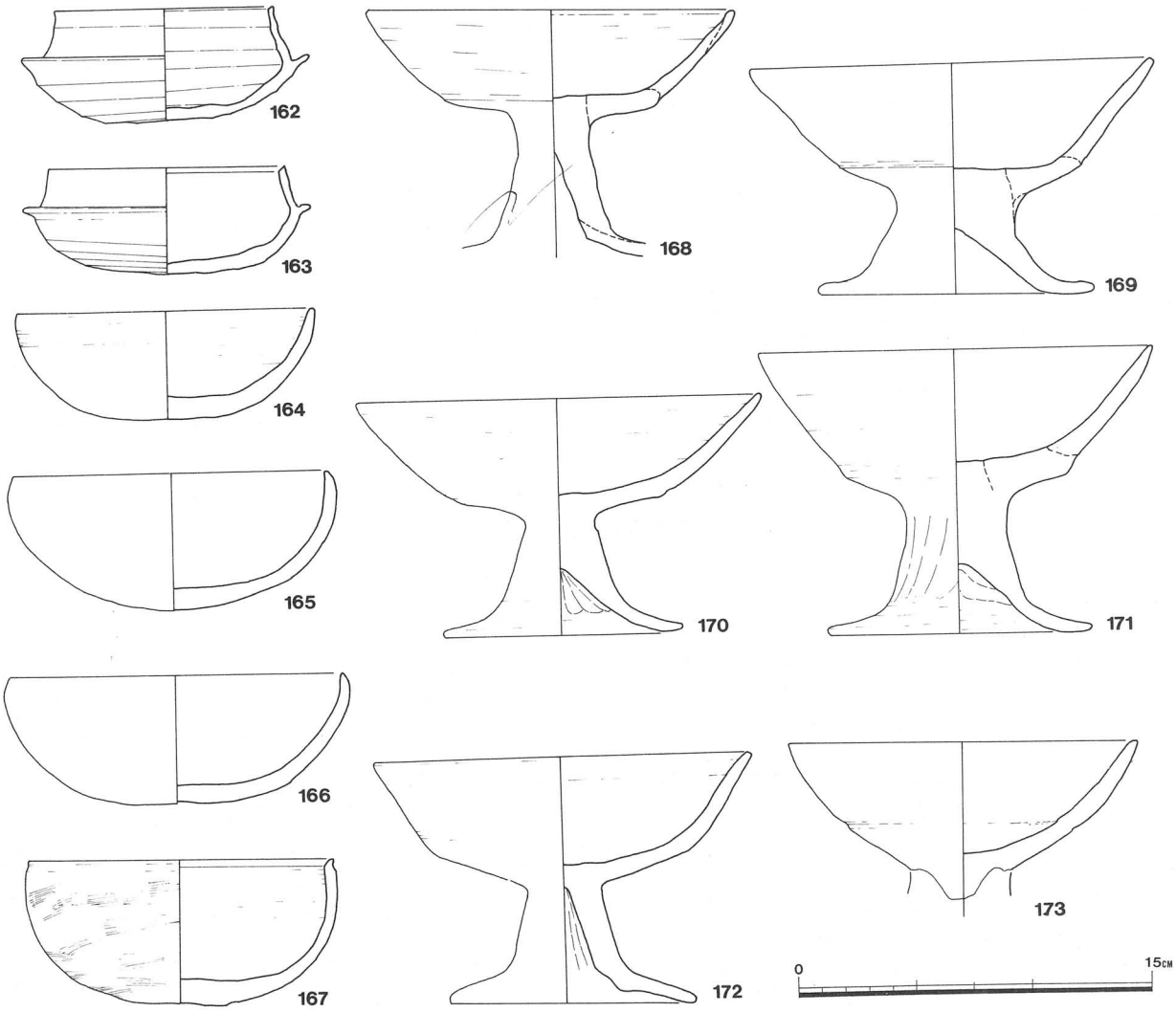
第27図には，手捏土器を除き，保存状態が良く図化可能な須恵器坏身2個，大師器坏4個，高坏6個を図示

した。

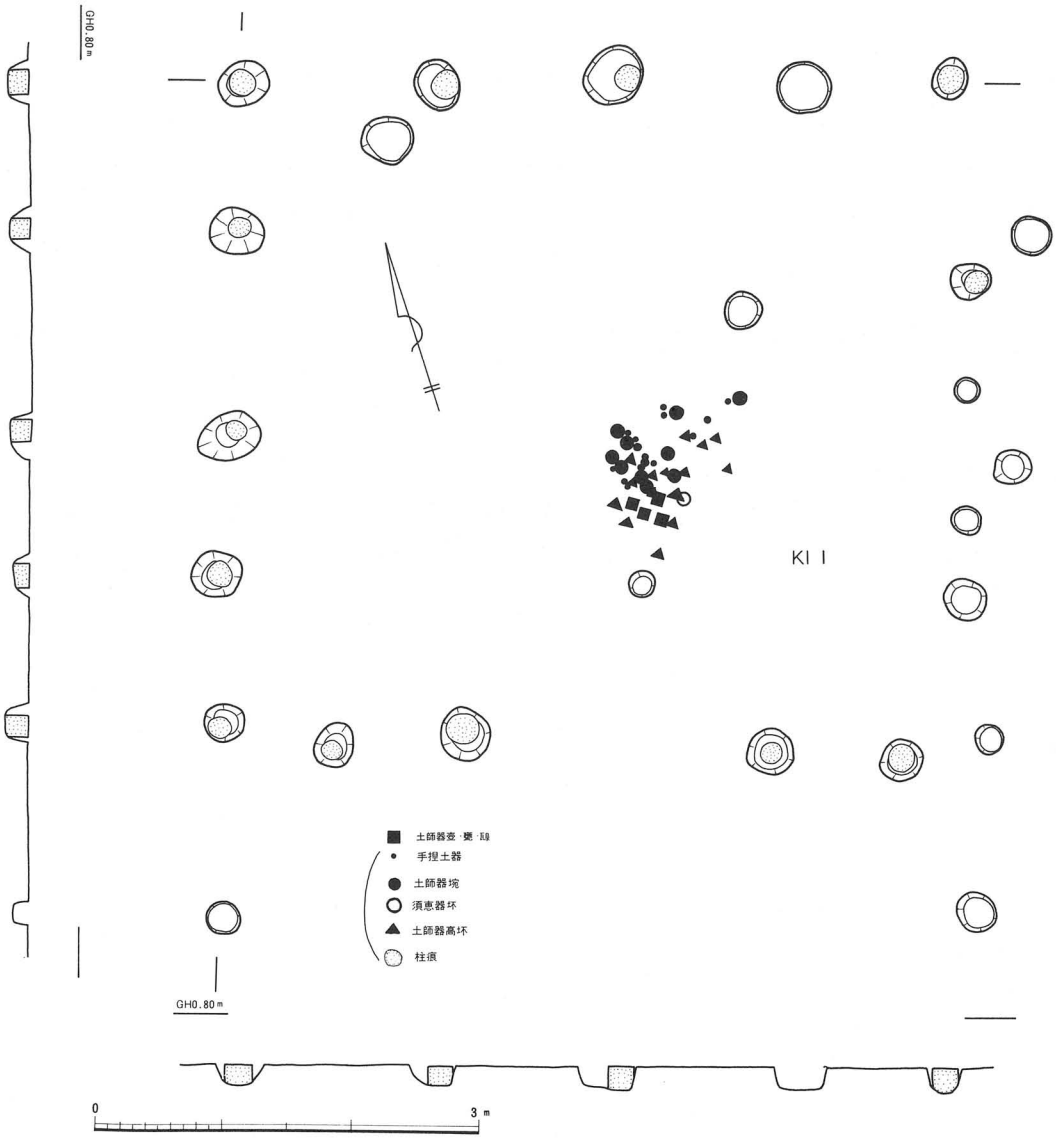
土師器について見ると164～167の坏は，内彎して立上がる口縁部を持つもの（164～166）と，その口唇部に内傾する平坦面を作り出すもの（167）がある。168～173の高坏は，坏部下半で軽い稜を体って折れ曲り，ほぼ直行して斜めに立上がる口縁部を持つ。脚は比較的低く八の字に開く。坏と脚との接合は，脚の先端を坏部の底面に挿入するもの（168～171），坏部底面に突起を作り脚に挿入するもの（172・173）の2種である。脚内面は絞り目がそのまま残るもの（170），箆で削って整形するが絞り目が残っているもの（172），箆で全体が整形されているもの（168），指頭によりナデ仕上げているもの（171）などである。

KI—1の出土土器と，同様な内容の土器群と考えて良い。162の須恵器坏身は，立上がりが高く口唇部は坦面を作って内傾し，シャープな感じに作られるなど，遠考研編年I期の前半（KT 208併行）に比定できる土器である。163は立上がりが高く，体部の腰も張り同様な須恵器と考えて良い。しかし，体部底面の箆削りの範囲が狭くなる等，後出の要素がありTK—23併行とすべきか?。

したがってKI—2もKI—1と同様に5世紀の後半代の時期と考えたい。前後関係については即断出来ないがKI—1が先行すると考えたい。いずれにしろ両者に大きな時期差は無いと考えて良い。



第27図　古墳時代祭祀跡出土土器実測図（KI 2）



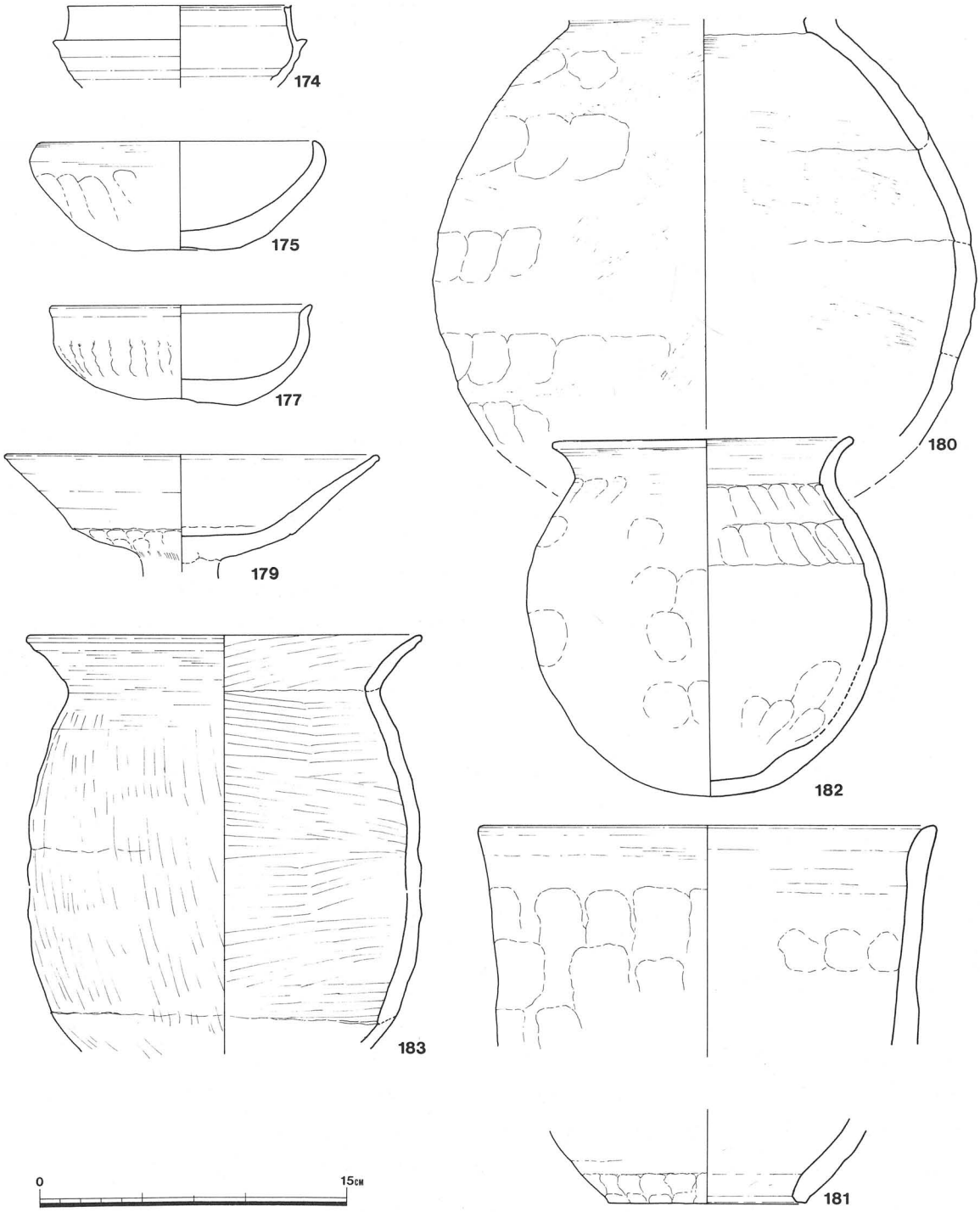
第28図　古墳時代祭祀跡実測図（KI 1）

第4節　溝（KT 201）（第29・30・31・36図）

イ・ヲ・ラ区で大溝にほぼ直角に流れ込む溝が検出された。大溝と接する合流部付近では幅3m程であるが，ラ区の東側では幅が2m程になって，さらに北東に続いていく。溝の底は大溝側が深く南西に向かって流れた事が分る。深さは溝の先端でも1m程あり，幅に比して深い溝である。発掘で60m程を確認し，ラ区以東は伊場遺跡公園に入ってしまい，上流部分は未発掘である。また，大溝と接する合流部は律令時代の掘立柱遺構と重なるため，それらの遺構保護のため発掘しなかった（写真図版第11-B）。溝（KT—201）が流れている地点は，東部地区の基盤層の高まり（砂丘＝第一砂堤列）の南西側の裾にあたることになる。東部地区の南側には，第一砂堤列と第二砂堤列に狭まれた堤列間湿地の存在が推定されるので，そちらから大溝に向けての排水溝と考えている（注5）。溝内の堆積土層は第30図に図示したように数層に分層できた。その土質や堆積状況から，下部の微砂質有機粘土層群（晩灰色微砂質粘土層・暗青灰色微砂質粘土層・暗灰色砂混りの有機粘土層）と，上部の暗灰色微砂質粘土層（粘土・砂・炭化物の互層）に大きく二分される。溝内の覆土からの出土遺物は，溝が深くしっ

かりした遺構のわりに，少なかった。第29・31図に示した土器が，その大半である。

174の須恵器坏身は底面を欠くが，口縁部の作りや立上がりが高い点等から，遠考研編年Ⅰ期後半（TK 23併行）に比定される。内彎する口縁となる175の土師器坏や，口縁部から底部へ丸みを持ってすぼまる181の甑・179・183の高坏や甕は，174と同様に5世紀後半の時期幅の中で考えて良い。184・185・185－2は比較的焼成も良く小さな底部を持つ大形の鉢。外面に多くの煤が付着して煮沸形態に使われた土器である。類似する土器

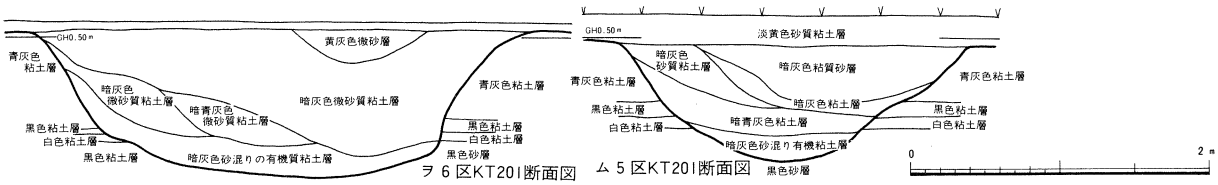


第29図　古墳時代溝状遺構（KT 201）出土土器実測図

は宮之腰Ⅰ式（1970 焼津市教委）の中にもあり 5 世紀の後半に比定できる。

182 は胴部の外面を箆ナデして平滑に仕上げている。底部も平底に作らず丸底にしており，5 世紀の前半代に比定したい。口唇部に内傾する平坦面を作る 177 の坏や球胴になる 180 の壺なども 182 の時期と考えたい。

このように 174 ～ 185－2 の土器は，時期的には大きく二分されそうである。これらの土器は上部の暗灰色微砂質粘土層（粘土・砂・炭化物の互層）の最下層から検出したが，土層も上下に二分されることから上層・下層のそれぞれに対応する土器群と想定したい。層序関係の定義から逸脱するが，上層の最下面からの出土であり妥当性を，与えても良いように思える。



第 30 図　古墳時代溝状遺構（KT 201）断面図

第 5 節　西部地区溝状遺構　（第 31 ・ 32 図）

リ・ヌ・ツ・ネ区にかけて 40 数本の小さな溝が検出された。この小溝は一括して何らかの遺構と考えられるが，当時の生活面が後世の耕作などによって攪乱されているので，攪乱をまぬがれた遺構の最下面が小溝状に検出されたものである。本来一連の溝であったものが先述したような理由で破線状に残された小溝の繋がりとして検出されている。

第 32 図に示したように，溝の繋がりを復元して東西方向に 5 条，南北方向に 6 条の溝遺構を考えた。溝の断面は，半円形，弧状，Ｖ字形など様々であった。溝に充満する覆土は，黒褐色有機粘土で，中からは須恵器・土師器・炭化材・木片・桃などの種子類が検出されている。遺構の性格については，残されている部分が少なく不明だが 40 数本の溝が，全てほぼ直行する方向に分類されること，覆土からの検出物から，生活に密着した遺構であったことなどを推測させるにとどまっている（注 6）。

各小溝についての詳細な形状や組合わせは『遺構編』（1977 浜松市教委）で，報告済みであるので，そちらを参考にされたい。

186 の須恵器坏身は KT 330 から出土したもので，最大径が 12.8 ㎝と，やや小さいが受部を横にしっかり作り出し，立上がりも高く作っているので，遠考研編年Ⅲ期後葉（終末期）に比定される。その他に図示しなかったが，KT 301 で高坏・KT 304 で坏蓋・KT 321 で坏身 2 個体などが検出されており，いずれも 186 と同時期として良い須恵器である。195 は古墳時代から奈良時代に一般的に見られる甕である。口縁部先端が横に開く点を考えれば，新しい要素だが奈良時代の物ではない。KT 301 から検出されたと推定されるので，やはり 186 と同時期としたい。

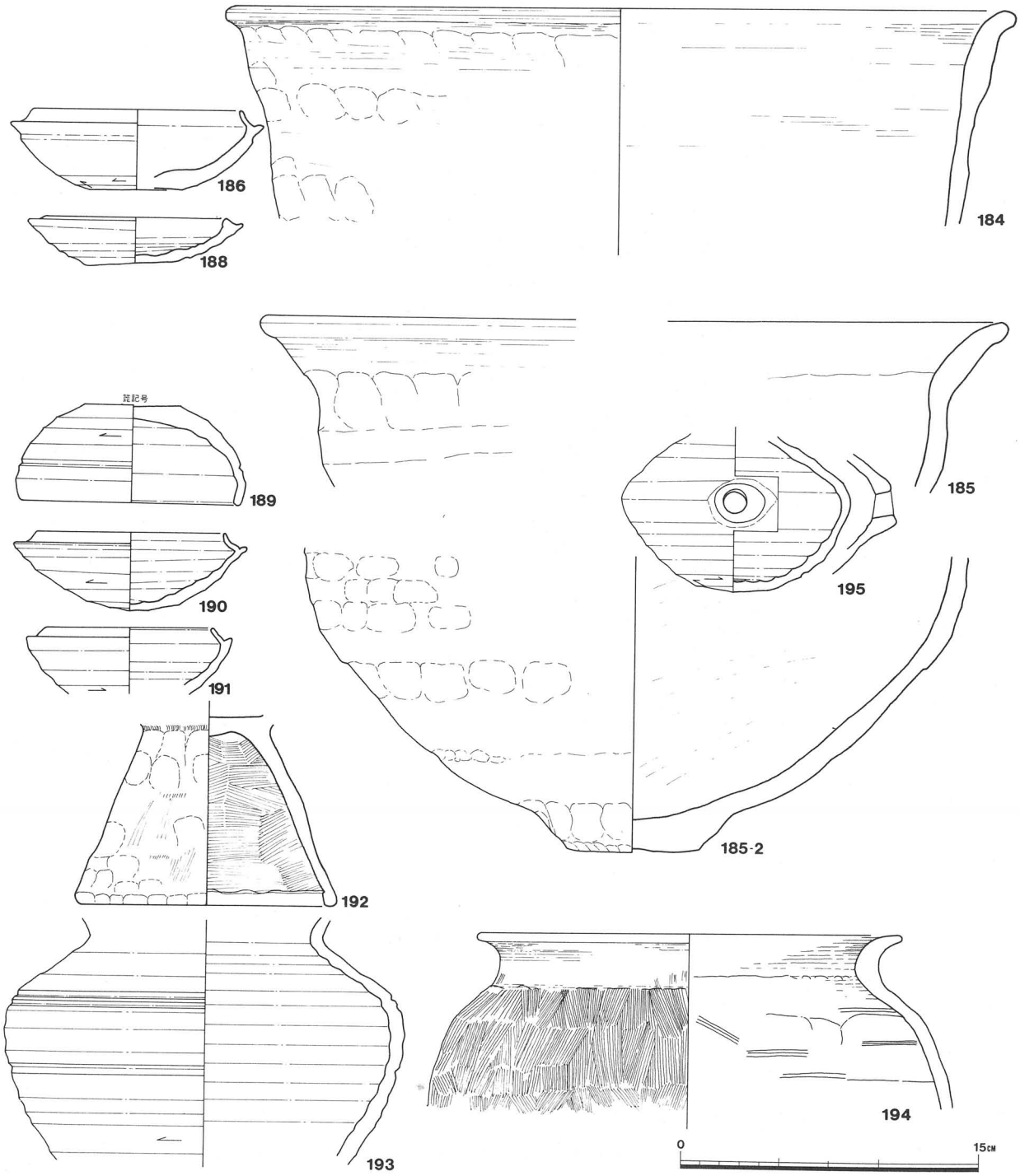
189 ～ 193 は KT 310 の南寄りで検出された土器である。189 は，沈線を置いて区切った口縁部が直立ぎみになり，器高も高く古い要素を残す。190 ・ 191 は口径が 10 ～ 11 ㎝程度の坏身で遠考研編年Ⅳ期前半に比定される。193 は須恵器の広口短頸壺の肩部破片である。肩部の張りがあまり大きくなく撫肩の球胴で丸底になる。192 は口縁部が大きく開く土師器の台付甕の脚であり，いずれも遠考研編年Ⅳ期に伴うものである。

195 の須恵器の䤈は KT 308 から出土している。体部は，肩があまり張らず粘土を張付けるようにして低い注口を作り出している。遠考研編年Ⅳ期に伴うものと考えて良い。

188 は器高が低く立上がりもほとんど無い，形態的には蓋と考えて良い。したがって遠考研編年Ⅳ期後半とす

べきかも知れない。KT 307 から出土している。

これらの小溝の性格については出土土器から，須恵器編年のⅣ期の間（7世紀前半代）に営まれた遺構である事を示し得る。また覆土内から，量は多くないが煮沸形態の甕が検出され，土製支脚状の焼土や灰，炭化物，炭化材，種子類も検出されるので，それらの遺物と有機的な関係を持つ遺構と考えねばならない。いずれにしろ，残されている部分が少なく想定し得る遺構を思い付かない。



第31図　古墳時代溝状遺構出土土器実測図

第32図　古墳時代溝状遺構模式図

第6節　井戸

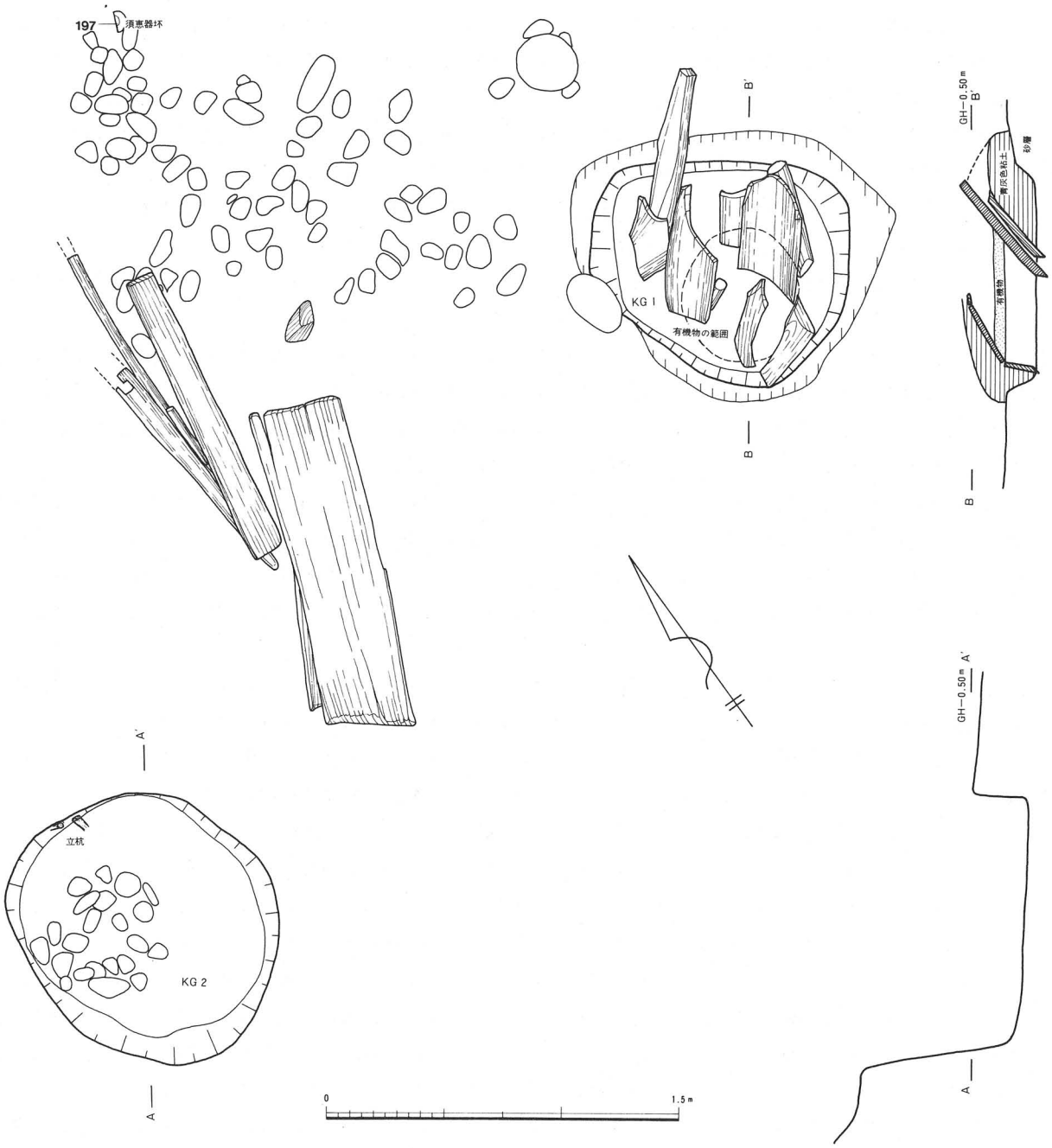
大溝の北端（ハ7・8区）と，南端（A15i区）に井戸遺構が検出された。いずれもⅦ層発掘中に，大溝の縁や底から砂層に掘り込まれた小穴に，有機粘土が充満した状態で発見された。住居跡などの遺構群に直接的に伴なって検出されたものではない。当然，伊場遺跡内の同時期の遺構群との間に，有機的な関係を求めねばいけないが，それに該当すべき遺構は少ない。

KG—1　（第33・34図）

ハ7区の大溝南縁で，弧状に跨り抜いた板を組合わせた，径40㎝程の井筒が検出された。井戸は砂層中に造られたため，長径110㎝，短径95㎝の掘り方と井筒板の間には，青白粘土が詰込まれ井筒を固定させていた。井戸の北西には，拳大の河原石が雑にではあるが並べられていた。これを，水辺の井戸に伴う敷石遺構と考えた。この敷石群の西隅で197の須恵器坏身が出土している（第33図）。196の坏蓋は井筒と敷石遺構を覆う土層から検出した。これら須恵器の蓋坏は遠考研編年Ⅳ期の前半に比定される。

KG—2　（第33・34図）

ハ8区の大溝の南岸斜面に造られている。長径120㎝，短径105㎝，深さ50㎝程の掘り方になる。北東に隣接してKG—1があり敷石遺構との間に，建築材と思える木材が検出され，井戸に伴う建屋を想定させた。井戸の底面には拳大の河原石が20個ほど置かれ，土器も土師器の甑の把手・甕片・須恵器片など僅かではあるが出



第33図　古墳時代井戸跡実測図

土した。そのうち主な物である198～200を第34図に図示した。

198は口径が11.8㎝で比較的器高の高い坏蓋で，遠考研編年Ⅳ期前半の須恵器である。199の土師器は細片で口径を計測出来ないが，甕の口縁部破片であろう。時期は類例がないので不詳。200も甕の破片で198に伴っても良いものである。

KG—1・2は互いに隣接して造られ，時期も全く同じ，井戸の底面レベルも海抜－1.0ｍとほぼ同じで類似点が多い。二つの井戸が同時に使用されたか否か判断する根拠は無いが，一度に2箇所近接して造る必要も無いように思える。どちらか一方が，何らかの事情で使えなくなり作り替えられたのではと想像している。

井戸遺構が検出されたハ区の大溝縁辺では，7世紀前半代の遺構は発見されていない。南西の古墳時代の小溝群が同時期の遺構であり関係が注目されるが，小溝群の性格が分からず有機的な関係を明確に出来ない。

KG—3　（第34図）

A 15 i 区の大溝はほぼ中央で検出された遺構である。上端で径2.0ｍ，深さ90㎝で，内部には有機物が混じった有機粘土が，覆土として充満していた。大溝底面＝第Ⅶ層下面（標高－1.4ｍ）で発見されたり，溝の中央部に造られていることなどもあって，井戸として利用するには不都合な点が多く，人工的な井戸遺構とするのを疑問視する考えもあった。しかし，井戸遺構周辺での，大溝の層位の状況から，本来大溝斜面の第Ⅷ層に造られた井戸遺構が，大溝の流路の移動で遺構の上部（大溝斜面＝Ⅷ層）が，浸食されてしまった。したがって，Ⅶ層が堆積する段階では，大溝の中央部に位置する結果となり，現況のような形で発掘されたと考えた。

第34図に示した201～214がKG—3の覆土中から検出された土器の主なものである。

201・202の須恵器坏身は，最大径が11～12㎝で，口径に比して器高がやや高くなり，遠考研編年Ⅳ期前半に比定される一群である。7世紀前半代の土器と考えられている。

203・204の坏蓋は肩部の稜が沈線化したり（204），ほとんどその形跡を残すだけ（203）になってしまっている。口径は14㎝程度となっている。206～208は，最大径が14㎝程となり，体部は腰が張らずに口径に比して浅い感じで，低く内傾する立上がりを持つ。204は稜や口縁部に古い要素を残すが，いずれも遠考研編年Ⅲ期後葉に，比定して良い一群である。6世紀中頃～後半の時期としたい。

209・210は最大径が14㎝代で，立上がりも206～208より高い。受部も横に作り出している。210は歪みがあり，いずれも細片であるので図化に疑点が残るが，遠考研編年Ⅲ期（KT 10併行）に比定されるか，それに近い時期のものと，考えられる。210は薄手の作りで，やや古く遠考研編年Ⅱ期（MT 15）に比定されると考えている。205は口径が17㎝近くあり，稜もまだ作り出されているので，遠考研編年Ⅱ期（MT 15）に比定したい。

211・212は中形とも言える甕形土器であり，全体を刷毛仕上げする。いずれも底部を欠く。213は台付甕あるいは鉢の脚部で分厚い作りになっている。いずれも201～210の須恵器群に伴う土師器と考えて良い。

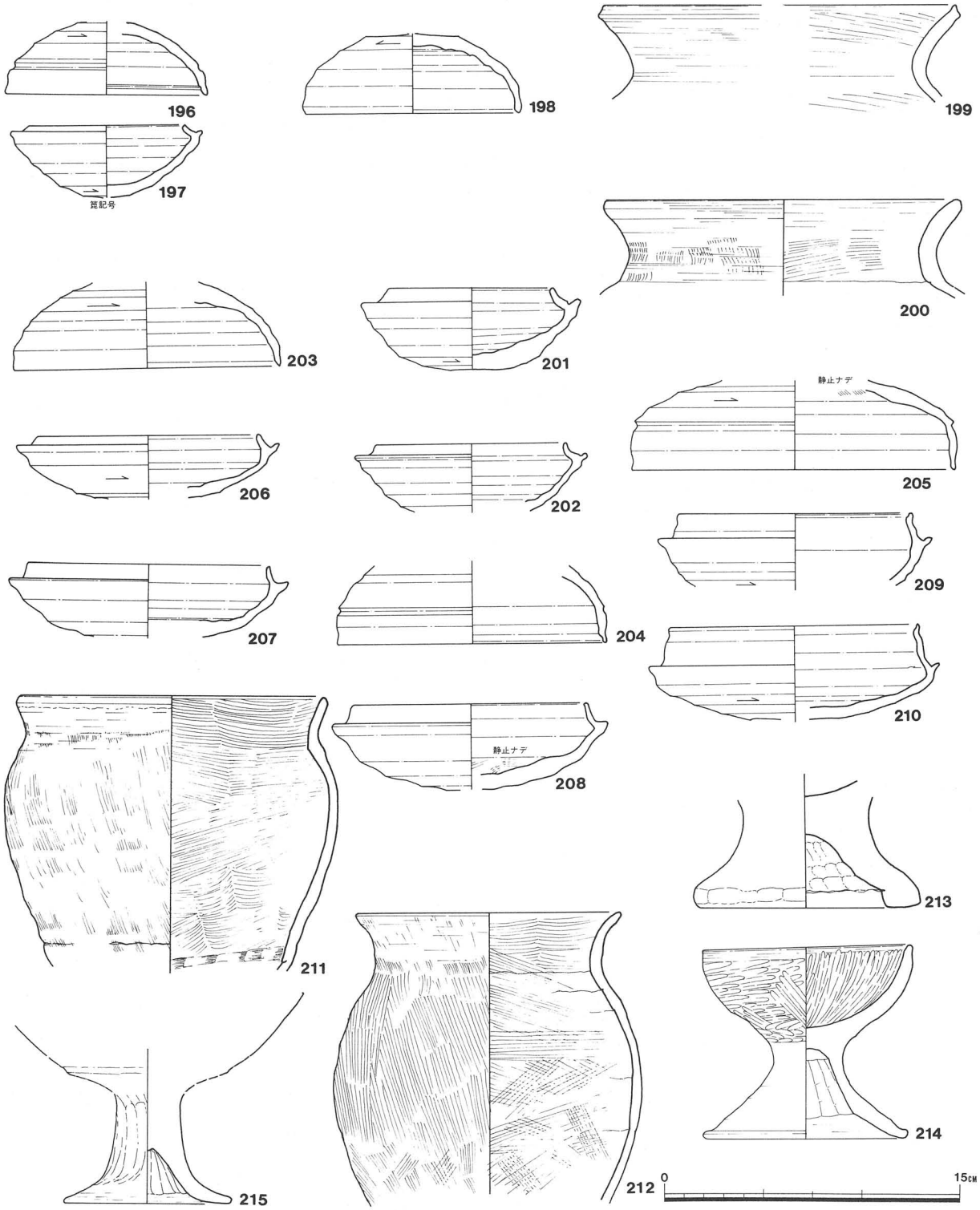
214は内外を箆研磨された坏部を持つ高坏である。坏内面には研磨痕が放射状に残り，脚内面は箆で刳る様に削って整形している。和泉式直前の土師器と呼ぶべきもので，5世紀の初頭の時期を比定したいと考えている。

KG—3は出土須恵器の編年上から見た時期の幅が，6世紀前葉から7世紀前半代にわたる，遺構と考えられる。214の土師器までふくめれば5世紀代まで遡る。大溝内でのKG—3の検出状況や層位的な出土状態からすると，Ⅶ層下面の時期には既に，浸食されていたことが知られる。201・202の土器は，そうした廃絶期に混入したものと考えたい。214の土師器は5世紀代にまで遡るが，この遺構が200年間続いたとも思えないので，何らかの紛れ込みと考えている。検出された須恵器の中で古いと思える205の坏蓋が遠考研編年Ⅱ期に比定されるなら，この時期に（6世紀前葉）に遺構が作られ，該当する時期の須恵器の出土量の多い203～208の時期（6世紀中頃）に，主体的に使用された井戸遺構と想定したい。井戸遺構から出土した土器の編年的な位置から，その様に想定したものであって，他に確定的な根拠は無く遺構の見方の一例として挙げておく。

A 15 i 区の大溝の近接地で，この遺構と直接的に結び付け得る同時期の遺構はない。さらにKG—3は大溝の

ほぼ中央にあり，先述したように大溝の縁が浸食されて消失しているので，溝の東縁か，西縁かの，いずれに造られた遺構か定かではない。

しかし，東部地区（弥生時代環濠内）の古墳時代住居跡群は6世紀代のものが多く，この井戸遺構と時期的に重なる住居跡群である。したがって，井戸遺構が大溝の東側に造られ，東縁から大溝内の井戸に降りていくよう



第34図　古墳時代井戸跡・方形周溝墓出土土器実測図

な施設が，在ったと推定すれば，こうした住居跡群と，井戸遺構の有機的な関係が想定される。

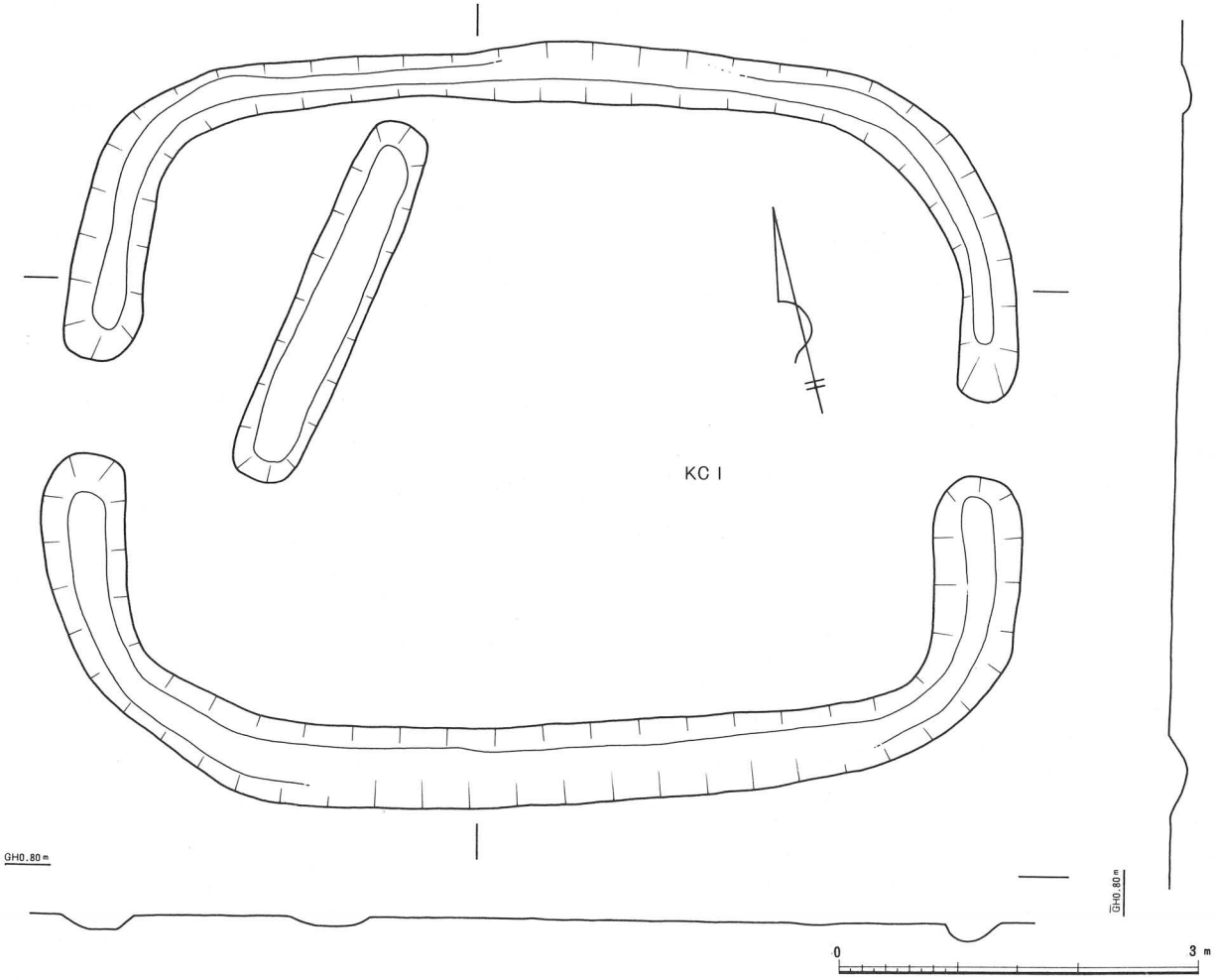
東部地区の住居跡群が立地する部分は，砂堤列の上にあたり地形的には水を得にくい。東部地区には発掘した範囲内では井戸は検出されていない。したがってこのように考える妥当性はあるように思う。ただ距離的にやや離れており，北側にはKT 201も在り，この溝も水源として利用できる等，否定的な要素も多い。

第7節　方形周溝墓

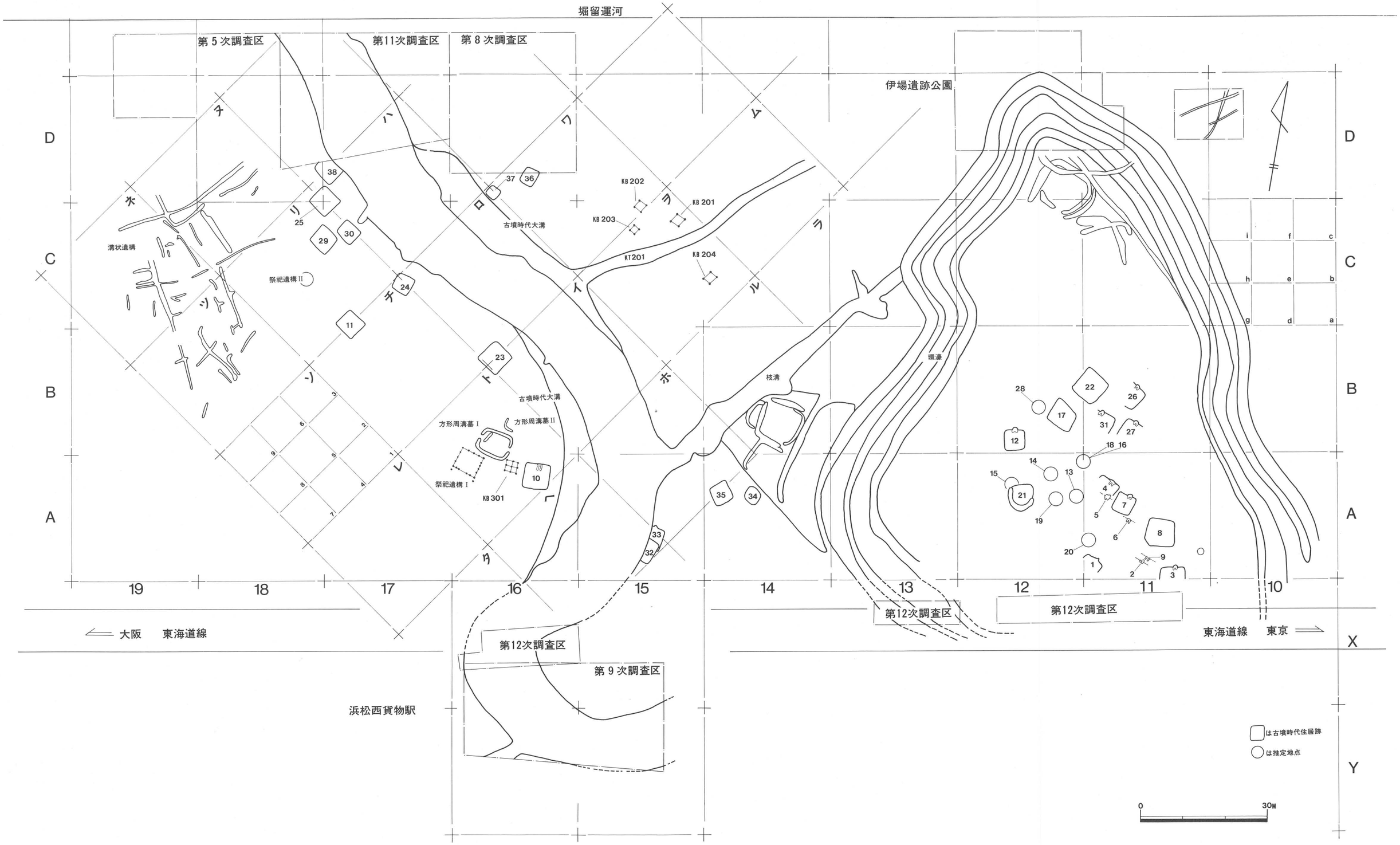
KC—1　（第34・35図）

ト2・5区に東西8.0 m，南北6.4 m程の，東西の中央部が開いた方形に巡る溝が検出された。溝の幅は約70 cm，深さは15 cm程度の浅い溝である。方形になる溝の内側の西よりに，長さ3.3 m，幅60 cm，深さ10 cmの長方形の溝も合せて発見された。この遺構を，上半が後世の耕作などで削平されてしまった方形周溝墓と考え，内側の長方形の溝を主体部とした。

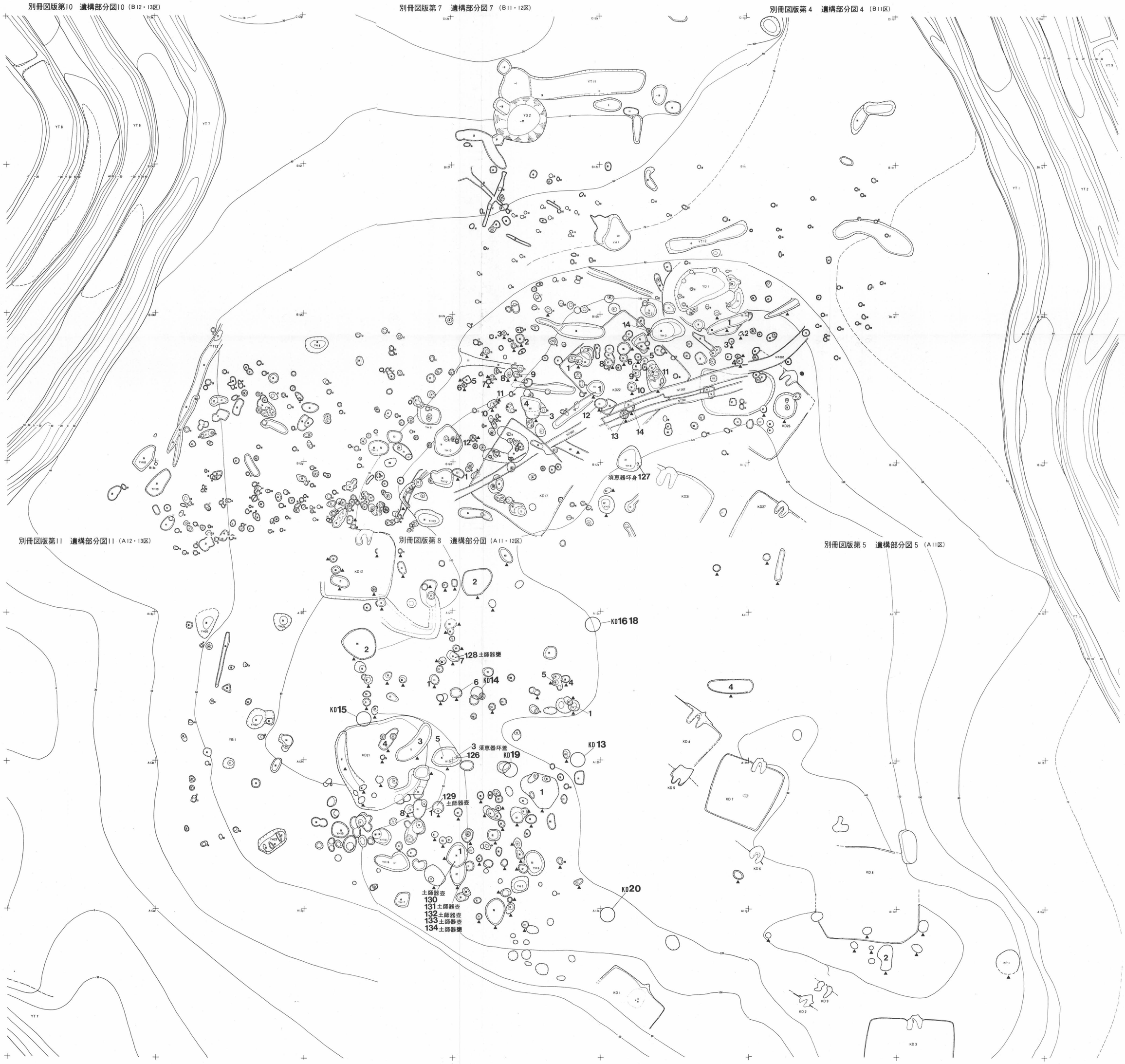
215の土師器高坏脚が周溝から検出され，この方形周溝墓に伴う唯一の遺物である。脚上部が中実になり内面には指で掻き出すような指頭痕を残す。祭祀遺構（KI—1・2）から検出した高坏に類似品が多い。5世紀後半代の土器と考えたい。



第35図　古墳時代方形周溝墓実測図



第36図　伊場遺跡グリット表（古墳時代遺構位置図）



第37図　東部地区古墳時代遺構出土状態

（伊場遺跡発掘調査報告第２冊
伊場遺跡　遺構編　別冊図版
加筆転載）

KC—2　（第36図）

ト2区の中央部で，長さ3.3 m，幅60 cm，深さ10 cmのL字形に検出された溝遺構である。KC—1に近いことや，同じような溝になるのでKC—1と同様に方形周溝墓と考えた。それにしても，遺構の大部分は削平されて，消失してしまった事になる。溝の中から，出土遺物は無かった。

古墳時代の中期にまで方形周溝墓が，造られたか否か，他に資料がないので断定できないが，方形周溝墓だとすれば，この地方で最も新しい例である。ただ，唯一の遺物が215の脚であり，この脚が，祭祀遺跡（KI-1・2）から出土した高坏との類似性から，同時期の遺構と考えられるなら，祭祀遺構に近接して造られた事は，注目に値する。こうした方形周溝墓群が，KI—1と近接して有機的な関係を持って造られたとすれば，KI—1の性格を葬制と係わりある遺構として位置付ける事が想定できる。KI—2からは滑石製の勾玉や臼玉が検出されるのもそうした性格を窺はせる。いずれにしろ，残された部分が少なく遺構の性格を，断定的に示し得る資料に乏しい。

第3章　古墳時代包含層出土土器

伊場遺跡は先述したように，旧砂堤列上に営まれてた遺跡であり，基盤層は砂丘性の黄色砂層である。砂丘面が高位となる東部地区では，砂堤列の形成後に堆積した弥生時代包含層（黒色砂層＝D層）や，その上に古墳時代の包含層（粘性を帯びた茶褐色の有機砂層＝Ⅲ層）などの堆積が広く見られる。砂丘が低位となる周辺部＝堤列間湿地（低地）では，弥生時代包含層の上を青（白）灰色粘土層＝C層が覆い弥生時代遺構は廃絶したと推定される。C層の上位には弥生時代終末から古墳時代初期にかけて堆積した青灰色粘土層＝B層が更に堆積している。このB層が伊場遺跡の西部地区の古墳時代や律令時代の基層となっている。B層が砂堤列や堤列間湿地を，広く覆ってしまった時期に，砂丘はA11区付近の最も高位にあたる部分が露頭していたに過ぎない。砂堤列の作る地形は，ほぼ地中に埋没していたと考えて良い。この様に東部地区ではⅢ層と呼んだ砂層と，西部地区ではB層と呼んだ粘土層が，それぞれ対応する同時期の古墳時代土層と考えられた。ここでは，そのⅢ層と，B層から出土した土器について述べる。

第1節　年代および編年的位置

＊須恵器坏蓋　（第38・39図）

遠考研編年Ⅰ期前半

坏蓋では301，坏身では320・326等である。坏蓋は，天井部が平らに近くなり口縁部は外反して高く，偏平な器形となる（301）。坏身は立上がりが高く器高の1/2以上を占めるものが多い（326）。口唇部も面を作って内傾する。TK 208に比定される物であろう。320は全体に作りが厚く，底面は手持ちの篦削りがされるものでTK 216あるいはTK 208の古い部分に比定される土器である。伊場遺跡で出土した須恵器では最も古い一群である。

遠考研編年Ⅰ期後半

坏蓋では302・303，坏身では323～325・327・328・336等の一群である。302は歪みのため器形がはっきりしないが，形態的には301に近いものであり口縁部も直立しているので，明通り古窯（TK 23）に併行すると考えたい。しかし全体的に体りが甘く，肩部の稜も鋭さに欠けるので，6世紀代まで下げて考えねばならないかもしれない。一応このグループに入れておく。

323～325の坏身はTK 23に比定されるもので，底面の篦削りの範囲が狭くなり，立上がりの口唇部が段を作って内傾する。体部はやや丸みを持って来る。328は口唇部を丸く作るが，立上がりも高く篦削りの範囲も広い点などを考えて，この群に含めた。

303は天井部外面の篦削りが1/2程の範囲に施されるだけで，天井部も丸みを持って高く球形に近くなっている。TK 47に比定したい。ただ口径が小さく，壺の蓋とすれば，6世紀代に下げて考えねばならない。

321・327・336はTK 47に比定される坏身と考えている。321に見るように，全体に体部が深くなり底面が球形に近くなる。327・336についても口径はやや異なるが，底面が球体に近くなる点などを考慮して，このグループに入れるべきと考えた。

遠考研編年Ⅱ期

坏蓋については，肩部の稜をまだ残し，口縁部が直立し，口唇部を内傾させるグループをこの類（MT 15）に入れた。304・305・307・309・311等である。306・308・312等も，このグループに含めるべきかも知れないが，口縁部の作りなどを考慮すれば新しいグループの範中であり，このグループからは除いた。

坏身では322・329～335・337・338～340等土器がこのグループに入る。立上がりはやや内側に倒れぎみ

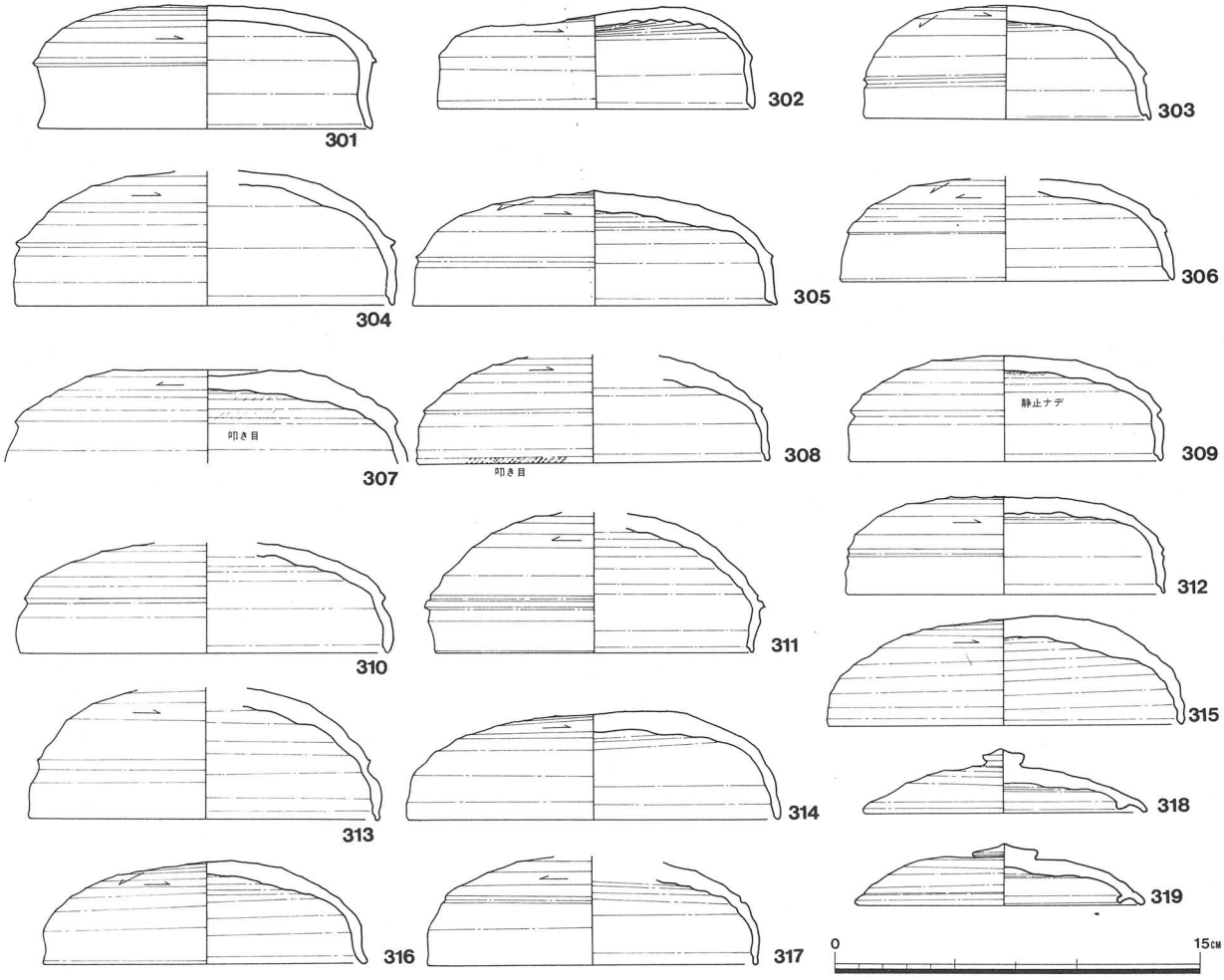
となり，立上がりの口唇部は内傾する面を残している。330は底面の箆削りの範囲も広く，立上がりや受部の作りもしっかりしている。この点を考えれば遠考研編年Ⅰ期の古い部分（TK 208）に含めることも可能だが，口径が大きく，口唇部の作りや体部の腰の張りが少ないなど，器形を考慮してこの類に含めた。329も立上がりが高く，箆削りの範囲も比較的広い点などから，遠考研編年Ⅰ期に含めることも考えたが，口径や口唇部の作りからこの類に含めた。329と330は焼成・胎土ともに，良く似ている。

遠考研編年Ⅲ前期葉

坏蓋では肩部で折れる角度が浅くなり，撫肩になって口縁部へと続く。稜は沈線を置いて作る程度であり，殆ど突起として残らない。口縁部の先端は丸く仕上げている。306・308・312・317等がこのグループに入るものと考えた。坏身は図示できる物が無かったが，KD—14から出土した土器がこのグループの一括品と考えている。

遠考研編年Ⅲ期中葉

坏蓋では，すでに稜は消失し，体部の形が，天井部からなだらかに口縁部へと続き，折れ角を強くする肩部さえ無くなってしまうものをこのグループにした。313～316等である。坏身では口径に比して器高が低くなり，立上がりも内傾した低いものである。口唇部は，丸く尖らせぎみに終る。体部の腰の張りが少なくなる傾向になる。341・343～343等をこのグループにした。



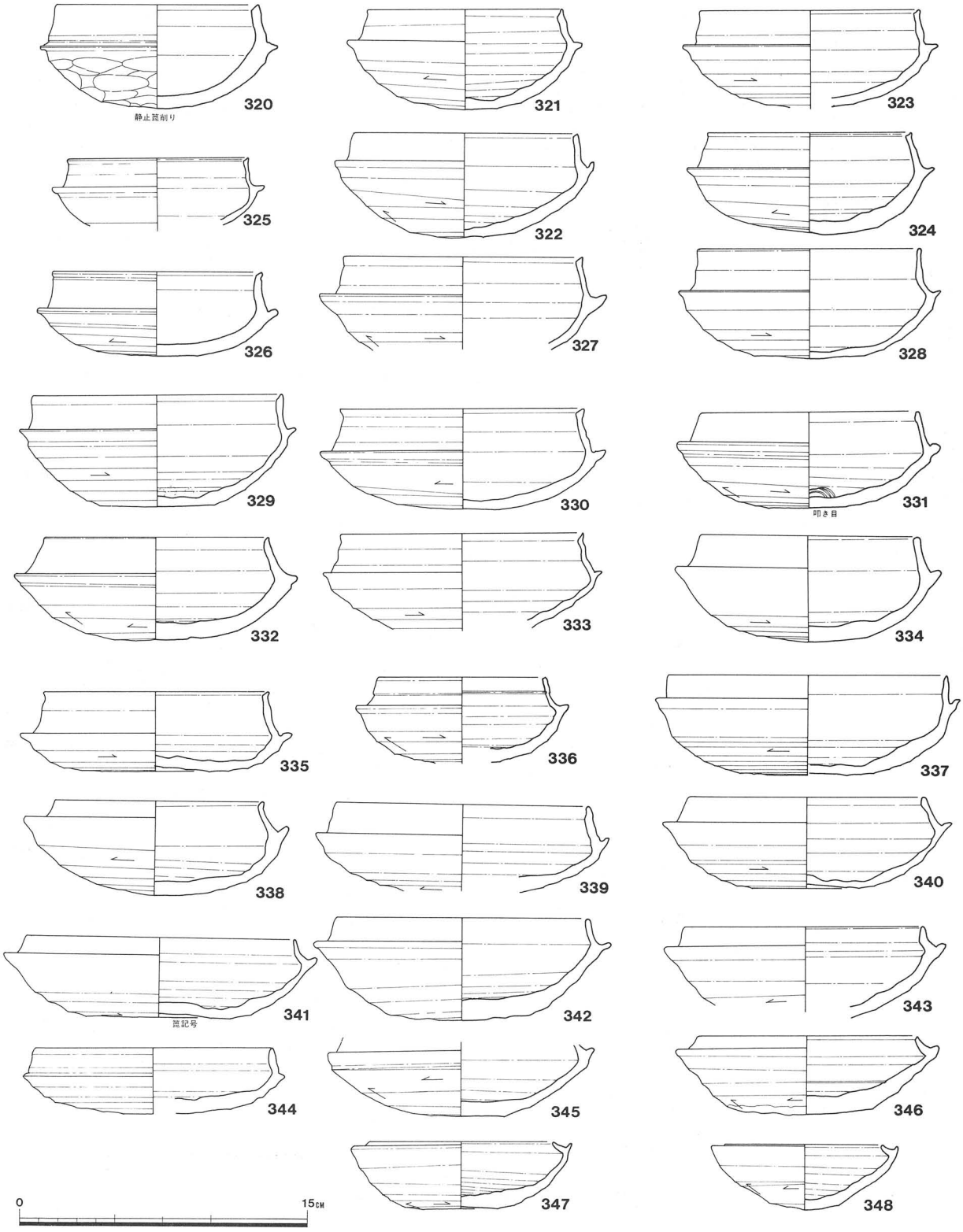
第38図　古墳時代出土土器実測図1

遠考研編年Ⅲ期後葉

346 とした坏身が 1 点だけである。口径が 13.8 ㎝と小さくなり，立上がりも低く外反して内傾する。

遠考研編年Ⅳ期前半

347・343 の 2 点である。347 は口径が 12 ㎝程あり Ⅲ期後葉に近いものである。343 は立上がりが低く，受部



第 39 図　古墳時代出土土器実測図 2

から僅かに出る程度しか無い。Ⅳ期後半に近いものか。

遠考研編年Ⅳ期後半

擬宝珠形の撮が付く坏蓋である。口縁部には身受（返り）が付くものである。

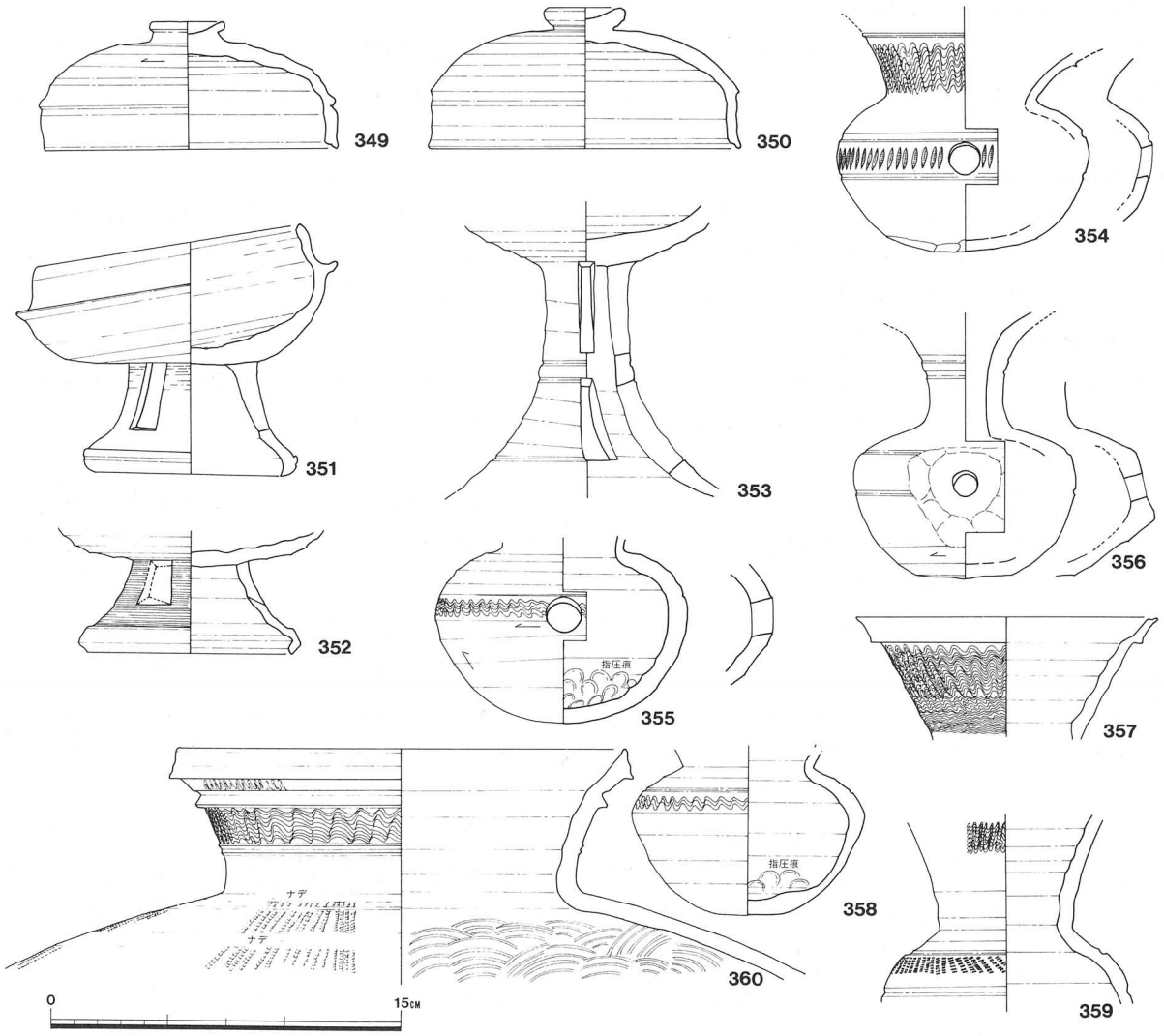
＊須恵器高坏　（第40図）

349～353の5個体を図示した。349・350は蓋となる。中央が凹んだ偏平な撮が付けられている。351は歪みが大きく器形がはっきりしない。脚にはカキメが薄く残る。352は坏部を欠くので詳細は不明だが古そうな高坏である。これらの高坏は遠考研編年Ⅰ期後半の時期に比定される。

353は，長脚二段透かし高坏である。坏部と脚裾を欠くので詳細は不明だが，遠考研編年Ⅲ期以降の須恵器であろう。

＊須恵器𤮋（壺）（第40図）

354～359は壺あるいは𤮋の破片である。354は焼き歪みが大きく，口縁部を欠くので頸部以上の器形が定かでは無い。底面は静止篦削りで仕上げられるなど古い要素を持つので，遠考研編年Ⅰ期の土器とすべきか。315も同様な𤮋の口縁部にあたるものと考えられる。



第40図　古墳時代出土土器実測図3

355は焼成も良く箆削りも丁寧で，波状文も整った櫛目でしっかりと描かれている。長頸で口縁部が大きく開くもので遠考研編年Ⅲ期に比定されると考えている。358・359も，同様にⅢ期のものと考えられるが，やや新しいものであろう。356は頸部が細くなり遠考研編年Ⅳ期前半に比定される時期のものと考えている。

＊須恵器甕（第40図）

360の頸部には沈線や稜を置き，櫛描きの波状紋が施される。体部内面には青海波の叩き目が，そのまま残される。外面にも平行叩き目が残る。この叩き目は，頸部の円に合せて同心円状にナデ消されている。遠考研編年Ⅲ期併行と考えられる。

＊土師器坏（第41図）

371～377・369等を図示した。5世紀末から6世紀代の土師器である。内彎して立上がる口縁部を持つもので，361・362のように半球状になるものと，369のように器高の低いものがある。こうした差が時期差になるものか否か，伊場遺跡での出土状態からでは分らなかった。

＊土師器埦（第41図）

367・368の2個体を図示した。内彎して立上がる口縁部の先端を内傾させている。箆による整形や調整が，多用されている。5世紀代の早い時期の物と推定している。

＊土師器　模倣坏（第41図）

370～373の4例を図示した。立上がりもしっかりと作り出し，受部も明瞭に作っている（372・373）もの，受部は，ほとんど無くなり稜となってしまうもの（370・372）との2種がある。前者が古く6世紀前半代，後者はそれ以後，6世紀後半代の土師器と考えている。

＊土師器鉢（第41・44図）

374～376・426に図示した。いずれの鉢も箆整形している。374は篭目土器となる。426は住居跡から出土した2や18の様な大型の鉢となる土器と推定している。和泉式の新しい時期に比定される物であろうか。古い要素のある土器だが，出土層位等から5世紀代の土器と考えている。

＊土師器高坏（器台）（第42図）

調整法や形態から，内外面が箆研磨されたもの（377～379），高坏の脚が長いもの（380・381・388～393），脚が短いもの（382・384・394～396・398・399）の3種に分けられる。

箆研磨されたもの

377の高坏と378・379の器台の3個体で古式土師器とされるものである。これらはいずれも単独で東部地区で検出したもので，遺構に伴った遺物ではない。一応，これらに近い時期の遺構を挙げるとすれば，KD—21が，在るだけである。また，KG—3から377と同様な高坏が検出されている。

須恵器を伴わない時期の土師器の一群で4世紀後半代のと考えている。

脚の長い高坏

坏部の底面と口縁部の接合部に軽い稜をつくり，外反ぎみの口縁を持つ。脚は最大径が下半部にあり，脹らんだ円柱状になり，脚裾は横に開く。脚内面は，絞り目を残すものや，指頭によるなでが縦方向に施されるものが多い。脚と坏部との接合は，坏部の底面に作り出した突起を，脚の上部に挿入するものが一般的である。

脚の短い高坏

坏部は脚の長いものと，ほぼ同じで大差は無い。脚は八の字形に開き，脚裾でさらに広がりを増すもの（382・384・387・394）。脚裾まで八の字に開くもの（396～399）。脚が八の字に開くが，脚裾の先端が横を向くまでには開かないもの（395）の3種に細分される。脚内面は395を除けば横方向に箆削りされるものが多い。

脚の長いグループは坏部の突起を脚に挿入するものが多く，脚裾まで八の字に開く396～399のグループは，脚の上部が中実になり，脚を坏の底部に挿入して作っている物が多い。こうした技法の差が，全体的な流れの中で時期差として考えられる。したがって382・384・387・394のグループは坏部の突起を脚に挿入するものが

多く，387のように脚の上部を坏部に挿入するものも混じるので，脚の長いグループと脚の上部が中実になるグループへの移行形態と考えられる。

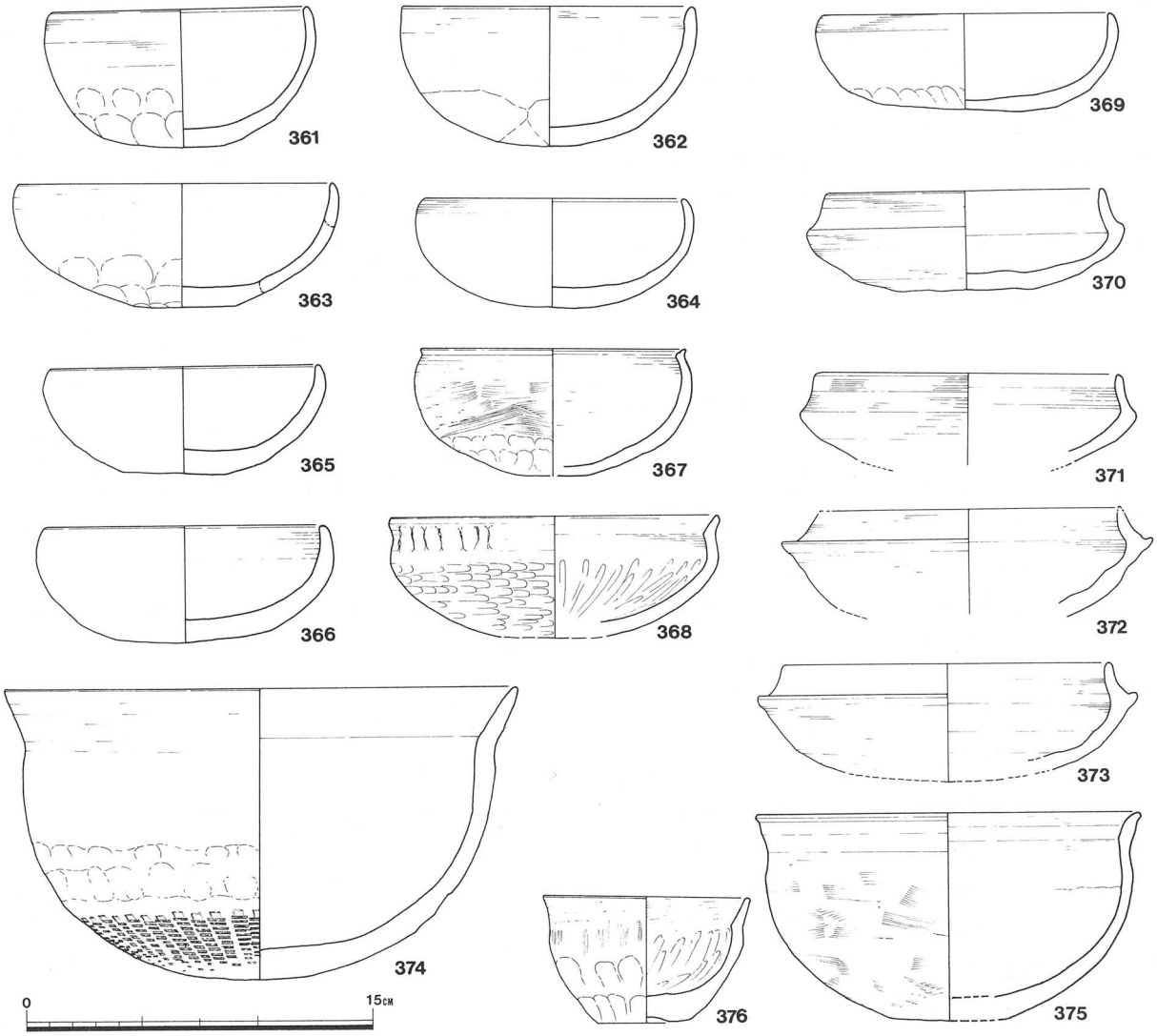
伊場遺跡では，祭祀遺構から検出された土師器の高坏が，脚の短いグループである（395の形態を除く）。伴出した須恵器から5世紀後半代とされる。したがって，脚の長いグループは，それ以前と言う事になり5世紀前半代（和泉Ⅰ式）に，あてられる。395は坏部の底面に，円筒形の脚を貼り付ける作りになっている。模倣高坏であり6世紀代と考えている。

＊土師器甑（第43図）

400と401の2個体を図示した。400は402の甕と伴出して，第4次調査のトレンチ発掘の際に検出された物である。平底に作った球胴の体部に把手を付け，底部をくり抜いて甑としている。402の甕も球胴に近く平底に作っている。和泉Ⅰ式併行の土器であり甑も同様に考えて良い。

401の甑は，口縁部の折り返しも無く，体部も長胴化しているのでKD—32で出土した甑に近い。6世紀代の時期にあたる。

＊土師器甕（第43・44図）



第41図　古墳時代出土土器実測図4

402・403・406～420・425等を図示した。402は，先述したように和泉Ⅰ式併行の甕である。403・406～415はS字状口縁の甕であり，403は，安達編年Ⅰとされたもので，弥生時代末の欠山式に併行する土器である。406～412は安達編年Ⅱbに相当するS字状口縁の甕であり，413～415は，それらの脚である。

416～417・419は，口縁部を構ナデして刷毛や箆で整形される一般的な甕である。口縁部が，やや立上がりぎみになり，416のように球胴に近くなる事や，出土属位の関係から和泉Ⅰ式併行の土器と考えたい。420は肩部が張った大形の甕で，体部は箆ナデして仕上げている。伊場遺跡では住居跡内から伴出していないので，何とも言えないが，調整技法などからは，やはり和泉Ⅰ式併行の土器と考えたい。425は口径が48㎝と大形になる土器である。弥生時代から続いた台付甕は5世紀代には消滅し，再び7世紀代には一般化すると考えられている。しかし，この土器は出土層位からすれば，5世紀代，和泉式に併行する甕としたい。ほかに類例が無いので，一応この様に例示して置きたい。

＊土師器壺（第43・44図）

404・405・421～424を図示した。404は全体に煤が付着しており，あるいは煮沸形態の土器かも知れない。他に類例がなく，搬入品と考えている。出土層位からは5世紀の前半代としたい。405は二重口縁の壺で5世紀代の土器である。

421は把手付きの壺で，球胴の体部に外反する口縁部が付く。こうした壺は7世紀になって一般的に現れてくる。しかし，この壺は出土層位から5世紀代の時期と考えたい。先述したように図示しなかったが，KD―4で球胴で把手の付く土器が出土している。これが421と類似する壺と考えて良ければ，KD―4が遠考研編年Ⅰ期の須恵器を伴っているので，5世紀代～6世紀初頭に遡る事が出来る。また，374の土師器の鉢が，ほぼ同じ場所で出土しているので，これ等の土器と伴出した物なら5世紀代と考えても良いと推定している。

422は口縁部が大きく開く複合口縁の壺で，5世紀前半代としたい。423は刷毛ナデ（箆ナデ）して器壁を薄く仕上げている。やや古く4世紀後半代と考えている。424は筒状の口縁部を持つ物で5世紀の後半の土器である。

第2節　出土位置および状態

ここで取上げた301～426の土器は，先述したように東部地区及び西部地区の古墳時代包含層から出土した土器である。住居跡のような明確な遺構に伴って検出されたものではない。しかし，出土状態や出土位置から遺構の存在を窺わせるものがある。ここでは，そうした土器と場所のいくつか挙上げてみたい。

まず，これらの土器群を地形や地層の関係から，西部地区（1区・2区・3区）出土の土器と（注7），東部地区（弥生時代環濠内）出土の土器とに，二分して考える必要がある。

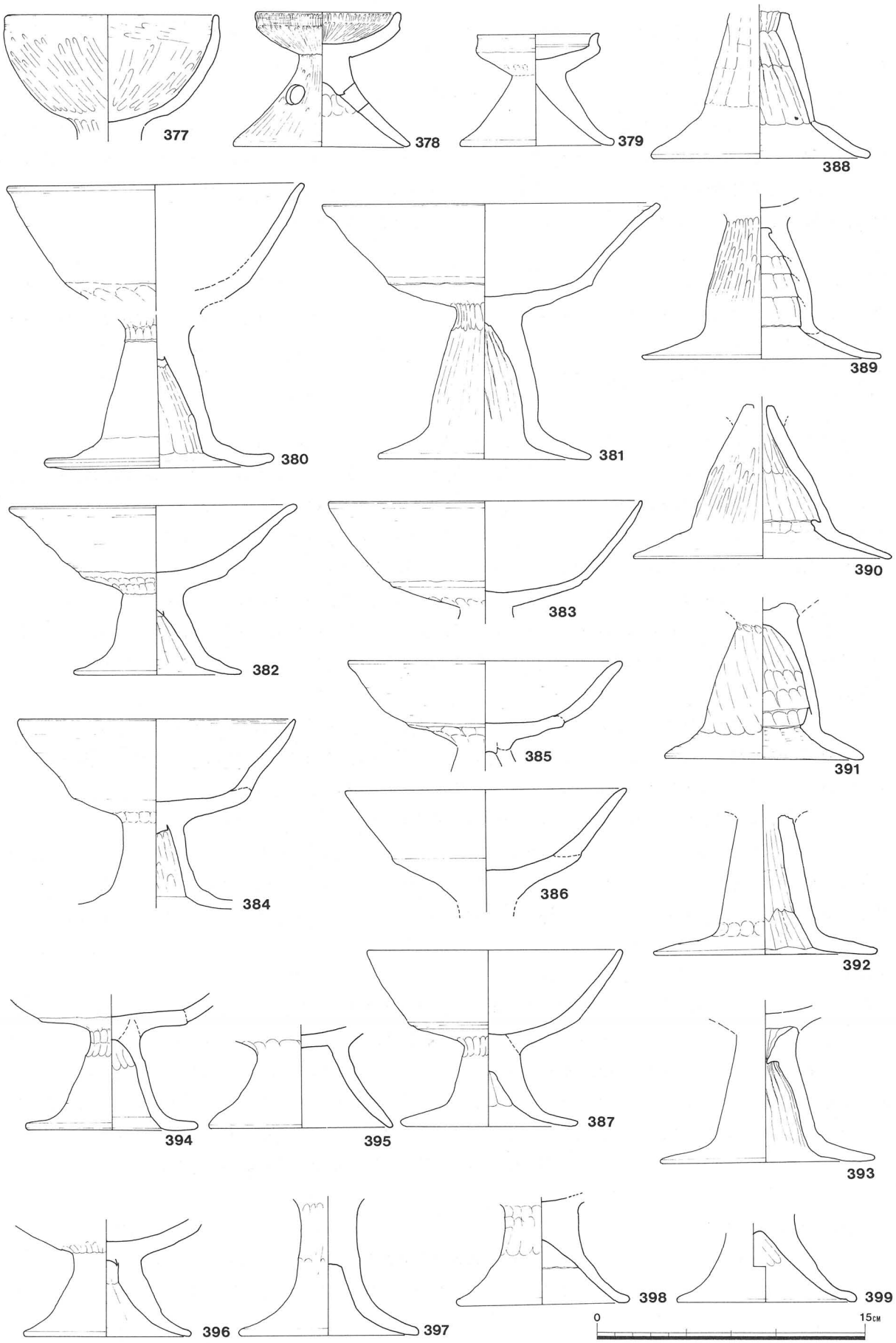
西部地区

＊1区

KD―34・35の南側（A14g区）で，303の須恵器坏蓋や土師器の坏（364）・高坏（394）などが一括して出土した。また近接して出土した331の須恵器坏身もこの一群に伴うものと推定される。発堀当初は須恵器坏蓋や坏身から6世紀初頭の住居跡を想定して調査したが，床面等平面的な広がりが，明確に確認出来なかった。

A14h区からA15b区にかけて，住居跡の床面と思われるB層の状況が観察された。周辺から325の須恵器坏身，361の土師器の坏，384の高坏，さらに424の壺などが検出された。この部分はB層に管鉄の発達が著しく，平面的な観察で土層の差を区別することが困難であった。また，焼土や炭化物など，炉やかまどを示す直接的な遺物も検出されなかった。

また，A14e区で381の土師器高坏が検出されている。こうした場所では，ここに図示した土器以外にも，甕などの破片も検出されることも多い。



第42図　古墳時代出土土器実測図5

このように，１区で土器がまとまって検出された場所は，住居跡群（KD―32～35）が立地する範囲の一角にあたり，何らかの遺構（住居跡?）が在った可能性が高い。しかし，焼土・粘土・炭化物などは，散見されるものの，住居跡内のかまどや炉の施設の存在を示し得る程の，集積には至っていない。

このように，土器がある程度まとまって出土する部分は，後世の攪乱や耕作などによって削平されてしまった，蓋然性の高い，住居跡のような物を想定している。したがって，大溝・奈良時代の技溝・弥生時代の環濠によって囲まれた西部地区１区には，KD―32・33・34・35の住居跡を含め，さらに，少なくとも２か所の遺構（住居跡）が存在し，５世紀末から６世紀にかけての時期の遺構群を作っていた事が知られる。

＊２区

318の須恵器坏蓋がワ８区，364の須恵器坏身がム１区より出土している。これらは，７世紀代の土器であり単独に近いかたちで出土しており特筆すべきことはない。ただ，ム５区から出土した386の土師器高坏は，５世紀末から６世紀にかけての土器であり，位置的にも近く同時期のKT 201との関係を示唆させる。ただこの土師器が１点だけであり，それ以上の事は不明。

＊３区

４次調査のトレンチ発掘で，イ３区のKD―23の西側に隣接して，400と402の甑と甕のセットが検出された。周囲には炭化物が広がっており，発掘当初は住居跡と考えた。第６・７次調査で平面発掘による精査を試みたが，住居跡らしきものの平面的な広がりは確認できなかった。本来KD―23に伴った甑と甕が，何らかの理由で住居跡外に投棄されたか，KD―23に伴う遺構が住居跡外に在った結果とも考えられる。しかし，これらの土師器KD―23に伴う土器に，時期差があるので一応，別の遺構と考えている。

リ・ヌ・ツ・ネ区で検出された小溝群の周辺では，319の須恵器坏蓋・348の坏身・349の坏身・356の𤮔などが出土している。349の坏身はKT 301に伴ったと推定されている。他の須恵器も遠考研編年Ⅳ期に含まれる時期の物である。小溝群の時期に重なり合い，位置的にも小溝群の周囲に限られるので，これらの遺構群に伴った土器と考えて良い。

さらに，３区ではチ８区から，伊場遺跡では最も古い須恵器のグループになる320の坏身・イ７区のピットからは須恵器の高坏脚・A 16 c区からは389の土師器高坏の脚。A 17 a区からは387の土師器高坏の脚などが出土している。いずれも単独で出土したので，こうした場所にもたらされた経緯は分らない。

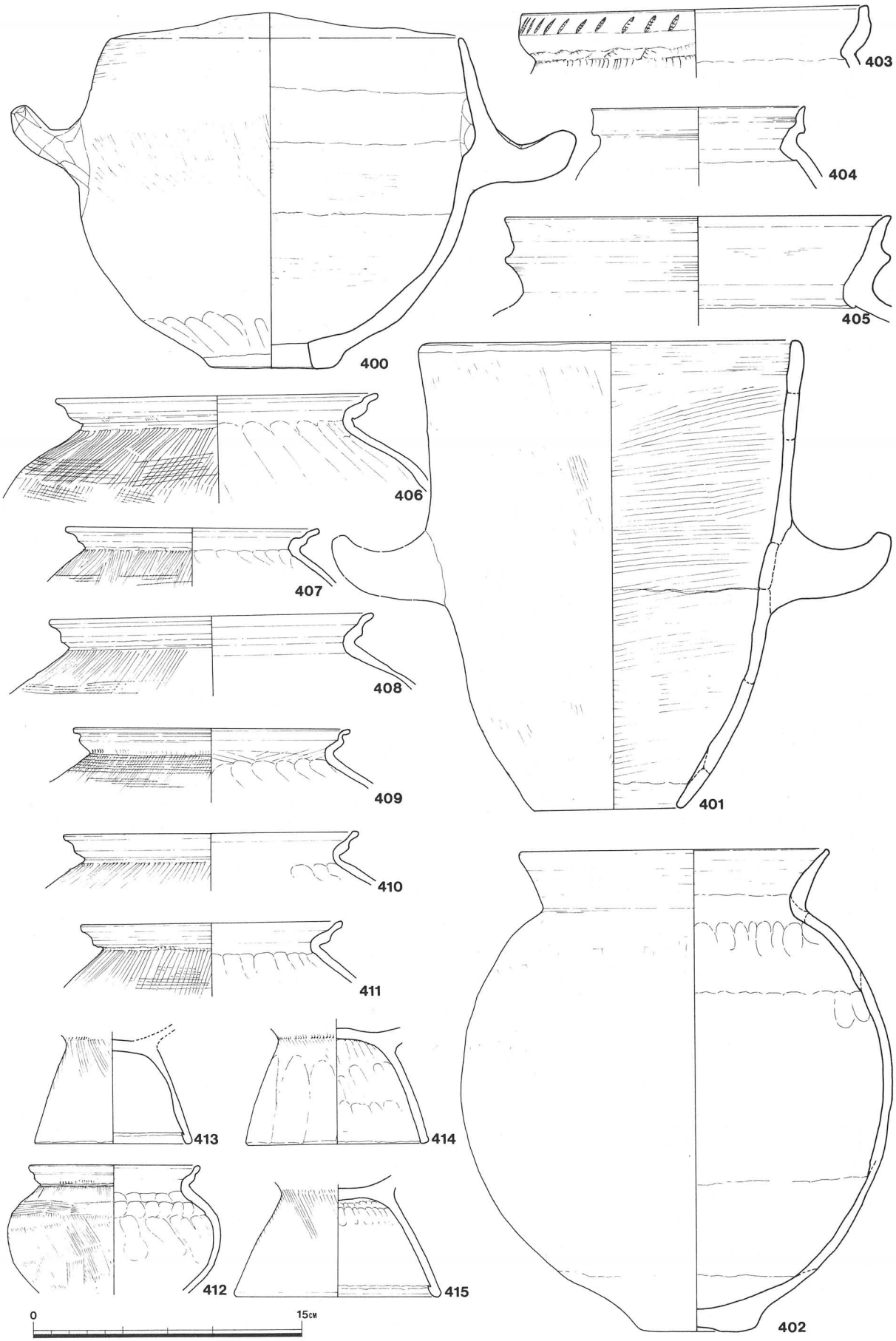
３区で古墳時代の生活が営まれたのは，住居跡群や祭祀遺構の作られた，５世紀末である事は言を持たない。しかし，ここに挙げた様に，320の坏身（TK 216併行?），400・402の土師器甑・甕（和泉Ⅰ式）など遺構群に先行する時期の遺物が含まれる。したがって，３区に人が入ったのは５世紀前半代で，後半代になると住居跡群を作るまでになったと推定される。その後に続く遺構がなく，やがて７世紀代になって西方に小溝群が作られ再び生活が営まれた事になる。

東部地区

東部地区と呼んだ部分は，砂丘面が高位となる所であり，弥生時代以来生活が営まれた部分でもある。したがって，第37図に示したように，古墳時代の遺構も多く集中している。砂丘と言う性格もあって，完全に残された住居跡が皆無であったように，遺構の保存状態がかなり悪い。東部地区での包含層出土の土器は，こうして後世の攪乱などによって，消失してしまった遺構の土器と，考えてもよい。また，ここに図示した土器は，攪乱により消滅させられた遺構の物を，多く含んでいる事は，言うまでもないが，先述した住居跡群に伴っていた可能性も多い。したがって，ここに図示した土器の傾向から，東部地区の集落（住居跡）の推移について考えて見たい。

＊須恵器について

第38・39図の蓋坏に付いてみると，先述した西部地区出土の土器を除くと，遠考研編年Ⅰ期前半から遠考研編年Ⅲ期中葉までがあり，それ以後の土器を含まない事が分る。第40図の，その他の須恵器についても，同様



第43図　古墳時代出土土器実測図6

な事が言える。この事は，先に見た東部地区の遺構（住居跡）の所見からも言えることで，6世紀の中葉までで，ここの集落は終わり，6世紀末までは続かない事を示している。

＊土師器について

同様に西部地区を除いた東部地区出土の，土師器の高坏（第43図）について見ると，先述したように377～379のグループ（A），280・281・388～391等のグループ（B），382・384・394・398・399等のグループ（C），395等のグループ（D）に分別される。

・Aとした土器は，かつて堤町式と呼んだ時期に比定される一群である（1959向坂鋼二）。この時期の土器は，他にあまり例がなくKG3から出土した215の高坏やKD—23の埦（88），423の壺口縁部などである。一応，4世紀後半代の土器群に比定している。口縁部が立上がる事なく，横に開いてしまう点を考えれば，406～415のS字口縁の甕なども，やはり4世紀後半代の土器群に比定しても良い。この時期の土器だけを出土する遺構はないが，東部地区で古墳時代の生活が営まれ始めたのは，この時期からと考えたい。この時期に近い時期の，遺構としては，KD—21とした住居跡が唯一であるが，存在している。この住居跡からは，ここで図示した甕や高坏は出土しなかったが，薄手の布留式壺（84）や埦（82）等はこの時期と考えて良い。

・Bとしたものは，従来和泉I式とした土器群に比定される土師器である。近くでは，見性寺遺跡で一括資料が出土している（1974磐田市教委）。須恵器を伴わない時期の土師器で，5世紀の前半代と考えている。同時期の遺物としては，405・422の壺。417・419・420の甕や鉢などである。374・375の鉢などの土師器もこの時期に含めても良いのかも知れない。西部地区でも400・402の甑と甕，381の高坏などが，同時期の物として出土している。この時期になって伊場遺跡全体に，遺物（土師器）が散見されるようになってくる。

・Cとした物は，伊場遺跡の西部地区の祭祀遺構などの時期で，須恵器を伴う時期の土師器群である。須恵器との比較では，TK208～TK47の時期に幅を持たせて対応させたいと考えている。第42図に図示したCのグループの中が，さらに細分可能であるなら，須恵器編年に対応させる事も可能だが，図示したものについては何とも断じがたい。5世紀後半代の土師器グループとしておく。遺構としては西部地区の住居跡群がこの時期にあたる。東部地区の住居跡の中にも，この時期のものが存在している。

・Dとした物は，395の高坏脚を図示しただけである。これは模倣高坏で坏部を全く欠くので，詳細な時期は不明だが，先述した須恵器の所見から6世紀後半代にまで東部地区の遺構が残らないとすれば，同様な時期に比定したい。東部地区出土で同時期の土師器について見れば，401の甑，426・418の甕・第41図の370～373の模倣坏などが6世紀代の遺物である。東部地区では6世紀代になると，かまどを持った住居跡が，一般化する時期であり，これらの土器はそうした遺構の，いずれかに伴ったものであろう。

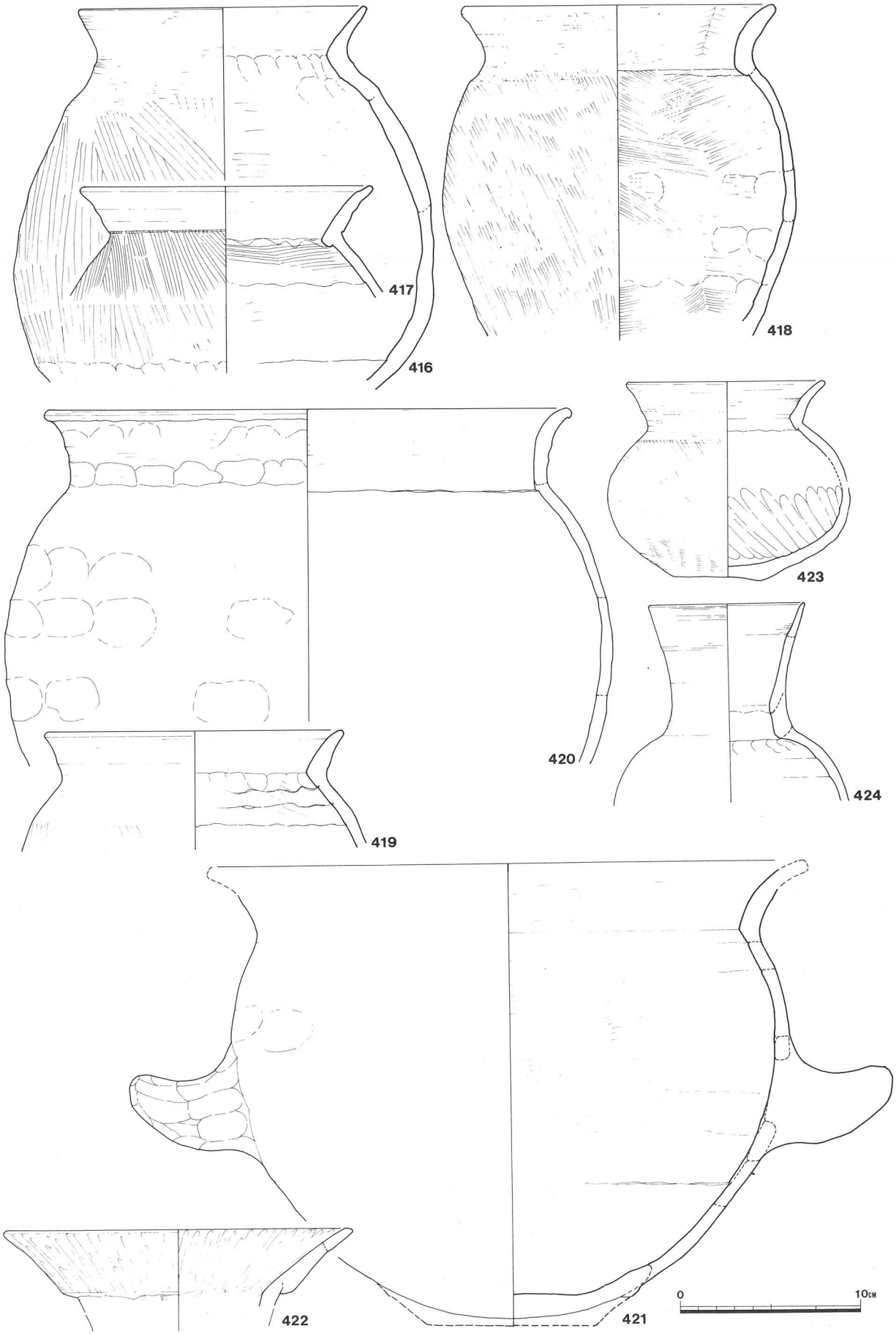
第41～45図に示した土師器のうち，前述した土器以外の坏，鉢，壺などについて見ると，坏などは，時期的な幅があるので，詳細に分別できないが，361・362など深めの坏から370・371の模倣坏まであり，5世紀末から6世紀代までの物と考えられる。壺や鉢など一部には，4世紀代に遡る物もあるが，5世紀末から6世紀代の土師器である。先にみた須恵器の所見と大きく矛盾せず，一致すると考えて良い。

第4章　遺構群の年代観および推移

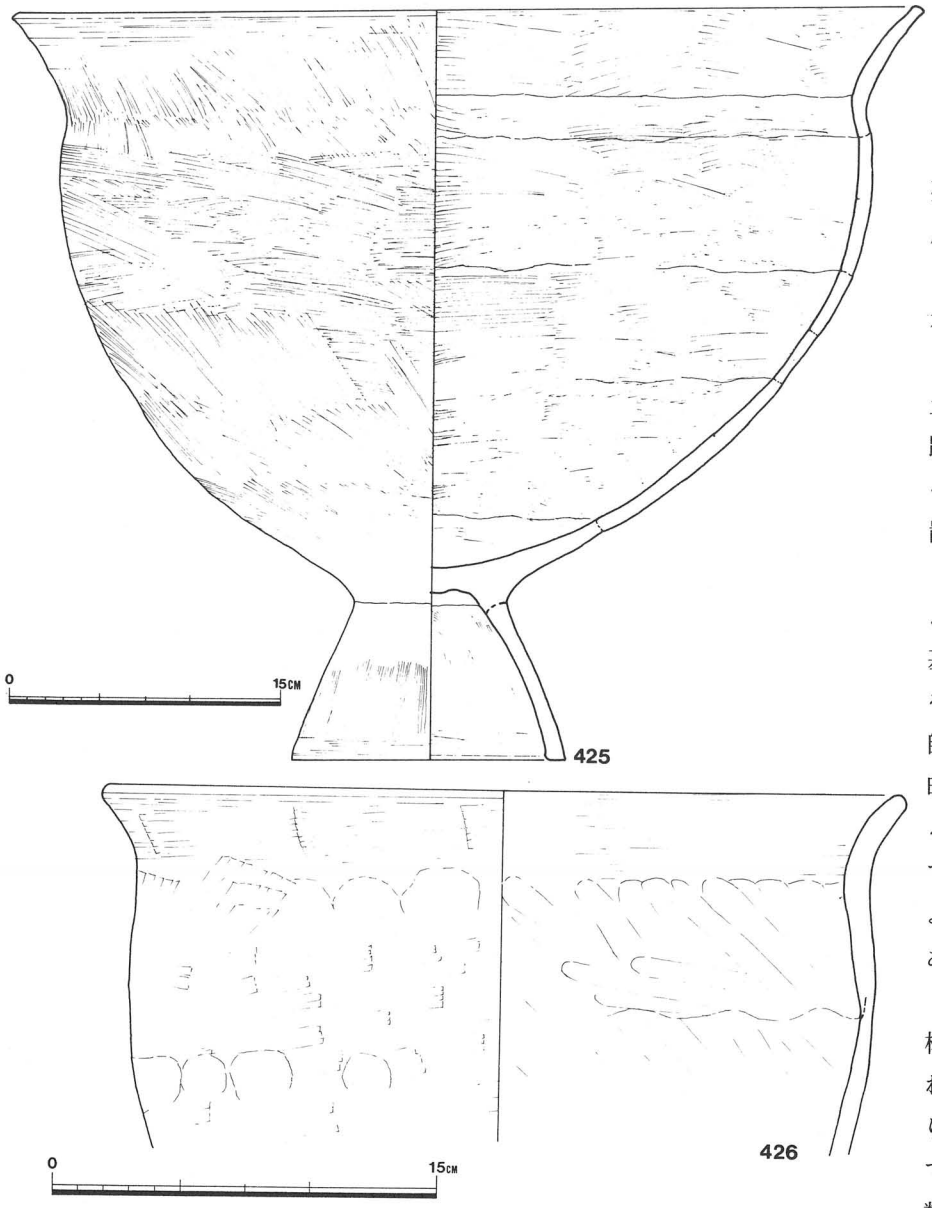
第1節　遺構群の年代

遺構の詳細については，既に『遺構編』として報告済みである（1977浜松市教委）。本書は遺構の伴出土器の報告を主とした物であり，土器の編年的位置から，遺構の時期，時間的な繋がりなど，遺構の推移・性格について明らかになったことなどを述べる。

遺構の遺存度が悪いため，住居跡などの，遺構検出状況から，建替え・改築等を検討して，遺構が営まれた期



第44図　古墳時代出土土器実測図7



第45図　古墳時代出土土器実測図8

間や前後関係を明らかにする事が難しい。また住居跡の壁や床面は僅かしか残されておらず，かまどだけが残っていた物も多いため，床面から検出された土器であっても，住居跡の時期を示すものと断定しにくい物もあった。。したがって出土状態から，極力その住居跡に伴うと考えられる土器を使用し，その編年的を位置を決めた。

表Ｉは先述した各遺構内より出土した土器の編年に基いて，夫々の遺構の時期を想定したものである。土師器は時間的な幅が広く，時期を特定しにくい物もある。したがって細分が進んでいる須恵器の編年基準によって分けたのがこの表である。

須恵器編年のＩ期と，遺構（住居跡）と遺構が営まれた期間が，そのまま重なり合う事がないのは言うまでもない。また理論的には数期に亘って遺構が使われ続けた事を考える事も可能である。住居跡を考えた場合，１ないし２期に亘ることは有っても，非常に長期に亘ることは無いと考えた。例えば，KD―３・４は，須恵器の編年的な位置だけから言えば，５世紀中頃から６世紀中頃まで約100年間続いたことになる。しかし，いずれもかまどを持つ住居跡であり６世紀代のものと考えた。KD―３については，遠考研編年Ⅲ期前葉としたものが，最も新しい須恵器であり住居跡の時期を編年Ⅲ期前葉とした。KD―４については土師器の高坏は，祭祀遺構などの所見から５世紀末代のものと考えられるが，14・15の甕については新しいと思われる。かまどを持つ住居跡が６世紀代になってからと考え，他に新しい要素が無いので，６世紀の前葉，遠考研編年Ⅱ期の住居跡とした。この様に，住居跡が重なり合わない限り，一個の住居跡について一時期をあてて想定した。したがって，こうした遺構の時期の想定が，それぞれの遺構の営まれた時間的幅を，完全にカバーしているとは断定できない。須恵器編年で，ある時期を区切った際の遺構の有り様を，示しているに過ぎない。

この表に基いて遺構群の推移を示した図が第46図である。したがって，この図の様な遺構群の在り方が，実

際の在り方と，必ずしも一致するとは限らない。あくまで，須恵器編年をもとにした，理論的な在り方を例示しているに過ぎない。しかしこうした様子が遺構群の在り方の，一般的な傾向を示し得ていると推測している。

＊4世紀代（第46図A）

4世紀代には，KD—21が後半代の遺構として唯一検出されただけである。KT 201内から検出された179・182がこの時期に近い物として挙げられる。KT 201が人工的な遺構か否か判然としないが，この溝の古い部分は，この時期に既に存在していた可能性がある。いずれにしろこの時期の遺構が検出されていず，遺跡全体の様子は分明できない。伊場遺跡に於ける古墳時代の初現といったところである。

＊5世紀代（第46図B）

5世紀前半代で性格の分る遺構は検出されていない。遺物としては，東部地区のA 12 bKP 1の小穴内から出土した131～133の甕や，西部地区のト3区で出土した400・402の甑と甕などがある。KP 1も遺構と考えれば，性格は不明だがこれが唯一遺構となる。この様に遺構として明らかな物は少ないが，遺跡全体に遺物として散見されるようになる。後述する西部地区の2・3区で検出した住居跡・祭祀遺構・方形周溝墓等の遺構群の中に，この時期に遡ることのできる遺構が，含まれている可能性があると考えているが，具体的に比定できない。第46図のBは，遠考研編年I期に比定される土器を出土した遺構を中心に，5世紀後半代の遺構と推定できる物である。図示した全ての遺構に時期を示す遺物が伴出した物ではない。炉の有無や火災に遭っているか否か，など『遺構編』(1977浜松市教委）で検討された結果も加味して作図した。

西部地区の1区の，土器の集積部分も住居2軒として加えれば，住居跡と想定した遺構が15，祭祀跡と方形周溝墓が2基づつである。住居跡にはKD—34・37のような特異な物も含んでいる。遺構群の主体となるのは，大溝両岸の西部地区である。東部地区には3軒の住居が存在するだけである。ト・ヲ区で検出した古墳時代の掘立柱遺構も遺物を伴っていないので即断できないが，位置的な点を考慮すれば，この時期に伴った遺構と考えられる。

祭祀跡や方形周溝墓の，時期は先述した様に5世紀後半代を想定している。しかし，出土した土器には5世紀前半代に遡ると思える土器も含んでいる。祭祀遺構は2か所にあり，須恵器だけから見ればそれぞれ前後関係が在りそうである。

これらの住居跡が15軒同時に存在したとは考えられないので，住居跡群を二分して7～6軒づつの住居が前後して存在したと仮定したい。（ちなみに，後述する6世紀代の住居跡は，土器編年の区分によって分けると1期7～6軒を単位として存在することが推測される。）こうして分けた2期の住居跡群に，先述した2基の祭祀遺構が伴ったとも推定できる。全ての住居跡に，時期の分る遺物が，伴出したものでは無いので即断できない。第46図Bの遺構群が，前後2時期に別れ，あるいは5世紀前半代にまで遡り得る可能性を指摘したい。先述した様に5世紀前半代の遺物が，東部地区や西部地区に散見されておりこうした推測を裏付ける。

また，第40図の351の須恵器の高坏には，土師器の坩・甕・手捏土器が伴って検出されている。発掘された場所は，東部地区のB 13 d区である。この時期には東部地区内にはKD—1・17・22の住居跡がある。単に立地地点の近さから，結論づけることは出来ないが，これ等の住居跡群の祭祀の場とも考えられる。明確な遺構もなく土器の集積も多くは無いので断定できない。ただ，5世紀代の遺構群には，こうした祭祀遺構や方形周溝墓，KD—34・37のような，特殊な遺構が伴う。ちなみに6世紀代の遺構には，そうしたものは無い。

＊6世紀前葉（第46図C）

遠考研編年II期に比定される住居跡群である。KD—16・18は，出土土器の編年的な位置が，同じであり同時に存在することはあり得ないので，同時期内の建替えと考えて，1軒と数えた（注8）。KD—4・5についても，KD—4は5世紀代の土器を出土するが，甕に新しい要素があり，かまどを持つので，この時期に含めた（注9）。またKD—5と重なり合うのでKD—16・18と同様に1軒と数えた。KD—32・33も同じである。KD—10は，KD—11，13等と同様に，炉からかまどへと変化する時期の住居跡である。KD—10は，炉がか

まどのように北壁から突出しないので，より古いと考え5世紀代の遺構群に含めた。KD—6はかまどを持っている。しかしKD—1で，地床炉に3本支脚が伴った鉢形土器（2）と同形態の土器（18）が検出されている。この時期の遺構群は，東部地区で5軒（KD—4・5，6，16・18，26）西部地区で2軒（KD—11，32・33）である。前代で比較すると，東部地区に集中している。東部地区の住居跡は，既にかまどを持っているが，西部地区では北壁に作られた炉である。

また，この時期にA15i区で井戸遺構（KG3）が現れている。住居跡群が大溝周辺の水際から，砂丘が高位となる東部地区に移動したことによる，「水」の確保と考えたいが，さしたる根拠は無い。

＊6世紀中葉（第46図D）

遠考研編年Ⅲ期前葉の時期に比定した住居跡である。KD—2・9は同時期内の，建替と考えた。KD—13，14ではかまどが検出できなかったが，他のKD—2・9，3，12，13，27，31はいずれもかまどを，北壁の中央部に持っている。7軒一群の住居跡のまとまりである。東部地区への移動が完了し，全ての住居跡が東部地区へ集中している。西部地区には，この時期に伴ったと考えられる遺構は，確認されたものとしては，皆無である。ただし，大溝内の井戸（KG3）はこの時期にも引続き存在している。

＊6世紀後葉（第46図E）

遠考研編年Ⅲ期中葉の時期と考えた住居跡群である。KD—13とKD—19はいずれも断面観察で検出した住居跡である。発掘当初の所見では，重なり合う住居跡でKD—19が古いと考えている。出土土器から時期差が無いので，同時期内での建替えか，全体に亘って床面が確認された物ではないので，軒を接して並んでいた可能性もある。6軒あるいは7軒の住居跡群である。これらの住居跡の内KD—13，35は土器や住居跡の切り合いから，新しい要素もあるので，遠考研編年Ⅲ期後葉の時期まで及ぶ可能性があるが，この時期に含めた。

いったん，前代に東部地区に集中した住居跡ではあるが，再び西方にKD—35が立地する。井戸（KG3）がこの時期も存在する。あるいは，この井戸との関係でKD—35のような分散が見られるのかも知れない。

＊6世紀末から7世紀前半（第46図F）

遠考研編年Ⅲ期後葉から同Ⅳ期前半に比定される時期である。この時期になると住居跡は無くなり，小溝群と井戸遺構（KG1・2）が，散見されるだけである。Ⅲ期後葉にあたる時期は，特に少なくなり小溝群のKT301・330から出土した須恵器の坏身などである。しかし，これらの小溝群も主体となる時期はⅣ期前半である。KG1・2も同様にⅣ期前半であり，遠考研編年Ⅲ期後葉の時期に比定される遺構は，無いと言って良い。

遺構の面からだけ言えば，Ⅲ期後葉の時期は，空白期でありⅣ期前半の時期に井戸と小溝群が現れる。しかし，発掘時の所見によれば，大溝内のⅦ層では，Ⅳ期前半の時期の土器が多量に検出されている。さらに，Ⅶ層の下部では，Ⅲ期後葉の時期の土器が検出されている。土器の性格から，これらの土器群の供給源となるべき遺構が，大溝の周辺部に在ったものと推定されるが不明である。

小溝群は，遺構の上半部の大半を，失っている。このように本来あった遺構が，地形的に高位な場所に在ったため，後世の耕作や攪乱で消滅してしまったと考えている。大溝の周囲で柱穴状の小穴が多く検出されている。そのうちで方形のプランを以て並んだ小穴を，律令時代の掘立柱遺構として抽出している。残された多くの小穴の内に，この時期に伴うものを多く含んでいる可能性がある。遺物を伴う小穴が少ないので時期を確定できない。イ7区の小穴で検出された353の須恵器高坏などは，こうした遺構の一部と考えて良い。

したがって，6世紀末から7世紀前半代の遺跡の様相は，今一つはっきりしない。住居群を伴った集落を想定したいが，根拠は無い。伊場遺跡の律令時代へと続く時期であり，政治的な集団・集落の性格を含めて考えねばならないのかも知れない。

第2節　遺構群の分別

各遺構の伴出土器及び古墳時代包含層の出土土器などの，編年的な時期をもとに，伊場遺跡の流れを見る。まず，4世紀後半代（提町式）に東部地区に，KD—21とした住居跡が検出される。この時期の遺物は，僅かではあるが，東部地区に散見されており，生活の痕跡を残している。

5世紀前半代（和泉Ⅰ式）では，西部地区にまで遺物が検出される。遺跡内でこの時期の遺物が，目立つ様になる。しかし，この時期の遺構は発見されていない。

5世紀後半代（遠考研編年Ⅰ期後半）に東部地区はもとより西部地区にも各種の遺構群が広がる。祭祀遺構・掘立柱遺構など，各種の遺構が作られ，大溝との関係が示唆される西部地区が，主体とさえなっている。

6世紀代（遠考研編年Ⅱ期・Ⅲ期前葉・同中葉）になると，再び東部地区に遺構が集中し，特殊遺構などが無くなり住居跡だけになる。6世紀末に相当する時期の遺構は無くやや時期的な空白がある。

7世紀前半代（遠考研編年Ⅳ期）では，大溝内に多量の土器を出土し，再び西部地区に生活の広がりを感じさせる。しかし，遺構としては小溝群が検出されただけである。こうして古墳時代は終り，律令時代へと続く。

・4世紀～5世紀前半代について

4世紀～5世紀前半代の伊場遺跡周辺は，海水準が低下し始め最も低位にいたる時であり，地形的には不安定な時期にあたる。古墳時代中期の住居跡の基層となった，B層及びその下位のC層の堆積に，大きく係わった時期である。発掘時の大溝内の土層観察では，遠考研編年Ⅰ期の須恵器が伴出するⅧ層下位や，さらに下位のⅨ・Ⅹ層が確認されている。こうした大溝下部の土層と伴出土器，KT 201の伴出土器，B層・C層との関係，等の検討を経て，伊場遺跡の諸相が明らかにされる。したがって，この時期についての詳細は，後日の大溝内出土土器の報告書に譲りたい。

・5世紀～6世紀代の遺構群について

ここでは，住居跡を中心に遺構群を，かなり乱暴な方法でグループ分けしてみた。何度も言う様に，先に示した住居跡群の様相が，実態をどれだけ反映し得たものか，完全に検証する術はない。しかし，6世紀の前葉・中葉・後葉（遠考研編年Ⅱ期・同Ⅲ期前葉・同Ⅲ期中葉）とした時期に，それぞれ7～6軒の住居跡が配分された。そして，やや長い時期を考えた5世紀の後半代には，そのほぼ倍の15軒が配分された。この5世紀後半代とした時期が，先述した様に，前後2期に二分することが可能ならば，各期にほぼ7～6軒づつの住居跡が配分される結果となる。かなり稀薄な根拠であったが，こうした分別の結果が，須恵器編年のⅠ期に7～6軒と言うまとまった結果になったことに，注目したい。単に出土遺物の一要素である土器の時期分類の結果が，こうした，あるまとまりを示した事は，それなりの説得力を持ち得ると思われる。住居跡の数だけで，集落全体の景観は復元できないが，古墳時代の集落の在り方の一端を示していると考えたい。

5世紀代の遺構は大溝に沿って散在して立地している。また，祭祀遺構，方形周溝墓，掘立柱遺構，あるいはKD—34・37のような特殊な遺構を伴っている。一方，6世紀代の遺構群としては，井戸を除けば，文字どおり住居跡だけである。こうした，状況が当時のものであったなら，単に集住している集落を，この遺跡から読み取れるだけである。ここに現れた両者の差に注目したい。群集墳の発生を考える，中期から後期への古墳時代社会の変節の時期を迎えた差が，こうした集落内からの，特殊遺構の減少と言う結果の現れとして伊場遺跡では表出したと推測しているが，いかがであろうか。

発掘によって得られた資料で見るかぎり，遠考研編年Ⅰ期後半から同編年Ⅲ期中葉までの間に，少なくとも住居跡の数は，増加していない事になる。住居跡の構造が分明でない点があるが，各期を通じて住居そのものの規模に，大差は無いと考えられる。したがって，住居跡に伴う人口もほぼ同じと考えて良い。須恵器編年のⅠ期を何年間と考えるか問題は残るが，ただ単に住居跡の数的変化から見れば100年以上の間，停滞していた集落とい

える。律令時代前夜として，古墳時代社会のエポックであったと思える，７世紀前半代の遺構が伊場遺跡では検出できず，これらの集落と比較出来ないのが惜しまれる。

６世紀代の集落は，先述した祭祀遺構や方形周溝墓を伴った５世紀代の集落や，さらに発展したと推定される７世紀前半代の集落とは異なり，変化の少ない安定した（停滞した）集落を作っていたと推測される。資料的制約の多い伊場遺跡の状態を，どこまで普遍化する事が可能か疑問だが，古墳時代中期後半から後期にかけての集落景観の一例となる。

第３節　遺構の推移と海面変動

先述した遺構（住居跡）の変遷と推移が，どのような要因によるものか断定できるだけの資料は無い。ただ，地形的には，海岸平野に立地する伊場遺跡のような低位に在る遺跡では，海水準の変動の影響を受けやすいと推定される。第２図に示した海面変動推定曲線を見ながら，その関係について述べて見たい。

海面変動推定曲線の古墳時代にあたる部分を見ると，水位が下がって谷間を作っている事がわかる。最も下がった時期が，中期の後半であり５世紀の後半代である。６世紀にかけて水位は上昇していく傾向にある。海水位の上昇は，陸地の相対的な低地化（湿地化）をもたらす事が推定される。

伊場遺跡のの古墳時代の住居跡群について見ると，先に述べたように５世紀代には西部地区に立地する。しかし，６世紀代には，砂丘面が高位になる東部地区へと移動している事が分る。このように，海面水位の変動曲線と住居跡の立地地点の上昇化の傾向が，一致している事が注目される。西部地区の住居跡群の床面レベルは，標高50～60㎝である。一方，東部地区の住居跡の床面レベルは，KD―４が標高156㎝で，KD―７が標高126㎝であり西部地区に比して１ｍ近く高位である。

海水面が低位となった５世紀代後半に，住居跡が西部地区に集中した事は，海抜50～60㎝の高さの位置が，居住可能だった事を示している。海水面が上昇した６世紀代にあっては，海抜が１ｍ以上ある砂丘面上の高い位置が，居住空間として求められた結果であり，海水面の変動と一致する。

古墳時代の包含層であるＢ層中で，水田面と考えられる部分が，花粉分析によって確認されている。確認地点はKT 201の南東側のヲ区の２か所である（第46図D)。遺構として確認されていないので，住居跡群など，他の遺構との立地の面から，直接的な関係を示し得ない。しかし、水田面と確認した部分は海抜約50㎝の高さの位置である。先に見たように，５世紀代の住居跡群の床面レベルは，標高50～60㎝であり，花粉分析による水田面との差は，ほとんど無いと言ってよい。

KT 201や大溝によって画されているとは言え，住居跡と水田が，近接している部分もある。こうした状況は，西部地区を居住地部分と想定しにくい。伊場遺跡の周辺は地形的に，起状の少ない平坦地であり上位面からの水の導入が考えにくい。したがって，揚水による水田経営を考えれば別であるが，KT 201や大溝からの水利を考えれば，なおさらのこと居住部分としては不適切である。

したがって，これらの水田が使用された時期は，居住地をより高位の東部地区に求め，海水面も上昇した６世紀代になってからと考えられる。この時期には，海抜50㎝程のヲ区周辺で，水田経営がなされた。居住地は砂丘面が露頭する海抜120～150㎝程の東部地区であったと推察される。この時期には，西部地区は相対的に低地化し，居住空間としては不適な土地となった。西部地区に立地する住居跡が，ほぼ５世紀代に限られるのは，こうした結果の証左と考えられる。

７世紀代になって，開発が及んだと考えられる西部地区西方（小溝群が検出された周辺）ついて見る。東部地区で露頭した砂丘は，遺跡内では西に向けて低位となり，西部地区西方でやや高位となる。やがてさらに西方の城山遺跡の周辺で，再び露頭する。大溝は，そうした砂丘の鞍部にあたる部分を貫流している。『遺構編』でも指摘しているが，現地表には露頭しないが，砂丘の微高地とも言える高まりが存在している。基盤層（砂丘面）

表Ⅰ　古墳時代遺構一覧表

遺構	出土位置	規模(m)		炉	かまど	4C	Ⅰ期		Ⅱ期	Ⅲ期			Ⅳ期		備考
		東西	南北			後半	前半	後半		前葉	中葉	後葉	前半	後半	
KD-21	A12e	6.3	6.1	—	—	……									
1	A11g	4.6		炉	—			……							
＊28	B12a	(5.8)	(5.4)	—	—			…							
＊17	B12a	6.1	5.8	(炉)	—				…						
10	ト 4	5.1	6.0	地床炉	—			…							貯蔵
22	B11h	6.7	6.5	(炉)	—			?…	…						
23	ロ 7	5.6	5.7	地床炉	—			…							火災
24	チ 3	4.2	3.9	—	—			?…							
25	ハ 9	5.4	5.3	—	—			…							火災・貯蔵
29	ハ 8	5.2	5.1	—	—			…?							貯蔵
30	チ 2	4.3	3.8	地床炉	—			…?							火災
36	ワ 8	3.5	4.1	炉	—		…	…							
37	ワ 8	3.1	2.9	—	—			…?							
38	ハ 9	5.5	(5.5)	—	—		…	…							火災
34	A14f	3.8	3.1	—											
?	A14g	?	?	?	?			…							
?	A14h 15b	?	?	?	?			…							
＊ 4	A11i	(4.8)	—	—	有		…	…?…	…						
＊ 5	A11h	—	—	—	有				…?						
6	A11e	—	—	—	有			…	…						
16・18	A12c	—	—	—	—				…						
26	B11e	(5.2)	5.4	—	有				…?						
＊33	A15e	—	(5.1)	地床炉	—			…	…						
＊32	A15d	—	5.6	—	—				…						
11	チ 6	5.1	4.8	地床炉	—			…	…						
＊ 2	A11d	—	—	—	有					…					
＊ 9	A11d	—	—	—	有					…?					
3	A11a	5.9	—	—	有		?…		…	…					
12	B12d	(5.0)	4.4	—	有				…	…					
14	A12f	—	—	—	(?)					…					
27	B11d	—	—	—	有					…					
31	B11g	(5.8)	—	—	有					…					
7	A11e	4.3	4.3	—	—						…				
8	A11e	7.0	6.3		有						…				
＊13	A12b	—	—	—	—						…				
＊19	A12b	—	—	—	(?)					?…	…				
15	A12i	—	(3.3)	—	(有)						…				
20	A12b	—	—	—	—						…				
35	A14i	(4.8)	(4.8)	—	有						…				貯蔵
KP 1	A12b	—	—	—	—		…								
KI 1	ト5・8	—	—	—	—		…	……							
KI 2	リ 5	—	—	—	—			……							
KT201	イヲラ区	—	—	—	—	…	…	…							
小溝群	リヌツネ区	—	—	—	—							…	……		
KG 1	ハ 7	—	—	—	—								…		
KG 2	ハ 8	—	—	—	—								…		
KG 3	A15i	—	—	—	—	?…			……	……	……	…	…?		
KC 1	ト2・5	—	—	—	—		?…	…?							
KC 2	ト 2	—	—	—	—		?…	…?							

※は切り合う住居跡

の高まりに準じて，上位のＣ層やＢ層が高位に，堆積したと推定される。西部地区３区の小溝群は，地形的には，こうした部分にあたっている。１区・２区でもこうした部分に，柱穴状の遺構が多く検出されている。

７世紀代に至って，さらに高位となった海水準に対応し，こうした高位な場所に遺構が作られた（生活した）。この結果，後世（現在）の生活面との差が少なく，現在の水田耕作などの攪乱によって古墳時代の生活面が消失してしまったものと考えている。したがって，西部地区西方の小溝群の様に，遺構の底面が深かった物が，検出されたに過ぎない。７世紀代前半は，城山遺跡を中心に展開した律令時代へと続く時期である。立地的にも城山遺跡に近い西部地区西方に生活の場が移動したと考えられる。西部地区西方は，地形的にも城山遺跡へと砂丘面（基盤層）が高まりを増していく部分にも，あたっているわけである。より，海水面が高水位にあった律令時代にあっては，伊場の地より城山周辺の方が，地形的に安定した広がりを確保できた結果，郡衙とも推定される遺構が作られたと考えられる。

５世紀後半代～７世紀前半にかけて，伊場遺跡の遺構の推移・変遷を，海水位の変動と合せて理解しようとした。各時期の遺構と立地の差は，こうした自然的な海水面の変動によって，ほぼ整合的に説明し得たと考えている。伊場遺跡のような低地の遺跡が，こうした自然災害の条件下で生活を続けざるを得なかった一断面は示しえたとものと思う。

しかし，自然条件によってのみ人々の生活が規定され続けたもので無いことは，言うまでもない。特に律令時代を控えた７世紀前半代にあっては，城山遺跡を中心に，政治的・社会的な要因がより強い形で作用したことが推定できる。伊場西部地区・梶子遺跡（国鉄工場内遺跡Ⅵ次調査）等周辺の遺跡群との関係の中で考えねばならないものであろう。

第４節　住居跡伴出土器について

いずれの住居跡も残存状態が悪く，全体を残していない。したがって，住居跡に伴った土器についても同様に本来あった組合わせを残してはいない。むしろ断片的に残っていれば，良いほうであった。こうした条件の中で生活什器としての土器の，使用状況や組合せを検討することは難しい。資料的には問題が多いが，残された僅かな部分から全体を見たい。

住居跡内に残された遺構（施設）と土器の関係について見る。KD—１で出土した鉢（１）は，炉と共に検出された３本の土製支脚を，五徳の様に使って使用したと想定してよい。このことは，第４図の出土状態面からも容易に推測される。また，KD—３やKD—７の様に，１本の土製支脚しな持たないかまどでは，長胴の甕の使用を容易にする。KD—15の甕の出土状態（写真図版第６-A）は，粘土の袖を持つかまどでの，甕の使われ方を示している。遺構と遺物（土器）の相関関係を示すわずかな例である。

KD—12の土器の出土状態を見れば，かまど・土製支脚・甕・甑の関係が，使用状況を示している様である。37・40の甕と41の甑の組合せが想定される。KD—４でも，かまどの周辺に甕・甑・壺・鉢などが一括して散乱している。いずれも一括資料として，土器の使用状況を示している例と言える。かまどを持つ住居跡は，かまど周辺から土器が検出される事が多い。KD—12では，かまどの横（住居跡の北東隅）に甕・甑などの什器が集中している。粘土で両袖を作ったかまどを持たない住居跡にあっては，南壁中央寄りに在る小穴（貯蔵穴）内や，その周辺に，土器の多くが検出されている。KD—11では，甕（32）・甑（34・35）がザルに入れられ，こうした貯蔵穴に置かれていた。この小穴からは，須恵器の高坏（33）も検出されている。これらの土器が，一括して貯蔵穴に保管されていた状況を，示すものであるならば，土師器と須恵器の編年的な位置関係を示す一例になる。KD—25でも南壁寄りの小穴の周辺で甕や甑が検出されている。かまどの定着によって，什器である甕や甑が住居跡の北東部分に集中するのは当然である。また，床面の有効利用の面からも，必然的であったように推測される。また，炉からかまどへの変化が，長胴化した甕の使用へと繋がったことが，わずか一例ではある

が例証できそうである。

検出された住居跡は遺構の破損が進んだものが多い。住居跡1軒あたり，どれ程の土器が，使用されていたか示す例は無い。出土土器が数的に多い住居跡について見る。KD—4は土師器の甕7個体？・甑1個体・高坏1個体・中型の鉢1個体・須恵器の坏身1個体。KD—14は土師器の甕5個体・中型の鉢2個体・須恵器の坏身7個体（1個体は土師質）・坩1個体などが，出土例の多い住居跡である。他の住居跡では，いずれも数個体しか出土しないのが一般的である。

什器の中でも，使用頻度の高いと思われる甕は，上記の他にKD—16・18で4個体，KD—17で4個体などがめだつ。破片まで含めれば，ほとんどの住居跡で検出されている。甑はKD—11で2個体，KD—12，25，27，32で，それぞれ1個体などである。高坏を見ると，須恵器の高坏がKD—10，11，23（2個体，蓋1個体），土師器の高坏はKD—2，6，10，19，23，26，32，38，など多くの住居跡で検出されている。しかし，1軒あたりの出土数は，1個体がほとんどであり全体として少ない。坏類は上述したKD—14で坏身が7個体，KD—16・18で須恵器の坏蓋が4個体，KD—17で須恵器の坏身が3個体などである。土師器の坏も伴うものと思えるが，KD—10の3個体が最も多い。土師器の坏は破損し易く細片が多いため実数はわからない。38軒の住居跡には時期幅があるので，いちがいには言えないが，検出した住居跡全体について見れば，甕4～5個体，甑1個体，鉢1～2個体，高坏1個体，須恵器蓋坏5～7セット，土師器坏3～4個体？と言った所が最大公約数的な数である。もとより資料的な根拠は示し得ないが，伊場集落の住居跡1軒あたりの，日常什器としての土器は，この程度のものであろうか。銘々器としての性格の強い坏が5～7個体と言う点や，使用頻度と消耗率が高いと思われる甕が4～5個体と多い点などは，それなりの説得力が有るように思える。

おわりに

本書では，既刊の報告書で一部未整理であった古墳時代の遺構から伴出した土器から，古墳時代の遺構を再構成したものである。したがって，土器が検出されなかった遺構については，既刊の『遺構編』の記述を，参考にされたい。また，既に報告済みの内容と異なった点もあるが，現在では本書のように考えている。既刊のものを修正する結果となった。

住居跡を中心とした遺構の，グループ分けについては，本文中でも述べたが机上の分類である。いずれの遺構も時期や性格を確定できる伴出遺物を，必ずしも伴ってはいない。したがって，資料的な粗密から同程度の，確さに基づいた検討に耐えない。一定程度の変遷の傾向を知ることを目的とした分別である。その結果が，6～7軒のグループに，分け得たのである。また，住居跡，小穴，祭祀遺構，溝，小溝群，井戸，方形周溝墓，水田などの遺構相互の関係についても，単に伴出土器の編年的な同時性によって結び付を考えた。遺構どうしの，有機的な関係を，直接的に示し得る資料によったものではない。当時の生活面が，消失している遺構群であるので，こうした単なる土器の編年的同時性によって分けたものである。

大溝に沿う様にして立地する，5世紀後半代～6世紀初頭の住居跡については，第46図Bのように15軒を想定した。しかし，第13次調査（1981浜松市教委）によってKD—25・29・30・38の住居跡群の，さらに西側で3軒の住居跡が発見されている。距離的にはやや離れるが，KD—25やKD—38の様に火災に遭っている。出土した土器から6世紀の初頭と考えられている。さらに周辺には，未発掘部分もあり他にも住居跡の存在が推測されている。時期的には，本書で第46図Bとしたグループに入れるべき住居跡である。本文中では，このことに触れなかった。将来的には，5世紀後半代～6世紀初頭とした15軒の住居跡に，これらの住居跡を加えた，西部地区全体の遺構群が，さらに細分される可能性がある。

注

1・浜松市教育委員会・遠江考古学研究会『伊場遺跡予備調査の概要』(1968年)

・浜松市教育委員会編　『伊場遺跡第3次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会(1971年 2月10日)

・伊場遺跡調査団編　『伊場』—第4次調査月報1—浜松市遺跡調査会　(1971年 8月10日)

・伊場遺跡調査団編　『伊場』—第4次調査月報2—浜松市遺跡調査会　(1971年 9月15日)

・伊場遺跡調査団編　『伊場』—第4次調査月報3—浜松市遺跡調査会　(1971年10月15日)

・伊場遺跡調査団編　『伊場』—第4次調査月報4—浜松市遺跡調査会　(1971年11月 5日)

・伊場遺跡調査団編　『伊場』—第4次調査月報5—浜松市遺跡調査会　(1971年12月 5日)

・伊場遺跡調査団編　『伊場』—第4次調査月報6—浜松市遺跡調査会　(1972年 1月 5日)

・伊場遺跡調査団編　『伊場遺跡出土文字集成(概報)浜松市遺跡調査会(1971年12月25日)

・伊場遺跡調査団編　『伊場遺跡第4次発掘調査の成果(要旨)』浜松市遺跡調査会(1972年2月29日)

・浜松市教育委員会編　『伊場遺跡第5次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会(1973年2月10日)

・浜松市教育委員会編　『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会(1975年3月25日)

・浜松市立郷土博物館編　『国鉄東海道線内埋蔵文化財発掘調査報告書』—伊場遺跡第12次の1期調査概報—浜松市教育委員会(1979年3月)

・浜松市教育委員会編　『伊場遺跡第8～13次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会(1981年3月31日)

伊場遺跡発掘調査報告書

第1冊　浜松市立郷土博物館編『伊場木簡』　浜松市教育委員会(1976年 3月25日)

第2冊　浜松市立郷土博物館編『伊場遺跡遺構編』　浜松市教育委員会(1977年 2月28日)

第3冊　浜松市立郷土博物館編『伊場遺跡遺物編1』　浜松市教育委員会(1978年 3月31日)

第4冊　浜松市立博物館編　『伊場遺跡遺物編2』　浜松市教育委員会(1980年 3月31日)

第5冊　浜松市立博物館編　『伊場遺跡遺物編3』　浜松市教育委員会(1982年12月25日)

2…須恵器の編年については，基本的に遠江考古学研究会編年に従った(1966遠考研・1968山村宏他)。しかしこの編年案は，発表されて20年近く経っており，その後の，資料の増加などから修正の必要性が指摘されている(1979静岡県考古学会)。しかし，古い部分については，編年的に大きな修正ではないと思える。本報告書は，Ⅰ期～Ⅲ期までの古い段階の須恵器が対象となったので，遠考研編年案そのままに近い形で使用した。伊場遺跡では，Ⅰ期の古い段階の須恵器が検出され，川江試案(1979静岡県考古学会)では，Ⅰ期の前半と後半に二分されていたので，それにしたがった。

・須恵器の編年は，(1978中村浩)や(1981田辺昭三)などによって成果が挙げられている。本書では，田辺編年の型式名を併記した。

・各編年と年代の比定は，厳密には出来ないので，おおまかに下記の様に対応させ表記した。

遠考研編年Ⅰ期前半—田辺TK216～TK208　＝5世紀中～末にかけて

遠考編年Ⅰ期後半—田辺TK23～TK47　＝5世紀末～6世紀初頭

遠考研編年Ⅱ期—田辺MT15　＝6世紀前葉

遠考研編年Ⅲ期前葉—田辺TK10　＝6世紀中葉

遠考研編年Ⅲ期中葉　＝6世紀後葉

遠考研編年Ⅲ期後葉　＝6世紀末

遠考研編年Ⅳ期前半　＝6世紀末～7世紀前葉

3…和泉式については，当地方に型式を分類し得る良好な資料があっての対比ではない。従来，和泉式をⅠ・Ⅱ式に二分していたのでそれに従った。Ⅰ式を当地方では須恵器を伴わない見性寺遺跡の時期(1974磐田市教委)とし，Ⅱ式を須恵器が伴った宮之腰Ⅰ式(1970焼津市教委)の時期と考えている。

4…第17図の84は布留式土器の細片で図上復元した。最近の研究では，形式の細分化が進んでいるようであるが，筆者は今だそれを知らない。布留式土器とのみ記した。

5…ヲ区で花粉分析によって，水田が確認されている。したがって『伊場遺跡遺構編』では，農業用の水路の可能性を挙げている。

6…小溝群が矩形に交わるように検出されるので，『伊場遺跡遺構編』では水田遺構にともなった小水路の可能性を考えている。

7…西部地区のうち奈良時代の枝溝・弥生時代の環濠・大溝に囲まれた部分を1区とした。2区は大溝より東側で奈良時代の枝溝より北西の部分。3区は大溝以西とした。『伊場遺跡遺構編』23頁「発掘区の略称」参照

8…KD 16・18は，本来1軒の住居跡であった可能性が強い。

9…KD 4出土の須恵器坏身（6）はTK 208と考えているが，細片であるため口径や器形などに，疑問が無いわけではない。

参考文献

1958　平安学園考古学クラブ『船橋Ⅰ』『船橋Ⅱ』

1959　向坂鋼二　『考古学手帳　8』「遠江における古式土師器」

1966　遠江考古学研究会　『大沢・川尻古窯調査報告』

1968　山村宏他　『古代学研究』第50号「遠江の須恵器生産」

1966　平安学園考古学クラブ『陶邑古窯祉群Ⅰ』

1969　浜松市　『浜松市都市計画図　1/2500』

1970　焼津市教育委員会　『宮之腰遺跡』

1971　杉原荘介・大塚初重　『土師器土器集成』

1971　浜松市教育委員会　『伊場遺跡第三次発掘調査概報』

1972　浜松市教育委員会　『伊場』―第4次発掘調査月報合本―

1974　安達厚三・木下正史　『考古学雑誌　第六十巻第二号』「飛鳥地域出土の古式土師器」

1974　磐田市教育委員会　『見性寺貝塚の研究』

1976　静岡県考古学会　『静岡県考古学会シンポジウム2』「須恵器―古代陶質土器の編年」

1977　浜松市教育委員会　『伊場遺跡発掘調査報告第2冊　伊場遺跡遺構編』

1978　中村浩　『陶邑Ⅲ』「和泉陶古邑窯時期編年」大阪府文化財調査報告三十輯　大阪府教育委員会

1981　田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店

1981　中村浩　『和泉陶邑窯の研究』「第Ⅱ部　編年的考察」柏書房

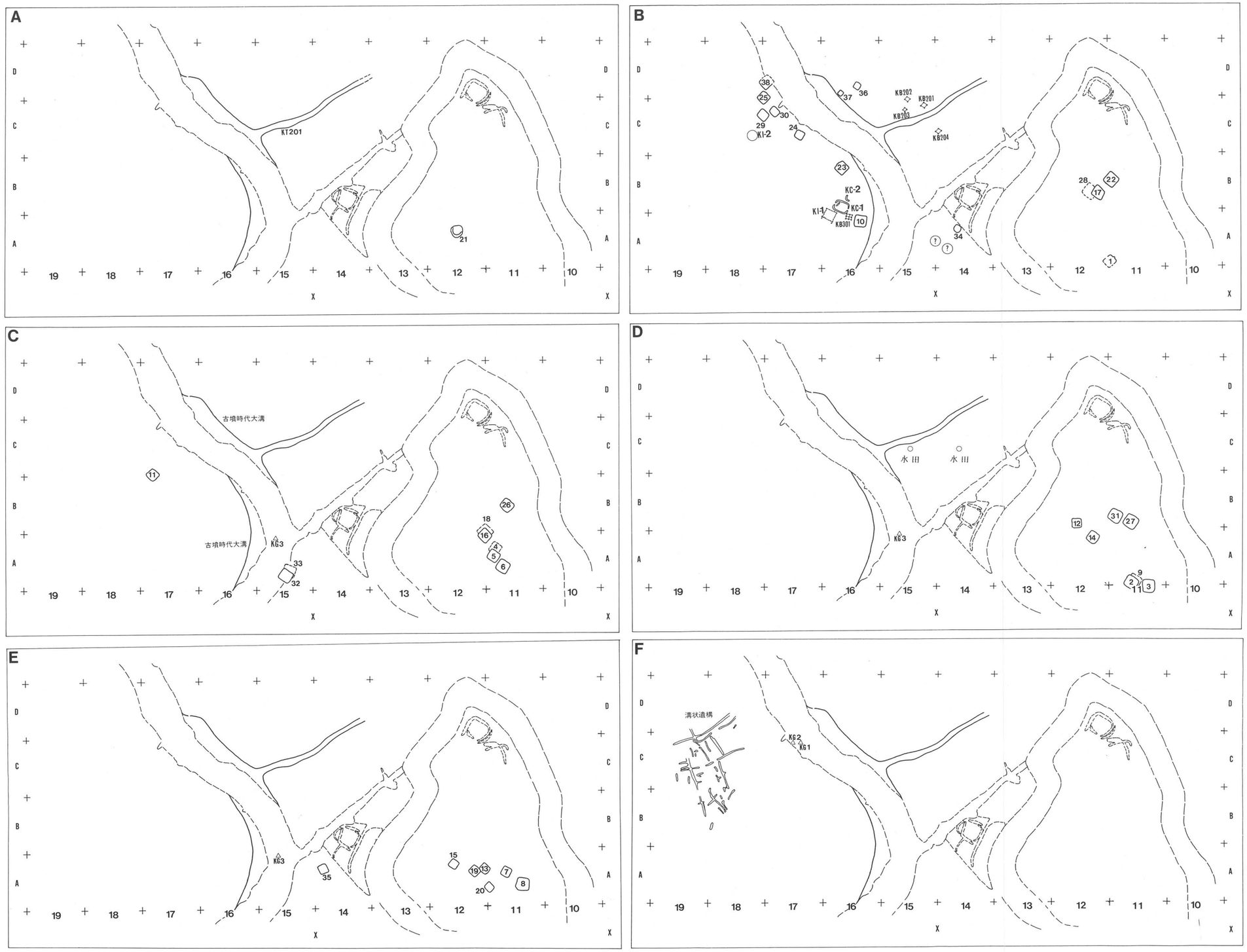
1982　浜松市教育委員会　『伊場遺跡発掘調査報告第5冊　伊場遺跡遺物編3』（本文編）

1983 a浜松市教育委員会　『国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次発掘調査概報』

1983 b浜松市教育委員会　『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』

1983　浅羽町教育委員会　『青木・馬場第1，第2遺跡』

1985　袋井市教育委員会　『坂尻遺跡』「序文・古墳時代編」



第46図　古墳時代遺構変遷図

A…4世紀代　　B…5世紀代

C…6世紀前葉（遠考研編年Ⅱ期）　　D…6世紀中葉（遠考研編年Ⅲ期前葉）

E…6世紀後葉（遠考研編年Ⅲ期中葉）　　F…6世紀末～7世紀前半（遠考研編年Ⅵ期前半）

古墳時代土器観察表

例　　言

番号　…各遺構から出土した土器は 1～215，古墳時代包含層から出土した土器は 301～426 の通連番号とした。したがって 216～300 は欠番である。本文及び図版中の番号は，全てこの通連番号を用いた。「挿図」「写真図版」とした番号は，各通連番号の土器が掲載されている挿図・写真図版の番号を示す。

登録番号…発掘調査時の遺物台帳にしたがった。復元の際，他の登録番号の土器と接合したものは，主体となるべき土器の番号に統一した。

出土位置…発掘区名，出土層位の順に表記し，遺構に伴出した土器については，最下段に遺構名を略号により表記した。

器種　…須恵器については，坏蓋・坏身・高坏・碗・壺，土師器については，坏・高坏・椀・鉢・甕・壺と表記した。各器種について形態（フォーム）による分類はしなかった。

法量　…単位はcmで示した。最大径の表記は，最大径が口径以外の部分に在る土器について表記した。したがって口径が最大径となる物は，口径として記した。底径は甕・鉢などにあっては，平底に作られた土器だけについて記し，高坏や脚付き甕などは脚裾の径を記した。

胎土・焼成・色調…土師器と須恵器について，一括表記したので主観的な記述となってしまったが，一応下記の基準に準拠した。

- 胎土については，精緻・精良→良好・良・普通→粗の順に精選されたものとした。砂・小礫粒などを含むものについては，その様に記した。
- 焼成については，硬質（須恵器）・良好・良→普通→軟質（須恵器）・不良の順とした。
- 色調は，土師器については赤褐色（オレンジ系），黄褐色（クリーム系），暗（灰）褐色（黒味の多い茶色系）にほぼ3分した。必要に応じ，それぞれに淡・暗・灰を付して各色系の中での，濃淡を示した。肌色はオレンジ系とクリーム系の中間とした。須恵器については，白灰色・灰色・青灰色・暗灰色の順に黒味（青味）を増すように表記した。

古墳時代土器観察表

番号 挿図 写真図版	器種	登録番号	出土位置	法量cm 口径	最大径	器高	底径	技法・調整の特徴	胎土	焼成	色調
古墳時代住居跡出土土器											
1 —3 —16	須恵器 坏身	A11—197	A11gⅢ上 KD—1	—	10.5	13.0	5.0	立上がりが直立ぎみになり、体部との比は約1/2となる。端部の作りは比較的シャープ。体部の外面は1/2が篦削りとなり内外ともに横ナデ仕上げとなっている。底部の内側に叩き目（内当て）の痕跡が薄く残る。全体の3/4が残る。	精	硬	灰	緻	質	色
2 —3 —16	土師器 鉢	3—258	A11g KD—1	—	33.3	—	27.3	6.9	全体を叩いて整形している。口縁部は内外ともに比較的丁寧な横ナデとなる。体部は粗い刷毛目仕上げ内面は斜め下方のナデ仕上げ。下半分や頸部内面には、凹凸や指頭痕が多く残る。胎土中に石粒を含み粗い粘土を使用し作りは粗い。体部から底部にかけて炭化物が付着する。	粗	良	黄	い	好	褐	色
3 —3 —16	須恵器 坏蓋	3—247—1	A11e KD—2	—	15.2	—	4.0	—	全体の1/3を残すだけ。天井部の1/2が篦削り他は横ナデ。肩部に沈線が入り、やや内湾する口縁部へと続き口唇部を内傾させる。篦削りは粗く切離しの跡を残す。全体的に作りはあまい。	や	普	灰	や	通	粗	色
4 —3	須恵器 坏身	3—915	A11 KD—3	—	—	12.5	—	—	1/8程度残るだけ。底部と口縁部を欠くため口径、器高は不明。篦削りや端部の作りは比較的丁寧、受部上面に自然釉が付着する。	や	良	暗	や	好	粗	灰	色
5 —3 —16	土師器 甕	3—259 260 261	A11a KD—3	—	17.0	21.9	—	—	胴部の1/2を残し底部を欠く。口縁部は内外ともに横ナデ。体部は刷毛仕上の跡を薄く残す、下半部は使用によるものか刷毛目は残らない。体部に15×10cm程の黒班あり。	砂	良	赤	粒	褐	多	色	い
6 —5	須恵器 坏身	3—569—2	A11i KD—4	—	9.7	11.6	—	—	全体の1/5を残し底面を欠く。焼き歪みがあるが端部の作りや篦削りは丁寧。体部の外面の大半が篦削り他はノタメを残さない丁寧なナデ仕上げ。二次的な火力を受けた為か褐色がかった灰色、胎土に砂粒は少ない。	精	普	褐	緻	通	灰	色
7 —5 —16	土師器 高坏	3—192	A11i—Ⅲ KD—4	—	16.2	—	10.3	9.0	完形品。口縁部が外側に開き底面と軽い段を作って接合する坏部をもつ。器面の調整法は焼成が悪くはっきりしないが横ナデ仕上げ。刷毛による整形痕を薄く残す。脚部内面は篦整形。脚裾は内外ともにナデ仕上げで横に開くが縦方向のナデの痕跡も薄く残る。	砂	良	黄	粒	く	褐	多	な	色	い
8 —5 —16	土師器 鉢	3—191—3 A11i—Ⅲ	KD—4	—	19.8	19.5	12.6	6.0	口縁部の1/3を欠くがほぼ完形。口縁部は内外ともに横ナデ。体部の外面は左方向への篦削り、内面も口縁部に近い部分は左方向。底面から胴部にかけて　揚げる様な篦削りで調整されている。内面の一部には刷毛整形した様子もうかがえる。胴下半から底部に黒班あり、籠目土器の可能性あり。	砂	普	黄	粒	褐	多	通	色	い
9 —5 —16	土師器 甕	3—577	A11i KD—4	—	17.6	—	—	—	胴下半部を欠く。口縁部は横ナデ。胴部外面は刷毛仕上げとなるが内面は粘土の繋ぎ目をはっきり残す。胎土に赤褐色の泥粒が混じる。器面は風化が激しくもろい。体部に黒班あり。	砂	不	黄	粒	褐	多	良	色	い
10 —5 —17	土師器 甕	3—581	A11i KD—4	—	15.0	—	—	—	口縁部の1/3を欠く。やや厚手の甕と考えている。口縁部は横ナデ。体部の外面は篦で下方に撫でている内面は横方向のなで仕上げとなるが、粘土の繋ぎ目を消すまでには至っていない。器壁外面に煤が少し付着する。	小	普	肌	石	通	混	色	じ	る
11•12 —5 —16	土師器 甕	3—573 3—569—1	A11i KD—4	—	17.3	22.1	23.5	6.5	器壁は内外ともに風化が激しく調整法は不明。ただ内面は砂粒の流れから右横方向のナデと推定される胎土には雲母と大粒の砂粒（石英？）を含む。胎土の状態から11と12を同一個体と考えた。底部外面には籠目が残り煤が多く付着する。	砂	不	赤	粒	褐	多	良	色	い
13 —5 —17	土師器 甕	3—572	A11i KD—4	—	18.4	21.0	24.8	—	全体の1/2が残る。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦方向のナデ。内面は横方向のナデ仕上げ。いずれも丁寧に調整され光沢をもつ部分もあり。底面を除く外面全体に煤が付着する。丸底甕形土器となる。胴部下半には二次火力による黒班や赤変が残る。	砂	良	赤	粒	褐	多	好	色	い

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
14 —5 土師器 甕	3—574 A11 i KD—4	— 16.0 21.0 — —	口縁部の1/5を残し胴部以下を欠く。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦内面は横方向の刷毛仕上げとなっている。いずれもやや広めの刷毛で丁寧に調整されている。	砂粒少ない 良好 赤褐色
15 —5 —17 土師器 甕	3—574 A11 i KD—4	— — 22.3 — —	胴部上半を欠く丸底の甕となる。内外面ともに丁寧なナデ仕上げとなるが粘土の繋ぎ目の影響が整形の凹凸をのこす。器壁は薄く胴部には煤が付着。胎土には砂・雲母の細粒を含む。胴部下半から底部にかけて火力による赤変あり。	精良 良好 肌色
16 —6 —17 土師器 高坏	3—913 A11 KD—6	— — — — 11.4	坏部を欠く。脚裾は内外ともに横ナデされるが柱状部は整形時の凹凸を残し軽い稜を作り中実となる。内面に絞り目が残る。器壁は化粧粘土の為か薄く剥落する部分あり。	砂粒含む 不良 赤褐色
17 —6 土師器 甕	3—916—3 A11 KD—6	— 16.7 — — —	口縁部の1/4を残す。内外を横ナデして仕上げる。内面の粘土の繋ぎ目を指で押えている。胴部は刷毛仕上げ。	細砂含む 良好 肌色
18 —6 —17 土師器 鉢	3—916 A11 KD—6	— 35.8 — — —	口径の1/3を残し下半を欠く。口径部を肥厚させ外側に折曲げる大型の甕。口縁部は内外ともに横ナデでしあげ。頸部は粘土の繋ぎ目をなでつけ整形している。胴部外面は粗い刷毛で調整し内面は右横方向にナデている。外面全体に煤が付着する。胎土に雲母粒あり。	砂粒含む 普通 黄褐色
19 —6 須恵器 坏身	3—909 A11 h KD—7	— ?— ?— — —	口縁部の細片で下半を欠く。口径を復元すると14cm程になると推定している。立上がりは薄く作られ端部は丸い。	精良 良い 暗灰色
20 —6 —17 須恵器 坏身	3—630 A11 e KD—7	— 12.4 14.6 5.5 —	1/2が残る。底部を平に篦削りし器壁は厚い。体部上半と内面は横ナデ仕上げ。立上がりは内傾ぎみに直立する底部内面には内当ての跡が残る破断面を見ると細かな気泡が多くある。	粗い 良い 暗灰色
21 —6 —17 土師器 坏蓋	3—624—1 A11 e KD—7	— 14.2 — 3.9 —	口縁の一部を欠くが完形品。身の様に図示したが模倣坏の蓋と考えている。口縁部の内外面が横ナデで調整される。体部外面には指頭痕状の凹凸が残る内面の調整法は不明。胎土中には石粒等の混入はないが茶色の泥粒が混じる。	精良 不良 赤褐色
22 —6 —17 土師器 坏身	3—624—2 A11 e KD—7	— 13.5 14.5 7.4 —	口縁部は1/3底部はほとんど残っている。口縁部の上部は内外面ともに横ナデ。内面は水平方向のナデ。外面は口縁部下半から底面のほとんど未調整で粘土を押え付けた凹凸が残る。底部には籾と藁の圧痕が残る。口縁部外面に煤が付着する。	精緻 硬質 赤褐色
22-2 —6 —17 土師器 鉢	3—918 A11—80 KD—8	— 19.7 — 9.3 —	完形品。口縁部は横ナデ。体部は内外ともに刷毛目を残すが下半部には指圧痕状の凹凸を残し調整が及ばない。体部には粘土の繋ぎ目をはっきり残す。	砂粒を含む 普通 黄褐色
23 —7 —18 須恵器 坏蓋	5—235 ト4 KD—10	— 11.9 — 4.4 —	完形品。天井部の外面は2/3を篦削り内面はナデマワシ。他の部分は横ナデ仕上げ。肩部は稜を作りやや開きぎみに口縁部は直立する。端部の作りは比較的シャープ。天井部の外面に自然釉あり。胎土中に白砂（石英？）多く混入。	やや粗 良好 暗灰色
24 —7 須恵器 高坏	7—1073—2 ト4 KD—10	— 18.3 — — —	口縁部の1/4、坏部底面の1/4が残り脚部を欠く。把手の有無は不明。口径は一応18.3cmとし復元実測した。体部に作り出された稜はしっかりしており波状文も丁寧に描かれ端部はシャープに作られる。長方形三方向透かしとなる。内面には自然釉が付着する。	精良 良い 暗灰色
25 —7 —17 土師器 坏身	7—1139 ト4 KD—10	— 11.4 — 4.8 —	全体の1/2を残す。口縁部の先端がやや外反しながら立上がる。器壁は刷毛あるいは篦の小口の様なもので無方向にナデ整形している。器壁は凹凸が激しい。口縁の先端は一応横ナデしている。	砂少ない 普通 褐灰色
26 —7 —18 土師器 坏身	5—221 ト4 KD—10	— 13.5 — 6.0 —	完形品。内面全体は不定方向のナデマワシによって平滑に仕上がっている。外面は口縁部を横ナデによって器壁を整えているが体部から底面にかけては凹凸を残し完全なナデ調整を行っていない。胎土は雲母と砂粒が混じる。口縁部外面に煤の付着する部分ある。	良 普通 黄褐色
27 —7 —18 土師器 坏身	7—1073—1 ト4 KD—10	— 10.3 10.8 5.3 —	口縁部の1/3と底部を欠くやや小さめの坏。口縁部は内外ともに横ナデ。いずれも摩滅が進んで確定出来ないが、体部の外面は刷毛整形や指頭痕の凹凸を残し、内面はナデ仕上げで調整されている。胎土には砂が少ない。	精良 普通 黄褐色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
28 —7 土師器 高坏	5—295—1 ト7 KD—10	— 16.2 — — —	坏部の2/3と脚下半を欠く。体部下半で軽く段を作る。口縁部は横ナデ。坏部の底面は刷毛目や脚との接合のためのナデツケの凹凸を残す。脚内面は絞り目の上からナデている。	砂粒多い 良い 黄褐色
29 —7 土師器 甕	5—295—2 ト7 KD—10	— 15.0 — — —	口縁部の1/4を残す。口縁部は内外ともに横ナデ。胴部も残っている部分は丁寧なナデで平滑に仕上げている。胎土には雲母の細かな粒を含むが砂粒はほとんどない。器壁外面に煤の付着あり。	精良 普通 赤黄褐色
30 —7 —18 土師器 甕	5—294—2 ト4 KD—10Pit内	— 16.5 — — —	肩部以下を欠く。口縁部は内外ともに横ナデ、肩部外面は縦、内面は斜め横方向のナデで仕上げられる。しかし外面には粘土の繋ぎ目や指頭痕、内面には指によるナデアゲの跡が残る。胎土には雲母を含む。	砂粒多い 不良 肌色
31 —7 土師器 甕	7—1139—2 ト4 KD—10Pit内	— 19.5 20.4 — —	胴径の1/5程度を残し底部を欠く。口縁部は丁寧に横ナデ、胴部外面は粗い刷毛による縦方向の調整、内面は横方向の刷毛調整となる。外面全体に煤が付着する。	砂粒多い 良好 褐色
32 —9 —18 須恵器 高坏	5—240—1 4—1548 リ4 KD—11	— 12.8 — — —	坏部の1/3と脚部を欠く。坏底部外面の1/3程は篦削り他は横ナデ、坏胴部の稜や沈線はシャープさに欠け端部も丸みを持つ。体部下半の波状紋も崩れている。透かしは長方形で三方向。内面は自然釉が噴き調整法が分らない。	やや粗い 良好 暗灰色
33 —9 土師器 甕	4—1548—3 チ4 KD—11	— 19.3 29.0 — 10.5	胴部下半を欠く脚付甕となる。口縁部も脚部も完全ではなく1/4程度を残す。口縁部は内外ともに丁寧な横ナデ。外面は刷毛整形され肩部で羽状に交わる。内面は凹凸を残すが丁寧なナデ仕あげ、雲母の細粒を含み砂粒は含まない。外面全体に煤付着、脚部に赤変あり。	精良 普通 灰褐色
34 —9 —18 土師器 甑	5—240—3 リ4 KD—11	— 22.4 — 24.1 9.7	ほぼ1/2が残る。把手も片方を残すだけ、口縁部を肥厚させ胴部下端には籠目の圧痕を残す。全体に摩滅が激しく器面調整は不明。内面は黒灰色。外面は赤褐色となる。白色の砂粒が多い胎土。全体に二次火力を受けた可能性あり。	砂粒含む 不良 赤褐色
35 —9 —18 土師器 甑	5—240—2 リ4 KD—11	— 21.6 — — —	口縁部の1/2と胴部下半を欠き把手も片方だけ残る。口縁部は折返して肥厚させ内側をやや外反ぎみに横ナデしている。胴部外面は縦方向の細かな刷毛仕上げ。内面は横方向の刷毛仕上げとなる。内面からは粘土の繋ぎ目がよくわかる。胴部下半に二次火力によると思える赤変あり。	砂含まず 普通 赤黄褐色
36 —9 —18 須恵器 坏蓋	4—1575 B12dⅢ中 KD—12	— 14.6 — 3.9 —	完形品。天井部外面を篦削りし肩部からなだらかに下がって口縁部まで横ナデする。内面も横ナデ仕あげ。口縁部は内湾ぎみになって口唇部にいたる。胎土に白色砂粒多い。	砂粒含む 普通 暗灰色
37 —9 須恵器 坏	6—1444 B12d KD—12	? — ? — —	口縁部を欠くので蓋か身か定かでない。口径は15cm程になると推定される。焼成は悪く軟質（二次火力を受けた？）調整法不明。内面は暗灰色。外面は白色。	良 不良 暗灰色
38 —9 —18 土師器 甕	5—61 4—1762 D12d KD—12	— 17.1 — — 30.5	完形品。口縁部内外面は横ナデしているが内面には薄く刷毛目が残る。先端部は内側を凹ませ丸みを持つ。胴部から底部までの外面はほぼ縦の刷毛調整し、底面にも刷毛目が残る。内面は刷毛整形の後にナデ仕上げした為か刷毛目がうすい。（あるいは使用による摩滅。）	砂粒多い 普通 赤黄褐色
39 —9 —19 土師器 甕	5—62—1 4—1763 B12d KD—12	— 14.0 15.4 19.1 4.7	口縁部から底部まで全体の1/2が残る。口縁部は内外面ともに横ナデ。内面は斜め水平方向の丁寧なナデ仕上げ。外面は口縁部下半から底部までナデ調整で粘土を押え付けた凹凸が残る。底部には木葉痕が見られ丸底ぎみになる。底部付近を除き外面全体に煤が付着する。	良い 良い好 灰褐色
40 —11 —19 土師器 甕	5—62—2 4—1763 B12d KD—12	— 17.5 19.8 30.8 —	口縁と胴部の一部を欠くが完形品。外面は口縁部が横ナデで調整され体部はやや粗い刷毛目の調整が残る。内面は口縁部に横の刷毛目が残り体部には刷毛目がナデ調整によって消され所々に薄く残る。底部は丸底。胴部下半に煤付着。口縁部に二次火力を受けた黒変が対方向に残る。	砂多い 普通 肌色
41 —11 —19 土師器 甑	5—60 4—1761 B12d KD—12	— 23.0 29.0 — 9.1	片方の把手と口縁の一部を欠くが完形品。口縁部は肥厚させ外面を横ナデするが下半部には指頭痕状の凹凸を残し調整が及ばない。内外ともに丁寧な刷毛調整痕を残すが胴下半部の内面は使用による摩滅か刷毛目が薄い。底部に二次火力に因る黒変あり、底部口辺部は横ナデ。	砂粒含む 良い 赤黄褐色
42 —12 須恵器 坏蓋	4—1591—11 A12c—Ⅲ KD—14	— 11.9 — 4.4 —	1/4が残る。天井外面の1/2が篦削りされる。他の部分は横ナデ天井部内面の中心は静止ナデ。肩部は折曲げ稜は作らず口縁部はほぼ直立し端部は内傾する。断面は赤茶色。胎土中に白砂（石英？）多く混入。	精良 硬質 暗灰色

番号 挿図 写真図版	器種	登録番号	出土位置	法量cm 口径	最大径	器高	底径	技法・調整の特徴	胎土	焼成	色調
43 —12 —19	須恵器 坏蓋	6—963	A12e KD—14	—	15.5	—	4.7	口縁部の一部を欠く。天井部外面が篦削り、肩部から口縁部の内外面は横ナデ。肩はなだらかに曲り浅い沈線を置き口縁部と画される。口唇部は内傾するが丸くなる。内面天井部には叩目状圧痕と静止ナデの跡が残る。	や	や	粗
									や	や	軟
									灰		色
44 —12 —19	須恵器 坏蓋	4—1591—10	A12c KD—14	—	15.9	—	4.8	完形品。天井部の大半はやや広めの篦削り。肩部は浅めの沈線を置いて口縁部と画する。内面は丁寧な横ナデ。中心部には内当ての痕跡とそれを消すための静止ナデあり、口縁の先端は内傾している。胎土には砂粒が少ない。	良		い
									や	や ○	○
									灰		色
45 —12 —19	須恵器 坏蓋	4—1591—8	A12c KD—14	—	15.7	—	5.4	完形品。肩・口縁部の外面及び内面全体はノタメも顕著ではなく横ナデによって丁寧に調整される。天井部外面の篦削りも丁寧。肩部は軽い稜をつくって口縁部へと続く、天井部内面には内当ての跡を消したと思える凹凸と静止ナデがある。	良		い
									軟		質
									灰		色
46 —12 —19	須恵器 坏身	4—1591—6	A12c KD—14	—	13.4	15.7	5.4	完形品。底部外面の2/3は丁寧な篦削り、体部は底部からなだらかに立上がって受部へと続く。立上がりはほぼ直立し端部はかるく平担面を作っている。内面と立上がり部・受部外面は丁寧な横ナデ、内面中心部には円形の内当て痕と静止ナデが薄く認められる。胎土には砂少ない。	精		良
									軟		質
									白	灰	色
47 —12 —19	須恵器 坏身	4—1591—9	A12cⅢ KD—14	—	13.3	16.0	5.2	完形品。底部外面の1/2はやや雑な篦削り、他の部分は横ナデ。内面のナデはやや粗く粘土凸凹が残り内当て痕がのこる。体部は腰が張らずなだらかに受部に続き、端部は丸みを持って作られる。やや大粒の砂が目立つ。	粗		い
									普		通
									灰		色
48 —12 —19	須恵器 坏身	4—1591—5	A12cⅢ KD—14	—	13.2	16.0	5.0	完形品。底部外面の1/2は篦削りしかし中央部には切離しの部分を未調整のまま残す。他の部分は横ナデ。内面中心部には内当て痕を消した静止ナデが認められる。体部は腰が張らずに受部に続き、立上がり部はやや内傾し、口唇端部も内傾ぎみになる。砂粒を含み全体的に丁寧さを欠く作り。	や	や 粗	い
									普		通
									灰		色
49 —12 —19	須恵器 坏身	4—1591—7	A12cⅢ KD—14	—	15.4	18.0	5.0	完形品。底部外面の1/2は広い幅の篦削り、他の部分は横ナデ。内面のナデはやや粗く粘土の亀裂を完全に消し去っていない。内当ての跡が内面に残る。体部は腰の部分で軽く折れ受部へと続く。立上がりも一旦外に折れ口唇部を丸く作る。胎土には大粒の砂粒が混じる。受部以下の外面に自然釉が付着する。	砂	粒 多	い
									良		い
									灰		色
50 —12 —20	須恵器 坏身	4—1591—4	A12cⅢ KD—14	—	15.5	17.2	6.0	完形品。底部外面の2/3は篦削り、他の部分は横ナデ。器面の摩滅が著しく詳しい調整法は不明。やや腰の張った体部となり立上がり部はほぼ直立する。受部は横につまみ出し立上がり部を後から付けたしている。	砂	粒 多	い
									不		良
									白	灰	色
51 —12 —20	土師器 坏身	4—1591—3	A12cⅢ KD—14	—	13.2	15.0	4.7	1/2を残す。模倣坏である。内面はナデ仕上げ。立上がりと受部の下外面は横ナデ。体部外面は指頭痕状の凸凹が残る。口唇部は摩滅のため判然としない。雲母の細粒はあるが砂粒は混じらない。	精		良
									不		良
									赤	褐	色
52 —12 —20	須恵器 坩	6—962	A12e KD—14	—	8.8	12.6	8.4	完形品。底部外面は比較的丁寧な篦削り、胴部から口縁部の外面はノタメ状の凹凸を残さない横ナデ。内面は全体が横ナデ。底面には内当て痕あり、肩部には自然釉が付着する。	精		良
									硬		質
									暗	灰	色
53 —12 —20	土師器 鉢	6—1158	A12c KD—14	—	22.4	24.1	9.7	完形品。外面は粗い刷毛で全体を調整している。口縁部上半は刷毛目の上から横ナデし、頸部も粗くナデ調整しているが刷毛目を完全に消し去っていない。内面は口縁部下半に刷毛が残り、体部は摩滅ではっきりしないが斜め上に掻揚げるナデ仕上げ。底部には籾痕があり木葉痕の平底となる。	砂	粒 含	む
									普		通
									赤	褐	色
54 —12 —20	土師器 甕	6—961 6—1591—12	A12f KD—14	—	16.4	23.5	31.9	口縁部と胴部の1/3を欠く。やや粗い刷毛で内外面全体を調整し口縁部の外面だけが横ナデ調整される。胴部下半には籠目が見られ籠目を消すように刷毛調整が施される。底部はほぼ方形の平底となり使用した籠の様子を伺わせる。胴部外面には煤が付着し二次火力を受けたと思える器壁の荒れがある。	や	や 粗	い
									良		い
									黄	褐	色
55 —12	土師器 甕	6—971—1	A12e KD—14	—	19.7	21.8	—	胴部下半を欠く。口縁部内面は刷毛調形の後、軽いナデ調整、外面は横ナデ。胴部外面は刷毛、内面はナデ調整。焼成が悪く器壁の剥落が多いため詳細は不明。胎土に大粒の砂粒が多い。	砂	粒 多	い
									悪		い
									赤	褐	色
56 —12	土師器 甕	4—1591—13	A12cⅢ KD—14	—	18.0	—	—	胴部下半を欠く。口縁部の内外面は丁寧な横ナデ。胴部の内外面は粗い刷毛目の調整。胎土には雲母と砂の細粒を含む器壁には煤が僅かに付着。	良		い
									良		い
									赤	褐	色
57 —12	土師器 甕	6—971—2	A12e KD—14	—	14.9	18.8	—	口縁部の1/4と胴部下半を欠く。焼成が悪く器壁が荒れているが口縁部は横ナデ調整。胴部の内外面には薄く刷毛目が残り、刷毛調形の後になで調整している事を伺わせる。	砂	粒 多	い
									不		良
									黄	褐	色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
58 —12 土師器 甕	4—1591—14 A12c—Ⅲ KD—14	— 18.6 22.3 — —	口縁部から底部まで全体の1/2が残る。底部は直接胴部と繋がらないが同一個体と考えている。口縁部は丁寧なナデ仕上げ、内面は水平方向の刷毛仕上げ、しかし粘土の繋ぎ目や、押え付けた凹凸が残る。外面は頸部から底部まで縦の刷毛、調整で底面にも刷毛痕が残り丸底ぎみになる。籠目土器。	砂多い 普通 暗灰褐色
59 —13 —20 土師器 鉢	6—995 A12f 東Sect KD—14?	— 19.2 — 9.7 7.8	口縁と胴部1/2を欠く。口縁部内外面が丁寧に横ナデで調整される。体部外面はやや粗い刷毛目の調整が残る。内面は頸部に横の刷毛目が残り体部はナデ調整、口縁部内面・体部外面は器壁の荒れが激しい。体部外面に10×8cmの黒斑あり、底部は平底。	砂粒多い 普通 黄褐色
60 —13 —20 土師器 甕	4—1730 A12f—Ⅲ KD—15	— — 16.2 —	胴部の上半を欠く。胴部外面は刷毛目が薄く残り刷毛目整形の後にナデ仕上げ、内面は刷毛整形の後に軽いナデ仕上げのための粘土の繋ぎ目の影響や指頭痕状の凹凸が残る。底部は押付ける様にしてほぼ方形の平底に作っている（籠目土器？）。底面に籾痕あり。胴部の1/2に煤が付着する。	砂粒含む 良い 暗褐色
61 —13 —20 須恵器 坏身	6—957—4 A12c KD—16	— 9.5 11.6 4.6 —	1/2が残る。底部外面の2/3が削り幅の広い篦削で調整される。他の部分は横ナデ。底部内面の中央は静止ナデ。底部から緩やかに立上がって受部を作り、立上がりは内傾ぎみに直立し端部は内傾する。胎土に雲母の細粒が混じる。	良い 普通 灰色
62 —13 —20 須恵器 坏蓋	6—957—3 A12c KD—16	— 14.0 — 4.9 —	1/3が残る。天井部外面が篦削り、肩部から口縁部の内外面は横ナデ。肩部は折り曲げ低い稜を置き口縁部と画される。口唇部は内傾する。内面天井部には内当て痕を消したと思える静止ナデの跡が残る。	良い 普通 灰色
63 —13 —20 須恵器 坏蓋	6—957—2 A12c KD—16	— 13.8 — — —	ほぼ1/2を欠く。天井部の大半は篦削り、肩部は沈線を置いて口縁部と画する。内面はやや荒い横ナデ。中心部には内当ての痕跡とそれを消すための静止ナデあり。口縁の先端はやや内傾して丸い。胎土に雲母を含み砂粒は少ない。	良い 軟質 白灰色
64 —13 —21 須恵器 坏身	6—957—1 A12c KD—16	— 11.9 14.2 4.9 —	1/2が残る。口縁部の外面及び内面全体は、ノタメも顕著ではなく横ナデによって丁寧に調整される。底部外面の篦削りも削り幅は広いが丁寧。立上がりは一度内傾させ直立する。口唇部は一応内傾させている。体部はやや腰が張る。	良い 軟質 灰色
65 —13 土師器 鉢	6—958—2 A12c KD—16	— 18.4 16.2 — —	口縁部と胴部の1/4が残り底部を欠く。摩滅が激しく調整法がはっきりしないが口縁部は内外ともに横ナデ、体部は刷毛ナデ仕上げとなっている。胎土に砂はなく茶色の泥粒を含む。	精良 不良 赤褐色
66 —13 土師器 甕	6—958—1 A12c KD—16	— 17.3 19.3 — —	胴下半から底部を欠き口縁部の1/4を残すだけ。口縁部外面は横ナデ、胴部外面は粗い刷毛仕上げ。内面は器壁の摩滅がひどく調整痕がはっきりしないが、胴部には刷毛目が薄く残り刷毛整形の跡や指頭痕状の凹みが伺える。胎土には大粒の砂が多い。	粗い 不良 暗褐色
67 —13 —21 土師器 壷	6—986 A12c KD—18	— 19.6 — — —	頸部以下を欠く。器壁は内外ともに剝落が激しく調整法は不明。胎土はやや粗いが砂粒は含まない。頸部で粘土が継ぎ足され、口縁部は一度たちあがって外反する。	やや粗い 不良 赤褐色
68 —13 —21 須恵器 坏蓋	4—1687 4—1688 A12cⅢ KD—16・18	— 13.8 — 4.0 —	1/3を欠く。天井部外面の大半はやや広い削り幅の篦削り。他の部分はノタメを残さない丁寧な横ナデ。肩部で比較的なだらかに折れ曲り稜はやや低いがしっかりと作られる。口縁部はやや内湾するが口唇部は内傾させしっかりと作られる。	良好 普通 灰色
69 —13 —21 須恵器 坏蓋	4—1683 A12cⅢ中 KD—16・18	— 15.0 — 5.0	1/4を欠く。天井部外面の2/3は篦削り、他の部分は横ナデ。肩部で折れ曲り沈線を置いて稜を作り出している。口唇部は段を作って内傾し丸く仕上げている。内面のナデはやや雑で、粘土のよじれやひび割れを残す。断面内部は赤茶色。天井外面に自然釉あり。	砂粒多い 硬質 黒灰色
70 —13 土師器 甕	4—1688—2 A12cⅢ KD—16・18	— 13.6 20.0 — —	口縁部の一部と胴部下半を欠く。口縁部内外面は横ナデ。胴部内外面は粗い刷毛仕上げとなっている。外面は使用に因る摩滅か刷毛目が薄い。頸部内面の粘土の繋ぎ目がはっきり残り粘土の端を押え付けていない。外面には煤の付着があり、二次火力による黒斑もある。	砂多い 不良 黄褐色
71 —13 —21 土師器 甕	4—1686 A12c KD—16・18	— 16.3 — — —	胴部下半を欠く。口縁部は内外ともに丁寧に横ナデし端部は丸く作り出している。胴部外面は刷毛仕上げ。内面はナデ仕上げと思えるが摩滅が進み調整法がはっきりせず刷毛目は残らない。胎土には砂粒を多く含み黒変する部分がある。	粗い 不良 黄灰色
72 —15 —21 須恵器 坏蓋	7—155 A12a KD—17	— 14.0 — — —	1/2が残る。天井部の半分以上を丁寧な篦削りで仕上げている。肩部で折れ曲がりしっかりした稜を作り口縁部へと続く。口唇部は内傾させシャープに作る。内面の横ナデも丁寧でノタメの凹凸が少ない。天井部外面に自然釉が付着する。断面内部は赤茶色。	精良 硬質 黒灰色

番号 挿図 写真図版	器種	登録番号	出土位置	法量cm 口径	最大径	器高	底径	技法・調整の特徴	胎土	焼成	色調
73 —15	須恵器 坏蓋	4—1729	B12aⅢ下 KD—17	—	14.6	—	—	口縁部の1/6しか残っていない。天井部外面の大半を篦削りしている。肩部には稜を軽く作りだし、緩やかに折れ曲がって口縁部となる。口唇部は内傾するが丸みを持って作られる。細片であり計測値に誤差があるかも知れない。	良	良	好い 灰色
74 —15 —21	須恵器 蓋	4—1723	B12a KD—17	—	9.6	—	3.8	完形品。天井部外面は篦削り。天井部内面の中央には静止ナデ。内面と口縁部外面は横ナデ。平らな天井部から一気に曲がり口縁部となり、口唇部は丸みを持って作られ内傾する。天井部外面に自然釉が付着する。	砂粒多	良	い 灰白色
75 —15 —21	土師器 甑	4—1735	B12a KD—17	—	24.4	—	30.7 9.4	1/2が残り把手も片方を欠く。口縁部は肥厚させ内外面から横ナデしているが外面には指頭痕状の凹みが残る。胴部の内外面は刷毛調整されるが、内面はその後ナデ仕上げされたためか刷毛目が薄い。把手を撫で付けた窪みと指頭痕が内外面に残る。胎土には砂粒が多く雲母も含む。	良	良	い 淡黄色
76 —15 —21	土師器 甕	4—1737	B12aⅣ KD—17	—	17.1	22.9	—	底部を欠く。口縁部の内外面は横ナデで丁寧に仕上げられている。土器の片面が全体的に二次火力を受けているため器壁の荒れが目立つ。胴部は内外ともに刷毛仕上げ。内面は刷毛整形の後にナデ仕上げをしているかも知れない。外面に煤付着。	砂粒多	不	い 良 淡黄褐色
77 —15 —21	土師器 甕	4—1727	B12aⅢ下 KD—17	—	16.5	—	—	肩部以下を欠く。焼成が悪く器壁の荒れが激しいためはっきりしないが、口縁部の内外は横ナデ、胴部は刷毛仕上げとなっている。口縁部は口唇部にかけて薄くなりそのまま終わってしまう。外面には故意に付けたものか二本の沈線がある。	砂粒多	不	い 良 肌色
77-2 —15	土師器 甕	4—1728	B12aⅢ下 KD—17	—	17.5	—	—	肩部以下土器のほとんどを欠く。器壁全体に摩滅が進み器面の調整法がはっきりしないが口縁部は横ナデ、胴部はナデ仕上げになっていると思われる。胎土には大粒の砂粒が多い。	粗	不	い 良 赤褐色
78 —15 —22	土師器 甕	4—1738	B12aⅢ KD—17	—	14.4	20.9	27.0	胴部のごく一部を欠く完形品。口縁部は内外ともに横ナデし先端部を丸く作っている。胴部は内外とも器壁に凹凸を残すものの丁寧にナデ仕上げされ刷毛目等の整形痕はみられない。底面が二次火力によって赤変する。底部を除く体部外面には煤が付着している。丸底の土器である。	砂粒多	普	い 通 黄褐色
79 —15 —22	土師器 甕	4—1736	B12aⅢ KD—17	—	16.7	22.2	—	口縁部の一部と胴部の下半を欠く。胴部外面は縦の刷毛目が薄く残り内面も横方向の丁寧な刷毛仕上げ。口縁部は刷毛整形の後に横ナデしているナデが完全では無く外面は縦、内面は横の刷毛目薄くが残る。外面は使用によるものか摩滅が進んでいる。内面下半と外面には煤状の炭化物が付着する。	砂粒含む	不	良 黄褐色
80 —17 —22	土師器 高坏	6—966—1	A12b KD—19	—	—	—	8.9	高坏の脚部で坏部を欠く。内面は内壁に添って篦削りされている。脚裾は内外面から横ナデされる。坏部と接する部分にはナデツケの跡が残る。脚内面には坏部との接合の際の粘土が残る。	精	普	良 通 赤褐色
81 —17 —22	土師器 椀	6—954	A12a KD—20	—	15.9	—	—	1/3が残る。焼成が余り良くないため調整法が良く分らないが口縁部は横ナデ、内面はナデ仕上げ？。胎土は精選されており砂は含まない。気泡と赤茶色の泥粒が混じる。	良	普	い 通 灰色
82 —17 —22	土師器 椀(坏)	6—1341	A12e KD—21	—	10.5	—	6.0	口縁部に欠ける部分があるがほぼ完形品。内部底面は指頭整形による凸凹がのこる。胴部内面から口縁部外面は横ナデ調整。口縁部以下は指頭整形の凹みが残る。さらに底面は篦削りで丸底に仕上げている。胎土には砂粒と赤茶色の泥粒が混じる。	小石多	普	い 通 黄褐色
83 —17	土師器 小壷	6—1309	A12e KD—21	—	5.9	7.5	7.3 4.9	短頸の小壷。体部は薄く作られ外面には刷毛目を置く。底部はやや厚めに作り中心部を薄くして高台状にしている。	良	良	い 好 黄褐色
84 —17	土師器 甕	6—1308	A12e KD—21	—	—	11.6	—	胴・頸部破片が残るだけ。外面は細かな刷毛目が薄く残る事から刷毛整形の後にナデ仕上げをしていると思える。頸部は残りがすくないが横ナデ仕上げ。内面は丁寧な篦削りで器壁を薄く仕上げている。胎土には雲母と白砂粒が混じる。外面には煤状の炭化物が付着する。	良	良	い 暗赤褐色
85 —17 —22	須恵器 高坏蓋	4—148—2	イ9—Ⅲ KD—23	—	12.3	—	4.6	口縁部の一部を欠くがほぼ完形品。肩部から天井部にかけて暗緑色の自然釉が濃くかかり器面調整がはっきりしない。内面は横ナデ仕上げ。丸みを持った天井部は肩部で折れ曲り、稜はしっかりと作られ口縁部は直立し、端部も丁寧に作られている。胎土に砂粒混じる。	良	硬	い 質 暗灰色
86 —17 —22	須恵器 高坏	4—276	ト3—Ⅲ KD—23	—	10.0	12.9	9.8 8.6	坏部の1/3を欠く。坏部外面下半は篦削で整形される。坏の腰部分では篦削りの上から、脚部ではほぼ全体にカキメが施される。他の部分は丁寧な横ナデ仕上げ、口唇部・受部・脚裾など端部はシャープに作られるが、焼成が悪いため全体的にあまい感じとなっている。丸窓は三箇所。	良	不	い 良 灰白色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
87 —17 須恵器 高坏	5—282 イ9・ロ7 KD—23	— — — — 9.4	脚部の1/3が残ったものである。脚裾は断面を三角に作り上半にはカキメを施す。透かしは三方向と考えている。脚部内面には白色斑点の自然釉がかかる。	良好 硬質 暗青灰色
88 —17 —22 土師器 埦	4—148—3 イ9—Ⅲ KD—23	— 12.8 — 5.7 3.5	1/3を欠く。焼成が悪く器壁の荒れが激しいので調整法がはっきりしない。底部を厚く口縁部に行くにしたがって薄く作っている。底面の中央をやや凹ませ、小さな底部を作り出している。胎土には砂粒と赤茶色の泥粒が混じる。内外面に炭化物の付着する部分がある。胴部下半に黒変あり。	砂粒多い 不良 赤褐色
89 —17 土師器 坏身	4—276—2 ト3—Ⅲ KD—23	— 14.1 — 5.8 8.0	全体の1/5を残すだけ。内外面ともに刷毛目が薄く残り刷毛整形した後にナデ仕上げしたことが伺える。胴部下半には指頭痕状の凹みがあり平らな底面をつくる。胴部はなだらかに立上がり口唇部は丸く作る。	砂含む 良い 灰黄褐色
90 —17 —22 土師器 高坏	5—281 イ9 KD—23	— — — — 9.5	坏部を欠く。坏との接合部にはナデツケの跡が残る。柱状部にはねじれが残り脚裾は横ナデして仕上げる。脚内面は篦削りし天井部は指で押えた後をくっきり残す。胎土には雲母・砂粒を含む。	粗い 良い 赤褐色
91 —17 須恵器 坏身	7—1192 ハ9 KD—25	— 12.3 13.9 4.0 —	全体の1/5が残るだけ。底部外面を篦削りして仕上げている体部でやや腰が張り受部に至り、立上がりはほぼ真直ぐに作る。口唇部は段を作って内傾さる。内面の横ナデも丁寧でノタメの凹凸が少ない。	良い 硬質 暗灰色
92 —17 —23 須恵器 高坏	5—140 D18aB₂ KD—25	— 11.1 13.5 8.9 9.0	脚部の1/3を欠くだけでほぼ完形品。坏底部外面の半分を篦削りしている。内面は器面の凹凸を残したやや粗い横ナデ。口唇部も段を作って内傾するが、丸みを持って作られる。脚部は三方向三角形透かしでカキメ状の横線がのこる。脚裾も断面三角形につくるがシャープさが無い。坏外面下半と脚に白色斑点状の自然釉あり。	普通 普通 灰色
93 —17 —23 土師器 坏身	7—1194 ハ9 KD—25	— 13.0 14.1 5.3 —	口縁部を僅かに欠くが完形品。化粧粘土の為か内外面ともに器面に剝落が激しく調整法が分らない。やや厚めの底部から緩やかに立上がって薄くした口縁部先端を、内傾させて作る。胎土には砂は無く赤茶色泥粒と気泡が混じる。底部外面の2/3が黒変する。	精良い 不良 褐色
94 —17 —23 土師器 壷	7—1343 KD—25	— 13.0 18.1 — —	胴部下半を欠く。口縁部に横ナデ、胴部内面に斜めのナデ跡が薄く残るが焼成が悪く（あるいは二次火力を受けた為か）内外ともに器壁の剝落が激しい。内面には粘土の繋ぎ目がそのまま残ったり指頭痕状の窪みも残る。外面に煤付着する。胎土には砂が少ない。	良い 不良 赤褐色
95 —18 須恵器 坏蓋	7—268—2 B11e KD—26	— — — — —	天井部と口縁部の先端を欠き全体の1/8程度しか残さない。天井部の大半は篦削り、内面は丁寧な横ナデ。肩部には稜を作っている。胎土には砂粒は含まない。	良い 普通 暗灰色
96 —18 土師器 甕	7—267 B11e KD—26	— 19.9 — — —	口縁部の1/4が残る。口縁部外面は丁寧に横ナデし内面には横の刷毛目が残る。肩部外面はきれいな刷毛仕上げ、内面はナデ仕上げとなっている。胎土には白色砂と赤茶泥粒が混じる。頸部内面には口縁部接合時の粘土のめくれがそのまま残る。口縁部先端は一旦折曲げ薄く仕上げている。	粗い 普通 赤褐色
97 —18 土師器 甕	7—266 B11e KD—26	— 18.1 — — —	肩部以下を欠き口縁部の1/4が残る。内面は焼成が悪く器壁の荒れが激しいが、口縁部の内外は横ナデ仕上げ。胴部は外面は刷毛仕上げとなっている。口縁部はやや厚めに作り端部内側を少し凹ませ口唇部を丸く作る。外面には煤が付着する。胎土には砂粒と赤茶粒が混じる。	砂多い 不良 赤褐色
98 —18 —23 土師器 高坏	7—437—1 B11e KD—26	— 17.3 — 15.5 10.8	坏部・脚部ともに1/2を残す。坏口縁部と脚裾の先端が丁寧に横ナデされる。坏胴部の内面には、板状の物の小口を使ったナデが残る。外面は一応ナデてはいるものの整形時の凹凸を消し去ってはいない。脚部外面も篦で縦にナデているが凹凸を残し、内面は斜めにかきだす様な指頭痕が残る。	砂粒多い 普通 灰褐色
99 —18 土師器 壷	7—437—3 B11e KD—26	— 12.2 — — —	口縁部の1/3が残るだけ。内外面を横ナデで仕上げているが外面のナデは荒く粘土の凸が残る。下半部の粘土の繋ぎ目部分で、稜を置き口縁先端外面をやや凹ます事によって、もう一本の低い稜をつくっている。断面内部は黒灰色。	良い 良い 灰褐色
100 —18 —23 土師器 壷	7—437—2 B11e KD—26	— — 16.5 — —	口縁部と底部を欠く。外面はナデ仕上げされ平滑になる。内面は篦で斜め方向にナデているが、上半部は粘土の繋ぎ目や指頭痕の凹凸をそのまま残す。外面全体に煤が付着し下半部では二次火力による赤変あり。	普通 普通 黄褐色
101 —18 —23 土師器 甕(壷)	7—437 B11e KD—26	— 13.3 24.2 — —	胴下半部から底部を欠く。口縁部は横ナデされ内傾ぎみに立上がる。胴部外面はナデ仕上げされる。内面は肩部に粘土の繋ぎ目がはっきり残るほか、繋ぎ目を押えた指頭痕や指頭によるナデの凹みが多くのこる。外面には煤が多く付着し二次火力によるのか、あばた状の剝落が見られる。	良い 普通 黄灰色

挿図番号 写真図版	登録番号	法量cm	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
器種	出土位置	口径 最大径 器高 底径		
102 —18 須恵器 坏身	7—265 B11d KD—27	— 11.1 13.5 — —	口縁部の1/5が残る。体部外面の半分程が篦削りされ他は横ナデ。底部から緩やかに受部に続き腰は張らない。立上がり部は一旦内側に折れ立上がる。口唇部は軽く段を作って軽く内傾するが、丸みをもった作りとなる。受部上面には重ね焼きした須恵器片が融着する。	粗い 普通 灰色
102-2 —18 —23 土師器 坏身	7—274 B11d KD—27	— 11.4 12.0 — —	1/2が残る。口縁部内外面は横ナデ、内面はナデ仕上げを丁寧にしている。底部外面は剝落が（化粧粘土のため？）激しくはっきりしない。口縁部は内彎ぎみに立上がって口唇部は丸く作る。	良い 不良 赤褐色
103 —18 —23 土師器 甑	7—275 B11d KD—27	— 19.5 — — 9.0	全体の2/3が残るだけ。外面は摩滅・剝落が多いが刷毛目が薄く残る部分もあり刷毛整形の後にナデ仕上げをしたと思える。口縁部内面には横ナデ仕上げの痕跡あり。内面は凹凸あるものの丁寧なナデで器壁を仕上げている。胎土には雲母と砂粒が混じる。外面に黒変する部分あり。	普通 不良 肌色
104 —21 —23 須恵器 坏蓋	7—1266—1 B11g KD—31	— 12.3 — 4.6 —	ほぼ1/2が残る。天井部の1/3程が篦削りされる。他の部分はノタメの凹凸の少ない丁寧なナデ仕上げ。肩の部分は緩やかに折れ曲がり、稜を作り出している。口縁部は薄く作り端部は丸い。天井部外面に藁状の植物の茎の痕跡がある。胎土に砂粒混じる。	良い 普通 淡灰色
105 —21 須恵器 坏身	7—1265—1 B11g KD—31	— 12.4 14.4 — —	口縁部の1/3がのこる。外面の半分が篦削りされる、他の部分は横ナデ。体部の腰は張らず緩やかに受部まで続き一度内傾して立上がる口縁部となる。使用によるものか体部の外面が平滑に成っている。	粗い 軟質 灰色
106 —21 須恵器 坏身	7—1265—2 B11g KD—31	— 12.4 14.4 — —	口縁部の1/6が残るだけ。手法的には105と同様になる。同一個体の可能性もある。	粗い 軟質 灰色
107 —21 —24 土師器 壷	7—1261 B11g KD—31	— 26.6 26？ — —	1/3が残り底部と把手の片方も欠く。口縁部の内外面は横ナデ仕上げ。胴部の外面は、器壁が荒れており目の粗い刷毛目が、全体に薄く残る。内面は斜め横の刷毛整形の後、丁寧なナデで平滑に仕上げられている。底部を欠くので甑の可能性も有る。外面には煤など炭化物の付着は無い。	普通 普通 赤褐色
108 —21 —24 土師器 甕	7—1262—1 B11g KD—31	— 18.1 — — —	肩部以下底部までを欠く。口縁部内面は横の刷毛、外面は横ナデで仕上げている。胴部内面は細かな斜めの刷毛、外面は篦の小口の様な物でナデ仕上げしている。口縁部は先端内側をやや凹ませ口唇部は丸く作る。口縁部の1/4が黒変している。	普通 普通 灰黄褐色
109 —21 —24 土師器 壷	7—1265—3 B11g KD—31	— 19.3 — —	肩部以下土器の大半を欠く。口縁部は内外から横ナデし、肩部外面は篦状の物でナデ仕上げされた様に観察されるが、器壁の荒れが進んでいるため分明でない。内面はナデ仕上げで器面を整えている。胎土には小礫が混じる。	普通 不良 赤黄褐色
109-2 —21 土師器 甕	7—1264—1 B11g KD—31	— 17.0 — — —	口縁部のみ胴部以下底部までを欠く。口縁部の外面は横ナデ、内面は横の刷毛整形の後に横ナデして仕上げる。胴部の外面は目の粗い刷毛目を残す。胎土には雲母と砂粒を含む。	粗い 普通 肌色
110 —21 —24 土師器 甕	7—1264—2 B11g KD—31	— 18.8 — — —	口縁部の1/2が残るだけ。口縁部は内外面とも丁寧な横ナデ仕上げ。胴部の外面は縦のナデ、内面は横のナデで仕上げている。口縁部先端は内側のナデを強くして、やや凹ませ口唇部を丸く作る。胎土には雲母を含む。	良い 良い 肌色
111 —21 —24 土師器 小壷	7—1365—3 B11g KD—31	— — 7.0 — 4.2	口縁部と胴部の1/2を欠く。口縁部の内外面には刷毛目が残り胴部下半にも薄くのこる。胴部外面はナデ、内面は指頭によるナデマワシで仕上げている。底部は器壁を薄くして高台状に作っている。	普通 普通 黄褐色
112 —21 須恵器 坏身	7—1657—2 A15d KD—32	— 10.8 12.8 — —	口縁部の僅か1/6が残るだけである。残された部分が小さいことや歪みがあるため計測値にやや問題が残る。体部外面のナデはやや雑だが口唇部は内傾させ、きっちりと作っている。	精良 硬質 白灰色
113 —21 —24 土師器 高坏	7—1657—1 A15d KD—32	— 15.0 — — —	脚を欠く。口縁部の内外は横ナデが認められ底部外面に刷毛整形痕が薄く残る、器壁の荒れが激しいためそれ以上は不明。口縁部は底部からなだらかに立上がり体部に軽い段を作る。	良い 不良 赤褐色
114 —21 —24 土師器 甑	7—1677 A15d KD—32	— 22.6 — 22.7 9.6	全体の1/3程度しか残らず把手は両方とも欠く。器壁も剝落や荒れが激しく調整法は殆ど不明。胎土には大きな砂粒は含まない。上端部は丸く口縁部状に終わるが、摩滅が激しく分明でない。	良い 不良 赤褐色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
115 —21 —24 土師器 甕	7—1676 A15d KD—32	— 16.2 24.0 27.2 —	胴部と底部の一部を欠くがほぼ完形品。口縁部は内外ともに横ナデし、先端部内面のナデを強くし凹みを作って口唇部を丸く作る。肩部以下の外面は縦、内面は横の刷毛仕上げとなっている。底面は不定方向の刷毛仕上で丸底となるが籠目土器の可能性がある。器壁外面には炭化物が付着する。	砂多い 普通 黒褐色
116 —21 —24 土師器 小壷	7—1644 A15d—B KD—32	— 8.9 8.1 7.5 4.1	完形品。口縁部の内外は横ナデ仕上げ。胴部の外面は指頭痕状の凹凸が残るもののナデ仕上げとなる。内面は底部から口縁部に向かって放射線状に掻揚げるような指頭痕がはっきり残る。口縁部から底部にかけて6×3cm程の黒斑あり。	普通 普通 黄褐色
117 —21 —24 土師器 坩	7—1627 A14i KD—34	— — 12.0 — —	口縁部と剝落した底部を欠く。口縁部から肩部にかけて横ナデ仕上げ。胴部から底部にかけては篦削りで整形している。内面には粘土の繋ぎ目と、指頭によるナデが残る。底面には煤が付着している。胎土には白色砂が混じり断面は赤茶色。	砂粒多い 普通 赤褐色
118 —21 —25 土師器 坏	7—1728 A14h KD—34	— 10.7 11.0 6.8 —	完形品。口縁部の先端部分が横ナデで整えられている。体部内外面には指頭痕の凹みが残り軽くナデて器面を整えている。胎土には砂粒と赤茶色の泥粒を含む。口縁部に黒変がある。	普通 普通 黄褐色
119 —22 —25 須恵器 坏蓋	7—1658 A14h A14b KD—35	— 13.6 — 4.6 —	口縁部の3/4を欠くが体部は殆ど残る。天井部は篦削り、他の部分は横ナデで器面を整えている。天井部の削りは雑で切り離し痕を完全に消し去っていないし×印の篦記号がある。肩部外面には沈線状の凹みが巡る。口縁部内面には細い沈線が施される。	普通 普通 灰色
120 —22 —25 土師器 坏身	7—1740 ワ5 KD—36	— 12.3 13.2 6.3 —	口縁部の1/4を欠く。口縁部は横ナデされ内傾して立上がる。焼成が悪く器壁の荒れが激しいため、他の部分の調整方は不明。底部は平らに仕上げ木葉痕が残る。	粗い 不良 赤褐色
121 —22 —25 土師器 坏身	7—1739 ワ8 KD—36	— 12.9 — 8.5 —	1/2が残る。口縁部の内外面が強めに横ナデされ口唇部を丸く仕上げている。体部外面は指頭による整形痕の凹みを残す。内面はナデで平滑に仕上げている。口縁には意識的に作ったかは疑問だが、浅い凹線が施されている。口縁部は正円とはならず横長の楕円になる。	粗い 普通 灰褐色
122 —22 —25 土師器 壷	7—1697 ワ8 KD—36	— 10.2 14.6 14.4 —	胴部の一部を欠くがほぼ完形品。口縁部は内外から横ナデし内面はナデ仕上げされる。口唇部は波をうって水平にならない。胴部は横方向のナデで器面を整えているが下半部は器壁の剝落が激しくはっきりしない。	良い 不良 赤黄褐色
123 —22 —25 土師器 高坏	7—2959—1 ニ7 KD—38	— 15.8 — — —	脚部を欠く。外面は摩滅・剝落が多く調整・整形法は全く不明。口縁部は、坏底部で軽く段を作って斜め上に開き、口唇部を尖らしぎみにして終わる。胎土には雲母・赤茶色の泥粒が混じり砂粒は含まない。	良い 不良 赤褐色
124 —22 土師器 高坏	7—2961 ハ9 KD—38	— 16.0 — — —	坏部の1/5が残るのみ。口縁部は内外から横ナデし、内面はナデて平滑に仕上げている。内面のナデは丁寧で光沢を持つ。坏底部外面は脚接合のためのナデツケや指頭痕が残る。胎土に砂粒混じる。	普通 良い 赤褐色
125 —22 —25 土師器 甕	7—2960 ハ9 KD—38	— 15.5 16.5 — —	口縁部の半分と底部を欠く。胴部外面は縦、内面は横の刷毛で器面が整えられ、底面は不定方向の刷毛目が残る。口縁部外面は横ナデ仕上げされるが整形時の指頭痕の凹みを残す。使用によるものか底部付近の外面に、剝落や器壁の荒れが目立つ。外面全体に煤が付着している。	粗い 良い 灰褐色
古墳時代小穴内出土器				
126 —24 須恵器 坏蓋	5—115 B11h Ⅲ下pit KP	— 15.0 — — —	全体の1/4が残るだけ。天井部外面の大半が篦削りされる。肩部には、きっちりとした稜を作り出し、口縁先端は外反するが口唇部を内傾させる。全体的に薄くしっかりした作り。	良い 硬質 黒灰色
127 —24 須恵器 坏身	6—1154 A12c KP—3	— 12.0 14.6 — —	1/4が残る。底部外面の2/3が篦削りされる。その他は横ナデ仕上げ。胴部は腰は張らずに底部からなだらかに受部へと続き、立上がりは内傾する。胎土は完全に混ざり合っておらず白い粘土が縞状にまじる。	普通 普通 灰色
128 —24 土師器 壷	6—1159 A12c KP—7	— 16.2 — — —	口縁部の1/2と肩部以下底部までを欠く。口縁部内外面は横ナデできれいに仕上げている。頸部内面は粘土の繋ぎ目が残る。口縁部は先端部までほぼ同じ厚さで、口唇部を方形に作っている。外面には炭化物が付着する。胎土に小礫が混じる。	普通 普通 赤褐色

挿図番号 写真図版 / 器種	登録番号 / 出土位置	法量cm 口径 / 最大径 / 器高 / 底径	技法・調整の特徴	胎土 / 焼成 / 色調
129 —24 土師器 壷	6—1259 A12e KP—1	— 8.8 10.4 10.9 4.9	完形品。口縁部の外面は縦の篦整形、胴部の外面は横の篦整形。頸部のくびれる部分と底部には刷毛目が残る。口縁部の内面には弧状の整形痕が残る。底部はやや厚めに作られ口唇部は薄く方形に作っている。	
130 —24 土師器 甕	6—984 A12b KP—1	— 16.0 25.5 — —	胴部下半を欠く。口縁部は内外面とも丁寧な横ナデ仕上げ。胴部の内外面は器壁に凹凸や粘土の繋ぎ目を残すが、斜め横のナデ仕上となっている。篦整形の痕も残る。口縁部内側と肩部は化粧粘土状に、赤みが強くなる。胎土には小礫が多い。	普通 良い 淡赤褐色
131 —24 —25 土師器 甕	4—1706—3 A12b KP—1	— 15.4 25.3 26.7 5.5	胴部の一部を欠くがほぼ完形品。口縁部は横ナデ仕上げ。内面側を窪ませ端部を丸く作る。胴部外面は指頭痕や粘土の繋ぎ目が残るが篦によるナデ調整、内面は丁寧なナデで平滑にしている。底部は中心を窪ませ台状に作る、胎土には小礫を含む。外面には煤が、内面底部にも炭化物付着する。	普通 普通 黄褐色
132 —24 —26 土師器 甕	4—1706—2 A12b KP—1	— 19.4 24.1 25.8 5.7	胴部下半の1/4を欠くだけである。器壁は内外面ともに全体を細かな刷毛状の篦で丁寧に調整している。外面の腰の部分の器壁が、使用によるものか荒れている。胎土には小礫と雲母が混じる。胴部は球形に近くなり底部を平底にしている。外面には煤が付き二次火力による変化が残る。内面底部近くにも炭化物が残る。	普通 普通 黄褐色
133 —24 —25 土師器 甕	6—1022 A12b KP—1	— 16.9 22.9 — —	底部を欠く。口縁部は内外ともに横ナデして器面を整えているが凹凸が残る。肩部と口縁部内面には篦によるナデ痕ものこる。胴部内面は斜めのナデ仕上げ。胴部下半は内外とも器壁の剝落が激しい、特に外面がひどく元の面を止どめない。外面には煤が付く。胎土に小礫が多く含む。	不良 不良 灰褐色
134 —24 —26 土師器 甕	4—1681—2 A12b KP—1	— 17.6 22.2 29.3 8.2	口縁部の1/3程度を欠く。口唇部に近い部分が横ナデされるが内外面の器壁全体を刷毛でととのえている。口縁部外面には意識的に付けたものか二本の沈線が付く。底部はやや大きく、平らにしっかりと作られる。下半部は火をうけた為か赤変する部分がある。煤も付着する。	良い 良い 灰褐色
古墳時代祭祀跡出土土器				
135 —25 —26 須恵器 坏身	4—483—35 ト5・8—B KI—1	— 10.0 12.3 5.1 —	1/2が残る。底部外面の大半を丁寧な篦削りで仕上げている。底部内面にはナデマワシ。体部内面・立上がりは横ナデ仕上げとなる。全体を厚めに作り口唇部や受部先端も丸みを持つ。内面には粘土の繋ぎ目と思えるシワも残る。胎土に砂が多い。体部外面に黒班がある。	粗い 不良 灰白色
136 —25 —26 土師器 坏身	4—483—13 ト5・8—B KI—1	— 11.7 12.8 5.6 —	1/4を欠く。口縁部の内外は丁寧に横ナデし、口唇部も内傾させ平滑にしている。内面は篦整形の後にナデマワシて器面を整えている。器面は内外とも精緻で堅く焼き上がっている。体部外面下半には整形時の指頭痕の凹みがそのまま残る。胎土には雲母を含み砂は少ない。	良い 良好 赤褐色
137 —25 —26 土師器 坏身	4—483—25 ト5・8—B KI—1	— 11.6 12.0 5.7 —	完形品。口縁部内外面は横ナデ仕上げ、内面は指頭痕の凹凸を残したナデマワシ。籾痕もある。外面は全体を板状の物で不定方向にナデて器面を整えている。外面の1/2程が二次火力を受けたものか、淡黄色に変わっており器壁が荒れている。	良い 良好 赤褐色
138 —25 —26 土師器 坏身	4—483—1 ト5・8—B KI—1	— 12.2 — 5.0 —	完形品。口縁部の先端部分の内外が横ナデで整えられている。体部内面はナデマワシで調整しているが指頭痕の凹みが残る。体部外面は指頭痕を残し殆ど未調整だが底面は篦でナデて器面を整えている。口縁部に黒斑がある。胎土には雲母・砂が多く混じる。	普通 良い 赤黄褐色
139 —25 —26 土師器 坏身	4—483—3 ト5・8—B KI—1	— 12.1 — 5.3 —	完形品。口縁部の先端部分が横ナデ。内面はナデ仕上げされる。外面は剝落が激しく調整法が分明でない。胎土は完全に混ざっておらず淡黄色や赤茶粘土が、縞状に混じる部分があり、雲母を含み砂粒は無い。	良い 不良 黄褐色
140 —25 —26 土師器 坏身	4—483—2 ト5・8—B KI—1	— 11.9 — 5.0 —	口縁部の2/3を欠く。口縁の先端部は横ナデされ内面はナデ仕上げされる。底部付近には刷毛目や指頭痕が残り整形の跡を伺わせる。器面の調整は雑である。外面は器壁の荒れが激しい。胎土には砂粒が多く混じる。	粗い 不良 赤褐色
141 —25 —26 土師器 坏身	4—483—7 ト5・8—B KI—1	— 13.8 — 5.7 —	1/2が残る。口縁部の内外面が横ナデされ口唇部を丸く仕上げている。内面はナデで平滑に仕上げている。体部外面は指頭による整形痕の凹みは少なく、細かな刷毛目を残す。底部はナデによって平滑に仕上がっている。胎土には比較的砂が少なく雲母が混じる。	普通 良い 淡褐色
142 —25 —26 土師器 坏身	4—483—10 ト5・8—B KI—1	— 16.8 — 6.7 —	口縁部の1/3を欠く。口縁部は内外から横ナデされる。内面はナデマワシでほぼ平滑に器面を整えている。体部外面は指頭痕を残し殆ど未調整。底面は手持ちによる不定方向の篦削りで、平底に作り出している。胎土には小礫が混じる。	普通 良い 黄褐色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
143 —25 —27 土師器 坏身	4—483—31 ト5・8—B KⅠ—1	— 12.3 — 7.7 4.7	完形品。口縁部が内外から横ナデされる。内側がやや強く撫でられ凹みを作って口唇部を丸く作る。内面はナデマワシて器面を調整している。外面は凹凸を残すが底部までナデ仕上げされ平底に作られる。胴部外面に二次火力を受けた跡がある。胎土には雲母を含み砂粒は少ない。器壁も厚く深めの土器である。	良い 普通 黄褐色
144 —25 土師器 高坏	4—483—19 ト5・8—B KⅠ—1	— 13.7 — 10.8 8.1	坏部は1/6が残り脚部と接合しない。口縁部と脚裾が横ナデ。脚内面には篦の削りと絞り目が残る。焼成が悪く、器壁が荒れ胎土中の砂が浮き上がっているため、調整法の詳細は不明。胎土には多量の砂と雲母が混じる。	粗い 不良 肌色
145 —25 —27 土師器 高坏	4—483—48 ト5・8—B KⅠ—1	— 15.3 — — 10.1	口縁部は1/4しか残らず体部と接合しない。口縁部の内外面は横ナデ。坏部内面はナデマワシ、底部外面はナデツケ等の凹凸は無く、ナデによって平滑にしている。脚部内面は篦で削られ上面には粘土の突起が残される。脚裾は横ナデし端部を丸く作る。口縁部は坏底外面で段を作って斜め上方に立ち上がる。	精良 良い 肌色
146 —25 —27 土師器 高坏	4—483—17 ト5・8—B KⅠ—1	— 14.6 — 11.0 11.1	口縁部の2/3を欠く。坏部内面はナデマワシ。口縁部と脚裾が横ナデされる。脚内面には掻き出す様な指頭痕が残る。器面の摩滅が進んでいるため詳細は分明でない。坏部は屈曲部で段を作らず深めの坏部となる。脚は中実となる。	粗い 不良 赤褐色
147 —25 —27 土師器 高坏	4—483—33 ト5・8—B KⅠ—1	— 14.2 — 10.3 8.7	完形品。器壁の摩滅が激しいため口縁部の横ナデ以外ははっきりと観察出来ない。坏部の底径はやや小さく腰も張らずに口縁部が斜めに立上がる。脚は中実となり内面に篦の整形痕を残す。胎土は砂・小礫・雲母を含む。	粗い 不良 赤褐色
148 —25 —27 土師器 高坏	4—483—16 ト5・8—B KⅠ—1	— 12.7 — 10.2 8.7	口縁部の1/2を欠く。口縁部内外面・脚部外面は横ナデで仕上げている。脚内面には篦の整形痕が放射線状に残る。脚裾は横ナデして横に開く。保存状態が悪く他の調整・整形法ははっきりしない。脚は中実となり胎土には雲母を含み砂・小礫は少ない。	粗い 不良 赤褐色
149 —25 —27 土師器 高坏	4—483—11 ト5・8—B KⅠ—1	— 15.4 — 11.3 9.0	口縁部の1/3を欠く。保存状態が悪く細部の調整法は不明。口唇部や脚裾の端部も摩滅が進んで判然としない。脚は中実である。胎土は小礫と雲母を含む。	粗い 不良 赤褐色
150 —25 —27 土師器 高坏	4—483—26 ト5・8—B KⅠ—1	— 14.3 — 10.0 9.9	口縁部の1/4を欠く。口縁部の内外面とも横ナデ仕上げ。坏の内面は剝落して欠損、外面には刷毛の整形痕が残る。脚外面はきれいに横ナデされ、脚裾は横に広がる。内面には絞り目が残る。胎土には小礫を含まず雲母と赤茶色の泥粒が混じる。	良い 良い 淡褐色
151 —25 土師器 高坏	4—483—38 ト5・8—B KⅠ—1	— 17.1 — 11.4 10.2	坏部の1/4・脚部の2/3が残る。口縁部の内外面は横ナデ仕上げ。坏内部底面は篦研磨痕が暗紋状に残る。脚外面と脚裾内外面は横ナデ仕上げ、内面は篦で削り天井部は指で押えた指頭痕を残し中空となる。胎土に砂は無く雲母を含む。脚断面は茶色、内面は暗灰色となっている。	良い 良い 淡赤褐色
152 —25 —27 土師器 高坏	4—483—23 ト5・8—B KⅠ—1	— 17.6 — 10.4 10.3	坏の1/3と脚の2/3が残る。口縁部と脚裾の内外面は横ナデ。坏の内外面と脚の外面がナデ仕上げされる。坏内面には刷毛整形のあとがこり脚内面には絞り目が顕著。坏外面の脚との接合部は丁寧にナデて凹凸を残さない。胎土には砂が少ない。	良い 普通 淡黄褐色
153 —25 —28 土師器 高坏	4—483—24 ト5・8—B KⅠ—1	— 15.6 — 10.6 9.5	坏部の1/2・脚部の1/3を欠く。器壁の荒が進み調整法がはっきりしない。坏外面と脚裾に刷毛目がのこされる。脚内面には絞り目があり先端部は横ナデされる。脚は中実である。胎土には小礫と赤茶泥粒が混じる。	不良 不良 赤褐色
154 —25 —28 土師器 高坏	4—483—36 ト5・8—B KⅠ—1	— 13.6 — — 9.8	坏部の1/2程度を欠く。口縁部に近い部分の横ナデが観察されるが他は器面の荒れが激しく不明。脚内面は篦の削り痕と絞り目が残り、天井部には粘土の突起が付く。胎土には砂は含まず雲母が混じる。	良い 不良 赤褐色
155 —25 —28 土師器 高坏	4—483—30 ト5・8—B KⅠ—1	— — — — 9.8	坏部を欠く。脚全体が横ナデ仕上げ。内面に絞り目が残り上半部は中実。胎土には砂が含まない。脚上半部の断面を見ると坏底部に脚を挿入して接合しに様子が伺われる。	良い 良い 黄褐色
156 —25 —28 土師器 高坏	4—483—41 ト5・8—B KⅠ—1	— — — — 10.3	坏部を欠く。脚裾は内外から横ナデする。内面は篦で削り天井部の粘土の突起は指で押えている。坏部との接合法は坏部の底面に突出を作り脚に挿入している。胎土には雲母を含む。	粗い 不良 黄褐色
157 —26 —28 土師器 鍔	4—483—22 ト5・8—B KⅠ—1	— 8.9 10.0 9.5 —	口縁部の一部を欠く。口縁部内外面から肩部にかけては横ナデ仕上げ。内面には掻揚げる様な指頭痕が残る。胴部外面には指頭痕の凹凸と篦によるナデ跡が残る。肩部にやや上向きの孔が開けられる。胎土に雲母含む。胴部下半に4×2㎝程の黒斑がある。	粗い 不良 淡黄褐色

番号	挿図 写真図版	器種	登録番号	出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
158	—26 —28	土師器　坩	4—483—21	ト5・8—B KⅠ—1	— — 12.0 — —	口縁部を欠く。口縁部から肩部は横ナデ、胴部上半は縦のナデ、下半から底部にかけては不定方向の篦削りで丸底にし、外面全体を球形に仕上げている。内面は掻揚げる様なナデと篦による削りで器壁を整えている。胎土には細かな砂と雲母がまじる。篦削りの残る底面には、煤が付き火力によって赤変している。	普通 良い 黄褐色
159	—26 —28	土師器　坩	4—483—43	ト5・8—B KⅠ—1	— 9.4 13.9 14.7 —	口縁部の一部が欠けるが完形品。口縁部内外面・頸部外面が横ナデされる。胴部上半は篦整形の後のナデ、下半は指による押えと篦削りで器面を整える。底部は篦で丸底ぎみに作り出している。胎土には砂は少なく雲母が含まれる。胴部に黒斑あり。底部から胴部下半に煤が付着する。	良い 良い 黄褐色
160	—26 —28	土師器　壷	4—483—39	ト5・8—B KⅠ—1	— — 13.3 — —	口縁部を欠く。全体がナデ仕上げされているが、器壁の荒れが激しく表面に白色砂（石英？）が多く浮出ている。作りは粗雑で器壁も厚く底部も不整形で器形の歪みも大きい。底部外面は火力によって赤変し胴下半部には煤が付着している。内面底部は器面の剝落が進む。	粗い 不良 黒灰色
161	—26 —29	土師器　壷	4—483—40	ト5・8—B KⅠ—1	— — 23.7 — 6.7	胴部の1/2が残る。外面は指で押えた後に篦のナデが粗く施され、凹みが多く残る。内面は雑なナデで粘土の繋ぎ目を撫で付けている。底面には刷毛の整形痕が残る。底部には籾痕や藁屑の跡が付いている。胎土には砂が多い。	粗い通 良い 灰褐色
162	—27 —29	須恵器　坏身	7—1586	リ5—B KⅠ—2	— 9.5 12.2 4.6 —	完形品。体部外面の大半を篦削りによって仕上げる。受部はやや斜め上方へ引上げ、立上がりは直立させ口唇部は内傾させる。立上がりは高く器高との比はほぼ2：1となる。内面は横ナデされるが底部の中央には静止ナデの跡が残る。断面は茶褐色で小礫が混じる。	普通 硬質 淡灰色
163	—27 —29	須恵器　坏身	7—1585	リ5—B KⅠ—2	— 10.0 12.2 4.6 —	完形品。体部外面は2/3が篦削りで仕上げられる。受部は横に引き出され、やや内傾した立上がり部となる。口唇部は面を作って内傾する。腰の張った体部となり立上がりはやや低く器高との比は3：1程になる。底面には火襷の黒変がある。胎土には砂粒が多く断面は茶色になっている。	良い 良い 灰色
164	—27 —29	土師器　坏身	7—1596	リ5—B KⅠ—2	— 12.6 — 4.7 —	完形品。口縁部内外面が横ナデ。内面はナデマワシで平滑に仕上げている。胴部から底部の外面は指頭に因る整形の上に篦で撫でて器面を整えているので凹凸が残る。底部と口縁部に黒斑がある。	粗い 不良 褐色
165	—27 —29	土師器　坏身	7—1595	リ5—B KⅠ—2	— 13.4 13.9 5.9 —	完形品。口縁部内外面と胴部外面は横方向に篦ナデする。内面はナデ仕上げで凹凸がない。底部外面は不整方向に篦でナデて調整している。粘土が乾いてからのナデか暗紋状になっている部分もある。内外に化粧粘土を張っている。口縁部から底部にかけて黒斑がある。胎土には小礫が混じる。	不良 不良 赤褐色
166	—27 —29	土師器　坏身	7—1597	リ5—B KⅠ—2	— 14.2 — 5.5 —	口縁部は僅かに残るだけだが下半部は全部のこる。口縁部内外面は横ナデ。外面は指頭による整形の後に雑なナデで凹凸を少なくしている。内面は一面に付着した酸化鉄により観察不能。胎土は精選され砂は無い。	精良 不良 黄褐色
167	—27 —29	土師器　坏身	7—1594	リ5—B KⅠ—2	— 12.9 — 6.2 —	完形品。口縁部の内外が横ナデ、内面は化粧粘土を張った為か剝落が激しい。外面には刷毛目や凹凸が残り整形の痕をそのままのこしている。腰のやや張る深めの坏で口唇部を内傾させる。	粗い 不良 赤褐色
168	—27 —29	土師器　高坏	7—1588	リ5—B KⅠ—2	— 15.6 — — —	脚裾を欠く。口縁部内外面を横ナデで仕上げている。内側のナデを強くして口唇部を丸くつくる。内面と胴部外面は剝落と酸化鉄の付着により観察不能。脚内面は篦で削っている。脚上端を坏に挿入して接合する。保存状態が悪く他の調整・整形法ははっきりしない。胎土には砂は無く精選されている。	精良 不良 黄褐色
169	—27 —29	土師器　高坏	7—1587	リ5—B KⅠ—2	— 17.0 — 10.1 11.8	坏部と脚部の一部を欠く。脚部に比して坏部が大きく深い器形となる。保存状態が悪く調整法は観察出来ない。化粧粘土が施される為か剝落が激しい。口唇部や脚裾の端部も摩滅が進んで判然としない。脚は中実で脚上端を坏底部に挿入して接合している。胎土は小礫と茶色の泥粒を含む。	粗い 不良 赤褐色
170	—27 —29	土師器　高坏	7—1590	リ5—B KⅠ—2	— 17.4 — 10.3 10.2	口縁部と脚裾の1/2を欠く。口縁部の内外面・脚裾とも横ナデ仕上げ、坏の内面はナデ。外面には指頭による整形痕が残る。脚内面には絞り目が残る。脚上端を坏に挿入して接合する。胎土には砂を含む。坏部に黒斑あり。	良い 不良 赤黄褐色
171	—27 —30	土師器　高坏	7—1589	リ5—B KⅠ—2	— 16.8 — 12.2 11.3	口縁部と脚裾の一部を欠く。口縁部と脚裾の内外面は横ナデ仕上げ。脚外面に縦の整形痕。内面に指頭による掻き撫で痕が観察される。保存状態が悪いので他の整形・調整法は不明。脚は中実で脚上端を坏に挿入して接合する。	良い 良い 淡赤褐色
172	—27 —30	土師器　高坏	7—1591	リ5—B KⅠ—2	— ? — 11.7 10.5	坏の2/3を欠く。表面の剝落が激しく調整・整形法の観察不能、ただ脚内面の篦の削りと絞り目が観察される。	粗い 不良 赤褐色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
173 —27 —30 土師器　高坏	7—1592 リ5—B KⅠ—2	— 15.0 — — —	脚部を欠く。口縁部内外面が横ナデ、内面は篦の整形痕を残すがナデマワシに因って器面を整える。表面の剝落多い。体部と坏底部との境には粘土の繋ぎ目を、くびれとして残す。坏の底部外面を突出させ脚上端に挿入して、坏部と脚部を接合する。	精良 不良 赤褐色
古墳時代溝状遺構出土土器				
174 —29 須恵器　坏身	7—1628—7 KT—201 2区	— 10.9 12.4 — —	口縁部の1/5が残されるだけ。残された体部の下端に篦削りが終わった痕跡があり体部のほぼ半分が篦削りされていた。端部はシャープに作られ口唇部にも坦面を作る。胎土には砂を含まず断面は赤茶色。体部外面に白い斑点状の自然釉が付く。	良い 硬質 暗灰色
175 —29 —30 土師器　坏身	7—1630 KT—201 2区	— 13.3 14.5 5.3 —	1/2が残る。口縁部の内外面が横ナデ仕上げ。内面は摩滅のため不明。胴部外面には指頭痕状の凹みや、ナデ跡なども見られるが詳細は不明。底部を上底状に作って口縁部は内彎させる。胎土には砂は無く気泡と赤茶色の泥粒が見られる。内面には煤状の炭化物が付着する。外面は灰褐色。	良い 不良 黄褐色
177 —29 —30 土師器　坏身	7—1623 1631 KT—201	— 12.8 — 4.9 —	口縁部の一部を欠くがほぼ完形品。口縁部内外面は横ナデ仕上げで口唇部を内傾させる。胴部外面には指頭痕と思える凹みとナデ跡が残るが、摩滅が進んでいて詳細は不明、内面はナデマワシて器面を平滑に整えている。胎土には砂が少なく赤茶色の泥粒が混じる。底部外面には8×4㎝程の黒斑がある。	良好 不良 赤褐色
179 —29 —30 土師器　高坏	7—1624 KT—201	— 18.3 — — —	口縁部の一部と脚全体を欠く。口縁部内外面が横ナデされる。坏内面はナデマワシで仕上げる。坏体部外面は指に因る押えと粗いナデで器面を整える。坏底部に突起を作り出し脚と接合する。	普通 良い 黄褐色
180 —29 土師器　壷	7—1642 KT—201 3区	— — 26.5 — —	胴部の1/4程を残すだけで口縁部も底部も欠く、器面には整形時のものと思える凹みが多く残り、内外面とも篦状の物で器壁をナデて調整している。胎土には砂は無く精選している。外面全体に煤が付着しているが、内面には煤は無く平滑に仕上げられている。	精良 良い 赤褐色
181 —29 土師器　甑	7—1628—2 KT—201 2区	— 22.4 — — 9.6	口縁部の1/4、底部の1/4を残す、上下は接合しないが胎土から同一個体（甑）と考えた。器壁の荒れが激しく調整法がはっきりしない。指頭痕と思える凹みが観察される。胎土に砂と赤茶色の泥粒が混じる。	粗い 不良 赤褐色
182 —29 —30 土師器　甕	7—1629 KT—201 2区	— 14.7 17.5 17.5 —	完形品。口縁部内外面は横ナデ、外面は肩部から底面まで篦状のものでナデ仕上げ。内面は肩部に粘土を撫で付けた指頭痕を残すが丁寧にナデ仕上げされる。底部内面には相対する4個の脹らみが残る、外面は整形されているが篭目土器の可能性有り。外面には煤が付き火力による赤変が著しい。内面胴部下半にも炭化物付着。	砂多い 普通 黄褐色
183 —29 —30 土師器　甕	7—1628—1 KT—201 2区	— 19.3 19.2 — —	口縁部の1/8胴部の1/2が残る。口縁部外面から肩部が横ナデされる。胴部外面は目の粗い縦の刷毛、口縁部と胴部内面は目の粗い横の刷毛で器面を調整している。胴部外面に二次火力を受けた跡がある。胎土には砂粒が多い。器壁も厚く深めの土器である。	不良 不良 黄褐色
184 —31 土師器　鉢	7—1628—3 KT—201 2区	— ? — — —	口縁部破片を20㎝程残す。口径を復元すると40㎝以上になる。口縁部を肥厚させ口唇部を外側に折曲げ端部は丸くする。口縁部の内外は横ナデされるが外面には整形時の指頭による凹みを残す。胴部は内外ともに篦状のものでナデ仕上げ。胎土には砂・小礫が混じる。外面に黒斑がある。	粗い 不良 赤褐色
185 —31 土師器　鉢	7—1728—5 KT—201 2区	— ? — — —	口縁部破片が20㎝程残る。口唇部の残りが少ないので口径を復元出来ないが40㎝程度と推定している。肥厚された口縁部を外側に軽く折曲げ頸部を作り口縁部も外に折って丸く作る。口縁部の内外が横ナデされ胴部は篦のナデ仕上げ、口縁部から頸部に指頭痕がのこる。胎土には砂が少なく赤茶色泥粒が混じる。	普通 普通 赤黄褐色
185-2 —31 土師器　鉢	7—1628—4 KT—201 2区	— — — — 6.6	底部がのこる。胎土の状態から185と同一体と考えているが確証は無い。外面は指頭による整形の後に雑なナデで凹凸を少なくしている。全体に煤が付着し火力による赤変もある。内面は篦によるナデで平滑に仕上げ中心部には炭化物の付着あり。胎土には砂は少ない。	普通 普通 赤黄褐色
186 —31 —30 須恵器　坏身	7—1816—1 ッ1 KT—330	— 10.6 12.8 4.1 —	1/2が残る。底部外面の1/3が篦削りされ底面は平らに作っている。受部は下面に沈線を置くように横ナデして作り出している。内面はノタメを残さない丁寧なナデ。立上がりは低く内傾して端部は丸く仕上げている。内面中央には静止ナデあり。	やや粗い 良い 暗灰色
188 —31 —30 須恵器　坏身	7—1820 ッ3 KT—307B南	— 9.0 10.9 2.5 —	完形品。形態から言って蓋とすべき物である。立上がりはほとんど無く受部より僅かに顔を出す程度。底部は切り離した後を軽く押えた程度で未調整。内面には内当ての後が残されている。受部と体部外面に灰釉状の自然釉が見られる。	粗い やや軟質 灰色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
189 —31 —31 須恵器 坏蓋	7—1823—2 ッ5 KT—310B	— 11.6 — 5.0 —	口縁部の2/3を欠くが体部は残る。天井部の半分程が篦削りされるが中心部に切離し痕を残したままで雑な仕上げ。口縁部は沈線によって体部と画され内彎しながら丸い口唇部を作って終わる。外面には二本線の篦記号があり、内面には指痕が残る。	粗い やや軟質 灰色
190 —31 —31 須恵器 坏身	7—1823—1 ッ5 KT—310B	— 9.5 11.8 4.0 —	完形品。底部外面の篦削りは器面に添って削った後で底面を一回転で削る。底面は平底にならず山形になる。受部は丸くなり内彎ぎみに付けられた低い立上がりが作られる。内面中央には指痕と内当て痕が残る。体部外面に灰釉状の自然釉が見られる。	普通 良い 灰色
191 —31 須恵器 坏身	7—1825—2 ッ5 KT—310B	— 8.4 10.4 — —	1/4が残るだけ。体部外面の半分が篦削りされ、他は横ナデで丁寧に仕上げている。体部は丸みを持ち立上がりは直線的に内傾して付けられる。胎土は砂も少なく精選されている。	良好 軟質 白灰色
192 —31 —31 土師器 台付甕	7—1825—1 ッ5 KT—310B	— — — — 13.3	体部を欠き脚部のみ。外面は整形時の指頭痕の凹凸と薄い刷毛目を残すがきれいにナデ仕上げされている。内面は細かな刷毛で全体をととまえている。脚先端は粘土を内側に折曲げて終わっている。脚は体部底面を作った後に円筒状の脚が接合されている。火力による変化あり。胎土は雲母を含み砂が多いが均一。	良い 良い 灰黄褐色
193 —31 須恵器 壷	7—1824 ッ5 KT—310B	— 10.9 12.4 — —	体部の1/4がのこされる。口縁部と底部をまったく欠く。体部下半は篦削りされ肩部と体部上半に沈線が付けられる。内面は横ナデできれいに仕上げられる。胎土は砂が少なく良い。肩部外面に淡緑色の自然釉が付着している。	良い 硬質 白灰色
194 —31 土師器 甕	7—1816？ ッ区KT KT—308C	— 21.5 — — —	口縁部内外面は横ナデで仕上げられる。外面は目の細かな刷毛で丁寧に器面調整している。内面には整形痕である刷毛目や指頭痕の凹凸が残される。口縁部を厚く作り先端を大きく外反させ口唇部を丸く作る。	赤褐色
195 —31 —31 須恵器 鍋	7—2957 ッ3 KT—308C	— — 11.6 — —	口縁部と頸部を欠く。底面を篦削りし体部は横ナデによって仕上げられるが肩部先端の上面は篦削りが一巡している。注口部は肩部に新たな粘土を継ぎ足して作り体部からやや突起する。体部は肩部で軽い稜を作り断面が算盤玉形になる。肩部外面に灰釉状の自然釉が付く。	

古墳時代井戸遺構出土土器

196 —34 須恵器 坏蓋	6—3206—2 ハ7W—V_3 KG—1	— 10.4 — 3.7 —	1/3が残る。天井部外面の半分が三回の篦削りで仕上げられている。口縁部は体部からならだかに続き沈線によって体部と画される。口縁内部にも細い沈線がある。使用による摩滅が内外面とも著しい、口唇部や篦削りの稜が平滑になっている。断面は赤茶色、内面は灰褐色。	良い 良い 暗灰色
197 —34 須恵器 坏身	6—3206—1 ハ7W—V_3 KG—1	— 8.0 9.8 3.7 —	1/2が残る。底部外面の1/3を二回の篦削りで仕上げている。体部は横ナデ仕上げで、斜めに直線的に立上がり深く内傾する立上がりが付く。底部や受部等の端部は摩滅か著しい。内面には内あて痕、底部には篦記号がある。破片の状態で火力を受けて灰褐色に変質し炭化物も付着する。	良好 焼きナマリ 灰褐色
198 —34 —31 須恵器 坏蓋	6—3222 ハ8E—V_6 KG—2	— 11.2 — 4.1 —	1/2が残る。天井部を二回の篦削りで整え、口縁部は体部から内彎気味に横ナデして作っている。内外面とも摩滅が進む、特に口唇部内側が著しい。内面には茶褐色の付着物（有機物？炭化物？）が全面に見られる。	粗い 軟質 黄灰色
199 —34 土師器 甕	7—3414—2 ハ8E KG—2	— ? — — —	口縁部の細片を残すだけで口径は不明。内面は刷毛目を薄く残し、刷毛整形の後に横ナデ仕上げ。外面は横ナデで口唇部を平らに仕上げている。胎土には白砂が多く含む。	粗い 普通 赤褐色
200 —34 土師器 甕	7—3414—3 ハ8 KG—2	— 18.3 — — —	口縁部破片の細片を残す。頸部の外面と口縁部の内面には細かな刷毛目が残すがともに横ナデで丁寧に仕上げられている。全体的に器壁が厚い。口縁部は体部から立上がり途中で少し外曲し口唇部へ続き丸みを持っておわる。胎土には砂が多く雲母も含む。	粗い 良い 灰褐色
201 —34 —31 須恵器 坏身	7—1014 A15iN KG—3	— 8.4 11.9 4.2 —	完形品。底部外面はの1/3が雑な篦削りで、中心部には一部切り離し痕がそのまま残される。その他の体部の内外面は横ナデ仕上げによる。体部はやや厚めに作られ内彎ぎみの受部に内傾する立上がりが付く。胎土は完全に混ぜられておらず灰白色と黒灰色の粘土が縞状に混じる。	普通 やや軟質 黄褐色 淡灰色
202 —34 須恵器 坏身	7—1016—2 A15iN KG—3	— 9.8 11.9 — —	口縁部の1/3が残る。体部外面の下端は篦削り他は横ナデされる。体部は斜め上に緩やかに立上がる。受部は一旦内側に屈曲させ先端部が立上がる。受部は横方向につまみ出す様に付けられる。内外面全体に茶褐色の付着物がある。受部・口唇部内側等に摩滅が激しい。胎土に砂は無く断面は茶色。	良い 良い 暗灰色

番号 挿図 写真図版	器種	登録番号	出土位置	法量cm 口径	最大径	器高	底径	技法・調整の特徴	胎土	焼成	色調
203 —34	須恵器 坏蓋	7—1016—10	A15iN KG—3	—	13.8	—	—	口縁部破片の1/3を残す。天井部外面の1/2が篦削りされ他は丁寧に横ナデされる。口縁部は体部から緩やかに下がって肩部に段を作らず口唇部近くが直立する。口唇部内側は摩滅。胎土はやや粗く断面は茶色、内外面茶褐色の付着物がある。	粗	軟	い 質 黄灰色
204 —34	須恵器 坏蓋	7—1016—8	A15iN KG—3	—	13.8	—	—	口縁部破片が僅かに残る。天井部外面の1/2が篦削りされる。その他は横ナデで仕上げられる。口縁部は体部と浅い沈線で画され、ほぼ直立して終わる。口唇部は段を作って内傾する。胎土には小礫・白砂がまじる。	粗	硬	い 質 暗灰色
205 —34	須恵器 坏蓋	7—1016—9	A15iN KG—3	—	16.6	—	—	1/3が残る。天井部外面の大半を篦削りで仕上げている。内面中央に静止ナデの痕跡を残すが他の部分は横ナデ仕上げ。体部は肩部で折れ曲り外面には下を沈線で画した稜をもつ。口縁部はほぼ垂直に立ち口唇部は丸く作る。外面に灰釉状の自然釉が付く部分がある。	粗	軟	い 質 淡灰色
206 —34	須恵器 坏身	7—1016—6	A15iN KG—3	—	11.3	14.4	—	1/4が残る。底部外面の1/3が篦削りされる。体部は腰が張らずなだらかに受部へと続き、やや内傾する低い立上がりが横ナデ仕上げされる。器高は低め、外面は淡緑色の自然釉が斑点状に見られる。断面は淡褐色で白砂が含まれる。	粗	硬	い 質 淡灰色
207 —34	須恵器 坏身	7—1016—7	A15iN KG—3	—	12.4	14.4	—	1/4が残る。底部外面の1/3が篦削りされる。器高はあまり高くなく立上がりも低い。体部は底部が厚く横ナデ仕上げで腰は張らずになだらかに受部へと続く。受部は横方向へ引き出される。体部外面は自然釉が全面に灰釉状に吹き出している。断面を見ると砂がやや多く混じり淡褐色。	普	硬	通 質 灰色
208 —34	須恵器 坏身	7—1016—5	A15iN KG—3	—	12.0	14.2	—	1/4が残る。体部外面は1/3が篦削りされている様であるが全面に自然釉が濃く吹き観察不能。体部は底部が厚く腰の部分で少し折れ受部へと続く。立上がりは受部の内側から引き出される様に内傾して付けられる。内面の中央部には静止ナデの後がはっきりと残される。断面は白砂が混じり赤茶色。	粗	硬	い 質 暗灰色
209 —34	須恵器 坏身	7—1016—3	A15iN KG—3	—	11.9	14.0	—	口縁部の1/8が残るだけ。底部の2/3程が篦削りされる。立上がり部は体部から直立ぎみに続き口唇部内側には軽い平坦面を作る。受部は横方向に引き出され上面には自然釉が付く。胎土には白砂が混じる。	粗	硬	い 質 暗灰色
210 —34	須恵器 坏身	7—1016—4	A15iNⅦ KG—3	—	12.6	14.8	4.8	1/3が残る。底部外面の大半を篦削りで仕上げている。器壁は薄く作られ受部も横に薄く引き出される。立上がりは体部から内傾ぎみに続き口唇部は段を作ってて内傾する。内面中心部には静止ナデが残り他はきれいに横ナデされる。胎土は砂も少なく精選され断面も暗灰色。	良	普	い 通 暗灰色
211 —34 —31	土師器 甕	7—1020—2	A15fNⅦ KG—3	—	15.9	17.0	—	体部の1/4が残る。体部・口縁部ともに刷毛仕上げ。内面は横方向に幅の広い目の細かな刷毛で丁寧に仕上げ、外面は縦方向の刷毛で器面を整えた後でナデ仕上げし刷毛目が薄く残る。口縁部も横ナデされるが刷毛目は薄く残る。胴内面の下端部は胎土の繋ぎ目の上を棒状の物で撫で付けている。胎土に雲母が混じる。	粗	良	い い 灰褐色
212 —34 —31	土師器 甕	7—1020—1	A15fN KG—3	—	13.7	15.7	—	口縁部の2/3と底部を欠く。体部外面は縦の刷毛で仕上げられ内面は口縁部から横の刷毛で仕上げているが胴下半部は不定方向の刷毛である。口縁部には軽く横ナデした痕跡も残る。胎土には砂が混じるが均一であり精選されている。外面には煤が多く付着し内面全体にも煤状の炭化物が付着して全体が黒色。	良	良	い い 灰褐色
213 —34 —31	土師器 台付甕	7—1015—2	A15iN KG—3	—	—	—	11.1	体部を欠き脚部のみ。外面はナデて器壁を整えているが内外とも整形時の指頭痕の凹凸をそのまま残す。僅かに残った体部内面はナデによって平滑にされている。外面には煤が付着し火力による赤変がある。胎土には砂が多い。	粗	良	い い 灰褐色
214 —34 —31	土師器 高坏	7—1017	A15iN KG—3	—	10.7	9.9	10.4	坏部と脚の一部を欠く。坏部は口縁部を横ナデした後に内面は放射状に、外面上半は横に、下半は不整方向に丁寧な篦研磨で仕上げる。脚裾は内外から横ナデされ端部を丸く作る。脚内面は篦削りできれいにえぐって整形している。胎土には小礫が混じる。	良	良	い い 赤褐色
古墳時代方形周溝墓出土土器											
215 —34	土師器 高坏	5—268	ト5 KC—1	—	—	—	8.7	坏部上半を欠く。脚外面は篦で縦に整形している。脚裾は内外を横ナデして端部を丸く仕上げている。脚内面には指頭による掻き出す様な整形痕が残されている。坏部は腰の部分で軽く段を作って立上がる。	悪	黄	い 褐色

番号 挿図 写真図版	器種	登録番号	出土位置	法量cm 口径	最大径	器高	底径	技法・調整の特徴	胎土	焼成	色調
古墳時代出土土器											
301 —38 —32	須恵器 坏蓋	6—1286	A10f—B	—	13.8	14.2	5.2 —	口縁部の1/2を欠く。天井部外面のほぼ全面を丁寧な篦削りで仕上げ、重ね焼きした跡がくっきり残る。口縁部は肩部のしっかりした稜の下部で折れ曲り、内彎して立ち口唇部は内傾する。口縁部の内面は回転横ナデされるが、天井部内面は全体が静止ナデで仕上げられる。胎土には小礫が混じる。	良 良 青黒灰色	い い	
302 —38 —32	須恵器 坏蓋	6—1828	A10c—B	—	13.1	—	4.3 —	口縁部の1/2を欠く。天井部外面の大半を篦削りで仕上げている。体部は肩部で（稜の下部）折れ曲り外面にはやや甘いが稜を作る。口縁部は内外面を横ナデし、ほぼ直立して口唇部は内傾させる。内面は横ナデ仕上げ。胎土には小礫が混じる。全体的にはシャープさに欠ける。	粗 やや灰	い 軟白	質色
303 —38 —32	須恵器 坏蓋	7—1692	A14g—B	—	11.8	—	4.7 —	口縁部の一部を欠くがほぼ完形品。天井部外面の2/3程をやや雑な篦削りで仕上げる。内面は横ナデ仕上げするが、粘土のしわが残る部分もあり丁寧さを欠く。口径に比して器高が高い。肩部の稜はしっかりと作られる。口縁部は内外から横ナデ仕上げされほぼ直立する。口唇部は段を作って内傾する。	粗 やや灰	い 軟	質色
304 —38	須恵器 坏蓋	4—1526	B12d—Ⅲ	—	15.8	—	— —	口縁部の1/4を残すだけ。天井部外面の2/3を篦削りし肩部以下口縁部と内面は横ナデ仕上げ。口唇部は段を作って内傾する。体部から口縁部に緩やかに折れ曲がった肩部となり稜の作りも甘くなる。胎土には砂が少ないが完全に混じり合わず黒灰色と灰白色の粘土が縞になって混じる。	良 やや灰	い 軟白	質色
305 —38 —32	須恵器 坏蓋	4—1491	A12f—Ⅲ	—	15.0	—	4.8 —	口縁部の2/3を欠く。天井部外面は2/3が篦削り肩部以下と内面は横ナデ仕上げ。肩部は緩やかに曲がり口縁部はほぼ直立する。肩部の稜は低くなり下の沈線も浅くなる。口唇部は段を作って内傾する。胎土に砂少ない。外面には班点状の自然釉がかかる部分あり。内面には小さな火膨れが多くある。	良 良 暗灰色	い い	
306 —38 —32	須恵器 坏蓋	4—1485—1	A12e—Ⅲ	—	13.8	—	— —	口縁部の1/2が残る。天井部外面の2/3以上が篦削りされ内面は横ナデされる。肩部はなだらかに曲がって口縁部へと続き外面の稜も潰れてしまう。口唇部は内傾するが端部は丸くなる。外面肩部から口縁部に自然釉が付着している。胎土には砂が多い。	粗 良 黒灰色	い い	
307 —38	須恵器 坏蓋	4—1672—1	A12c—Ⅲ中	—	—	—	— —	口縁部の先を欠くため口径は不明だが16cmを超える。外面天井部の篦削りは切り離し痕が残り丁寧さに欠ける。肩部は体部から口縁部にかけてなだらかに続き屈曲は少ない、肩部には退化した稜を作り出している。内面には叩き目（内あて）が広い範囲に残されている。	粗 普暗灰色	い 通	
308 —38	須恵器 坏蓋	4—1518—1	B12a—Ⅲ上	—	14.6	—	— —	口縁部破片の1/3を残すが天井部を欠くため高坏の蓋の可能性がある。天井部はほぼ半分が丁寧に篦削りされ肩部以下の内外面は横ナデで仕上げている。肩部の稜は低いがシャープに作られる。口縁部の先端外面に叩き目（刷毛目？）の圧痕が残る。	粗 硬淡灰色	い 質	
309 —38	須恵器 坏蓋	4—1656—1	A12b—Ⅲ下	—	13.3	—	4.4 —	1/4が残る。天井部外面の1/2が篦削りされるが切離しの凹凸を残し雑な仕上り。その他は横ナデで仕上げられる。肩部には沈線で画された稜を置き、体部から屈曲した口縁部はほぼ直立して終わる。口唇部は段を作って内傾ぎみに丸くなる。内面の中央は静止ナデされる。胎土には砂が多く混じる。	粗 軟白灰色	い 質	
310 —38	須恵器 坏蓋	4—1653	A12b—Ⅲ下	—	15.6	—	— —	1/4が残る。天井部外面の大半を比較的丁寧な篦削りで仕上げ他の部分は横ナデ仕上げ。体部は肩部で緩やかに折れ曲り外面には稜をもつ。口縁部は内彎ぎみに立ち口唇部は丸く作る。全体的に作りは甘い。	粗 硬黒灰色	い 質	
311 —38	須恵器 坏蓋	6—1204	A10f—B	—	14.0	—	— —	1/4が残る。天井部外面の半分が篦削りされる。肩部以下と内面が横ナデされるが内面中央には静止ナデの跡がある。肩部外面には上下を沈線で挟んだ稜が作り出されている。口縁部は稜の下部で折れ曲がり口唇部は内傾する。体部は丸みを持ち器高は高い。二次火力を受けたためか赤褐色の土師器色。	粗 焼き戻赤褐色	い り	
312 —38 —32	須恵器 坏蓋	4—613—1	A12a—Ⅱ下	—	13.2	—	4.1 —	1/2が残る。天井部外面の大半を篦削りし内面は横ナデ仕上げとなる。肩部には下に浅い沈線を置いて作った、退化した稜がある。口縁部は稜のやや上で折れ曲がり直立ぎみになる。口唇部は内傾する。断面を見ると砂がやや多く混じる。	普 普灰色	通 通	
313 —38 —32	須恵器 坏蓋	4—1700—1	A12b—Ⅲ下	—	14.5	—	— —	3/4が残る。天井部外面の2/3が篦削りされ他は横ナデ仕上げ。天井部には静止ナデの痕跡が残る。器壁は全体的に厚く天井部からなだらかに口縁部へと続く。口縁部と体部は太い沈線で画されその上に稜が作られる。全体に器高が高い器形となる。胎土には砂・小礫が混じる。	粗 硬淡灰色	い 質	
314 —38 —32	須恵器 坏蓋	4—1650—1	A12b—Ⅲ	—	15.4	—	4.5 —	体部はほぼ残るが口縁部は1/8しか残らない。天井部は1/3ほどしか篦削りされない。体部は横ナデされ、なだらかに下がって口縁部へと続き、肩部をつくらず、口唇部は丸く終わる。天井部には静止ナデが残る。器高は低く全体が丸みを持った作りとなる。	粗 普暗灰色	い 通	

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
315 —38 —32 須恵器 坏蓋	4—1754 A12f—Ⅲ	— 14.7 — 4.6 —	口縁部の先端がほとんど失われるが体部はほぼ残される。天井部外面は半分が篦削りされる。器壁は厚く作られ体部から口縁部になだらかに続き肩部を作らない。器形に歪みあり。胎土には小礫は混じらないが砂が多く粗い。口縁部外面の一部に自然釉が付着する。	粗い やや軟質 灰色
316 —38 —32 須恵器 坏蓋	4—1551 A15i—B₂	— 13.4 — 4.3 —	完形品。天井部外面の1/2がやや雑な篦削りで仕上げられている。他は内外とも横ナデ仕上げ。器形は体部から口縁部にかけて軽く曲がり先端を外反させた口縁部となり器高は低い。外面は二次火力のためか茶褐色に変質している。内面は灰色。胎土に砂は少ない。	粗い 普通 灰色
317 —38 —32 須恵器 坏蓋	4—1693—1 A12f—Ⅲ	— 13.7 — — —	1/2が残る。天井部の大半を篦削りして仕上げている。浅い沈線で肩部を作っている。口縁部はやや内彎して口唇部を丸く作る。器形は天井部からなだらかに下がって口縁上部で軽く曲がり口唇部となる。胎土には砂が少ない。口縁外面には自然釉が薄く乗る。	良い 良い 暗灰色
318 —38 須恵器 坏蓋	6—762 ワ8—B	— 11.7 — 2.7 —	完形品。宝珠形の撮を持つ小形の蓋。撮の付く坦面が篦削りされる、他は横ナデ仕上げ。撮は径17㎜程で頂部が突出する。内面はナデによって平滑にされている。身受部は口縁部先端より下に出ない。体部の外面には灰釉状の自然釉が全面に付着する。	粗い 普通 灰色
319 —38 —32 須恵器 坏蓋	7—1451 ツ2—B	— 11.9 — 2.6 —	完形品。宝珠形の撮を持つ蓋。径26㎜の偏平で頂部が突出す撮が付く。外面は一面に自然釉が噴き調整法の詳細は観察不能。内面は横ナデ仕上げで身受部は口縁先端より出ない。胎土は砂が少ない。	良い 良い 淡灰色
320 —39 —33 須恵器 坏身	4—510—2 チ8S—B	— 10.4 12.4 5.5 —	口縁部の一部を欠くがほぼ完形品。底部外面の大半が手持ち篦削りで調整される。口唇部は内傾させる。立上がり部は内外から回転ナデされるが内面は中心から口縁部へナデ上げている。受部は横に引き出し断面三角形に作る。胎土は砂が少なく精緻。器形は全体的に厚く重厚な作り。	精良 硬質 暗灰色
321 —39 —33 須恵器 坏身	4—1629 A12e—Ⅳ	— 10.2 12.4 5.3 —	完形品。底部外面の2/3以上を回転篦削りで仕上げ他は内外とも横ナデ仕上げ。立上がり部はやや内側に倒れ口唇部は内傾する。受部は横に引き出し断面三角形に作る。受部上面に黄緑色の自然釉が付く。胎土はやや粗いが硬質に焼き上がっている。器形は少し焼き歪みがあるが全体的に厚く作られ体部も深い。	やや粗い 良い 暗灰色
322 —39 —33 須恵器 坏身	7—222 B12d—Ⅲ下	— 11.7 13.6 5.6 —	完形品。底部外面の2/3程を篦削りして仕上げ他は内外面とも横ナデ仕上げ。内面の中心部には内当ての後が残る。受部は斜め上方へ引き出される。立上がり部はほぼ直立し口唇部は内傾する。胎土には白色砂が混じるが均一。	粗い 軟質 淡灰色
323 —39 須恵器 坏身	6—1163—1 A12e—Ⅲ	— 11.6 13.4 5.1 —	1/4が残る。底部外面の2/3以上を篦削りで、内面は静止ナデで仕上げる。体部と立上がりの内外面は横ナデ仕上げされる。口唇部は内傾する。受部は上面を平らにして横に引き出される。二次火力を受けて赤褐色になり底部内外面に剝落もある。胎土は均一。	良い 焼きなまり 赤灰色
324 —39 —33 須恵器 坏身	7—1345 ツ6—B	— 10.8 12.9 5.4 —	立上がりを殆ど欠くが体部は残る。篦削りは底部外面のほぼ半分となる。他は横ナデ仕上げ。受部は横に引き出され端部は薄くなる。立上がりは体部から続いて口唇部は内傾する。胎土はやや粗く砂粒も混じる。器形は全体的に厚めに作られて体部が深い。	粗い 良い 暗灰色
325 —39 須恵器 坏身	7—1649—3 A14hi A15abc —B・C	— 9.5 11.1 — —	1/5を残すだけ。底部外面の半分程が篦削り他の部分は横ナデ仕上げ。受部は横に引き出され上面を平らに作る。立上がりは直立させ口唇部を内傾させる。断面は赤茶色で砂は少ない。残された破片が小さいが全体的な作りはシャープで焼成も良い。器壁は薄い。	良い 良い 暗灰色
326 —39 —33 須恵器 坏身	7—1516 A14d—B上	— 10.9 12.6 4.5 —	完形品。底部外面の大半が丁寧に篦削りされ内面も静止ナデで平滑に仕上げられている。立上がりは内外面が回転横ナデできれいに仕上げてある。口縁先端の外面には浅い沈線を置き口唇部は内傾する。受部は厚く丸みを持ってつくる。端部はシャープで器形全体の作りが非常に丁寧。底部外面に重ね焼きの跡がある。	やや粗い 良い 暗灰色
327 —39 須恵器 坏身	7—249 B11h—Ⅲ上	— 12.5 15.0 — —	口縁部が1/3が残る。外部底面の篦削りは2/3程で、他は比較的丁寧な横ナデ仕上げ。底部中央を欠くので高坏の可能性がある。立上がりは高く先端部を外側に折って口唇部を内傾させる。受部は厚く大きくなり上面を平らに作る。胎土はやや粗いが均一になっている。	やや粗い 良い 黒灰色
328 —39 —33 須恵器 坏身	6—772 A10e—C₁	— 11.9 13.8 5.8 —	1/2が残る。底部外面の半分が篦削りされ内面の中央は静止ナデで仕上げる。他の部分は内外とも横ナデ仕上げになっている。受部は横に小さく引き出され端部は薄くなる。立上がりは一旦内傾して直立し体部に比して高い。口唇部は丸く作られる。胎土には砂が多いが焼成は良く器壁も薄い。	粗い 硬質 暗灰色
329 —39 —33 須恵器 坏身	6—1247 A10c—B	— 13.1 14.4 5.9 —	口縁部の1/2を欠くが体部は残る。底部外面の2/3が篦削り、他は内外面とも横ナデで仕上げられる。受部は下面に凹線を置くようにして斜め横に引き出される。立上がりはほぼ直立し口唇部は内傾する。内面の中央には内当て痕を消したと思える指圧痕が残る。断面と内面が茶褐色。外面が暗灰色。	粗い 軟質 暗灰色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
330 —39 —33 須恵器 坏身	6—1859 A10f—B₂	— 12.8 15.0 5.8 —	口縁部を僅かに欠く。底部外面の大半を丁寧な篦削り、内面は静止ナデで調整している。体部と立上がりは内外面を横ナデ仕上げする。受部は横に引き出され上面を平らに作る。立上がりはやや内傾して立上がり口縁先端を外側に折るようにして口唇部を内傾させる。体部外面には重ね焼きの跡が茶褐色に残り内面も茶褐色。	粗い やや軟質 灰褐色
331 —39 —33 須恵器 坏身	7—1636 A14g—B	— 11.6 13.8 5.1 —	口縁部の1/4を欠く。体部外面のほぼ半分が篦削りされ他の部分は横ナデ仕上げされる。内面中央には同芯円の叩き目がそのまま残る。受部は体部から続き上面は丸く作って終わる。内傾して付けられる立上がりは先端を肥厚させて口唇部は丸く作る。体部外面には灰釉状の自然釉が全面に付着する。	粗い 良い? 暗灰色
332 —39 —33 須恵器 坏身	7—159 B12e—Section	— 11.7 14.7 5.4 —	口縁部を僅かに欠く。体部外面2/3を篦削りし内面は静止ナデ仕上げとなる。他の部分は横ナデ仕上げ。立上がりは内外面から強く横ナデされ口唇部は先端が尖って終わる。器壁は全体に厚い。底部外面には切り離し痕が残る。胎土はやや粗いが小礫は含まず均一。	普通 普通 灰色
333 —39 須恵器 坏身	6—82 A12i—Ⅲ	— 12.8 14.6 — —	1/4が残る。体部外面の半分が篦削りされ他は横ナデ仕上げ。受部は横に小さく引き出され、内傾する立上がりが付く。口縁先端を外側に折り曲げる様にして口唇部が内傾する。受部上面に重ね焼きの跡が残る。器壁は薄いが焼成は良い。体部外面には自然釉がかかる。胎土はち密で断面は赤茶色になっている。	良好 硬質 暗灰色
334 —39 —33 須恵器 坏身	6—1200 A10f—B	— 11.6 14.0 5.7 —	体部はほぼ残り口縁部は1/4が残る。その他の部分は横ナデ仕上げ。受部はやや厚めに作られ、立上がりはやや内傾し口唇部は坦面をつくる。焼成が悪く器壁の摩滅や剝落が進む。全体的には器壁は厚い作りとなる。	粗い 悪い 灰白色
335 —39 須恵器 坏身	4—1514 B12a—Ⅲ上	— 11.8 14.2 4.2 —	1/4が残されている。体部外面は大半がきれいに篦削りされる。内面と立上がり部は横ナデ仕上げ。受部はやや長めに横へ引き出される。立上がりは高く口唇部は坦面を作って内傾する。焼き歪みもあるが体部は浅く立上がりが高い。	良い やや軟質 黄灰色
336 —39 須恵器 坏身	7—1944—4 C12a—Ⅲ土	— 9.0 11.2 — —	1/5が残る。体部外面の2/3が篦削りで仕上げられている。その他の部分は横ナデ仕上げ。底面を欠くので高坏の可能性もある。上面を平らにした受部を持ち、内傾する立上がりが付く。立上がりは故意に付けたものか段があり口唇部は丸くなる。外面に灰釉状の自然釉が付く痕跡がある。	やや粗い 普通 灰色
337 —39 須恵器 坏身	4—1651—1 A12b—Ⅲ下	— 14.7 17.0 5.3 —	1/2が残る。体部外面の2/3を篦削りして仕上げ内面や立上がりは横ナデ仕上げ。直立した口縁部や受部の先端は両側から強くナデて尖らせている。内面中央には内当て痕を消した静止ナデがある。体部外面は黒変している。焼成が悪く全体が灰白色でもろい。胎土には砂が少ない。	良い 悪い 灰白色
338 —39 —33 須恵器 坏身	6—1247—2 A10c—B	— 10.9 13.8 5.0 —	口縁部の1/4を欠く。体部外面の大半をやや雑ではあるが篦削りする。底部内面は静止ナデ。体部から立上がりの内外面は横ナデ仕上げ。受部は斜め上方に引き出され内傾する立上がりが付けられる。口縁部の先端を外側に折り曲げるように口唇部を内傾させる。器壁には小さな火膨れが多くある。	粗い 普通 暗青灰色
339 —39 —33 須恵器 坏身	4—1643 A12c—Ⅲ	— 13.4 15.4 — —	口縁部が1/2残るが底部を欠く。体部外面の1/3が篦削りされる。体部や立上がり部はノタメを残さない丁寧な横ナデ仕上げ。受部は斜め上方へ引き出され、立上がりは内傾し口唇部は丸く作る。体部は浅い作りとなる。胎土は砂が多い。焼成は悪く灰褐色に焼け上がっている。	粗い 不良 灰褐色
340 —39 須恵器 坏身	6—2077 B10d—BC	— 12.6 15.2 4.8 —	1/4が残る。底部外面の半分が篦削りで調整されるが中心部には切り離し痕が残されたままある。内面や体部から立上がりにかけて回転横ナデされる。受部は斜め横に引き出される。立上がりは内傾して付き口唇部は丸く作る。胎土は砂を含み器壁は薄いが焼成は比較的良い。	普通 良い 淡灰色
341 —39 —33 須恵器 坏身	4—1476 A12e—ⅡⅢ	— 14.1 16.2 4.2 —	口縁部の一部と体部を残す。体部外面の1/3が篦削りされ平らな底面を作り出している。他の部分は横ナデ仕上げ。立上がり部は受部から内傾して付き短い。底面には自然釉がつき、一本線の篦記号がある。器高は口径に比して低い。	やや粗い 良い 灰色
342 —39 —34 須恵器 坏身	4—1591—2 A12c—Ⅲ	— 13.3 15.6 5.4 —	立上がり部の1/2を欠く。底部外面を1/3程篦削りして底面を平らに作りだしている。体部内外面は横ナデ仕上げ。内傾して低い立上がりが付く。焼成が悪く器壁の摩滅が進んでいるため詳細な観察は不能。	粗い 軟質 淡灰褐色
343 —39 —34 須恵器 坏身	4—1650—2 A12b—Ⅲ	— 12.7 14.8 — —	1/2が残る。底部外面の半分が篦削りされる。体部と立上がりの内外面は横ナデ仕上げされる。受部は体部からそのまま続き、短く外彎する立上がりが付く。胎土は粗く小礫も混じる。体部外面には自然釉が見られる。	粗い 良い 灰褐色
344 —39 須恵器 坏身	4—1630 A12b—Ⅲ	— 12.4 13.6 3.5 —	1/4が残る。篦削りは底部外面のほぼ半分となる。他は横ナデ仕上げ。受部は横に短く引き出される。立上がりは体部から続いて直立する。胎土には砂粒が少ない。焼成は悪く軟質。器形は全体的に低く作られて体部が浅い。	良い 軟質 淡灰褐色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
345 —39 —34 須恵器 坏身	4—1492—1 A12b—Ⅲ	— — 14.0 — —	体部の1/4と立上がり部を欠く。体部外面の大半が篦削りで仕上げられる。底部は篦削りで平らに作り出されている。受部外面は強く横ナデされ体部との境に軽い段を作る。体部内面は横ナデ仕上げ。中央には静止ナデの跡もある。	良 い 良 い 灰 色
346 —39 —34 須恵器 坏身	7—1653 ム1—B	— 11.5 13.8 4.2 —	完形品。平らに作られた底部は未調整で粘土の凹凸をそのまま残す。体部は斜め上に直線的に伸びて、短く外反する立上がりが付く。体部外面にはノタメが顕著。底部には藁のような物の圧痕が付いている。器壁は厚く全体的に雑な作りで体部も浅くなっている。胎土は粗く砂も多い。	や や 粗 い 悪 い 灰 色
347 —39 —34 須恵器 坏身	6—2903 D18g KT	— 9.7 11.6 3.5 —	立上がりの一部を欠くがほぼ完形品。体部外面が雑に篦削りされるが外面全体に自然釉が濃くかかるため観察不能。内面は横ナデ仕上げされるが中央には内当て痕がそのまま残される。立上がりは体部から内傾して付けられるが低く、受部先端から僅かに出る程度。受部上面に重ね焼きの痕跡を残す。	粗 い 良 い 灰 色
348 —39 —34 須恵器 坏身	7—1835 ネ4—B	— 8.2 9.9 3.4 —	完形品。二回の削りで底部外面の半分を篦削りしてしまう。底部は先端が尖るため不安定。他の部分は内外とも横ナデ仕上げに。立上がりが水平に近く内傾する。受部は意識して作り出していない様な作りになる。唇部は丸く作られる。二次火力を受けて赤変する部分がある。内面は茶褐色。	普 通 普 通 暗 灰 色
349 —40 —34 須恵器高坏蓋	6—60 A12h—Ⅲ	— 12.8 — 5.5 —	口縁部の1/5を欠く。天井部外面の2/3が篦削りされ、径34㎜程で中央が凹む撮が付けられる。その他体部や口縁部の内外面は横ナデ仕上げ。肩部は稜が下に沈線を置いて付き口縁部は直立して口唇部は内傾させる。全体的に器壁は厚めで稜や端部の作りは甘い。	粗 い や や 軟 質 暗 灰 色
350 —40 —34 須恵器高坏蓋	7—2180—2 C12b—Ⅲ	— 13.5 — 6.1 —	1/2を欠く。天井部外面の2/3程が篦削りで、径35㎜で中央部が凹む撮が付く。体部と立上がりの内外面は横ナデ仕上げする。口縁部は肩部で折れ曲がりやや外反して立ち、口唇部は内傾する。肩部には稜を置く。器形は比較的シャープに作られ器高も高い。胎土には砂や小礫が混じる。	粗 い 良 い 灰 色
351 —40 —34 須恵器 高坏	7—76 B13b—B	— 11.5 14.0 — 9.1	口縁部の1/4を欠く。火脹れがあり焼き歪みが大きい。坏部外面の半分が篦削りされ長方形の透かし窓が三方に付く脚が付く。受部は横に引き出され立上がりは内彎ぎみに立ち口唇部は内傾する。脚は八の字に開き先端は段状となり縁端は両側から撫でて丸く仕上げている。脚部外面には灰釉状の自然釉が付着する。	や や 粗 い 良 い 暗 灰 色
352 —40 須恵器 高坏	7—1135—2 C11g—C₂	— — — — 8.8	坏上半を全く欠き脚の1/3が残る。坏底面の篦削りされた部分に長方形の透かし窓を三方に持つ脚が付く。脚は八の字に開き脚端は段状に作って縁端は折曲げて脚裾としている。脚外面にはカキ目が顕著。カキ目は坏部外面にも一部施される。全体が薄い作りで焼成は良い。	普 通 良 い 灰 色
353 —40 —34 須恵器 高坏	5—238 イ7—SB101 北ピット	— — — — —	坏部の大半と脚裾を欠く。二方に長方形透かし窓を二段に付けた長脚の高坏。脚内外面は横ナデ仕上げされ透かし窓の上下に三本の沈線を置く。胎土はやや粗い。外面には自然釉が小さな斑点状にかかる。	や や 粗 い 普 通 暗 灰 色
354 —40 —34 須恵器 碗	7—2181 C12b—Ⅲ	— — 10.9 — —	口縁部の先端を全て欠く。肩部から口縁部の焼け歪みが著しい。八の字に開く口縁部には幅の広く雑な櫛描波状文が施される。櫛描波状文の上端には稜を置く。偏平な体部には二本の沈線の間に櫛状施文具で刺突文を施している。沈線の間にやや上向きに孔が開けられる。底面は不定方向の雑な篦削りで仕上げている。	粗 い 良 い 灰 白 色
355 —40 —35 須恵器 碗	7—2932 ラ8—B	— — 10.8 — —	口縁部を欠く。肩部に浅い沈線を二本書きその間にしっかりした櫛描波状文を置く。波状文以下は回転篦削りで仕上げ底面は更にナデて平滑な丸底に仕上げている。波状文より上は濃緑色の自然釉で覆われる。波状文の部分に注口用の孔が開く。内面には内当て痕と思える凹みがあり自然釉も付く。	良 い や や 軟 質 黄 灰 色
356 —40 —35 須恵器 碗	7—1584 ツ9—B	— — 9.6 — —	口縁部の先端を欠く。肩のやや張る偏平球胴の体部を持つ坩となる。体部下半は篦削りで仕上げ、底部は一回の篦削りで平底を作っている。肩部と頸部に浅い沈線が二本づつ置かれる。注口がやや体部から突出して肩部に付けられる。ほぼ平らになる肩部と口縁部内面に自然釉が付く。	や や 粗 い 普 通 灰 色
357 —40 須恵器 坩？	7—1135—1 C11g—C₂	— — 13.0 — —	八の字に開く口縁部の1/2が残る。坩あるいは碗の口縁部。外面は細かな歯の櫛で二段に別けて波状文を描いている。波状文の上には断面三角形の稜が付き口唇部は内傾して広がる。器壁は薄く端部もシャープな作りとなって焼成も良い。	良 い 良 い 淡 灰 色
358 —40 須恵器 碗？	7—1519 A14d—B	— — 10.0 — —	口縁部と体部の1/2を欠く。注口にあたる部分を欠くが碗と考えて良い。肩部の浅い沈線の間に形の崩れた櫛描波状文が施される。体部下半は回転篦削りの後になでて平滑に仕上げている。底部は丸底に仕上げる。内面は横ナデ仕上げ。肩の張る偏平球状の体部となる。	良 い 普 通 灰 色
359 —40 須恵器 碗？	4—1492 A12b—Ⅲ	— — — — —	口縁部先端と体部下半を欠く。碗か坩と考えている。頸部外面には先の細かい櫛で乱れた波状文が施される。肩部には櫛の歯がはっきりした刺突文が沈線の間に施される。頸部内面にはノタメが良く残されている。	粗 い や や 軟 質 暗 灰 色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
360 —40 —35 須恵器 甕	7—1944—3 C12a—Ⅲ上	— 19.3 — — —	口縁部から肩部の1/3程が残る。外反する口縁部外面には沈線と組合わせた三本の稜がありその間に櫛描波状文が施される。肩部外面に残った叩き目を間隔を置いてナデ消している。内面にも青海波の叩き目がそのまま残されている。	普通 良い 青灰色
361 —41 —35 土師器 坏	7—1647 A14hi A15abc—B	— 11.2 11.8 6.0 —	2/3が残る。口縁部の内外面は横ナデ仕上げ。内面はナデマワシて器面を整えている。体部外面は不定方向のナデ仕上げで、底面近くには器壁に指頭痕状の凹みが残る。内面には化粧粘土が施された可能性がある。口縁部が内彎ぎみに立上がり半球に近い深めの坏。外面に煤が僅かに付着する。	良好 良い 黄褐色
362 —41 —35 土師器 坏	4—1505 A12i—Ⅲ	— 12.9 — 6.1 —	完形品。口縁部の内外が横ナデ仕上げされる。内面はナデマワシ。底部外面には不定方向に篦削りした痕跡が残る。いずれも器壁の摩滅と剝落が激しいため詳細は不明。器形は口縁部がやや内彎するが半球状となる。胎土には砂粒と赤茶色の泥粒が混じる。	粗い 軟質 赤褐色
363 —41 —35 土師器 坏	7—1921—1 C11g—C・D	13.7 14.2 5.4 — —	2/3が残る。化粧粘土の為か器壁の剝落が激しく器面の調整法は観察不能。底部には整形の跡か、凹凸が残る。胎土には砂が含まれ気泡も多い。口縁から体部にかけて8×7cm程黒変する。口縁部はあまり内彎せず偏平な器形になる。	粗い 不良 赤褐色
364 —41 —35 土師器 坏	7—1693 A14g—B	— 11.2 12.1 4.8 —	3/4が残る。口縁部外面が横ナデ仕上げ。底面には木葉痕が薄く残る。その他は器壁の剝落が激しいため全く観察出来ない。胎土には砂が無く精選されている。口縁部は内彎し口唇部が向き合う様になる。底部から口縁部まで緩やかな弧を描く偏平な器形になる。	良い 不良 赤褐色
365 —41 —35 土師器 坏	6—1282—1 A10c—C	— 11.6 12.2 4.7 —	1/2が残る。表面の摩滅が激しく調整法は観察出来ない。底部を厚く作り平底に整形される。体部は緩やかに弧を描いて口縁部に続くやや深めの器形になる。胎土に砂が含まない。底部が灰褐色に変色している。内面には化粧粘土が施されている。	良い 不良 赤黄褐色
366 —41 —35 土師器 坏	6—1285 A10c—C	— 12.1 12.9 5.1 —	完形品。口縁部の内外面が横ナデ仕上げ。内面は篦（刷毛？）整形の後にナデ仕上げしている？。体部下半の外面は器面の荒れが激しく観察できない。平底に作り口縁部にかけて緩やかに内彎した偏平な器形。内外面とも化粧粘土が使われる。胎土は完全に混じっておらず茶色と白色の粘土が縞模様になっている。	良い 悪い 赤褐色
367 —41 —36 土師器 埦	6—1118—2 A12f—Ⅲ	— 11.5 12.1 5.5 —	1/2が残る。口縁部の内外面が横ナデ、内面は不定方向のナデ仕上げ。体部外面上半は細かな刷毛で器面を整え、下半は指頭による押えの凹みが残る。底部は一応平らに作り出している。器壁は薄く作られ、腰がやや張って内彎し口縁部を内傾させる器形となる。胎土に砂は無く精選されている。	良い 良い 淡黄褐色
368 —41 —36 土師器 埦	7—1531 A16c—C	— 14.3 — — —	1/3が残る。口縁部と体部上半は内外面とも横ナデ仕上げ。内面はナデ整形の後に放射線状の篦研磨、外面は横に篦研磨して仕上げている。口縁部外面には整形時の粘土のしわが縦に残る。内彎して立上がる体部の先端を外側に屈曲させ口縁部を作る器形になる。胎土に粘土は少なく焼成は良い。	良い 硬質 暗赤褐色
369 —41 —36 土師器 坏	7—6—1 B13f—C	— 12.4 13.2 4.3 —	2/3が残る。口縁部の外面が横ナデされる。他の調整法は器壁の荒れが激しく観察が不能。底部がやや広く内彎して立上がる体部で低い偏平な器形になる。化粧粘土が施されたためか内外面に剝落する部分もある。胎土は精選され細かい。	良い 不良 赤褐色
370 —41 土師器 坏身	6—1208—3 B12A—Ⅲ	— 12.0 13.8 4.3 —	1/4が残る。模倣坏の身である。受部は無くなり稜になってしまう。立上がり部の内面に横ナデした後が残る。体部下半から底部外面にかけて整形時の指頭痕と思える凹みが残る。他は剝落が激しく詳細は不明。内外とも化粧粘土が施された？。胎土には茶色の泥粒が混じり白色粘土が縞状になっている。	粗い 不良 赤褐色
371 —41 土師器 坏身	4—1656—2 A12b—Ⅲ下	— 13.3 14.6 — —	受部が退化し稜になってしまう模倣坏で口縁部の1/3が残る。立上がり部の外面に横ナデした事が認められる。他は器面の摩滅が進んで観察できない。胎土には赤茶色の泥粒が混じる。化粧粘土が内外面にある。	良い 不良 赤褐色
372 —41 —36 土師器 坏身	4—1525 B12d—Ⅲ	— 13.? 16.1 — —	口縁部の1/2が残る模倣坏である。器壁の荒れが激しく器面調整法の詳細は不明。内傾して付く立上がりや、受部もしっかりと作られ須恵器に似る。底部を欠くので何とも言えないが浅めの器形になる。胎土には赤茶色の泥粒や砂粒が混じる。	普通 不良 赤褐色
373 —41 土師器 坏身	4—1511 B12d—Ⅲ	— 14.2 16.5 — —	模倣坏で口縁部の1/4が残っている。立上がり部に横ナデした痕跡が残る。他の部分の詳細は不明。372と同じ様に須恵器の坏を良く真似ており、受部や立上がりをしっかりと作っている。胎土は砂と赤茶色の泥粒が少し混じる。	良い 不良 赤褐色
374 —41 —36 土師器 埦	6—1202 A10f—B	— 22.2 — 12.7 —	口縁部の一部を欠く。横ナデされた口縁部が「く」の字に屈曲して開く大きめの埦。内面は全体がナデ？によってきれいに調整される。体部外面の上半ナデ、下半は粘土の繋ぎ目や凹みが残り底部には篦目が残される。胎土はやや粗いが砂は少ない。底部は丸底に作っている。	粗い 良い 黄褐色

番号 挿図 写真図版	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
375 —41 —36 土師器 椀	6—301 B11d—Ⅲ	— 16.7 — 9.0 —	2/3が残る。底部を平底に作り、内彎して立上がる内部が肥厚した口縁部で外反する。口縁部の内外面は丁寧な横ナデ仕上げ。体部内面はナデ仕上げで平滑にされる。外面は目の細かな刷毛で器面が整えられ底部は平らにナデられる。外面は赤褐色で煤が付着する所もある。体部外面に黒斑がある。	普通 普通 黄褐色
376 —41 —36 土師器 椀	7—273 B11g—Ⅲ下	— 9.0 — 5.5 —	口縁部の一部を欠く。口縁部は細かな刷毛目も残すがナデ仕上げしている。内面は篦整形の後にナデ仕上げ。外面下半は指で押えた後を軽く撫でて仕上げる。底部が黒変し底面は凹む。手捏状の小形土器。	粗い 良い 黄褐色
377 —42 土師器 高坏	4—1622 A12e—Ⅲ	— 12.0 — — —	坏部の1/3が残り脚部を欠く。口縁部が内外から横ナデされる。外面は斜め、内面は縦の篦研磨で仕上げている。内面は光沢を持つが外面は摩滅が進み篦の痕跡のみを残す。胎土には雲母と小礫が混じる。	粗い 不良 黄褐色
378 —42 —36 土師器 器台	4—1649 A12e—Ⅳ	— 8.2 — 7.6 9.9	脚の1/3を欠く。脚内面を除き器面全体が縦方向に、丁寧に篦研磨される。坏部は浅い皿状になり口縁部外面には浅い凹線状のへこみが付く。口唇部の内側は使用に因るものか摩滅している。脚はラッパ状に開き三方に丸孔が開けられる。脚内面は横ナデされる。胎土はやや粗いが精選され均一。	良い 良い 赤黄褐色
379 —42 —36 土師器 器台	4—1415—2 A12d—Ⅱ	— 6.9 — 6.3 8.8	口縁部と脚の1/2坏部は端を折り曲げ、横ナデで外反させた口縁部を作って皿状にしている。ラッパ状に開く脚は縦方向に篦整形し、脚裾は内外から横ナデして仕上げる。脚内面は篦で削って整形している。全体的に作りは荒く器面に凹凸が残る。胎土には砂が多い。	荒い 普通 灰褐色
380 —42 土師器 高坏	3—311—2 A13a—Ⅲ	— 16.6 — — 12.3	坏部の大半と脚裾の1/4を欠く。口縁部の内外面は強めに横ナデされる。坏部内面は剝落が多く観察不能。外面は整形時の凹みが残る。脚は下半がやや脹らみ脚裾が内外から横ナデされ大きく開く。脚内面には天井部から掻き出す様な指のナデ跡が残る。	荒い 普通 灰褐色
381 —42 —36 土師器 高坏	7—1454 A14e—B	— 17.9 — 14.4 12.0	坏部口縁部の大半と脚裾の1/2を欠く。坏は腰の部分で稜を作って曲り、やや外彎し脚裾で折れて横に開く、外面は縦の篦整形痕が、内面には絞り目が残る。口縁部と脚裾は内外面から横ナデ仕上げ。脚裾を突起させ坏部を接合する。	粗い 良い 灰黄褐色
382 —42 土師器 高坏	7—1944—2 C12a—Ⅲ上	— 16.2 — 9.5 6.4	坏部の大半と脚裾の2/3を欠く。口縁部と脚裾に横ナデ、脚内面は篦削りで絞り目を消している。他は器壁の摩滅が激しいため詳細は不明。坏は底部と口縁部が接する部分で段を作って折れ斜め上に開く。脚は短く脚裾が開く。坏部に突起を作り脚に接合し、脚内面天井部には突起を指頭で押えた跡が残る。	粗い 不良 赤褐色
383 —42 土師器 高坏	6—1118—1 A12f—Ⅲ	— 17.1 — — —	坏部の1/4が残る。口縁部外面に横ナデの跡が残る。口縁部は底部と接する部分で軽い段を作って曲がり、やや内彎ぎみに斜め上に開く。器壁は薄く砂が混じる。坏部に突起を作って脚と接合している。口縁部外面に煤が付着している。	粗い 良い 淡黄褐色
384 —42 —36 土師器 高坏	7—1649—1 A14hi A15abc —B・C	— 15.5 — — —	脚部の3/4を欠く。口縁部外面が横ナデ仕上げ。坏の内面はナデマワシ？。他は器壁の荒れが激しく観察出来ない。坏部は甘い稜を作って曲がり上方に開く。脚は低く内面は篦整形される。坏底面に突起を作り脚に接合。脚内面には突起を指頭で押えて潰した様子が観察される。	粗い 不良 赤褐色
385 —42 —37 土師器 高坏	7—763 B11f—Ⅲ下	— 15.4 — — —	脚全体を欠く。口縁部外面が横ナデされる。器面の荒れが激しく他の部分の調整法は観察出来ない。口縁部と底部の接する部分は軽く段を作るが、折れは少なく坏部も浅い。坏底面に突起を作って脚と接合する。二次火力を受けた為か外面が赤変し煤状の炭化物も付着している。	粗い 不良 赤褐色
386 —42 —37 土師器 高坏	7—1656 ム5—B	— 15.8 — — —	脚全体を欠く。口縁部の内外面が横ナデ仕上げ。内面はナデ仕上げしている。坏部下半の外面は荒れが激しく観察出来ない。坏部は外面に甘い稜を作って折れ曲がり深めに作る。坏部底面に突起を作って脚と接合したものと思えるが分明でない。器壁は厚めに作り胎土も粗い。	粗い 不良 赤褐色
387 —42 —37 土師器 高坏	7—1517 A17a—B_2	— 14.5 — 9.9 9.9	口縁部の2/3と脚裾の1/3を欠く。口縁部と脚裾の内外面は横ナデ、他はナデ仕上げされる。口縁部は底部から甘い稜を作って曲がり深めの坏部となる。脚は低く脚裾は横に開く。脚内面は絞り目を篦で削って消し、脚上端を坏部に挿入して接合する。坏内面には化粧土が施される？。	良い 良い 黄褐色
388 —42 —37 土師器 高坏	7—180—3 B12a—Ⅲ下	— — — — 12.3	坏部全体と脚裾の1/2を欠く。やや内彎する高い脚に「く」の字に曲がって横に開く脚裾が付く作りとなる。脚裾は内外面から横ナデ仕上げ。内面は指頭に因る整形痕がそのまま残る。外面は縦に篦整形した後ナデ仕上。上端部の残りから坏底面に突起を作って脚と接合した事が観察される。	粗い 良い 黄褐色
389 —42 —37 土師器 高坏	4—1532 A16c—C	— — — — 13.4	坏全体と脚裾の1/3が欠ける。内彎する脚に横に開く脚裾が付く。脚裾は内外面が横ナデされ脚外面は縦に篦ナデ（篦研磨？）される。しかし、内面には粘土の輪積みの跡がそのまま残される。坏部との接合は円筒形に作った脚上端を坏の底面に貼り付けている様に観察される。坏部の内底面は黒色。	粗い 硬質 赤褐色

挿図番号 写真図版	登録番号	法量cm	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
器種	出土位置	口径 最大径 器高 底径		
390 —42 土師器　高坏	4—1674 A12b—Ⅲ中	— — — — 14.5	坏部と脚裾の2/3を欠く。少し内彎する脚に横に開く脚裾が作り出された器形になる。脚裾の内面に横ナデした痕跡を残す。外面は器壁が荒れ観察出来ない。内面には絞り目と指頭のナデ跡が残る。坏部との接合は脚先端を坏底面に挿入している。胎土には砂粒が多く焼成も悪い。	粗　い 不　良 赤　褐　色
391 —42 —37 土師器　高坏	7—180—1 B12d—Ⅲ下	— — — — 11.1	坏部と脚裾の1/2を欠く。内彎して脚裾が開く器形になる。脚裾の内外面は横ナデ仕上げ。外面の上半部はナデ仕上げだが下半は脚裾から撫で上げる様に篦削りされる。内面は絞り目や指頭に因って掻き撫でた跡と篦の整形痕が残る。坏部との接合は脚上端の挿入法と思えるが確定出来ない。	良　い 良　い 赤　褐　色
392 —42 —37 土師器　高坏	7—180—2 B12d—Ⅲ下	— — — — 12.5	坏部を欠く。下半がやや太くなる円筒にほぼ水平に開く脚裾が付く。脚裾は内外面から横ナデ仕上げ。内面は篦削りして仕上げている。外面は器壁の荒れがひどく観察不能。坏部との接合法も残った部分が少なく不明。脚裾の1/4が黒変する。	粗　い 不　良 赤　褐　色
393 —42 土師器　高坏	7—1946—2 C12a—Ⅲ	— — — — 12.1	坏部と脚裾の2/3を欠く。脚裾は横ナデされ横に開き、やや内彎する脚となる。内面には絞り目が残る。他の調整法は器壁の荒れが進んではっきりしない。上端部の残りから坏底部に作った突起を挿入して接合した事が知れる。胎土は粗く砂が多く混じる。	粗　い 不　良 赤　褐　色
394 —42 —37 土師器　高坏	7—1694 A14g—B	— — — — 9.7	坏部大半を欠く。坏底部から「八」の字に広がり、横ナデした脚裾が水平に開く低い脚となる。外面はナデ仕上げされる様である？。内面はきれいに篦削りされ天井部には指頭による押えが残る。坏部は底部と横ナデした口縁部が接する部分で曲がり、軽く段を作る。接合法は坏部の底面の突起を脚に挿入？。	粗　い 良　い 赤　褐　色
395 —42 土師器　高坏	4—1636 A12b—Ⅲ	— — — — 10.3	坏部全体を欠く。内面に横ナデした痕跡が残るが他は器壁の摩滅が進んで観察は不能。太い径で「八」の字形に開く。模倣高坏の低い脚。胎土は精選され砂は含まない。化粧粘土が施される。	良　い 不　良 肌　色
396 —42 —37 土師器　高坏	7—1944—1 C12a—Ⅲ上	— — — — 9.4	口縁部全体を欠く。やや太めの脚で「八」の字に開き、脚裾は横ナデして薄く仕上げている。脚内面は篦削りされ天井部は指で押えている。他は器面に剝落があり観察出来ない。坏部との接合は脚に坏部底面の突起を挿入する方法か？。胎土はやや粗いが均一で砂が少ない。	良　い 不　良 黄　褐　色
397 —42 土師器　高坏	4—1651—2 A12b—Ⅲ下	— — — — 10.1	坏部と脚裾の1/2を欠く。円柱の下半が「八」の字に開く脚で上半は中実になる。脚裾は内外面が横ナデ仕上げ。内面は篦で削って仕上げている。器面の荒れが著しく剝落が進んでいる。坏部との接合は脚上端をそのまま坏底面に貼り付けている？。胎土は粗く砂も多く含む。	粗　い 不　良 黄　褐　色
398 —42 土師器　高坏	4—1651—3 A12b—Ⅲ下	— — — — 9.7	坏部全体と脚裾の2/3を欠く。中実の円柱の下半がラッパ状に広がり内外から横ナデされて脚裾となる。外面は凹凸が残るがナデ仕上げされ、内面には指頭痕が残る。坏部との接合法は不明。胎土は粗く砂も多い。	不　良 不　良 赤　黄　褐　色
399 —42 土師器　高坏	4—1651—4 A12b—Ⅲ下	— — — — 10.1	坏部と脚上半を欠く。中実の脚の先端がラッパ状に開き脚裾を作っている。脚裾は横ナデされる。脚内面には刷毛目や指頭痕と思えるナデ跡も残されている。	粗　い 良　い 赤　褐　色
400 —43 —37 土師器　甑	4—38 ト3—Ⅲ	— 19.7 — 19.9 6.7	全体の1/2が残り球胴に近い器形となる。全体的に作りが荒く歪みも大きい。内外面とも刷毛で器壁を整えている。特に内面には横の刷毛目が顕著である。口縁部は先端が内外面から横ナデされている。底部は平底に作った後に略円形に刳りぬいて作っている。胎土は粗く砂や小礫が混じる。	粗　い 不　良 赤　褐　色
401 —43 —38 土師器　甑	4—1694 A12f—Ⅲ	— 21.6 — 26.2 8.3	口縁部の一部と把手を欠くがほぼ完形品。胴下半にかけて径が小さくなる縦長の器形である。外面は縦の、内面は横の刷毛仕上げ。口縁部は横ナデしていると思えるが器壁の荒れが激しく分明でない。把手の剝がれた跡には体部と同様な刷毛目が残っており整形後器面に張り付けたことが分る。	粗　い 不　良 肌　色
402 —43 —37 土師器　甕	4—37 ト3—Ⅲ	— 17.4 24.2 27.0 6.5	全体の1/2が残る。平底で球形に近い体部に横ナデして外反する口縁部が付く。体部外面は凹凸を残すが篦ナデして仕上げている。内面は指頭痕や粘土の繋ぎ目が残されている。底部を厚く作り底面は窪めて上げ底になる。体部外面には全体的に煤が付着している。胎土は荒く砂が多く混じる。	粗　い 良　い 赤　褐　色
403 —43 土師器　壺	6—1205 A12f—Ⅲ	— 19.5 — — —	口縁部が約8㎝残るだけの細片。内彎して立上がる口縁部の外面に櫛（刷毛）による刺突があり、頸部以下は刷毛整形される。内面は横ナデの様であるが摩滅のためはっきりしない。口径は残された部分で復元した。	粗　い 不　良 赤　褐　色
404 —43 土師器　壺	4—263 B11g—Ⅲ下	— 12.0 — — —	受け口状の口縁部を持つ土器の口辺部片。7㎝程が残る。体部から外側に屈曲する口縁部の先端を更に外彎ぎみに引き上げて口唇部を薄く作る。口縁部は横ナデ仕上げ。体部内面には粘土の繋ぎ目と指頭痕を残す。外面全体に煤が付着している。	粗　い 良　い 赤　褐　色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
405 —43 —38 土師器　壷	6—634 A13f—C	— 21.6 — — —	口縁部が残り体部以下を全く欠く。外反する口縁部外面に横ナデした太い凹線を二本置き断面三角形の突帯が付く様な形になる。剥落が激しくそれ以外の器面調整法は観察出来ない。繋ぎ目を見ると体部の上に二枚の粘土を重ね口縁部を作っている。胎土には砂粒が多くある。	粗　い 不　良 肌　色
406 —43 土師器　甕	3—164 B11h—Ⅲ	— 18.3 — — —	口縁部の1/4が残される。S字状口縁の台付甕で比較的しっかりと受け口状の口縁部を作る。頸部外面の括れ部に箆描きの沈線が引かれる。肩のやや張る体部には斜行刷毛目（肩部以下を欠くため断定出来ないが羽状刷毛目？。）と横刷毛目が施される。口縁部は横ナデされ体部内面には指頭痕が残る。外面に煤が付着。	粗　い 不　良 暗灰褐色
407 —43 土師器　甕	4—1583 B11g—Ⅲ	— 14.2 — — —	口縁部の1/4が残る。S字状口縁の台付甕。肩部以下を欠くので斜行刷毛目に横刷毛目が残るだけ。口縁部は横ナデ、内面には指頭痕が薄く認められる。括れ部には箆描きの線がある。胎土は粗く砂が多く雲母がまじる。器壁は薄く荒れている。	粗　い 不　良 灰褐色
408 —43 土師器　甕	3—311—1 A13c—Ⅲ	— 18.2 — — —	口縁部の1/5が残る。S字状口縁の台付甕。肩部以下を欠く。斜行刷毛目と横刷毛目が残る。括れ部に線を引く。口縁部は横ナデされしっかり作られる。胎土は粗く砂・雲母が混じるが焼成は良い。外面には煤が付き暗灰褐色。	粗　い 良　い 黄褐色
409 —43 土師器　甕	7—1963—1 C12a—Ⅲ	— 15.5 — — —	口縁部の1/5が残る。S字状口縁の台付甕。口縁部のS字形の屈曲も大きくしっかり作られる。肩部の斜行刷毛目の上に施される横刷毛目は頸部に近い部分にまで施される。口縁部はきれいに横ナデするが頸部内面には刷毛目が残る。胎土には砂・雲母が混じる。外面には煤が多く付く。	粗　い 良　い 灰褐色
410 —43 土師器　甕	4—1484 A12e—Ⅲ	— 16.5 — — —	口縁部の1/5が残る。S字状口縁の台付甕。S字形の屈曲は少なくなり上方へ伸びた口縁となる。括れ部に沈線を引く。肩部以下を欠くが斜行刷毛目が残る。胎土は砂が多く雲母を含む。器壁の荒れが進んでいる。	粗　い 不　良 淡黄褐色
411 —43 土師器　甕	4—1485—2 A12e—Ⅲ	— ? — — —	口縁部の破片が残る。歪みがあり口径を確定出来ないが15〜20cm程度のS状口縁の台付甕。S字形の屈曲は少く偏平になる。口縁部は横ナデ仕上げ。内面には指頭痕状の凹凸を残す。胎土には砂・雲母が混じり外面には煤が付着する。	粗　い 不　良 淡黄褐色
412 —43 土師器　甕	4—1605—1 A12e—Ⅳ	— 9.6 11.9 — —	口縁部から胴部の1/4が残る小形のS字状口縁の台付甕。S字形の屈曲は少なく立上がりぎみになる。外面の刷毛は一応羽状になり肩部には横刷毛目が施される。口縁部内面には刷毛目も残る。体部内面には指頭によるナデ整形が残る。胎土には雲母が混じる。	粗　い 良　い 茶褐色
413 —43 土師器　甕	4—1582 B11g—Ⅲ	— — — — 8.8	S字状口縁の台付甕の脚破片。外面は上半部に斜行する刷毛目が残り下半部はナデ消している。脚裾は裏側に粘土を折返して肥厚させ粘土端はそのまま残す。内面天井部には指頭によるナデ痕が残る。胎土には砂が多く雲母も含む。	粗　い 不　良 黄褐色
414 —43 —38 土師器　甕	7—1931—2 C12a—Ⅲ	— — — — 10.2	体部全体を欠く。S字状口縁の台付甕で断面が台形になる脚。外面は斜行するやや細かな刷毛目を箆状の物で上から下へ扇形にナデ消している。内面は下半が横ナデされ上半は指頭によるナデツケの跡が残る。僅かに残った体部内面には炭化物が付着している。	粗　い 良　い 灰褐色
415 —43 土師器　甕	3—311—1 A13c—Ⅲ	— — — — 12.6	体部全体を欠く。S字状口縁の台付甕の脚。外面は斜行する刷毛目が残るが（器壁に荒れがあるのではっきりしないが）外面を一周するように上から下へ扇形にナデ消している。脚裾は粘土を裏に折返して肥厚させる。内面には脚を体部底面に撫で付けた指頭痕が残る。火力を受けた為か赤変する部分がある。	粗　い 不　良 肌　色
416 —44 —38 土師器　甕	4—1514—2 B12a—Ⅲ上	— 16.2 23.4 — —	胴部の下半を欠く。体部は丸みを持って球形に近くなる。口縁部は内面から横ナデして薄く仕上げている。体部は厚く作り内外面を刷毛（板？）でナデ調整している。器形には歪みもありやや雑な作り。胎土はやや粗いが砂をあまり含まず均一。胴部外面には煤が付き、内面にも炭化物が薄く残っている。	粗　い 良　い 赤褐色
417 —44 —38 土師器　甕	4—1715—1 A12f—Ⅲ下	— 16.4 — — —	口縁部の1/2が残り胴部以下の大半を欠く。口縁部は厚めで内外面から横ナデして外反ぎみに開く。体部は内外面とも刷毛仕上げ。二次火力を受けた為か器面の荒れが進んでいるが、堅く焼き締まっている。胎土には砂が多く白い粒が浮き上がって見える。断面は黒灰色になっている。	粗　い 良　い 黄褐色
418 —44 土師器　甕	4—1483 A12e—Ⅲ	— 17.6 19.8 — —	1/3が残り下半部を欠く。胴長の体部に、横ナデして外反する厚めの口縁部が作られる。口縁部の外面には縦の、内面には横の刷毛が薄く残るが内外ともに横ナデ仕上げされる。体部は目のこまかな刷毛で丁寧に仕上げられる。胎土には砂があるが細かくて均一。体部と口縁部には煤状の炭化物が付着している。	粗　い 粗　い 赤黄褐色
419 —44 土師器　甕	4—1715—2 A12f—Ⅲ下	— 16.7 — — —	口縁部の1/2がのこるだけ。口縁部は内外から丁寧に横ナデし外反ぎみに作り出している。体部内面には口縁部接合時の粘土の捲れや、繋ぎ目等が残り荒い刷毛仕上げになっている。外面は肩部にまで横ナデが及び刷毛目が薄く残っている。胎土には砂・雲母・砂粒が混じる。	粗　い 良　い 赤褐色

挿図番号 写真図版 器種	登録番号 出土位置	法量cm 口径 最大径 器高 底径	技法・調整の特徴	胎土 焼成 色調
420 —44 —38 土師器 甕	7—2180 C12b—Ⅲ	— 29.7 34.2 — —	口縁部が2/3程残るだけで胴部以下の大半を欠く大形の甕。脚が付くかは不明。口縁部は外反し丁寧に横ナデして口縁部を丸く作り出している。体部は内外面ともに整形時の凹凸が薄く残るが箆のナデ仕上げで器面を丁寧に整えている。胎土もやや粗いが整っており砂粒等は含まない。外面には全体的に煤が付着している。	良 い 良 い 茶 褐 色
421 —44 —38 土師器 壷	6—1197 A10f—B	— — 31.5 — —	口縁部・把手の片方・体部の半分を欠き全体の1/3が残る。球形の胴部に外反し横ナデした口縁部が付く。胴部内面は刷毛整形の後にナデ仕上げをしており刷毛目がのこる。外面はナデ仕上げで平滑にしている。底部外面は全面が剝落して原形を止どめない。胎土には砂が多く粘土が完全に混じっていず縞模様になる。	粗 い 不 良 肌 色
422 —44 土師器 壷	7—1921—2 C11g—2	— 19.6 — — —	口縁部が半分残る。大きく外反し復合口縁になる。内外面ともに箆研磨して仕上げている。地に刷毛目が残る部分もあり刷毛整形後に箆研磨している。	良 い 良 い 肌 色
423 —44 —38 土師器 壷	7—1945—1 C12a—Ⅲ	— 11.1 13.5 11.1 4.6	口縁部の1/4を欠く。偏平な球胴に平らな底部と外反する口縁部を作り出した小形の壷。口縁部は内外から横ナデされる。内面は箆や指頭による整形痕が残される。外面は全体が細かな刷毛で整えられている。胎土は精選され砂が少ないがナデや箆で調整したと思える部分もある。器形に歪みあり。	良 い 良 い 灰 褐 色
424 —44 —38 土師器 壷	7—1649—2 A14hi A15abc —B	— 8.7 13.1 — —	口縁部の1/2が残り体部の下半を全て欠く。球形に近い体部に円筒状に作られた口縁部の付く器形になると思われる。内外面ともに焼成が悪く、全体に摩滅が進み器面の調整法は観察出来ない。器壁は薄く作られ胎土に砂はすくない。	良 い 不 良 赤 褐 色
425 —45 —39 土師器 甕	7—1930 A13f—C	— 50.3 — 42.4 15.3	全体の2/3程が残っている。内彎して立上がる大きめの体部に外反して開く幅の広い口縁部が付く台付甕。口縁部の先端は横ナデし口唇部は面を作る。器壁は内外面とも刷毛調整して仕上げている。脚も内彎ぎみのしっかりした作りである。胴部には煤が付着し火力により赤変している部分もある。	粗 い 良 い 赤 褐 色
426 —45 —39 土師器 鉢	4—1517 B11a—Ⅲ上	— 31.5 — — —	口縁部の1/2が残され体部は大半を欠く。体部から緩やかに外反しやや肥厚させた口縁部になる。口縁部の内外は箆？による横ナデ、体部は箆削り（箆ナデ）によって器面を整えている。胎土はやや粗いが小礫は無く均一な粘土である。内外面とも煤等の炭化物は付着しない。	良 い 良 い 肌 色

伊場遺跡発掘調査報告書　第6冊

伊場遺跡遺物編 4

1987年3月31日発行

編集　浜松市博物館
浜松市蜆塚四丁目22番1号

発行　浜松市教育委員会

印刷　浜松共同印刷株式会社

写　真　図　版

写真図版第Ⅰ

A　古墳時代住居跡KDⅠ（北西から）

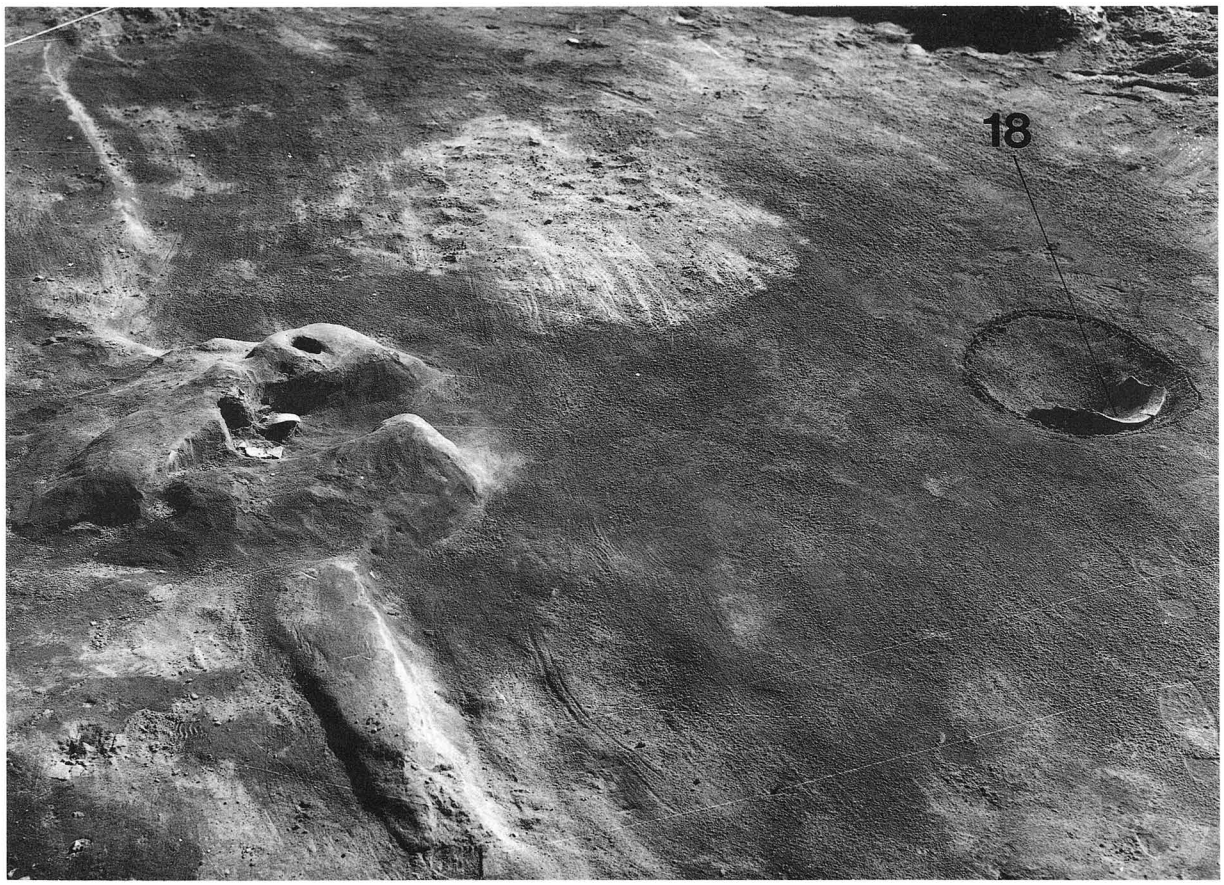
B　古墳時代住居跡KDⅠ（鉢の出土状態）

写真図版第２

A　古墳時代住居跡KD４（北西から）

B　古墳時代住居跡KD４（かまど付近の土器出土状態）

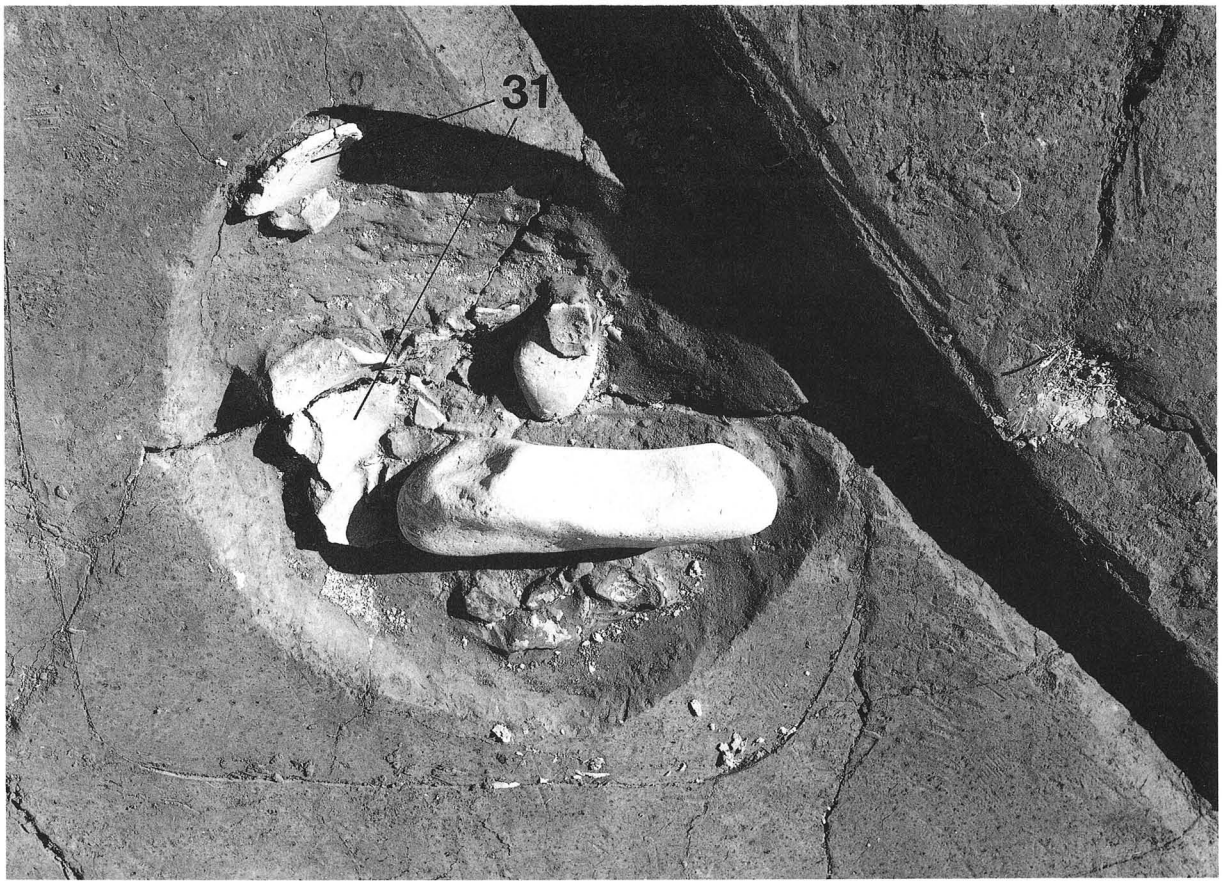
写真図版第３



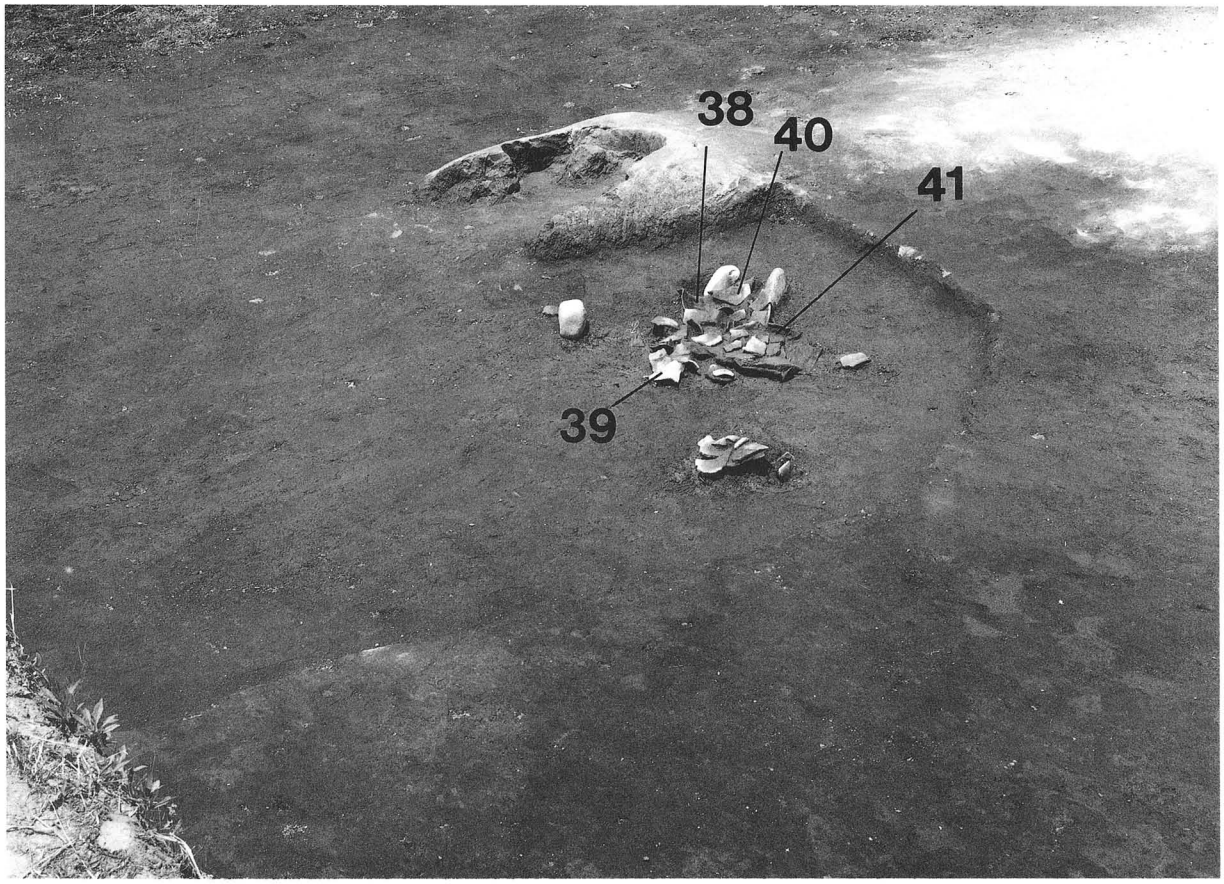
A　古墳時代住居跡KD６（かまどと鉢の出土状態）

B　古墳時代住居跡KD10（南から）

写真図版第 4



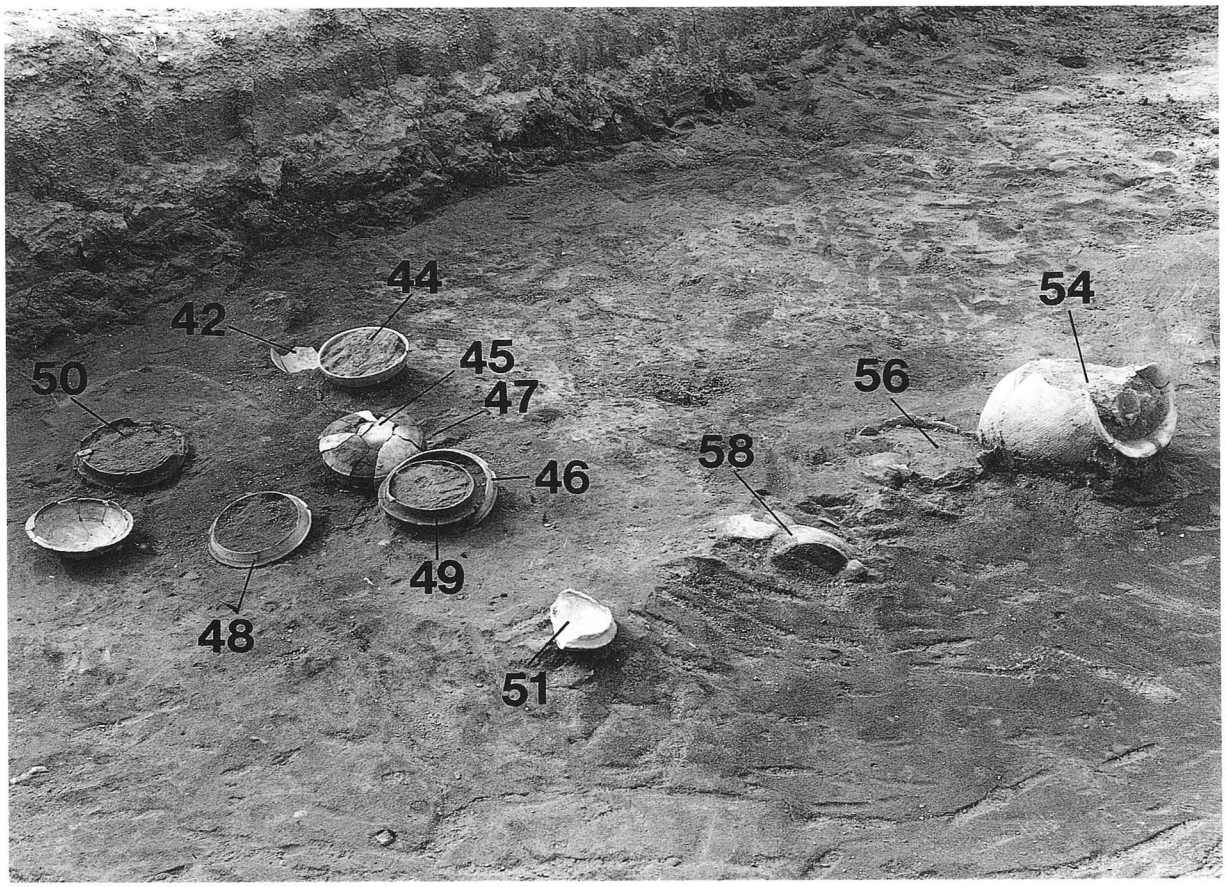
A　古墳時代住居跡KD10（貯蔵穴内の土器出土状態）



B　古墳時代住居跡KD12（北から）

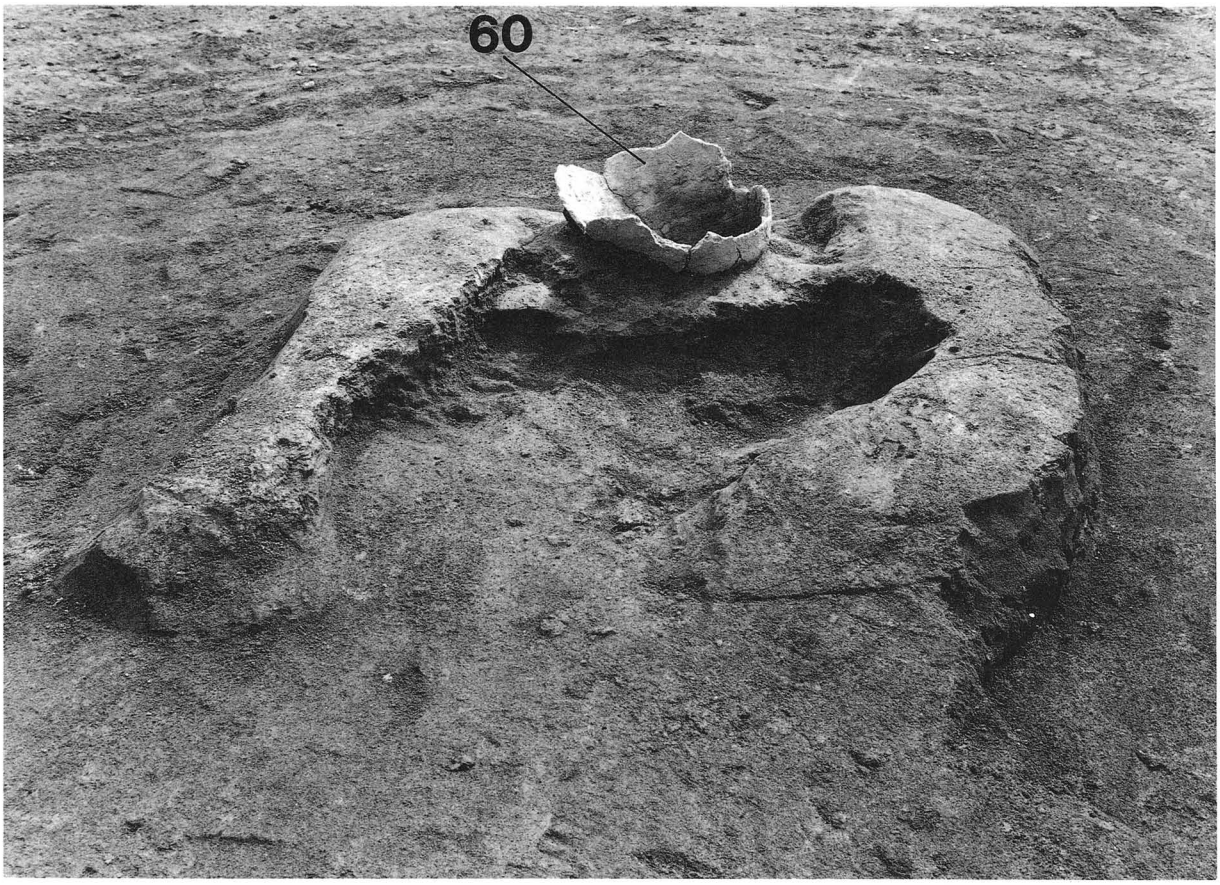
写真図版第５

A　古墳時代住居跡KD12（かまど付近の土器出土状態）

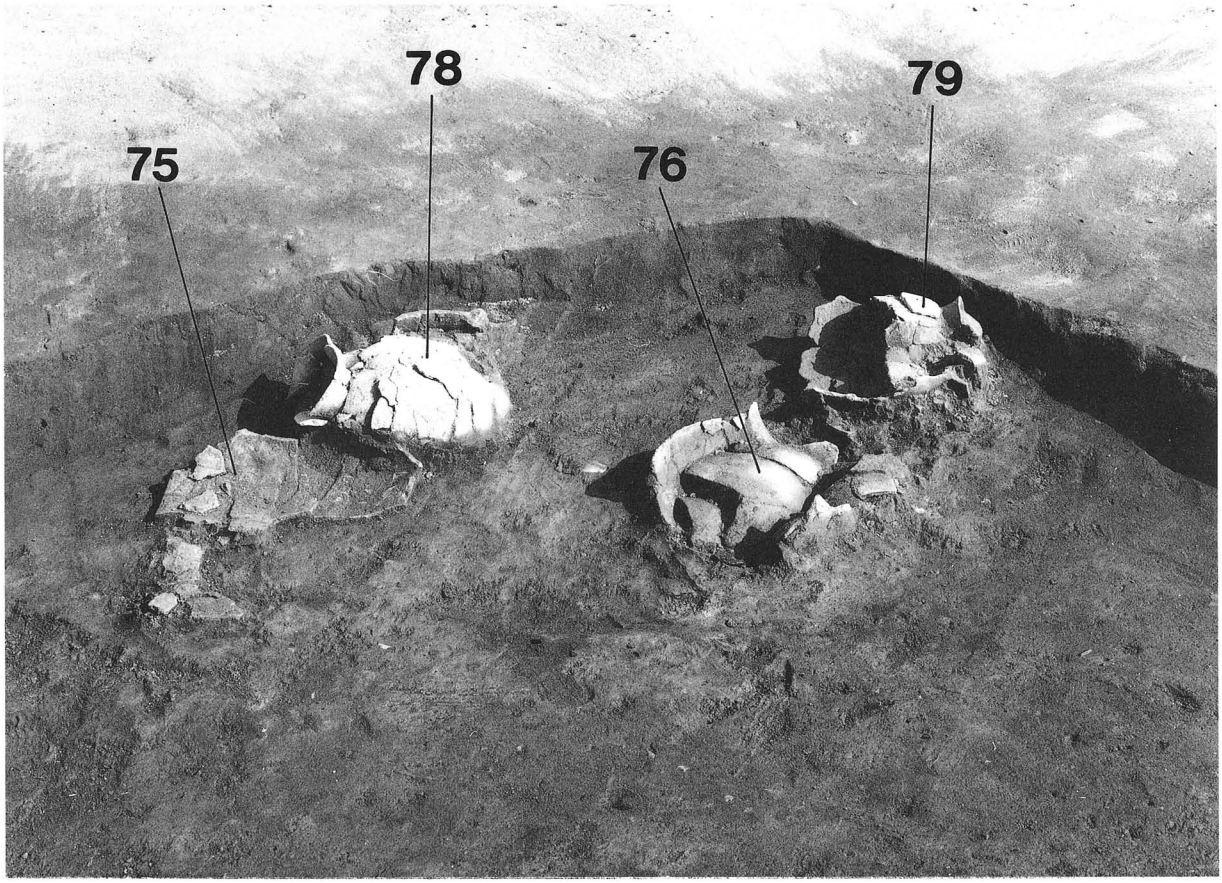


B　古墳時代住居跡KD14（土器出土状態）

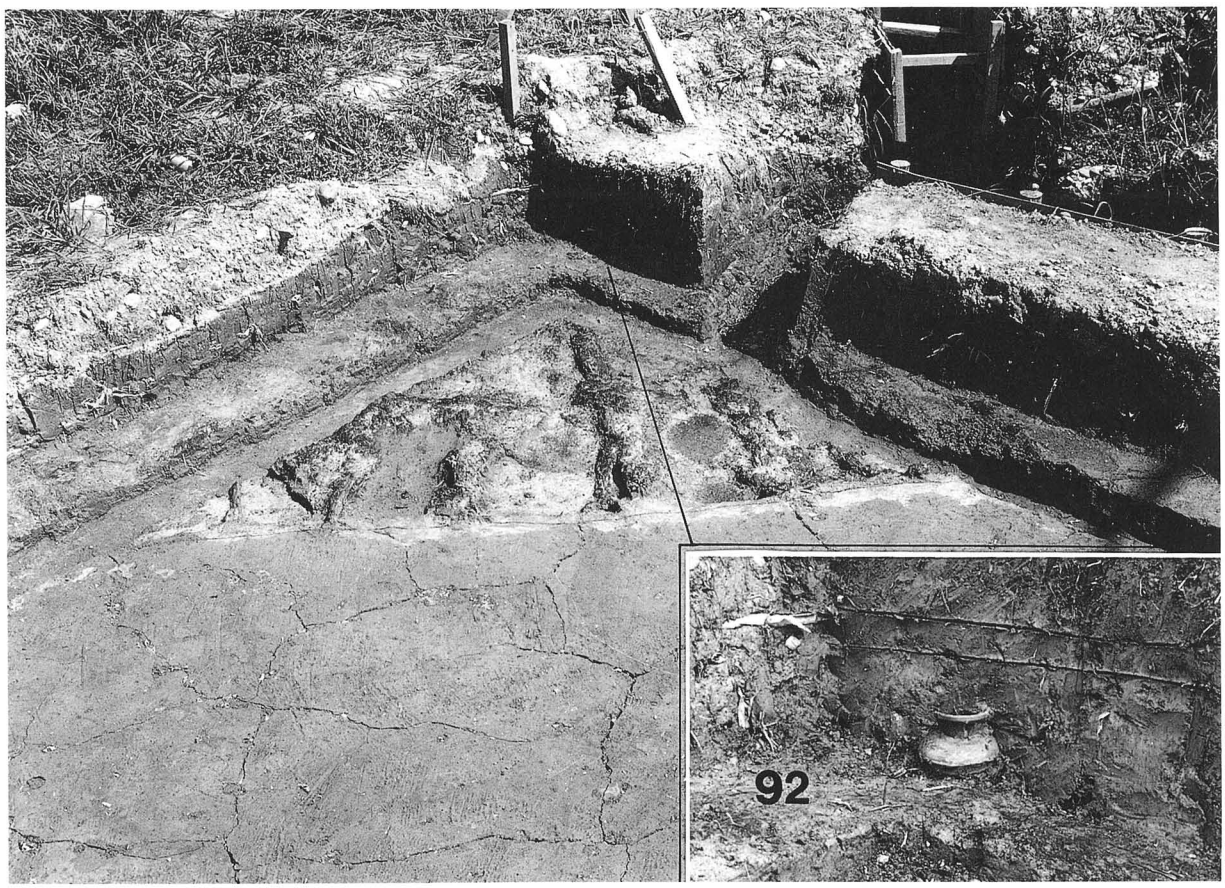
写真図版第 6



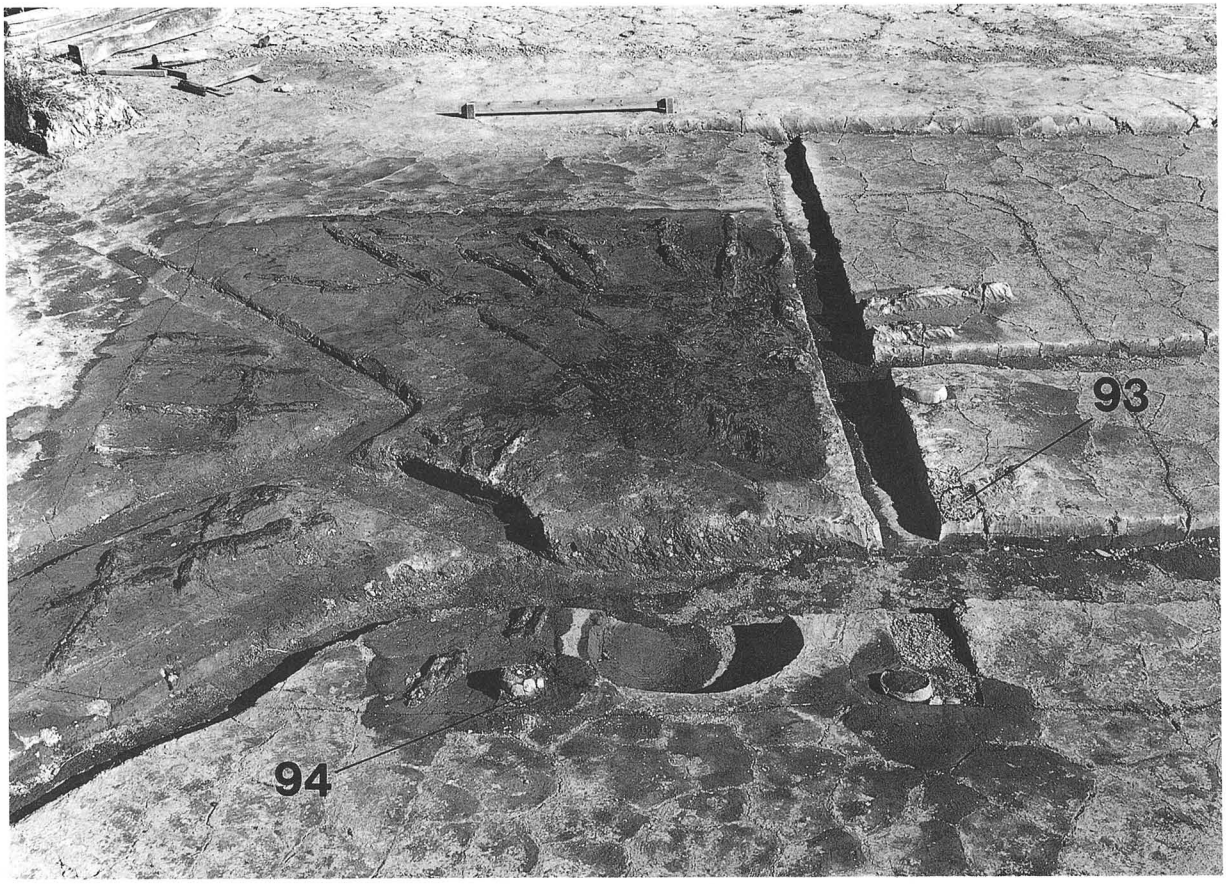
A　古墳時代住居跡KD15（かまどと甕の出土状態）



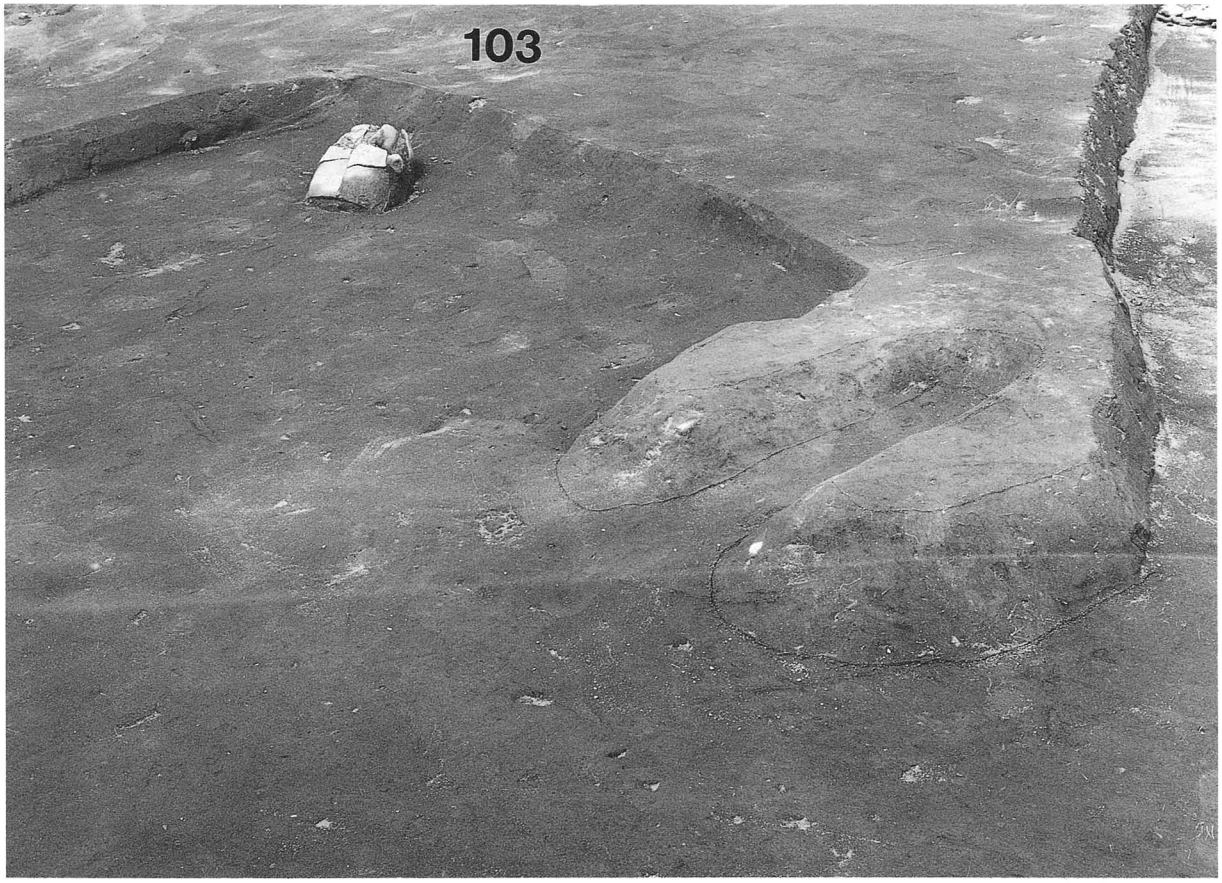
B　古墳時代住居跡KD17（南隅の土器出土状態）



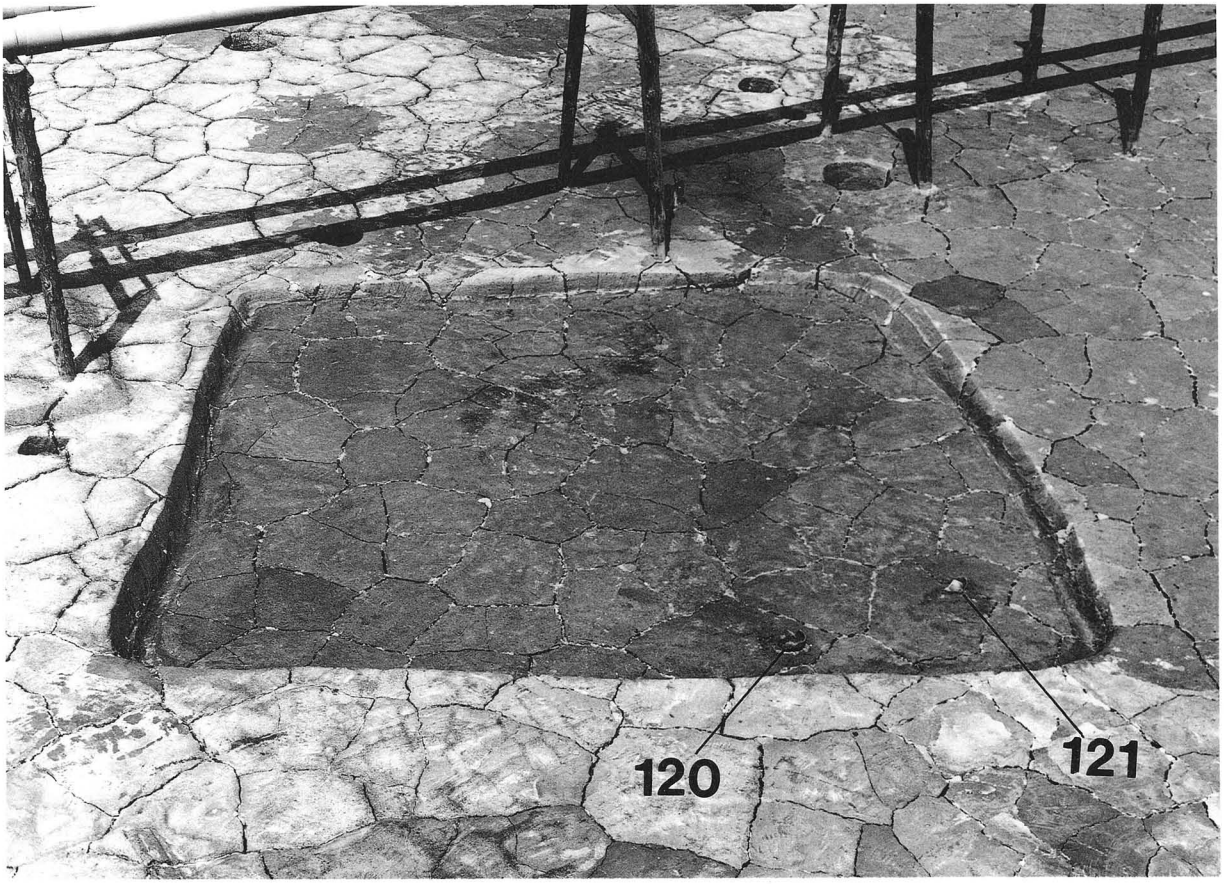
A　古墳時代住居跡KD25（北西壁付近の須恵器高坏の出土状態）



B　古墳時代住居跡KD25（南西から）

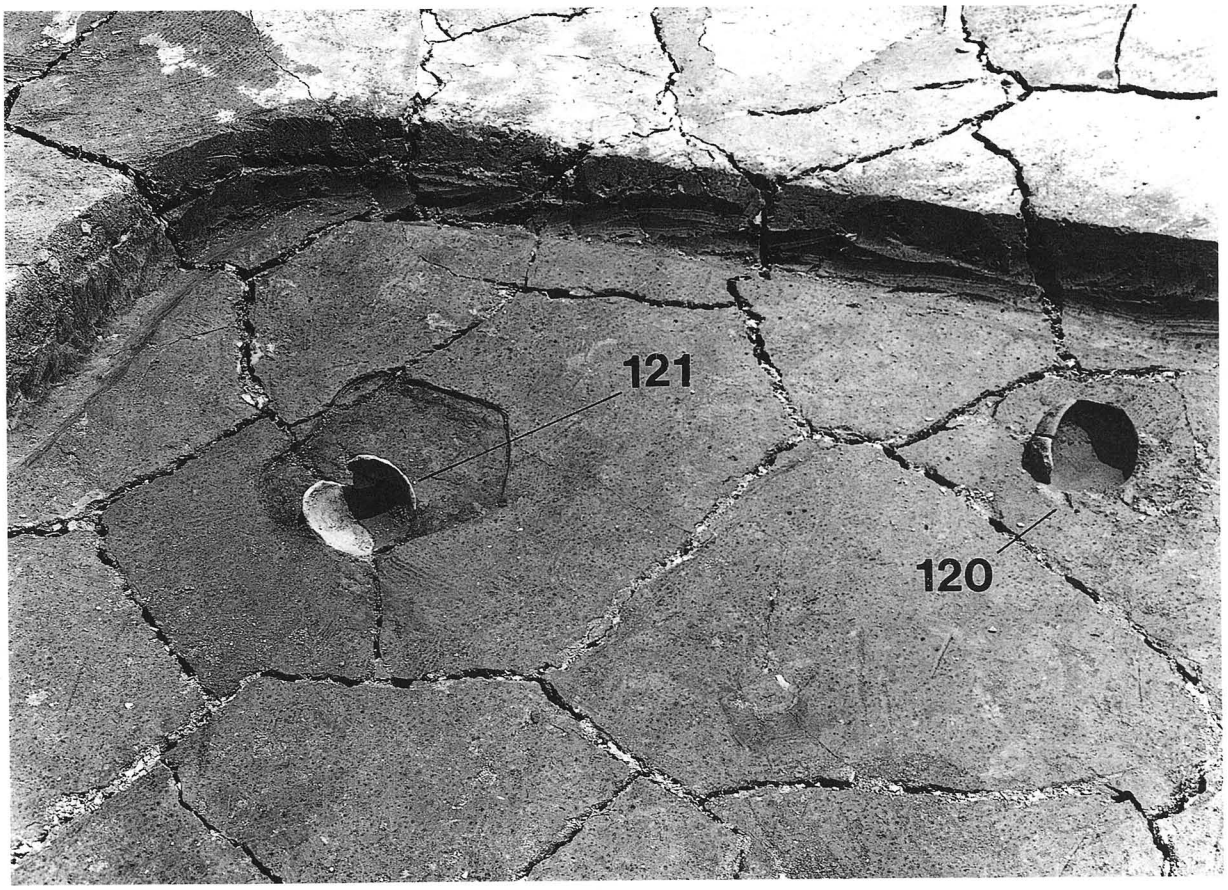


A　古墳時代住居跡KD27（かまどと甑の出土状態）



B　古墳時代住居跡KD36（東南から）

写真図版第 9

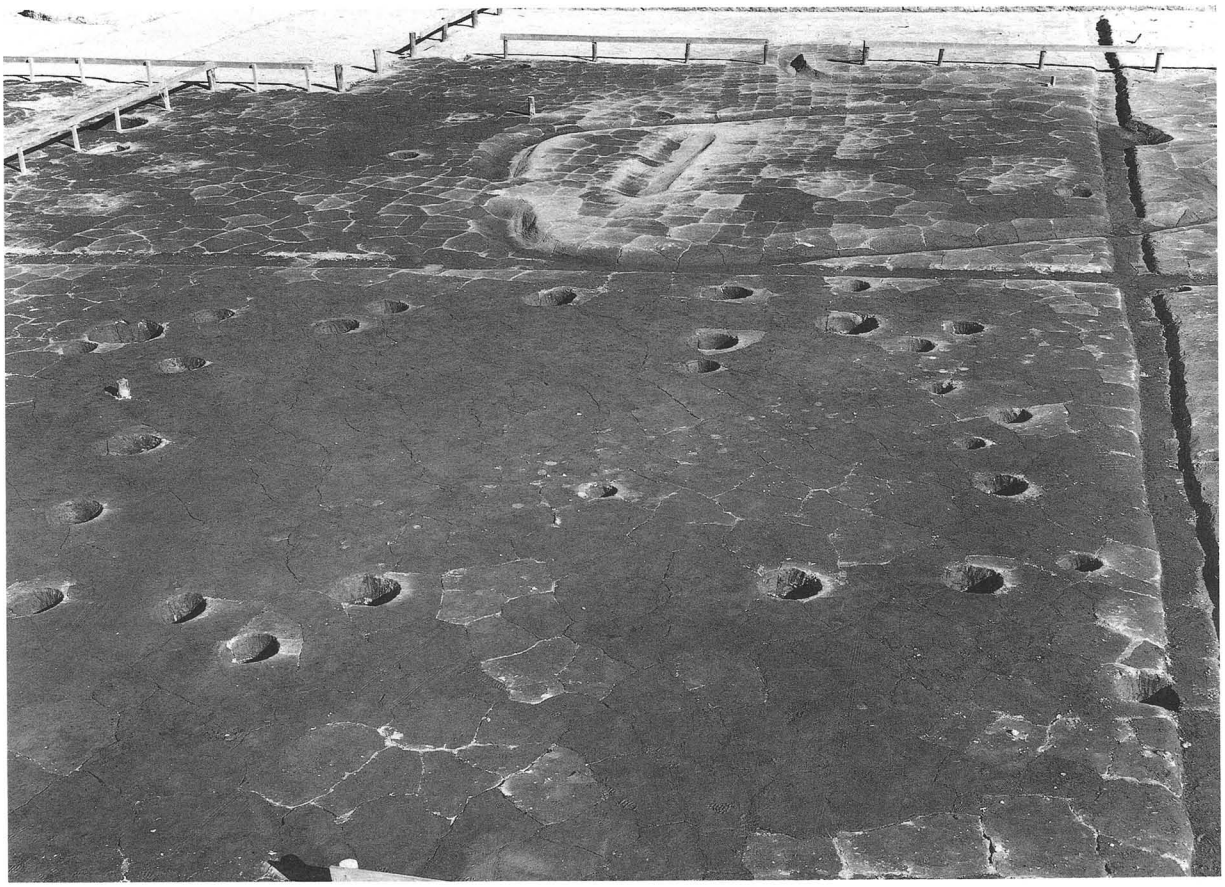


A　古墳時代住居跡KD36（土師器出土状態）

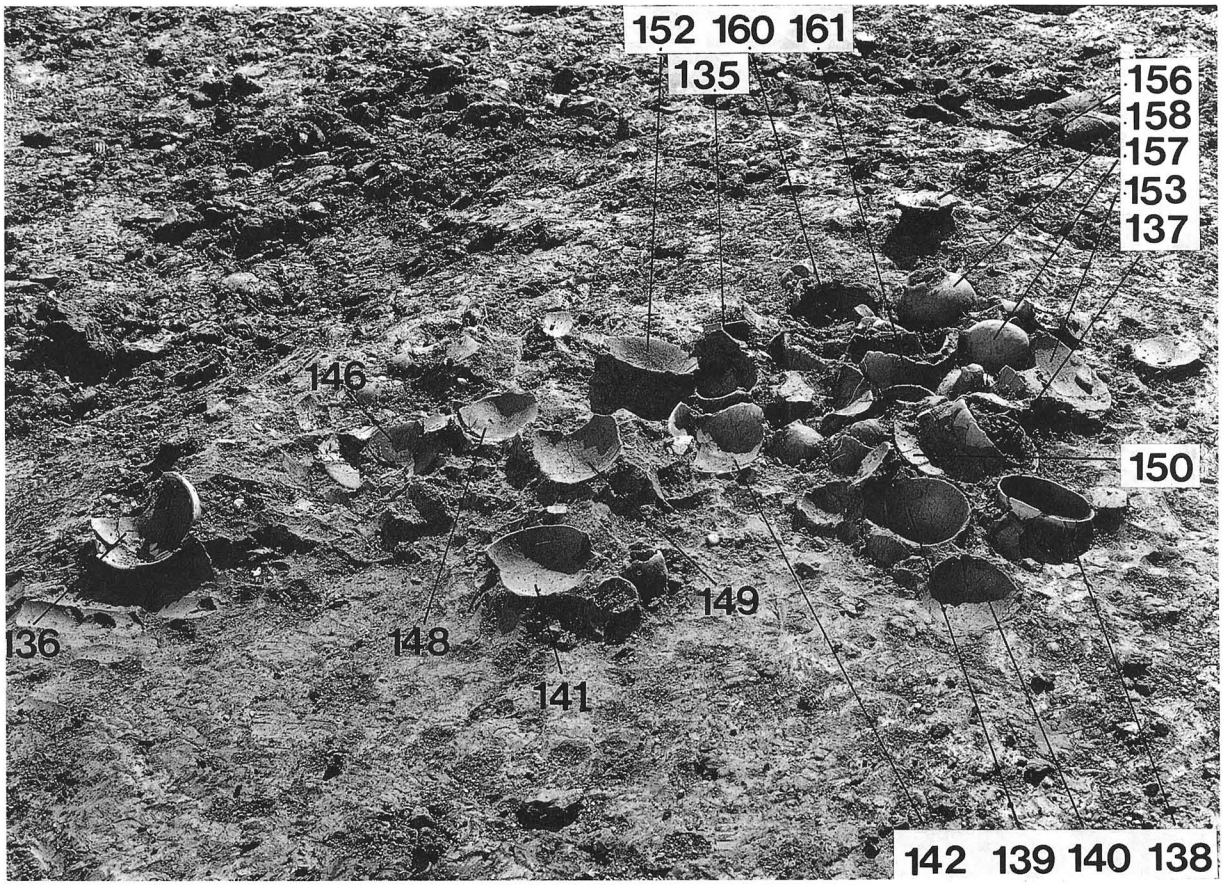
B　東部地区小穴群出土状態（西から）

写真図版第10

A　東部地区小穴群出土状態（東から）



B　古墳時代祭祀跡（KII）



A　古墳時代祭祀跡KI I（土器出土状態）

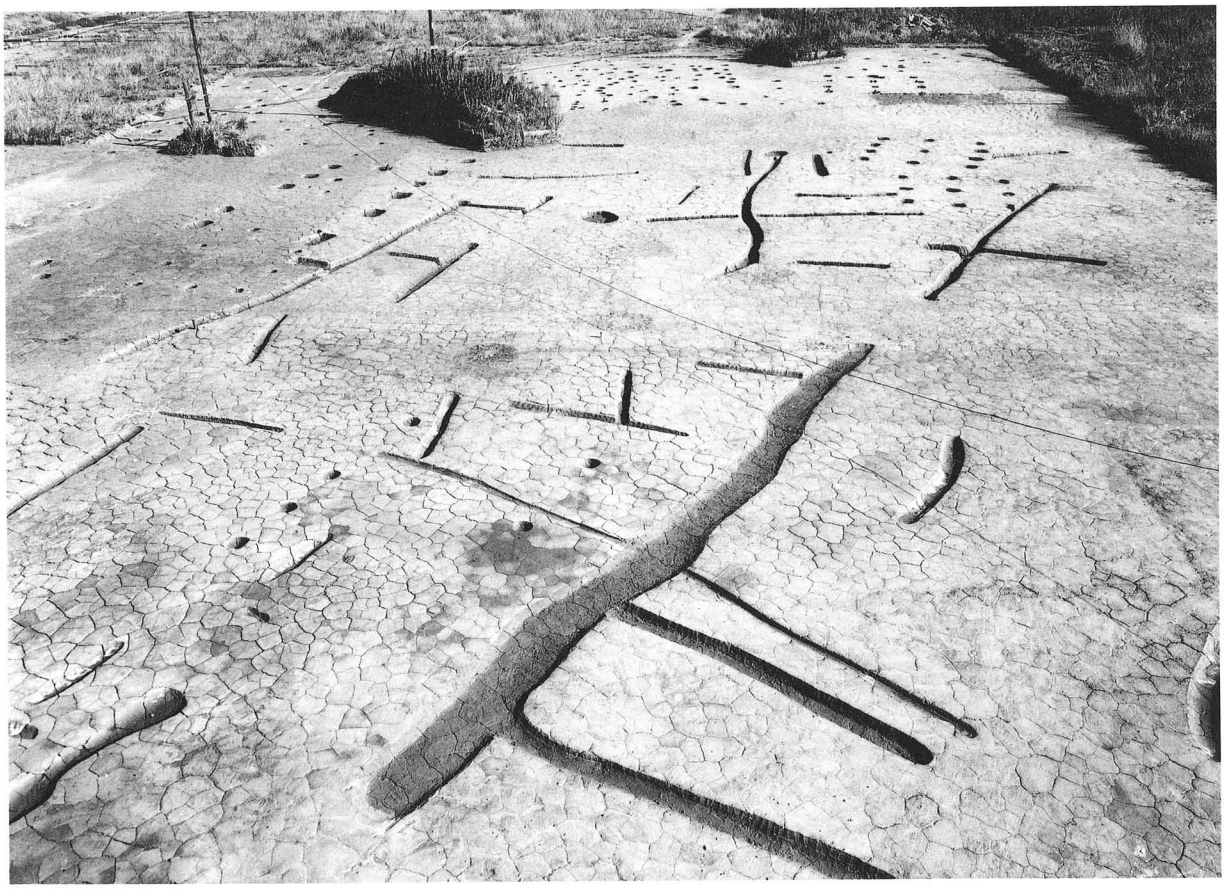
B　古墳時代溝KT201（北東から）

写真図版第12

A　古墳時代溝KT201　（南西から）

B　西部地区溝状遺構（南から）

写真図版第13



A　西部地区溝状遺構（北西から）

B　古墳時代井戸KG１（左）・ KG２（右）

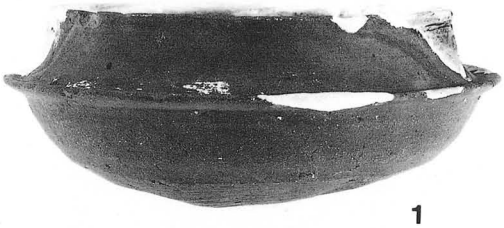
A　古墳時代井戸KG１（北から）

B　古墳時代井戸KG２（北から）

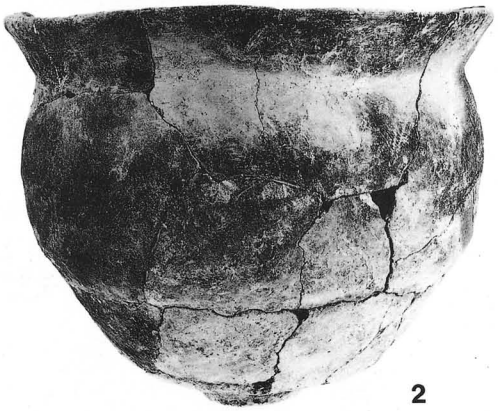
写真図版第15

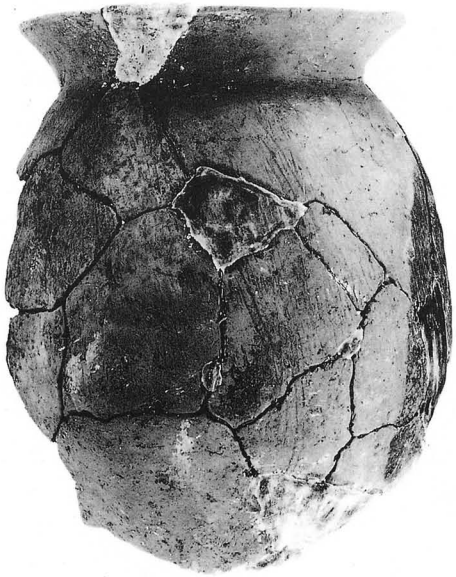
A　古墳時代方形周溝墓KC１・KC２

写真図版第16

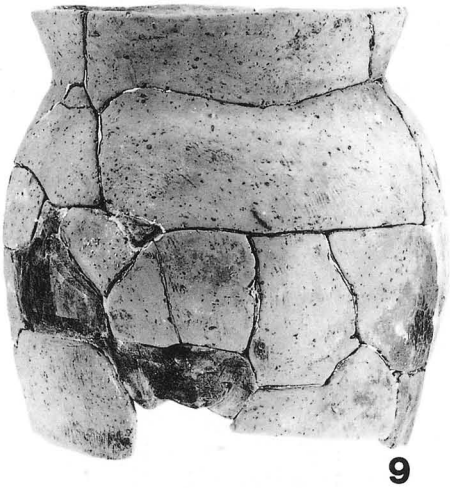

1

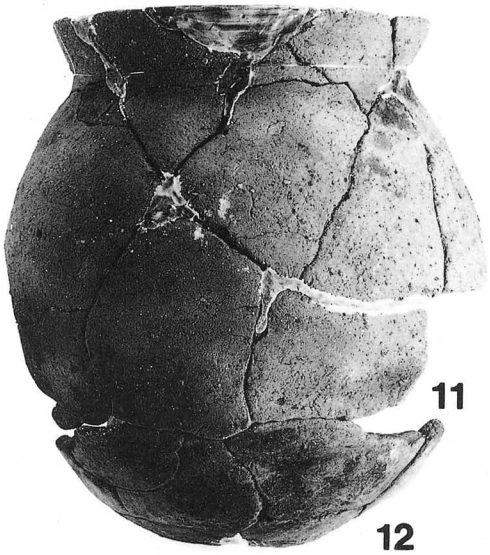
3

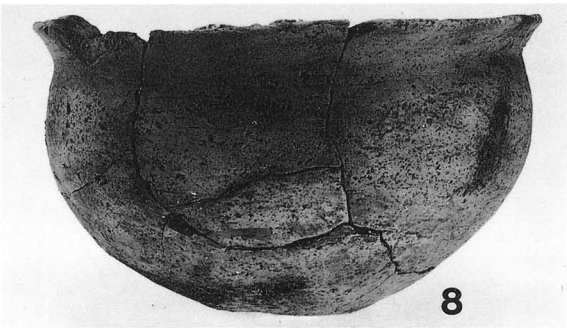

2


5

7


9


11
12


8

写真図版第17

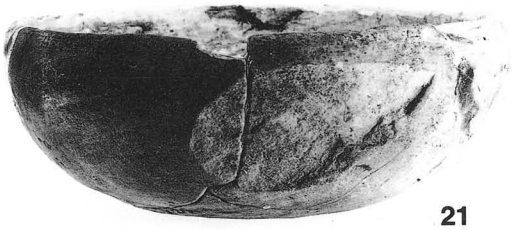
13

10

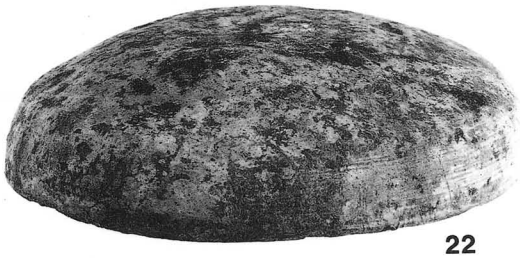
16

15

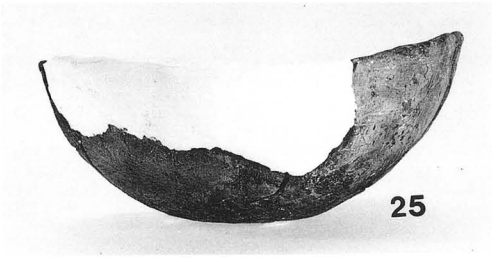
20



21



22

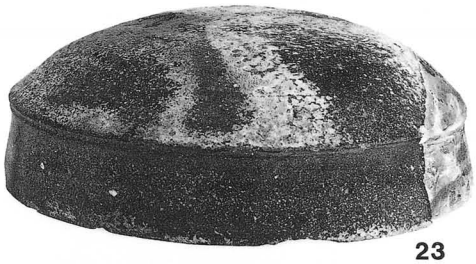


25

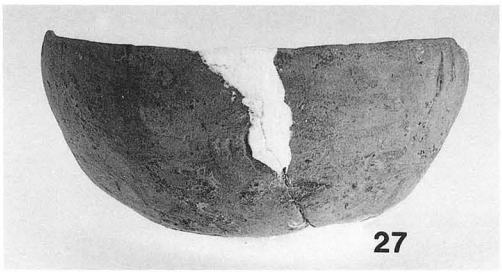
22-2

18

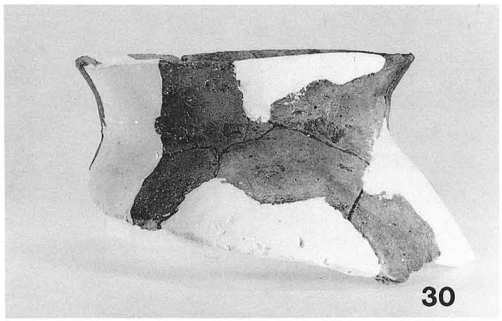
写真図版第18


23

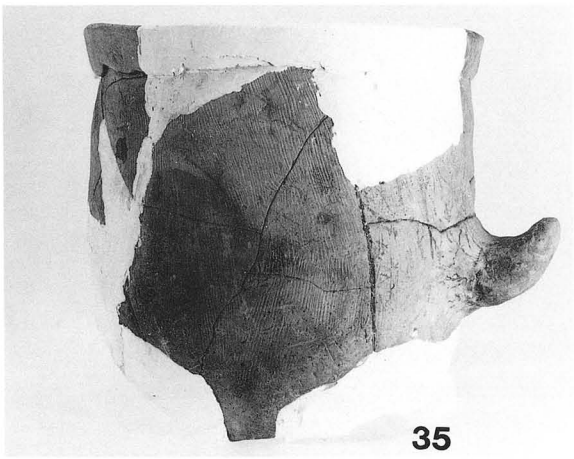
26


27

34


30

32

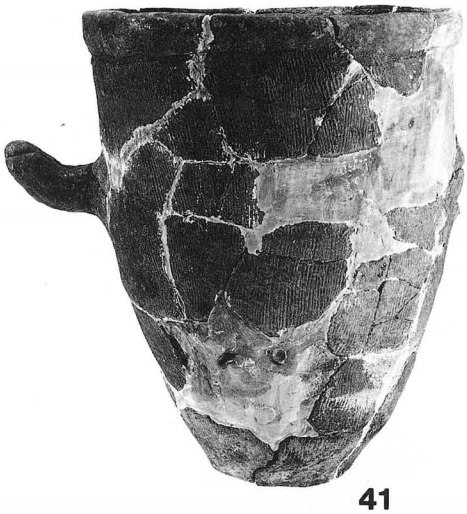

35

38

36

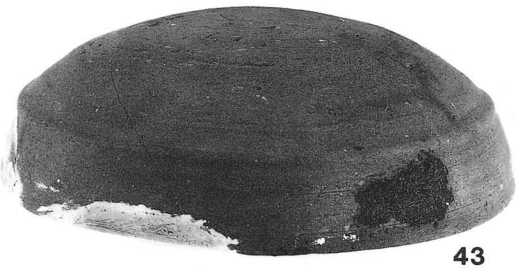
写真図版第19

40



41

39



43

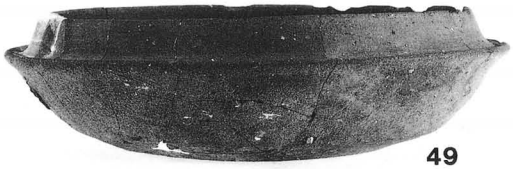
44

45

46

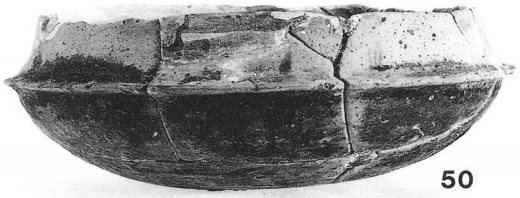
47

48



49

写真図版第20


50

59

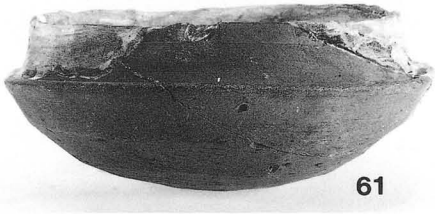
51

52

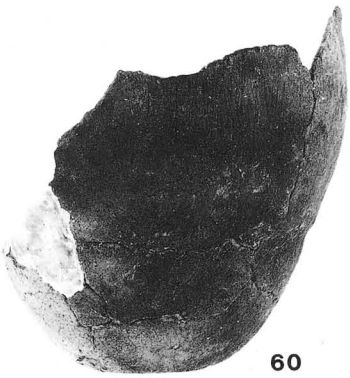
54

53

63


61

62


60

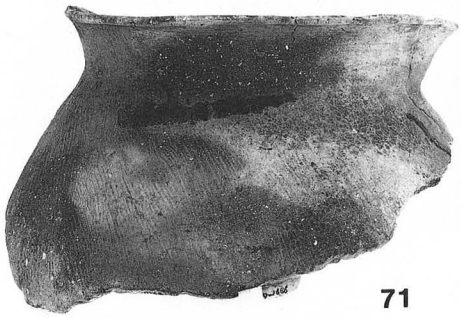
写真図版第21

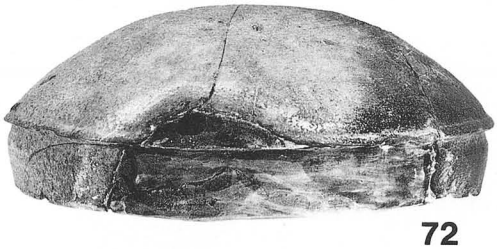
64

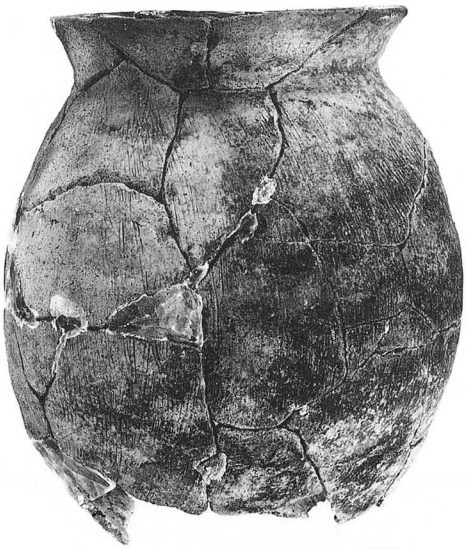
67

68

69

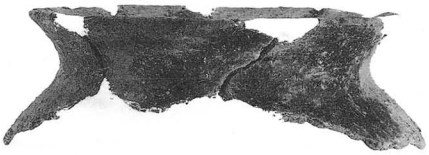

71


72


76

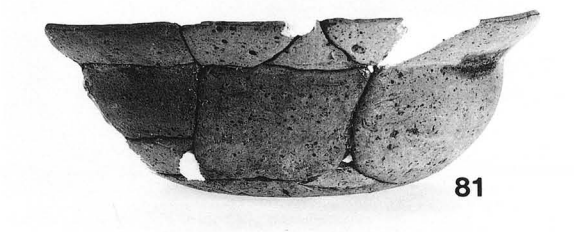
75

74

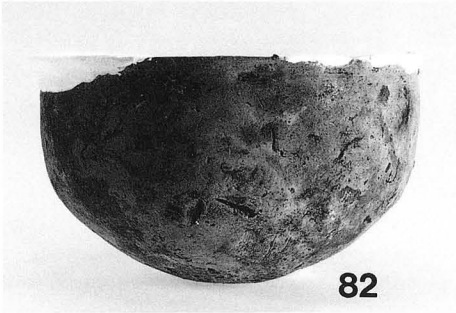

77

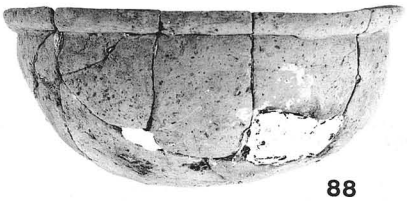
写真図版第22

80


81

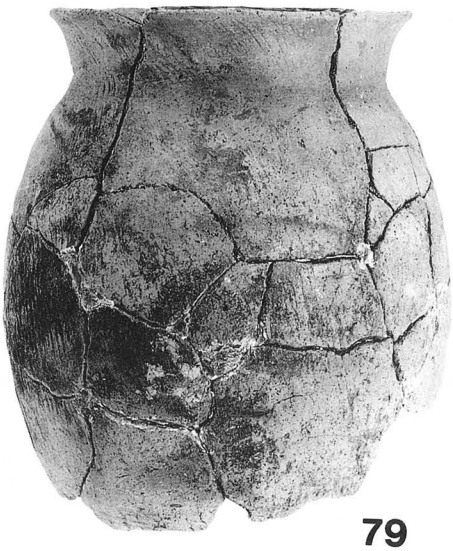
85

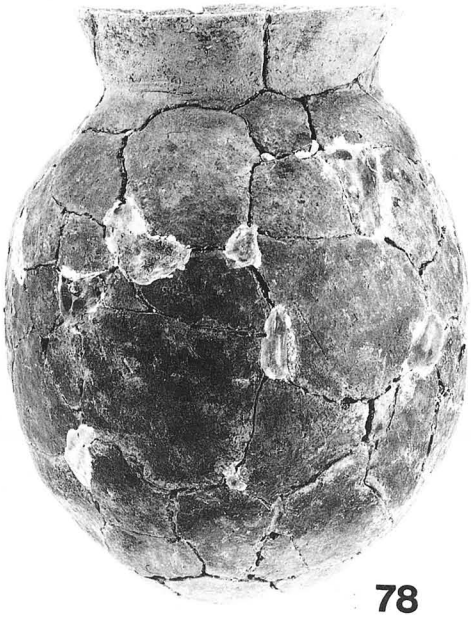

82


88

86

90


79


78

写真図版第23

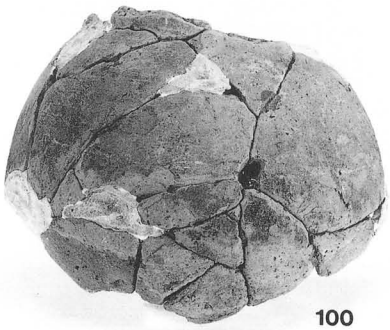
92

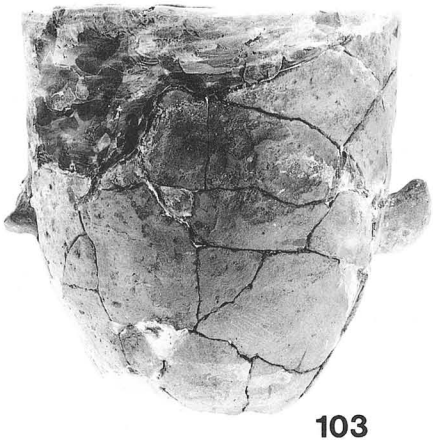
93

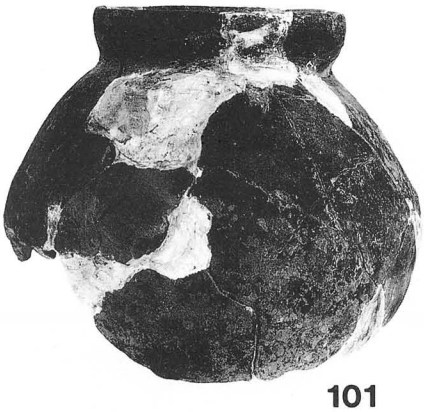
94

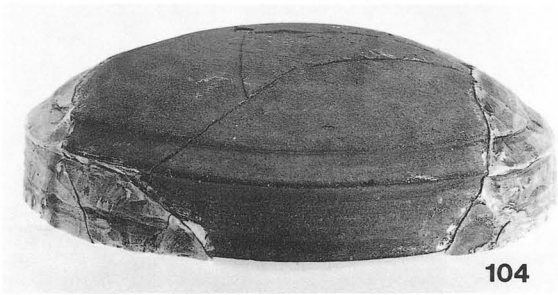
98

102-2

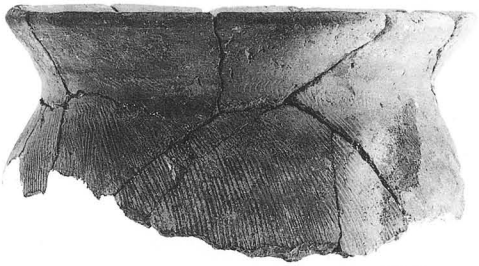

100

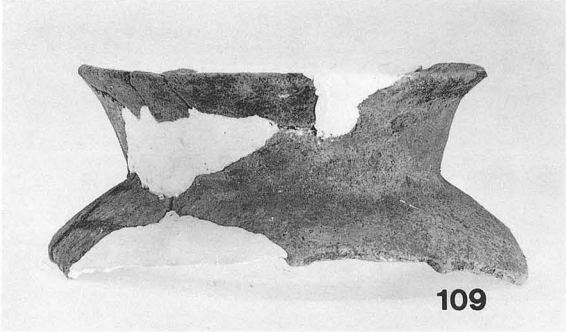

103

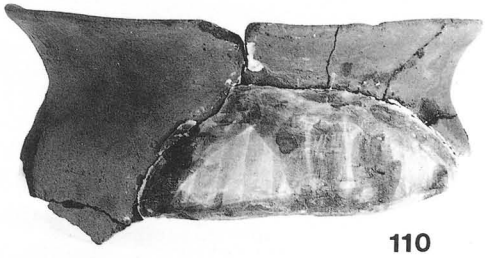

101

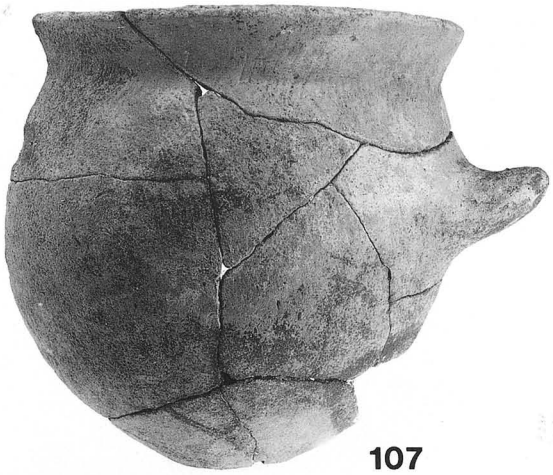

104

写真図版第24


108


109

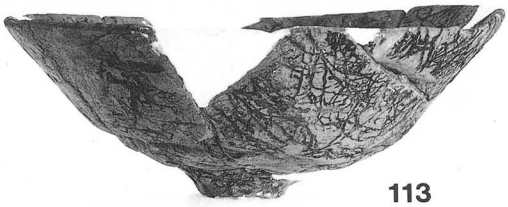

110


107

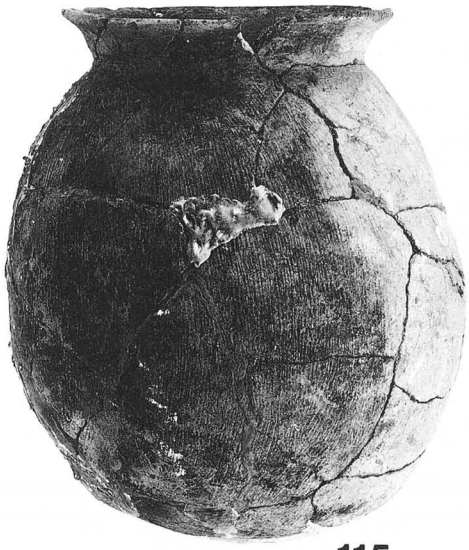
114

116

111

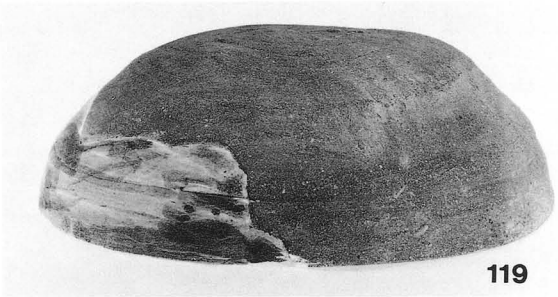

113

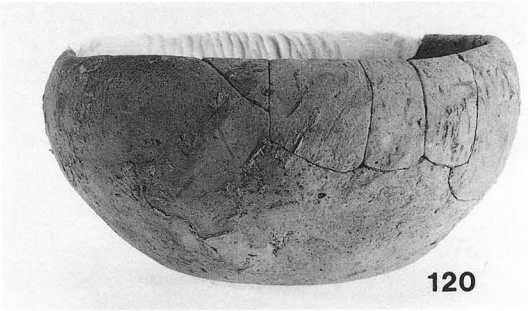
117

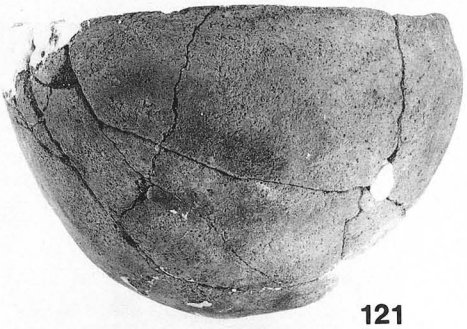

115

写真図版第25

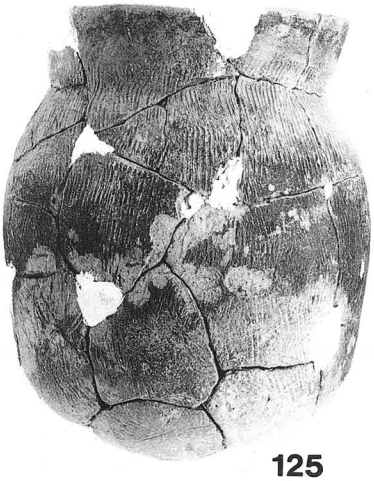
118


119

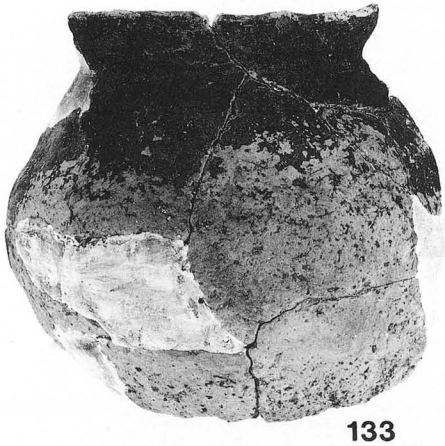

120

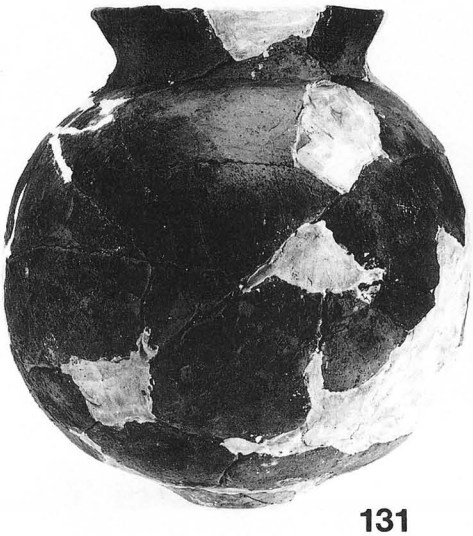

121

122

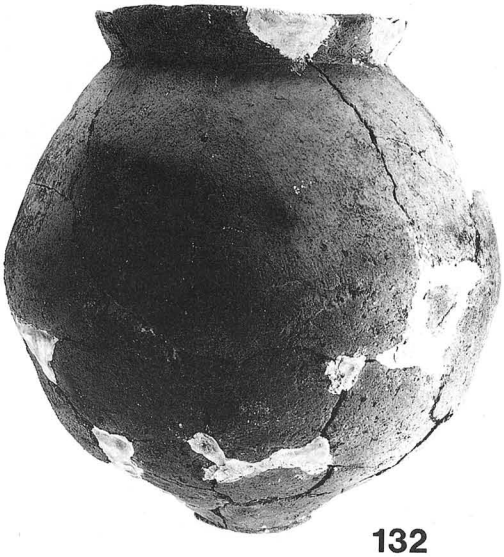

125

123

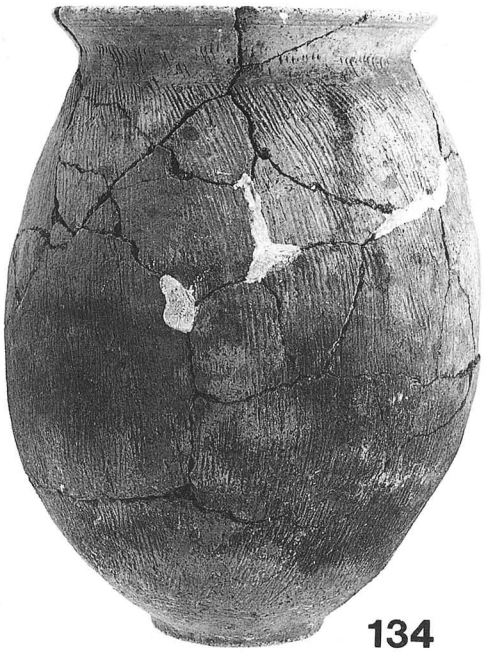

133


131

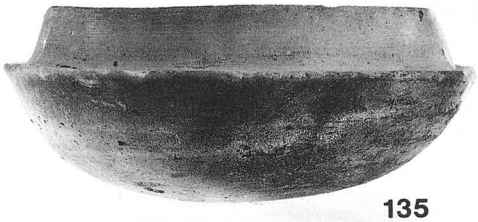
写真図版第26



132



134



135

137

136

138

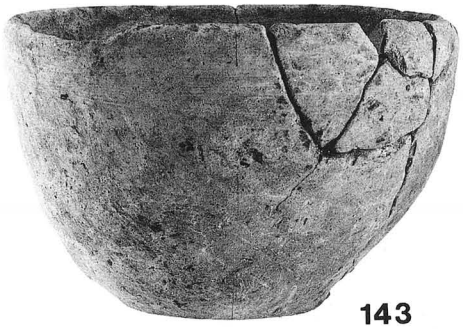
141

139

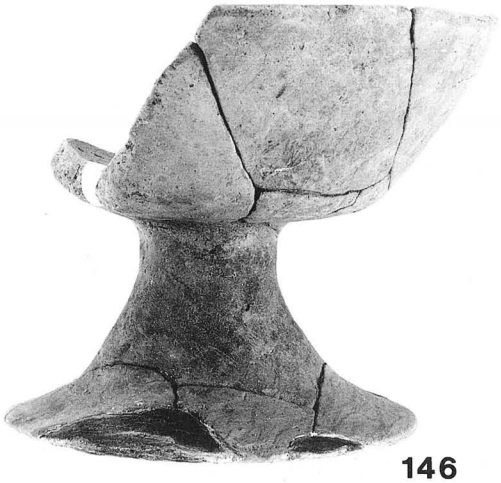
142

140

写真図版第27


143

145


146

147

148

149

150

152

写真図版第28

153

154

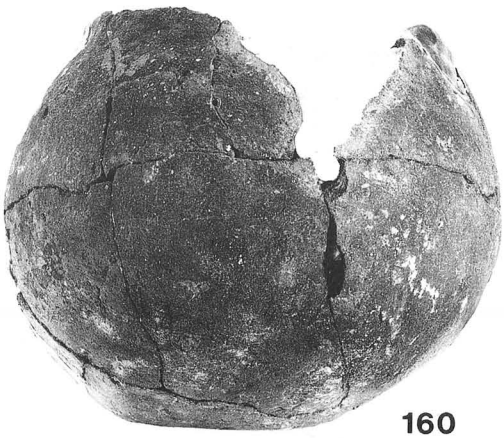
155

156

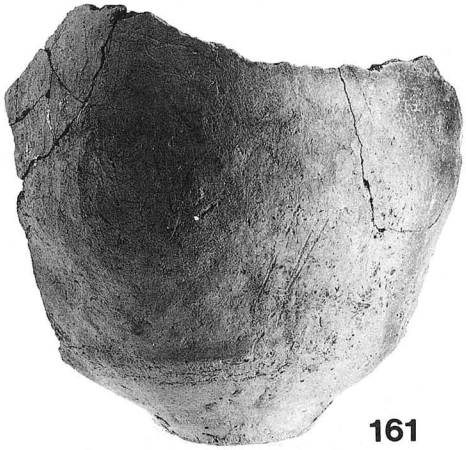
157

158

159


160

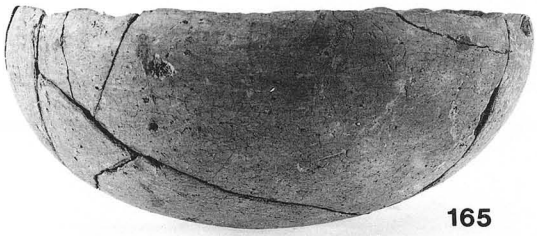
写真図版第29

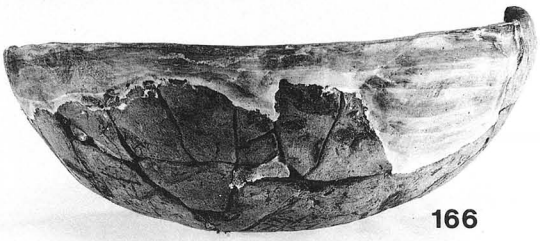

161

162

163

164


165


166

168

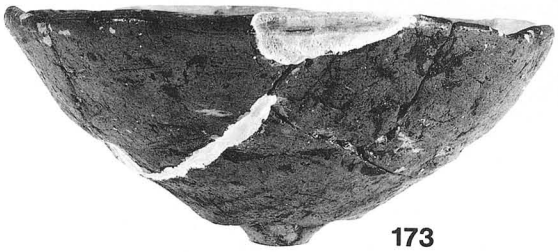
167

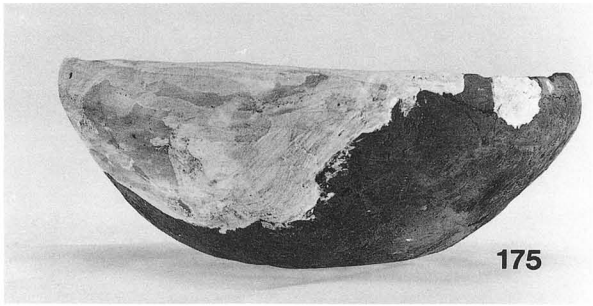
169

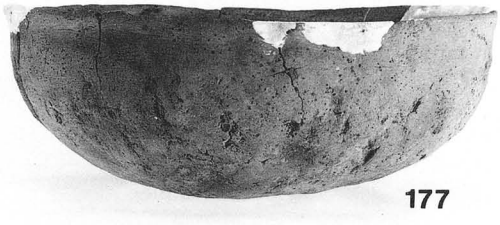
170

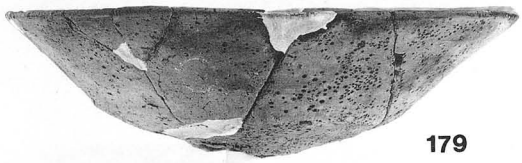
171

172


173


175


177


179

182

183

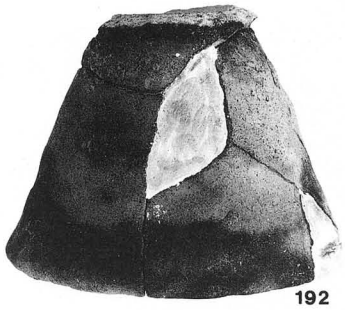
186

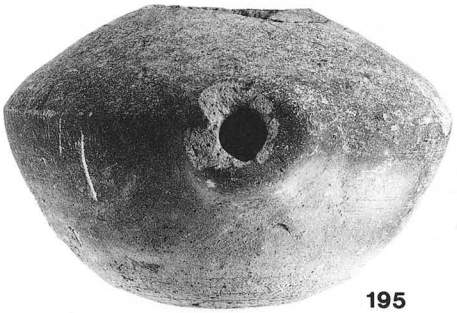
188

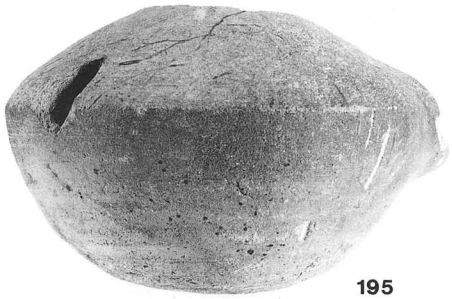
写真図版第31

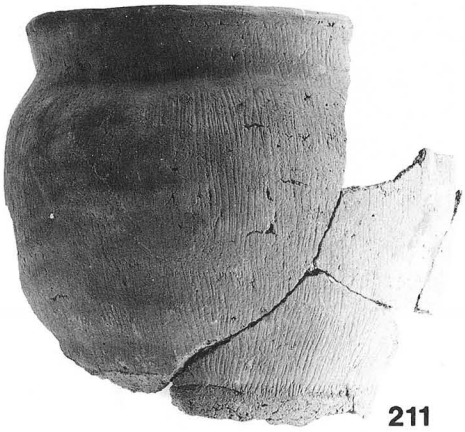
189

190

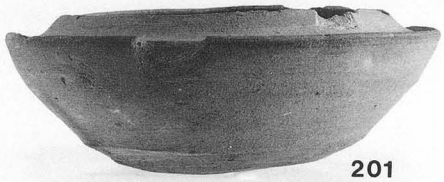

192

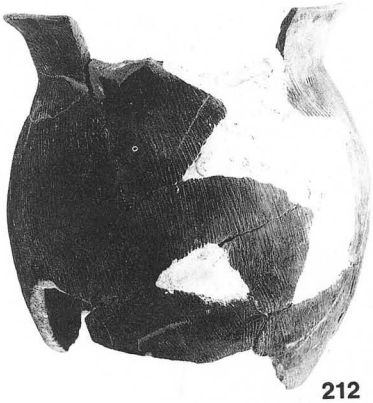

195


195


211

198

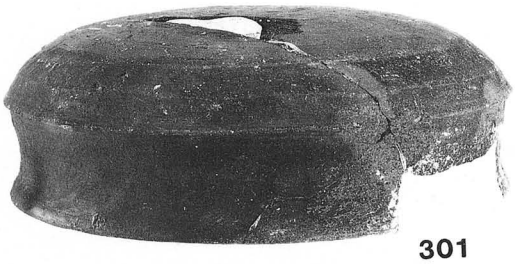

201


212

213

214

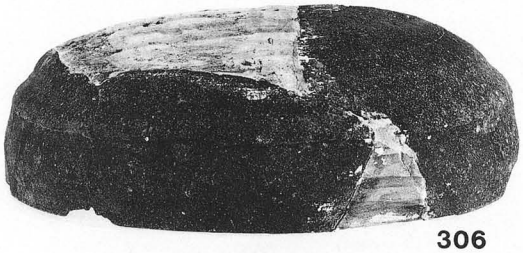
写真図版第32


301

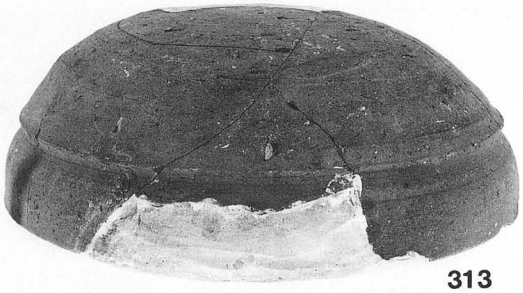
302

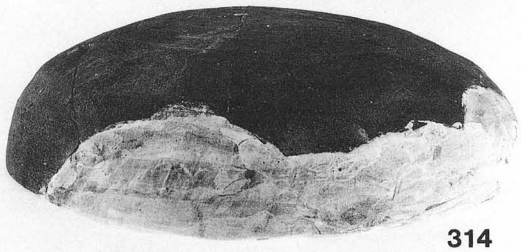
303

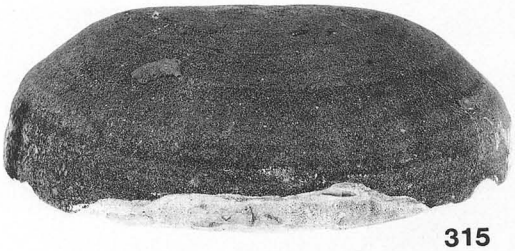
305


306

312

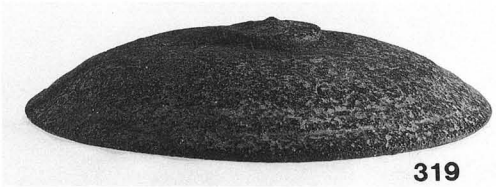

313


314


315

316

317


319

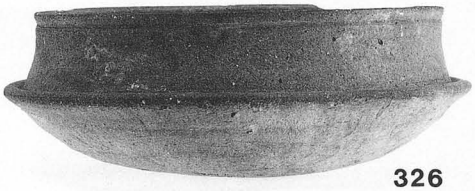
写真図版第33

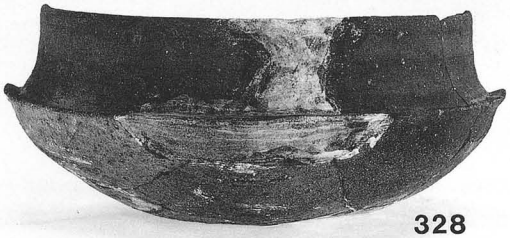
320

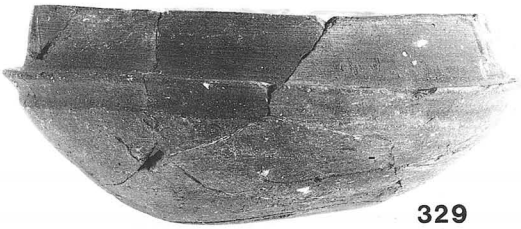
321

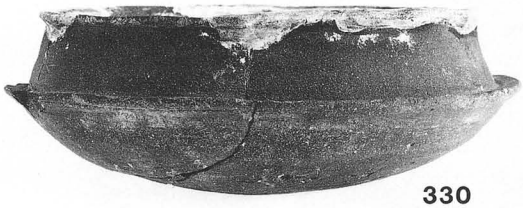
322

324


326


328


329

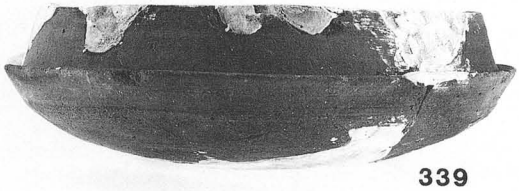

330

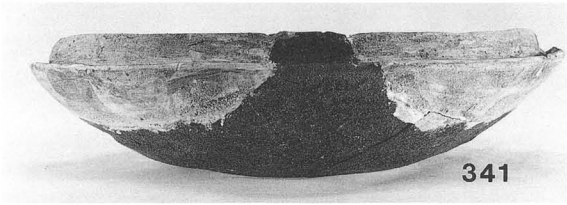
331

332

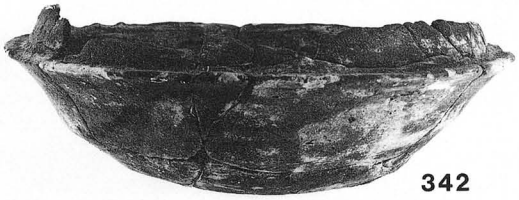
334

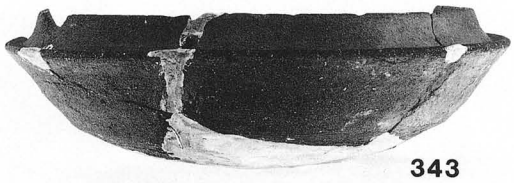
338

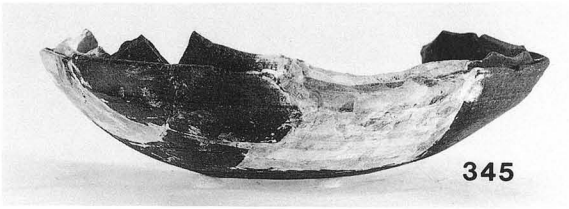

339

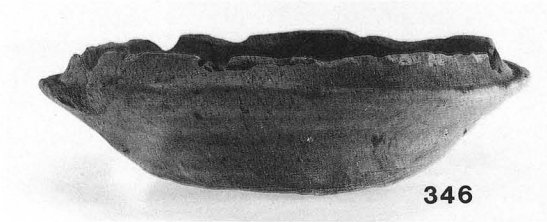

341

写真図版第34


342


343

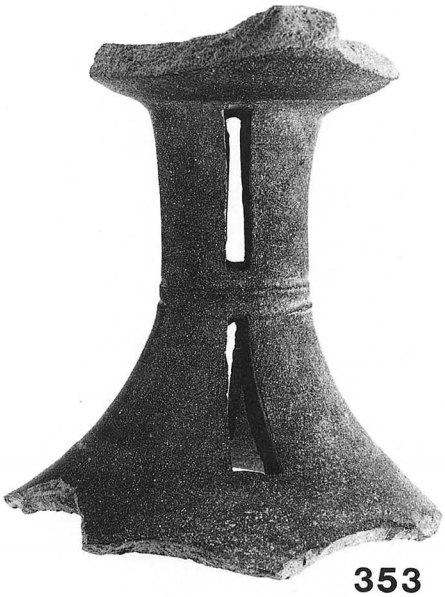

345


346

347

348

349


353

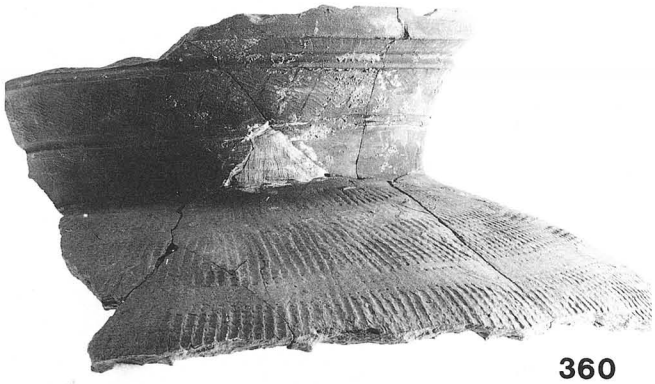
350

354

351

写真図版第35

355


360

356

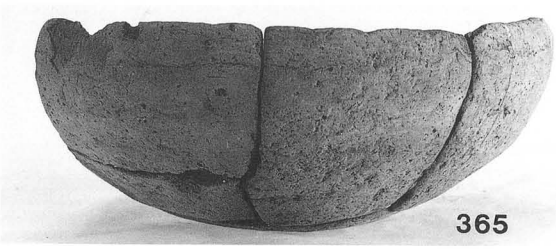
356

361

362

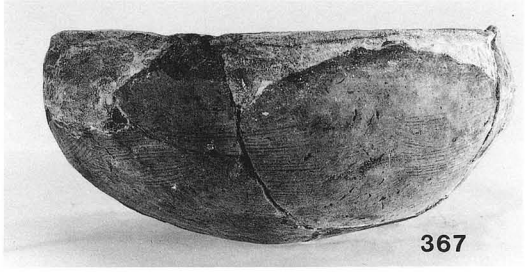
363

364

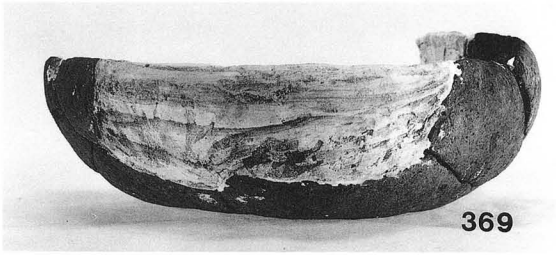

365

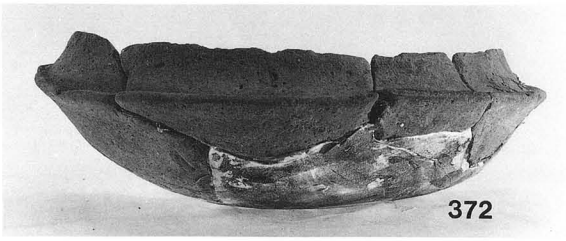
366

写真図版第36

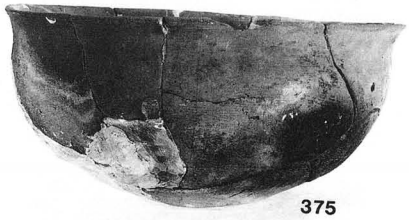

367

368


369


372

374


375

376

378

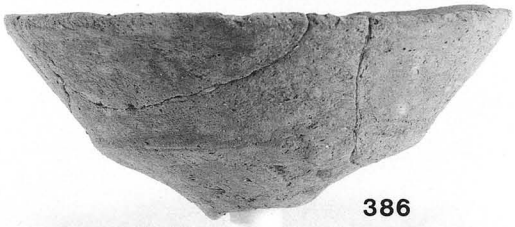
379

381

384

写真図版第37

385


386

387

388

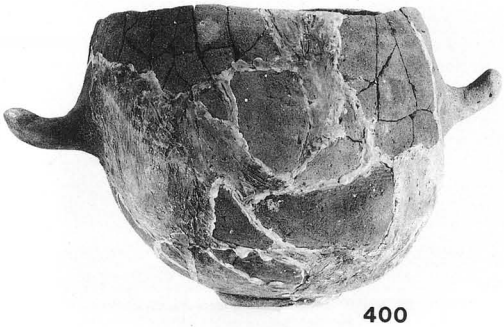
392

396

389

394

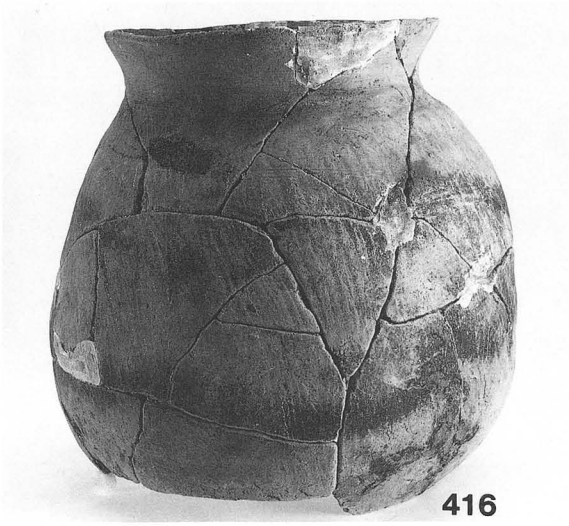
391

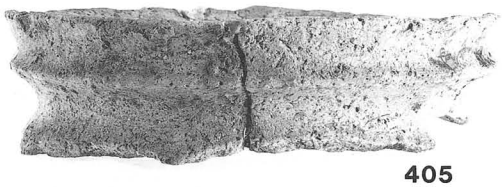

400

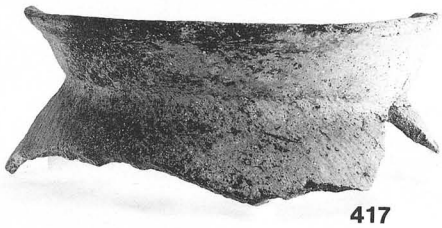
402

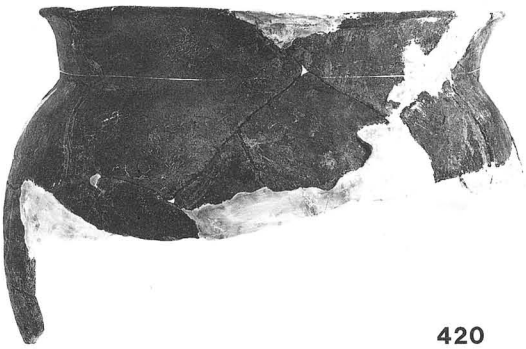
写真図版第38

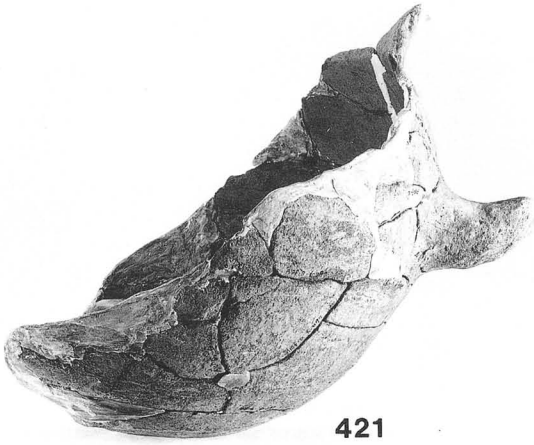
401

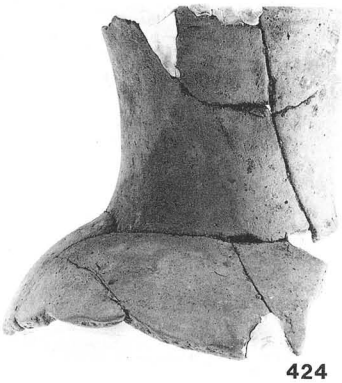

416


405


417


420

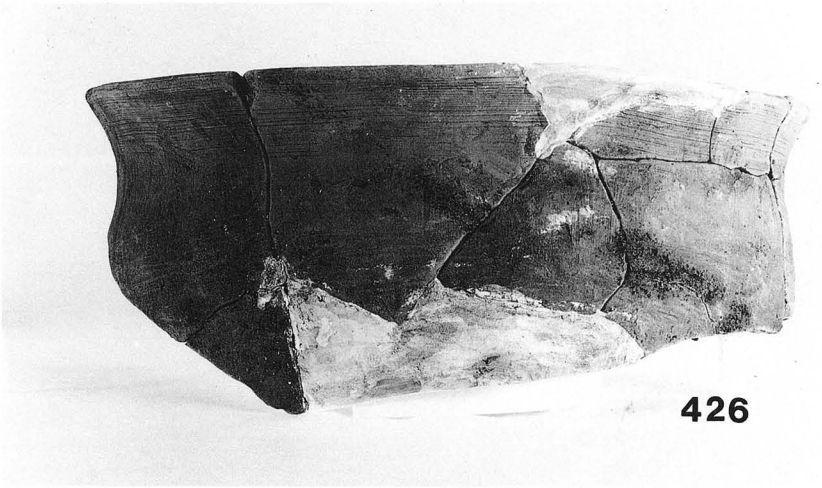

421


424

414

423

写真図版第39



426

425